

TSヤンデレ配信者は今日も演じる

龍流

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

TS転生して美少女になったので、ほんのちよつと特殊な能力を活かして配信者になることにした。あと、幼なじみの夜風景ちゃんがかわいいので、イチヤイチヤする。

碑文つかささんから挿絵いただきました！

## 目次

夜風家夕食実況	1
バトロワ配信と天使の布石	16
配信はお休み。幼馴染とイチヤイチャするだけ	23
釣り配信と映画監督	30
わたしのプロデューサー	39
天使に触れて、触れられて	45
はじめてのCM撮影	54
お料理配信（※CM撮影）	62
景ちゃんと雑談配信	72
ハロー・エンジェル	79
天使配信	88
TSヤンデレ配信者は今日も演じる	99
演劇編	
格ゲー配信と演劇界の重鎮	107
夜風景は止まらない	114
「なによこの女!」という芝居でお決まりのアレ	121
金髪ツインテツンデレメガネっ娘攻略パート	128
悪魔なんかに絶対負けないんだから! (フラグ)	135
犬と猫	144
勘違いとすれ違いは加速するもの	152
地雷原でタップダンスをする夜風景	160
天使の仮面、悪魔の仮面	169
万宵結愛、死す	176

東京上空実況配信	183
デスアイランド編	
万宵結愛・ログイン	191
天使と悪魔	199
天使VS悪魔VSゴジラ〜南の島の大決戦〜	209
「親友」	219
天使とゴジラ	228
TSヤンデレ配信者は今日、演じない	238
宵過ぎて夜。百の星へ手を伸ばす	253
銀河鉄道の夜編	
登山配信	263
共喰い	270
覚醒	281
逆転	291
『暴食』	299
星アキラの災難	306
演劇会の重鎮・巖裕次郎	314
ただのファン	323
そしてはじまる乗車試験	331
天才と凡人と取引と	341
悪魔との契約	350
推しがいる生活	358
配信できないタイプの修羅場	367
百合の間にはさまる天使	378
あなたを喰べたい	387

天使を喰（は）む

395

悪魔とゴジラとクソジジイ

403

屋形船配信

412

悪魔は、銀河鉄道には乗れない

420

act—CHAnge

429

## 夜風家夕食実況

まずわたしが胸を張って自慢できるのは、夜風景がとびっきりの美少女だということだ。

普通なら、このまま「その名の通り、まるで夜の闇を溶かしたような艶やかな黒髪は、透明な白い肌に映えてなによりも美しく〜」などと。彼女の外見を客観的に表現する詩的な描写がびっしりと書き連ねられるのだろうけれど、その必要は全くない。何故なら、景ちゃんは普通の美少女ではなく、近年稀に見る完璧な美少女だからだ。

美少女は、顔の造作が整っているから美少女なのではない。ただ、かわいいから美少女なのだ。誰の言葉かって？ 他ならぬわたしの言葉ですよ。

インターホンを鳴らすなんて無粋な真似をする必要はない。夜風家のドアを軽くノックをすると、この世のものとは思えない美少女のご尊顔が現れた。

「おかえり、結愛ちゃん」

「ただいま、景ちゃん」  
そう。

何を隠そうというのか、いいや隠さない（反語）。なんと、わたしと景ちゃんはおかえりとただいまを言い合う関係なのだ。これはもはや、幼馴染を超え、恋人を超越し、夫婦の関係に至っているといっても過言ではない。

え？ 日本じゃ同性同士で結婚できないって？ うん、アメリカ行けばいいんじゃないかな。

「今日の晩御飯、何？」

「カレーよ」

カレー。なんて素晴らしい。あまりにも素晴らし過ぎる。きつと男子諸君なら……ううん、部活を頑張っていた運動部系女子のみんなにも共感してもらえらるだろう。お家に帰ってお母さんに「今日の晩御飯、何？」と問いかけて、「今日はカレーよ」と言われた時の、あの興奮。夕食への期待と昂ぶり。そして喜びは、とてもじゃないが筆舌に

尽くしがたい。

そんな言葉を、景ちゃんから言われてしまった。もしかしたらわたしは、今日という日が幸せの絶頂なのかもしれない。

結婚しよ。

「……景ちゃん」

「なに？」

「今日の服もよく似合っているね」

「これTシャツだけど……」

ダボつとしたオーバーサイズのシャツは、カタカナで『東京』と書かれている以外は特にこれといった特徴もないシンプルなデザインだ。しかし、そのシンプルさが逆に素材の良さを引き立て、この『晩御飯を作って家で待っていてくれた幼馴染』というシチュエーションをより一層素晴らしいものに昇華してくれていた。

「ああ……神よっ……主よ！ 仏様よ！ わたしは今日という日に深く感謝します！」

「？ 結愛ちゃん、宗教にハマったの？ それは困るわ」

「わたしはいつだって景ちゃんという女神に釘付けだよ」

「ふふっ……それも困るわ」

くすつて笑うの、かわいいなほんとにもう。

美人がかわいい仕草するの、やばみと尊みしかない。わたしの幼馴染は女神か？ 女神なのか？ 女神で決定でいいよね？ よし、女神だ。

「あ、ゆあねーちゃんだ！」

「またうちにたかりにきたの？」

「だめな女だね」

「ねー」

と、景ちゃんと玄関先で乳繰り合っていると、ちびっ子どもが居間の奥から飛び出してきた。景ちゃんの妹のレイちゃんと弟のルイくん。今日もかわいいね〜

「いやいや、ちょっと待って！ いいかい、レイちゃん、ルイくん。わたし、べつにご飯たかりにきてるわけじゃないからね。事実、ご馳走

になつてる分の食材代は、ちゃんど払ってますよ？ 決してタダメシ食らいではないのです」

「ほんとにー？」

「ほんとにー？」

「ほんとほんと〜」

このちびっ子ども、小癩にも疑り深い目を向けてくるので、わたしはピンと張った千円札を2人に示してみせた。千円札の中の野口さんのインパクトは、まだ小さい2人にはなかなか強烈だった様子。食費だー、タダメシじゃなかつたー、などとほざきながら手を伸ばしてきたけれど、残念ながらきみたちに届くわけがないし、渡すつもりもないのだよ。わたしはそれをさっさと景ちゃんに手渡した。

「いつも思うのだけれど……いらないわ、お金」

「まーまー、そう言わずに。景ちゃんの料理おいしいし」

ちなみに、これはお世辞でもなんでもなく紛れもない事実である。景ちゃんの料理の腕前はかなり高い。本来の得意ジャンルは純日本食なんだけど、レイちゃんとルイクんの好みに合わせて最近ではハンバーグやカレーといったお子様洋食系メニューばかり作ってる。でも、それを差し引いても、めっちゃくちゃおいしい。事実、わたしは今から振る舞われるカレーライスが楽しみで仕方なかったりする。

それでも、なお不満そうな表情の景ちゃんはほっぺたを膨らませている。もっー！ むくれててもかわいいなんて、ほんとに美人はお得だなもーっ！

膨らんだ白く丸い頬を、わたしは両手でむずつと掴んだ。

「けーいちゃん」

「ぐむっ……」

「わたしは夜風家で食べるご飯がなによりの楽しみだし、景ちゃんの作ってくれる料理が本当においしいから、いつも感謝してるんだ。家事の手伝いとか、レイちゃんとルイクんのお迎えとか、そういう形で返せばいいんだけど……でも、わたしも仕事があるから景ちゃんちのお手伝い、あんまりできないじゃん？ だからさ、このお金はとりあえず受け取っておいてよ。それが、わたしのためだと思って、ね？」



「ふえ、ふえも……」

で、でも、つて言いたかったのかな？

こうなつた景ちゃんは、結構頑固だ。でも、わたしもそれなりに頑固で意地っ張りな自覚はあるので、しつこい景ちゃんの頬を、さらにぐりぐりした。

「ひや、ひやめてー！」

や、やめて、かな？

ぐへへ……やめてとか言われると、背徳感がくすぐられるじゃねえか……もつとやろ。

「おねーちゃん、もてあそばれてる〜」

「ゆあねーちゃん、悪女だー」

最近のガキンチョはどこでこういう言葉を覚えてくるんだろうねまったく。

ああ……それにしてもなんて触り心地のいいほっぺたなんだろう……できることなら、永遠にもみもみしていたい。

「まあ、もちろん。渡したお金をどう使うかは景ちゃんの自由だよ。気に入らないなら、お父さんから受け取っている仕送りみたいに、一切手をつけなければいいだけだし」

「……」

「でも、お金つて基本的にいくらあつても困るものじゃないでしょ？それに、どんなに嫌いな人から贈られてきたお金でも、お金そのものに罪はない。いつか、役に立つ時がくるかもしれない」

言いながら、わたしは足元のレイちゃんとルイくんをちらりと見た。

夜凧家の家計は火の車だ。景ちゃんがいくつもバイトを掛け持ちして、なんとか成り立っている。いつか、この2人の進路や進学に、絶対にお金が必要になってくるのだ。重ねて言うけど、お金つていくらあつても困るものじゃないしね。

察しの良い景ちゃんは、わたしの視線だけで言いたいことがわかったのか、ぐぬぬ……と言いそうな、なんとも言えない微妙な表情になつて黙り込んだ。

「……ちよつとずるいわ」

「ほらほら、そんな顔しないでよ。美人が台無しだよ?」

いや、どんな顔しても景ちゃんは最強に美人なんですけどね?

ただ好きな人には、しかめっ面じゃなくて、なるべく笑顔でいてほしい、って。そう思うでしょ?

「じゃあ、カレー食べよ! わたし、ほんとお腹ペコペコなんだ」

「……うん。大盛りにしてあげる」

「やったー!」

大盛り宣言いただきました。やったね!

「ゆあねーちゃん、おねーちゃんのごはんおいしいのはわかるけど、食べ過ぎると太っちゃうよ?」

「ふっふふ。あまいなレイちゃん。わたし、食べ過ぎた分は全部胸にいく体質だから」

「ナイスバディだ!」

「ふっふふ。そうだぞ。ゆあおねえちゃんはナイスバディなのだ」

ありがたいっっちゃありがたいんだけど、最近またブラきつくなってきたんだよね……あと肩こりがわりと洒落にならんレベルになってきた。今度、夜風家連れてゆつくり温泉とか行きたいね。浴衣姿の景ちゃん見たいし、裸の景ちゃんとイチヤイチャしたいし。

「……」

「あれ? どうしたの景ちゃん? わたしの胸じつと見て」

「……やっぱりずるいわ」

「ええ……?」

そりゃ、わたしは『ある』方だと思っし、景ちゃんはスレンダーな長身の美人さんなので決して『大きい』わけじゃないけど……そんなことでむくれられると困るな。

「ほらほら、機嫌直してよ景ちゃん! 今日は機材とPC持ってきたから!」

「機材とぴーしー……パソコン? あっ……! もしかして、配信するの?」

「うん。配信しちゃうよー」

ゴソゴソと機材を取り出して、わたしはニツと笑った。

「本日の配信は名付けて……『突撃、夜凧家の晩御飯』だ！」

わたしは転生者だ。

とはいえ、前世の記憶はほとんどない。なんとなく、前の人生では男だったことはうっすらとおぼえていたけれど、あとは一般常識や基礎的な教養が頭の中にぽつぽつと残っているくらいで、具体的な記憶やら思い出の類いはきれいさっぱり失われていた。

普通、転生といえば異世界に行って前世の知識でがーつと無双して、かわいいヒロインをゲットして、はい！おれ最強！ってなるものだ。少なくとも、わたしはそう思っていた。しかし、現実は甘くなかった。っていうか、わたしの転生した世界はもろに『現実』だった。

モンスターはいないし、ダンジョンはどこにもないし、魔法も使えない。ギルドとかレベルの概念もないし、当然、ラスボスの魔王なんて存在しない。わたしが知っている一般的な歴史と同じように時代が進んで、普通に人が暮らしている、いたってノーマルな現代世界。それが、わたしが二度目の生を受けた世界だった。

正直に言えば、最初は落胆した。どうせならファンタジーな世界で冒険を試みたかったし、魔法も使いたかったし、魔王も倒してみたかった。でも、生まれてきたものは仕方がない。前世の記憶を持つてる人なんて早々いないだろうし、せつかく女の子になったわけだし、わたしなりに新しい人生をエンジョイしてみようと決意したのである。やだもうわたしってば超ポジティブ。

そうそう。魔法は使えないけど、どんな運命のいたずらか、それとも神様のきまぐれか。わたしには『転生特典』っぽいものが、二つほど備わっていた。

まず一つ。特別なこの『身体』だ。

べつに怪力が備わっていると、モンスターに変身できるとか、そういう超能力ではない。ただ、わたしにはこの現代社会を生きていく

上で、超重要なステータス……『外見』が備わっていた。

まあぶっちゃけてしまうと、超かわいいのだ、わたしは。

あんまり自分の容姿をベタ褒めすると、すごいナルシストみたいになるので嫌なんだけど……客観的に分析してみても、わたしはものすごく美人である。多分、千年に一人とかそれくらいの表現で盛っているくらい、ステキ美少女である。

腰にまで届く天然の茶髪は緩くウェーブがかかっている、艶やかに輝いているし。肌は染み一つなく健康的で、鼻筋もすらっと伸びるように通っている。髪色と同じくブラウンが混じった瞳はパツチリと開いていて、およそ自分の顔面に文句をつけたくなる要素はないくらいだ。完璧だ。パーフェクトと言っても過言ではない。

しかも、洗顔クリームやらヘアケアやらお手入れをサボっても、不思議なことにわたしの外見はパツチリ維持されていた。いや、もちろんお風呂上がりにドライヤーで髪乾かしたりとか、そういう最低限のことはするんですけどね。ただ、美容パックとかしなくてもお肌はつやつやもちもちだし、多少食べ過ぎても太ることはなく、栄養は胸にいった。おかげさまで、わたしはおっぱいデカいです。そこそこのナイスバディです。いいい。

さらに言えば、わたしは声も良かった。かわいらしい、それでいて聞きづらくない、耳に染み入るようなソプラノボイス。自分の声はつきり通って魅力的なのは、我ながら嬉しかったし、ついでにいくら喋っても喉が枯れたり、声が荒れることはなかった。これも、この身体に備わった特別な力なのかもしれない。

チート級にかわいい容姿。魅力的な声質。そして、もう一つ。異世界で無双するような特別な魔法は得られなかったけど、現代社会を生きていくのに必要十分以上の強力な資質はゲットできた。

なので、わたし……万宵結愛は、それを有効活用して生きていくことに決めたのだ。

「みんな、こんばんは〜！ 今日も待っていてくれてありがとうがとね！」

——動画配信サイトの、実況顔出し配信者として！

カメラ配信開始と同時に、コメントが流れ始める。

『ただいま』『まにあつたー！』『今日も生きがいが始まる』『こんばんは、おれのオアシス』

「はーい。みなさんおかえりなさい。お仕事お疲れ様です。今日も社会に立派に貢献してきましたか？」

いつも通り、挨拶代わりに聞いてみるとさらにコメントが流れていく。

『ユアちゃんの顔を見るためにがんばったよ』『颯爽退勤』『お前ら働いてないだろいい加減しろ』『残業と上司は倒した』

「ふふっ……みんなえらいですねー。いつも来てくれてほんとありがとうねー」

やや首を傾けながら、にしゃつと。あえて表情を崩して笑う。

瞬間、わたしは設置したカメラから莫大な量の『感情』を受け取った。比喩ではない。本当に、色濃い『喜び』の波を、全身で感じ取ったのだ。

ぶるり、と。少し身震いする。

『かわいい』『スマイルいただきました』『かわいい』『ユアユアのスマイルいくら？』『百万円』『この笑顔、プライスレス』『開幕尊死』『かわいい』『かわいい』『気取らない笑顔』『好き』

そう。これがわたしに備わっている二つ目の特別な力。自分を見ている人の、自分に向けられる感情を肌で感覚的に『受け取る』ことができる、特殊体質である。

わたしは、わたしを見ている人が考えていることを、肌で感じ取ることができる。心を読む、と言ってもいいのだろうか。厳密に言えば『考えていることが手に取るようにわかる』というほどではないけれど、基本的な喜怒哀楽。喜びや悲しみ、その他もろもろの大まかな感情なら、苦も無くキャッチできるのだ。

発動の条件は『相手に見られる』こと。でも、このかなり便利で少しだけ厄介な力の最も大きな特徴は……カメラなどの映像機器を通して、それがリアルタイムなら効力を発揮する、ってところだった。つまり実況配信でこの能力を使うと。なんとわたしは、わたしを観ている視聴者の『生の感情』を。わたし自身に向けられる、？偽りのない感情を、肌で直接感じ取ることができてしまう。

優れた容姿と声。感情を直接感じ取る力。

この二つが合わさって、わたしは実況顔出し配信者『ユアユア』として、大ブレイクしたのである。えっへん。

『あれ？いつもの部屋じゃない？』『ほんとだ』『どこだここ』『これあれじゃん』『K子ちゃんの部屋じゃん』『マジかよ』『やったぜ』『今日K子ちゃん回!?!』『キタコレ』

と、ぼちぼち勘のいい視聴者さんたちが気がつきはじめる。いつもはわたしの部屋で配信してるけど、今日は景ちゃんの居間で配信してるからね。無理もない。

肌に刺さってくる感情は『期待』が七割、『困惑』が三割っていったところか。わたしの過去配信……アーカイブを観ていたら、景ちゃんのこととは知っているはずだけど。まあ観てない人は知らないよね。

ざっくりとファンの反応を掴んだわたしは、三割の視聴者さんに向けて景ちゃんの説明をすることにした。

「気がついた人は流石だね。今日は、わたしが小さいころからの幼馴染で、家がお隣の大親友である『K子ちゃん』の家にお邪魔してまーす」

かるーく解説を入れてみると、コメントがさざ波のように広がった。

『K子ちゃん！』『大親友？』『家が隣とか少女マンガかよ』『百合だろ』『K子ちゃん前もでてたよ』『百合』『おまえら過去配信みろ』『K子ちゃん好き』『声かわいいよな』『かわいいっていうかかっこいい』『かわいいとかかっこいいが合わさってー』『最強』『顔出ししてくれ』『ユアユアとラブラブなんですよ』『なにつきあってるの？』『やはり百合か』

うんうん。開幕早々、コメが活気づいてきていい感じいい感じ。

「あー、そうだよね。前の配信観てくれてる人は知ってるよね。なんと今日は、K子ちゃんの家にお邪魔して、お夕飯をご馳走してもらったことになりました。その名も、突撃イ！ 隣の幼馴染の晩御飯！」

『メシテロ』『メシテロか』『メシテロあかん』『メニユーは？』

「んー、メニユーはね。ふっふっふ……なんと！ 王道をいくカレーだ！ しかもK子ちゃんの手作り！」

『カレー！』『カレーか』『手作りとかうらやま』『ちよつと今からじゃがいも買ってくる』『玉ねぎ買ってくる』『にんじん』『今からじゃ間に合わねえよ』『レトルトだ』『美少女のカレー食いたい』『K子ちゃんかわいの？』『手作りは神』『幼馴染の手作りとか』『最高すぎる』『幼馴染買ってくる』『じゃがいもにしとけ』

やっぱカレーだとみんなテンション上がるんだね。肌に刺さってくる感情の盛り上がり、ちよつと熱を帯びてきたのがよくわかる。

せつかくだし、ここは少しサービスしますか。

「いいでしょう。K子ちゃん、すごい料理が上手で、いつもおいしいもの作ってくれるんだ。しかも、K子ちゃんってば、わたしに負けないくらい美人でね？ 肌は白くしスレンダーだし、ロングの黒髪は超きれいだし、運動神経も抜群で足も速いんだ」

『チートか？』『完璧じゃん』『もりすぎ』『ユアユアがかわいいって言うてんだぞ？』『絶対かわいい』『まちがいないわ』『スペック高すぎる』『ユア、デレデレじゃん』『おれたちのユアが骨抜きに』『それだけK子ちゃんが魅力的なことだろ』『K子ちゃん最強か』『おれなら惚れる』『顔出し希望』『カレーまだ？』

いかんいかん……景ちゃんがかわいすぎるせいで、つい語りに熱が入ってしまった。いや、でもまあいつか……景ちゃんが魅力的過ぎるから仕方ないよね。

もういいや。もうちよつと語っちゃおう。おまえらも景ちゃんの魅力に骨抜きになってしまえ！

「は〜？ 盛ってないし〜！ K子ちゃんほんとに美人だしかわいいし！ でも顔出しはしません！ K子ちゃんはわたしだけのK子

「ちゃんだからね！」

『嫁宣言いただきました』『百合きた』『これは勝った』『百合百合しい』『嫁キタ』『神展開』『嫁じゃん』『K子ちゃんすごい』『百合最高』『イチヤイチャしてくれ』『百合』『百合』『カレーまだ?』

「結愛ちゃん、入っても大丈夫かしら? カレーできたんだけど……」

あ、景ちゃんきた。

『K子ちゃんキター!』『嫁降臨』『ごほんよー』『お夕飯の時間です』『カレーのターンだ!』『K子ちゃん声クールじゃね?』『いい声』『これはイケメン』『やはり旦那か』『結婚しよ』『結婚してくれ』

うーん。さすが景ちゃん。すでに視聴者の大半を骨抜きにしているよ。K子ちゃん……おそろしい子!

まあ、何はともあれ準備ができたらしいので。早速、カレーを持ってきてもらおう。

「はいはい。みんなお待ちせ! ついにきましたよー! これが、K子ちゃんが! わたしのために! 腕によりをかけて作ってくれた! 特製スペシャルカレーだよ!」

じやがいもがゴロゴロ入っていて、レイちゃんやルイクンみたいなちっちゃい子が苦手なんじゃんとかもちゃんが入っている。いかにも『お家のカレー』といった趣のカレーライスだ。超おいしそう。

ただ……わたしの予想の二倍くらい大盛りで出てきたんだけど?

『うまそう』『でも多すぎワロタ』『でかい』『フードファイトか?』『ユアユアの顔の小ささが目立つ』『これは愛の重さ』『食べきったら無料になるやつ』『これ無理じゃね?』『うまそう』『めっちゃ手作り』『じやがいも』

「えーと、K子ちゃん? 量多くない?」

「だって……いっぱい食べてほしかったから」

『尊い』『はい死んだ』『愛だな』『キタコレ』『これが濃厚な百合か』『尊死』『尊死』『かわいすぎ死んだ』『ちよつと間に入ってくる』『もう無理』『最高か』『神回確定』『がんばれユア』『愛を平らげろ』『俺得すぎる』



「わかってる！ わかってますよ！ K子ちゃんの愛はすべて！ このわたしが完食するから！ いただきます！」

暑苦しいくらいの『期待』と『羨望』の感情を浴びながら、わたしはスプーンを手にとった。

角度よし。

表情よし。

カレーよし。

スプーンよし。

そして、一気にカレーライスをかつこんだ。

『この食いつぶりよ』『女捨ててる』『でもすき』『でもかわいい』『うまそうに飯食うの好き』『あまりにもわかる』『飾らない美しさ』『意外と大食い』『そこもまたよき』『お味は？』

「ん〜っ！ すっごくおいしいー！」

「よかったわ」

『夫婦か？』『やはり夫婦』『結婚してくれ』『未永くお幸せに』『最高』『神』『カレー食いたい』

「じゃあ、しばらくK子ちゃんのカレーを味わいたいから黙って食べるね」

『ワロタ』『食レポしろ』『実況配信で喋らないってどうなの？』『咀嚼鑑賞会』

「……まあ、冗談は置いて。食べたらなにしょっか〜」

いくらなんでもずっと黙っているままってわけにはいかないの、適当に水を飲んで箸（スプーン）を休めながら、コメントを拾ってトークを振っていく。

わたしは普段、ゲームやら雑談やらの配信をしている。他にもマンガやアニメの感想とか、あとは個人的な趣味で本が好きだから、そのレビュー感想をだらだら流したり。

本は好きなんだけど……でも、夜風家において『小説』は一種の禁句だ。

「おねーちゃん！ ルイがカレーこぼした！」  
と、その時。

べつの部屋でカレーを食べていたレイちゃんの声がマイクに入  
た。

「あ」

入ってしまった。

『なんかちびっこの声した』『息子か?!』『娘でしょ』『マジで結婚して  
た!』『尊い』『尊死』『尊さ爆発してる』『マジか』『もう結婚してるじゃ  
ん』『出来ちやっってたか』『カレーこぼしたのはやばい』『やばいな』  
途端にカメラから溢れて突き刺さる『疑問』と『期待』の感情の数々。  
……やれやれ。

今日の配信も、收拾がつかなくなりそうだ。

でもまあ……わたしの景ちゃんの魅力を今日は存分に発信できた  
ので、良しとしよう。

☆☆☆☆

真っ白なシーツの、大きなベッドの上で。

少女は、その配信を食い入るように見ていた。

「うん。やっぱり……この子がおもしろいかな」

百城千世子。

芸能事務所『スターズ』に所属する、若手のトップ女優である。

「ほんと、こっちの反応が見えてるみたいがいい表情するなあ」

その表情の移り変わりを、一つたりとも見逃さないように。隅から  
隅まで、穴が空くほどに、つぶさに観察する。

千世子は、プロの女優だ。

その演技と立ち振る舞いを評して『天使』と呼ばれている。

絵画の中の天使のような、だとか。天使が地上に舞い降りたよう  
な、だとか。そういった表現を千世子は飽きるほど浴びてきた。自分  
自身に、そういったイメージがつくように心血を注いで演技を磨いて  
きた。

「……」

口に啜えた、栄養ゼリーのパックが音をたてる。強く噛み締めたからだ。

千世子はこれまで、ファンからの印象をエゴサーチで徹底的に調べ尽くしてきた。調べ尽くして統計を取り、次の出演の際には調整する。そうやって、幾重にも仮面を被って重ねてイメージを作ってきた。

天使を実際に目にした人間はいない。だから、作り出す天使の姿は偶像でいい。誰もがイメージする、理想とする、美しい天使の姿を、千世子は計り知れない努力の上に築きあげた。

けれど、彼女は。この子はもうどうだろう？

彼女は、大盛りのカレーを食べている。千世子は、ビタミンのゼリーパックをすすっている。幼馴染が作ってくれた、大盛りのカレーを食べている姿は、おもしろおかしいけれど。千世子のように一人つきりでわびしい食事をしている人間にとっては、嫉妬の対象になりえる。

だが、

『ふう、食べた食べた！ わたし、普段は一人で食事を済ませちゃうから、たまにこうやって誰かにご飯食べると、すごい楽しくなっちゃうんだよね！』

画面の中の彼女が、こちらを見た。

ぞわり、と。鳥肌がたったのが、自分でもわかった。

『みんなも、仕事とかで忙しいかもしれないけど。たまには家族とか友達とか、あと恋人とか！ 大切な人と一緒にご飯を食べる時間を、大事にしてね！』

見られた気がした。

事実、あからさまな『調整』が入った。

「……今、修正したな」

彼女は、演じている。

映るカメラは一つだけ。演劇や舞台と比べれば、その難易度を比べるまでもない。けれど、たった一つの、小さな配信用のカメラを通して、彼女はリアルタイムで演技を調整していた。元々の顔立ちと声の

良さを活かして、表情、角度、声色、視線。その他、部屋の内装や小物に至るまで。利用できる全てを使つて、視聴者の理想の『偶像』を演じているのだ。

まるで、こちらの反応が見えているかのように。

アーカイブはすべて観た。そして今日、生の配信を観ることで、疑念は確信に変化した。

千世子は、スマートフォンを手を取った。

「もしもし、アリサさん。この前言つた企画のことなんだけど」  
簡潔に言えば。

強烈に、熱烈に。興味が湧いてきた。

「私、いっしょにやってみたい人、みつけたよ」

天使は、画面から目を離さず、静かに微笑んだ。

## バトロワ配信と天使の布石

配信者の夜は遅い。

わたしだって花の17歳。ぴちぴちの女子高生である。昼は学校があるわけで、自由な時間っていうのは中々存在しない。お勉強して配信して学校行って寝て起きてごはん食べて景ちゃんとイチャイチャして学校行って……。わたしの毎日は、中々に多忙である。

時間は作るものっていうけど、いやほんととその通りだと思うね、うん。ちゃんと時間を作らないと景ちゃんと会いに行けないし、自分の趣味の時間も作れやしない。まったく世知辛い世の中だぜ……

なのでまあ、とりあえず。趣味の時間は仕事を兼ねるに限ります。

「あー、みんなどこ降りるのかな〜」

こうして今晚も、わたしはお仕事(ゲーム)に勤しんでおるわけですよ。

本日の配信用にセレクトしたのは、パラシュートで降下して武器や装備を拾い、最後の一人まで殺し合う……いわゆる『バトロワ系』のゲームだ。わたしは『ミッドナイトデビル』という中二病コテコテのプレイヤーネームで遊んでいる。そこそこやり込んでいるし、運営への感謝も込めてかわいい衣装スキンにお金も貢いでいる。とはいっても、決して廃人ではないし、廃課金でもない。断じて、断じて違うのでそこるところよろしく。

このゲーム、スマホでやれるお手軽さもあってか、巷ちまたでも結構流行っていて、視聴者の反応がいい。なので、ネタに困った時なんかによく重宝している。プレイヤーを募集して同じチームでワイワイやったり、あとは他の配信者さんとコラボ企画をやったりもできる。まあ、今日は一人でチーム戦に潜っているんだけど……なかなか勝てない日ですね、これは。

「さてさて、どうしよっかな、と」

『そろそろドン勝が見たい』『眠くなってしまいました』『ユアユアの顔はずつとみても飽きないわ』『都心降りようぜ都心』『明日も社畜のつらみ』『ニートデビューしようぜ』

「ドン勝したいよね。あ、眠くなった人は寝ちやっても全然大丈夫だからねー。明日もあるし」

まだまだコメント欄は元気だけれど、わたしも明日があるし、ちよつと眠くなってきたのは否定できない。眠気を押し殺しつつ、降下準備までの時間を雑談しながら潰す。

と、そこに。わたしのキャラの周りをぐるぐると回る変なキャラが1人、やってきた。あー、待機所で煽ってくるヤツ、鬱陶しいんだよねあ……この人、同じチームみたいだけど、Tシャツにパンツの初期装備だからマジで初心者っぽい。これは今回も、勝つのは厳しいかな……？

画面がヘリコプターに切り替わり、島の全体図をマップで確認する。野良のマッチングでもボイスチャットはつけられるし、普通に知らない人と喋るプレイヤーさんもいるんだけど、まあみなさんボイチャは切っていらっしやいますね、仕方ない。

「めんどくさいから、都心降ります」

マップにピンを立てて、他のプレイヤーに降りる場所を示す。

わたしが指定したのはマップのど真ん中の市街地。武器も物資もいっぱいあるけど、その代わり人もうじゃうじゃ降りるクソみたいなエリアだ。死亡フラグ全開ってやつである。

『勝負投げたぞ』『死亡フラグ乙』『こういう思い切りいいとこすき』『誰もついてこないだろ』

若干冷めていたコメント欄の熱が再燃する。

「うるさーい。わたしは都心で無双するんじや！ 見とけよ見とけよ〜?」

ちなみに今回、わたしが選んだのは『スクワッド』。4人チームで協力して戦い抜いていくモードだ。でも、野良のマッチングはそんなに連携に期待できない。案の定というべきか。わたしの指定したポイントで降下してくれるプレイヤーさんは……

「あ。降りてくれた」

『やさしい』『自殺に付き合う優しさ』『ユアユア、そこそこ上手いからワンチャンあるっしょこれ』『あるか? ほんとにワンチャンあるか

？』『これ初心者だからついてきただけだろ』『死んで得る絆』

さつき、待機所でわたしの回りをぐるぐる回っていた、あのプレイヤーさんだ。えーと、名前は……サウザンドエンジェル？ 強そうだなオイ。

『名前草』『ユアと同じくらいの痛さ』『これは同類』

「うるさいよー」

コメントを拾ってツツコミつつ、わたしと似たようなネーミングセンス(?)をお持ちの『サウザンドエンジェル』さんに「ありがとう」とメッセージを送る。

「よいしょつと。うーん、天使さんちよつと距離離れてるかな〜」

さてさて、降下完了なわけですが。あの天使さん、悪い人ではないみたいだけど、やっぱり初心者さんみたい。なんか全然、狙った場所に降りることができてないみたいだし。できればもうちよい近くにいてほしかったんだけど、まあ……致し方なし。ここは1人でがんばるとしましょう。

「うわ……足音めつちや聞こえる。絶対たくさんいるじゃんもうやだ〜」

マンションの屋上に降りてみたのは良いけれど、さすがはマップの中心というべきか、わんさか敵がいらっしやる。考えなしに1人で突っ込んで死ぬほど馬鹿ではないので、わたしは屋上から隣のマンションへジャンプ。窓の縁に飛び移った。ちよつとした高等テクニックである。

「……って、こつちにもいっぱいいるし！ 足音しか聞こえないし！ もう〜！」

『よくある』『まわりは敵だらけ』『知ってた』

逃げた先が安全な場所とは限らない。さつきのマンションと変わらない足音の多さにうんざりしつつ、わたしは窓を叩き割って部屋の中に入った。

ヘルメットはレベル1。ベストもレベル1。リュックはなし。あと……

「武器は……これだけね、はいはい」

足音が近づいてくる。

画面越しに『期待』の感情が突き刺さる。

唯一、落ちていたサブマシンガンを拾い上げるのと、同時。迂闊に部屋の中を覗き込んできた敵の顔面に向けて、弾丸を一連射分、浴びせかけた。ヘッドショットで即死。

ニヤつと。声のトーンを意図的に抑えて。わたしは低く呟いた。

「1人目、おわり」

瞬間、肌を撫でる感情の感触が、目に見えて変化する。

『ナイスー』『実に鮮やか』『性格変わってる』『イケボ』『この顔すき』『鍛え上げられた鮮やかなエイム』『べつにこれくらい普通でしょ』『でも顔と声が良い』『気持ちいい』『いけいけー！』

うん。やつぱりこれで正解だ。

反応を確かめて、少し満足する。

倒した敵から物資を奪いたかったけど、欲張るとろくなことにならないのは目に見えているので、さっさと窓枠に退避する。壁にはりついていると、また足音が聞こえてきたので、室内に入ってきたところを狙って、窓から攻撃。即死じゃないけど、ボディにしこたま弾丸を食らって膝をついた。これで2人目つと。

『マジで無双』『ナイスー』『うまい』『窓待ち陰キャ戦法』『これをリアタイで顔色変えずにやれるのがすごい』『声と視線がマジ』『2人目ナイスー』『あと何人だ?』『ワンパじゃないよね』『まだいるつしよ』『そうなんだよね。今回スクワッドで降りてるから、まだいるよね絶対。少なくともあと2人はいるはず……多分隣のやつかな?』

殺したやつから物資を漁って、手早く装備する。

「物資あんま強くないなくていうか、9ミリなのがすごいつらい……」

『それはしかたない』『がんばれー』『片方アサルトだからまだマシ』『室内で撃ち合いならサブマシンガンの方が好きなんだよなあ。もう弾があんま残ってないのが悲しいところだ。』

「べつの階、もう漁ったあとかな?」

淡い期待を抱きながら下に降りてみると、隣のマンションの2人組



がもうこつちを見つけていた。

「やっば……」

嵐のような銃撃が降りかかる。

何発か受けながらも、ギリギリで建物の影に隠れた。

「うひゃあ……回復もあんま持つてないんだよね……これはしんどい」

このまま隠れてやり過ぎしていれば、とりあえず死なないけれど……それにも、限界がある。さっきまでわたしが複数人相手に有利を取っていたのは、居場所を悟られずに不意打ちに徹していたからだ。絶え間ない射撃で釘付けにされてしまうと、もうどうしようもない。『オワタ』『ピンチ』『これ無理だろ』『手榴弾で終了』『2人は倒したからがんばったよ』『投げ物あったら死ぬ』『逃げればワンチャン』『これはしんどい展開』『よくがんばった』『最後突っ込もうぜ』

もうダメか……と。わたしが玉砕覚悟で、どう死ぬのがおいしい展開か考えを巡らせ始めたその時。

「へ？」

敵の1人の頭が、背後からの銃撃で吹っ飛んだ。

独特な発砲音。散弾銃だ。

「……マジか」

状況をさばくのには必死で……というか、そもそも頼りにしていなかったから、気にしていなかった。

ぎよつとする敵の後ろには、初期装備でヘルメットも被っていない初心者丸出しのキャラが1人。サウザンドエンジェルさんが、敵の後ろに回り込んでいた。しかも、散弾銃一本を持って突撃するという、あまりにも男らしい突撃。わたしを助けようと動いてくれているのは、明らかだった。

「ありがとう！ 天使さん！」

案の定、振り向いた敵の銃撃でサウザンドエンジェルさんは倒れてしまったが、そこはそれ。背中を見せた迂闊極まりない敵に鉛弾をぶち込んで黙らせて、わたしは猛ダッシュ。倒れた天使さんの救助に向かった。

「今助けに行くからねー！」

『神展開キタ』『これはビギナーズラック』『この人初心者？』『初心者っぽいけど、度胸あるわ』『芋り陰キャのお前らより強いよ』『ユアユアめっちゃテンション上がって草』『これはテンションぶち上がるっしょ』『エンジェルさんマジ天使』  
さて。

サウザンドエンジェルさんは、助けた後の動きを見ていても、間違いなく初心者だった。ただし、初心者でもなんというか……度胸があつて思い切りが良い動きをしていた。これは、ゲーム続けていけば確実に伸びるタイプだ。間違いない。助けてもらったわたしが保証しよう。

結局、このあとめちやくちやがんばって3位まで粘った。サウザンドエンジェルさんにフレンド申請をして、わたしは大きく伸びをした。

「ん〜、みんなおつかれさまでした！ 最後盛り上がってよかった！

おやすみ〜！」

今日の配信は楽しかった。

そういえば、明日は景ちゃんがスターズの『俳優発掘オーディション』に行く日だ。

ちよつと眠いしつらいけど、明日は少し早起きをして、神社へ景ちゃんの合格祈願に行こう。

☆☆☆☆

百城千世子は、決して時間を無駄にしない。

共演するキャストの出演作、その全ての事前確認。小まめで徹底したエゴサーチ。ちよつとした休憩時間であっても、千世子は芝居に繋がる努力を怠らない。

だからこそ。星アキラはスマートフォンを横持ちで。しかも忙しくなく指を動かしている千世子を見て、少し驚いた。

「千世子くん」

「ん、なに？」

「それは……何のゲームをやっているんだい？」

「人を撃ち殺して生き残るゲーム」

「それは……おもしろいのかい？」

「それなりにおもしろいよ」

スマートフォンを持ちながら。膝の上に載せたタブレット端末でその配信を流し見ていた千世子は、薄く笑って首を傾げた。

「ちゃんと、友達になれたし」

配信はお休み。幼馴染とイチヤイチャするだけ

「落ちたあ!?!」

「……うん」

思わず出してしまった大声に、目の前に座る景ちゃんはしゅん……と、借りてきたネコのように小さくなった。

「あと、結愛ちゃん……ルイとレイ、もう寝てるから」

「あ、ごめんごめん。起きちゃうよね」

ちびっこがもう寝静まる時間帯に、急に呼び出されてもほいほい飛んで行けるのがお隣さんの強みである。まあ、わたしは景ちゃんに呼ばれば365日。たとえ火の中、水の中。どこにでも飛んで行くんですけどね!

「それで……スターズから不合格の通知きたんだ?」

「そうなの」

ルイさんとレイちゃんを起こさないように小声で確認すると、景ちゃんはまた小さく頷いた。

おずおずと差し出された紙は、たしかにスターズから送られてきたもので。いろいろと細かく定型文が書き連ねてあったけれど、簡潔に言ってしまうえば『不合格とさせていただきます』という一文が、結果の全てだった。

景ちゃんは、スターズのオーディションに落ちてしまったらしい。

「なんで? このオーディション、五次審査までいったんでしょ?」

「ええ。五次まではいったわ」

「もしかして景ちゃん、五次審査でなんかすごい大ポカやらかしちゃった……とか?」

景ちゃんは時々思考回路がエキセントリックなので、常識では考えられないバカなことやアホなことをやらかしてしまうことがある。

今回も、もしかしたら何かとんでもないことを……

「ううん。むしろバカでも分かるように演じたわ」

「ええ……?」

どうやらちがうみたいだ。

景ちゃんの演技力は間違いなく本物だし、ルックスに関しては言わずもがな。そこらへんのアイドルくずれが裸足で逃げ出すような美人さんだ。あんまりこういうことを言うのはアレかもしれないけど、スターズみたいな大手の芸能事務所に「芝居未経験」と書いて応募した景ちゃんが生き残れたのは、その生まれながらの顔面偏差値の高さによるところが大きい。

もちろん、わたしは景ちゃんの顔だけでなく、景ちゃんの演技も大好きだし、身内の鼻目目を抜きにしてすごいと思っているので、実際に演技する段階まで上がっていけば、自然と審査員の目に留まるだろう……って、樂觀的にそう考えていたんだけど、やはり人生というもののは、そんなに甘いものではないようだ。

「バイトもクビになってしまったし……はあ。いろいろうまくいかないものね」

「まあまあ。元気だしなよ、景ちゃん。大丈夫大丈夫。バイトはまた探せばいいし、オーディションだってべつのところがあるって」

「そうかしら?」  
「そうだよ」

不安がる景ちゃんの言葉を、ひとつずつ拾って肯定する。

すると、綺麗な瞳から一滴。涙がぽつりと溢れるようにこぼれ出た。

「景ちゃん?」

「あ……ぶ……めんなさい」

わたしは、向けられた人の感情がわかる。

その人の考えていることが、全てわかるわけではない。でも、苛立っている人がわたしを見れば、わたしはその苛立ちをイメージで感覚的に捉えることができるし、捉えたイメージから大まかに心の中を覗くことができる。

すぐ近く、向き合った状態で。付き合いの長い幼馴染の感情の色なら、なおさら深く感じ取ることが可能だ。

肌を撫でる感触は『不安』がほとんど。それに『落胆』が少々。けれど残り香のように、まだ浅く『悲しみ』の色が残っている。

多分、これは……

「景ちゃん、オーディションのテーマ『悲しみ』とか『涙』だったでしょ？」

「……すごい。どうしてわかったの？」

「そりゃ、わかるよ」

ああ、まただ。

またこの子は、戻れなくなっている。

「だって、幼馴染だもん」

メソッド演技。

劇中の役柄を演じるために、その感情と呼応する自らの過去を追体験する演技法のことだ。

景ちゃんは、このメソッド演技を独学で習得している。感情を表現する、役になりきる、という意味では、とてつもない技術。生まれ持ったの才能がなければできない芸当だ。月並みな言い方になってしまいうけれど、景ちゃんの演技はいつも『真にせまっている』。でも同時に、役柄に入り込むために深く感情に沈み込み、どこまでが演技でどこまでが素の自分なのか、区別がつかなくなってしまう……という、明確なデメリットも抱えていた。

自分以外の誰かになる。それは、すごくこわいことだ。

「何か、一緒に映画でもみよっか」

だから、引き戻してあげなければならない。

わたしは、押入れを開けた。夜風家の押入れには、古い映画のビデオテープがぎっしりと隙間なく詰まっている。ブルーレイが全盛のこの時代で、DVDすらない化石の山みたいな棚だけど、作品のラインナップはメジャーなものからマイナーな作品まで、完璧に揃っていた。

「どれみよっか」

「じゃあ、これ……」

「おっけー」

景ちゃんは意外と、ラブロマンスが好きだったりする。

選んだのは、いつも特に好きだと言っている作品。王女様と新聞記

者が身分を隠して美しい街並みを巡る、すてきなラブストーリーだ。  
やはり古ぼけた、いつ壊れるかもわからないビデオデッキにテープ  
を入れると、景ちゃんはブラウン管の画面を喰い入るように見つめ  
て、作品に入り込み始めた。

「……」

もう何度も何度も観ているはずの作品なのに。景ちゃんはまるで  
はじめて開けた宝石箱に夢中になる女の子のように、きらきらと輝く  
登場人物達の表情を、瞳に焼きつけていく。

隣で手を繋いで、一緒に作品を観ているわたしのことなんて、忘れ  
てしまっているみたいだった。

景ちゃんは、映画を観る時は大体いつもこうだ。

「景ちゃん」

だからわたしは、画面の中のきれいな王女様に、いつもちよつとだ  
けやきもちを妬いてしまうのだ。

「……結愛ちゃん？」

近づいて、肩を寄せて抱きしめる。身長はそこそこあるのに、景  
ちゃんの身体は本当に細くて華奢で、強く抱きしめたら壊れてしま  
いそうだった。

「いっこ、聞いていい？」

「なに？」

「悲しみの演技をする時、おかあさんのこと思い出したでしょ？」

「……」

沈黙は肯定だ。

景ちゃんのおかあさんは、もういない。

おかあさんが死んだ日が、多分景ちゃんにとっては一番悲しい日  
で。

だから『悲しみ』っていうテーマを出されて、景ちゃんはあの日の  
ことを思い出してしまったんだろう。

「それが景ちゃんの演技なのはわかるし。わたしは景ちゃんの演技を  
否定する気もないよ」

戸惑っている。『困惑』が頬をなでる。

それでも、ゆつくりと。言葉を続けて紡いでいく。

その『悲しみ』は、演技には必要なものかもしれない。でも、普通に生きる毎日には、不要なものだ。使い終わったら、箱にしまうべきものだ。出しっぱなしでは、心が疲れてしまう。

「でも、無理はしてほしくないなあ、って。時々、心配になるんだ」  
絡めた指の感触を、確かめる。

抱いた肩先に、壊れないようにそっと力を込める。

わたしに向けられる感情を、ゆつくりと。『困惑』を紐解いて、もつと甘く、もつとやわらかなものに変えていく。

景ちゃんのひとつひとつの反応を、細かな心の揺らぎを、見逃さなように汲み取って。視線を、声音を、表情を。すべてをコントロールして接する。

この子は役者だ。

これから、必ず役者になる。

「悲しみをリセットして、笑顔を思い出したくなったなら。映画だけじゃなくて、わたしにも頼っていいんだよ?」

だから、わたしは夜風景にやさしく触れるのだ。

「……ていうか、頼ってほしいな」

返事は返ってこなかった。

ただ、ぎゅつと。正面から抱きしめられて、不意に襲ってきた人の重みに、わたしは後ろに倒れそうになった。

「……ちよつと、甘えていい?」

「もちろん。景ちゃんのはがんばってるんだから、もつと甘えていいんだよ」

手のひらを広げて、背中をさする。

絹の糸のような黒髪に、指を通す。

「……結愛ちゃんに、隠し事はできないわ」

「当たり前だよ。景ちゃん、わたしに隠し事できたことないじゃん」  
この夜。



心を満たす感情の色が『安心』に変わるまで。わたしは景ちゃんの側にいることにした。



翌朝。

「どう？ 自然に笑えてるでしょ？」

ピスピス、と。

両手でピースサインを作っている景ちゃんを見て、朝からわたしのテンションは最強マックスボルテージインフィニティだった。

あー、かわいい。かわいすぎる。昨日、熱くて濃厚な一夜を過ごしたかいがあったわ……！

「わあーい！ 明るいおねーちゃんだー！」

明るい景ちゃんを見て、ルイくんも元気一杯に喜んでい。いやあ、よかったよかった。

景ちゃんも上機嫌になって、その場でくるくる回りだす始末だ。

「もつと早く覚えるべき顔だったわ！ これなら、友達スタバに誘えそう！」

「景ちゃん、わたし以外に友達いるの？」

「いないわ！ まず、結愛ちゃん以外の友達を作らなきゃいけないわね！」

「あつはっは〜」

と、和やかに笑っていると、この場の雰囲気似つかわしくない感情が、背中に刺さった。

色濃い『不安』と。そして『恐怖』。

「どうしたの？ 大丈夫、レイちゃん？」

「ゆあねーちゃん……」

びくつと。レイちゃんはランドセルの紐を強く握って後ろに下がった。

あまり、怖がらせてはいけない。

膝を折って、目線を同じにして、景ちゃんには聞こえないように。顔を近づけて、わたしはレイちゃんに囁いた。

「お姉ちゃんがこわい？」

「え……なんで、わかるの？」

「わかるよ。わたしは、魔法使いだからね」

そつと手を握る。

「たしかに、普通の人は急に涙が流れたり、急に満面の笑みになったりしないよね。だから、レイちゃんがこわくなつちやう気持ちも、すぐよくわかる。でも、大丈夫だよ」

「なんで……？」

「だって景ちゃんは、必ず役者になるから」

言つて、聞かせて、

「だからさ。お姉ちゃんがこわい、とか。そういう、景ちゃんが傷つくようなことは、絶対言つちやダメだよ？ わたしと、約束してね？」

「……うん。わかった」

頷かせる。

これでいい。

満足して、わたしは立ち上がった。

「よし。じゃあ、景ちゃん。わたし、先に学校行くね！」

朝から景ちゃんの笑顔をたくさん見れて、今日は学校も配信もすごくがんばれそうだな！なんて。わたしは実にいい気分で、一日のスタートを切れそうだったんだけど。

家の前で停まった一台の車が、その穏やかな朝のスタートを、粉々に破壊した。

「夜風景君」

車から降りてきたのは、涼やかな声が耳によく通る、1人の男性。「すまないが、一緒に来てくれないか？」

……は？

なに、この男？

## 釣り配信と映画監督

景ちゃんが、連れ去られてしまった……

景ちゃんが連れ去られてしまったのに、なんでわたしは？ 気に学校に来て、のんびりと授業を受けて、穏やかにお昼のお弁当を広げているんだろう……？

「はああああああ……」

「どうしたの結愛？ 溜息深いよ」

「だつてえ……」

「あー、隣のクラスの夜風さん。今日、お休みなんだっけ？ だから元気ないの？」

「それは、そうなんだけどお……」

クラスメイトの言葉に、力なく頷く。

朝、車で乗りつけてきたあの不審者の名前は、星アキラ。よく顔を見てみたら、わたしでも知っている有名な俳優さんだった。最近は何曜朝の子ども向け番組『ウルトラ仮面』に主演として出ている。ちびっ子と若い奥様から大人気だ。

なんでも、景ちゃんが落ちたオーディションの合格者が最終審査を辞退してしまつたらしく、その穴埋めということで、景ちゃんにもう一度審査を受けてもらうため、あんな朝早くから迎えにきたらしい。今をときめく若手俳優を、タクシー代わりにこき使うなんて、スターズは人手不足なのだろうか？ それとも、事務所の代表の星アリスの息子だから、こき使われているのかな？

心の中で皮肉を言っても、誰も聞いてくれないのがつらい。

そういえばあのイケメン、ちらつと「君が千世子くん……」って言うってたけど、なんだつたんだろう？

「でもよかつたじゃん。夜風さんがお休みなの、オーディションを受けに行つたからなんですよ？ 落ちたはずのオーディション、今度こそ受かるかもしれないし」

「それはあ……そうなんだけどお……」

本当は、わたしもついて行くこうと思った。

でも、あの見た目さわやかイケメン不審者は「関係者以外の人間を会場に連れていくわけにはいかない」とか正論をのたまうし、景ちゃんも景ちゃん「大丈夫。行ってくるわ。心配しないで」とか思わず心をハートキャッチされそうなイケメンセリフでわたしのことを押し留めてくるし。そのくせ、レイちゃんルイくんはしれっとなにくわぬ顔で一緒に車に乗り込んでオーディション会場に付いて行っちやったし……

結局、ぽつんと取り残されてしまったわたしは、1人寂しく学校に行くしかやるのがなかったわけで……

「わたしだけ仲間外れだああ……うわあああ」

「はいはい」

「おー、よしよし。おかずの玉子焼き食べるか？」

「食べるう……」

こういう時、甘やかしてもらえるから美人はお得だ。

女の子のコミュニケーションは外見がかわいいと生きにくい……って思っていたけれど、なんてことはない。大事なのは、人間関係の構築と立ち回りだ。

刺さってくる感情を読んで、分析して、それに沿った行動を取捨選択して、自分に対する好感度が高い人間を周囲に残す。それさえできれば、集団の中で孤立することはまずない。

なお、景ちゃんは雰囲気近寄りがないので孤立しまくってる模様。

でも、景ちゃんにはわたしがいるから……景ちゃん……景ちゃん景ちゃん……

「あー！ 景ちゃん大丈夫かな！ また何かやらかしてないかな！  
！ オーディション受かるかなあー！」

「夜風さんいないから発作起こしてるよ」

「心配するかごはん食べるかどっちかにしな」

「信じて待つのが幼馴染ってもんじゃないの？」

「うー！」

クラスメイトからの正論に袋叩きにされて、わたしは頭を抱えるし

かなかった。

でも、たしかにその通りかもしれない。

今のわたしにできるのは、景ちゃんの合格を信じて待つことだけ。だったら、わたしは待つ！ 景ちゃんの合格を信じて！

また落ちたらしい。

「何なんだろう今日は……厄日かな？」

放課後、わたしはスマホの画面を見ながら、思わず首を捻った。

オーディションの審査で、一度は落ちたけど、補欠枠から合格まで駆け上がって、一気に人生大成功！ なんて、よくあるサクセスストーリーだと考えていたんだけど……何度でも言おう。やはり現実というものはそんなに甘くはないらしい。

本当は今すぐ景ちゃんを抱きしめて慰めて頭よしよししたいところだったけど、今日は前から言っていた配信の予定日だったので、それはできなかった。というか、まだ景ちゃんも家に帰ってないらしいし、仕方がない。自分の気持ちを落ち着けるためにも、大人しく配信やってから景ちゃんを慰めに行こう。

というわけで、

「おつちやーん。きたよ。2時間お願い」

「あいよ。1200円ね」

本日の配信は、釣り堀実況です。

釣り堀。そう、あの釣り堀です。じじ臭いとか、JKらしくないとかよく言われるけど、釣り堀です。わたしは放課後、タピオカをキメるよりも、釣り糸を垂らす方が好きなのだ。

わたしが常連として足？く通っているこの釣り堀は、なんと駅から3分。少し上を見上げれば都会のビルとマンションが目に入る……

コンクリートジャングルのど真ん中にポツンと浮かぶ、癒しのオアシスみたいな空間である。それなりに歴史のある釣り堀で、なんでも大正の時代からやっているらしい。

平日の夕方とはいっても、学校が終わって即行でやってきたので、まだ人は少ない。こんな時間帯から釣り堀で時間を潰しているのは、近所のおじいちゃんか、よほどの暇人か、働いていない自由人くらいだ。

「あ、ヒゲのおじちゃん。今日もきてたんだ」

「……配信少女。またきたのか」

わたしのことを『配信少女』と呼ぶ、この失礼なおじちゃんも、常連の1人だ。職業は自称『映画監督』。うそかほんとは知らない。普段、何で食べているのかわからないくらい、結構な頻度でこの釣り堀に入り浸っているの、まともな働き方をしていないことだけは間違いない。

「おじちゃんにまたきたのか、って言われる筋合いはないんだけど」

「その『おじちゃん』って呼び方やめろ」

「じゃあ、またカメラの位置みてよおっさん」

「おじちゃんでもなければおっさんでもねえよ……ったく」

ぶつくさ文句を言いながらも、ヒゲのおっさんは配信用のカメラの位置をみてくれた。

「その場所はやめとけ。この時間帯だと、すぐに逆光になっちゃう。こっちにしろ」

「角度はこれくらいでいいかな?」

「もうちょい上げろ。それと、この前とは違うアングルにした方がいい。お前、顔だけはいいいからな。そっちの方が画面映えるし、見る方も飽きないだろ」

「顔がいいって……え? なに? ナンパしてるの?」

「ぶつとばすぞ?」

そう。このヒゲのおっさん。どこからどうみても不審者なのに、カメラや撮影の知識はプロ並みにあるのだ。『映画監督』という職業の自己申告を、疑いきれない理由がここにある。まあ、名前聞いて調べ

ててもいいんだけど、釣り堀で偶然知り合った人のプライベートをそこまで詮索するのも野暮つてもんなので、特に詮索はしないことにしていた。べつにそこまでおっさんのプライベートに興味があるわけじゃないし。

「ていうかお前、前から思ってたんだけど、よくこんな場所でカメラ使うの許されてんな」

「ここの釣り堀のじいちゃんとは、昔からずっと仲良しだからね」

「釣り堀の配信なんてやって、視聴数稼げんのか？」

「この時間だからリアルタイムは少ないけど、それなりには稼げるよ。変わり種だから興味持ってくれるし、結局メインはトークみたいなのがあるし。あと、わたしかわいいし」

「けっ」

気に入らない、と言いたげにヒゲのおじちゃんは鼻を鳴らして、釣り糸を垂らした。いつもはつまらなそうに魚の動きをみているのに、今日はなんだか竿を持ってそわそわしている。

「ねえ、おじちゃん」

「あん？」

声をかけて、こちらを見させる。

ふむふむ……なるほど。

「なんか、今日いいことあった？」

「お前、相変わらず勘が鋭いな。エスパーか？」

「趣味が人間観察なだけだよ。で、何かいいことあったの？」

「……あった」

「なに？」

「俺の映画に相応しい役者が見つかった」

「……はあ？ それはなんとというか、よかったね？」

「お前、信じてないだろ」

「そんなことないよー。祝福しているよー」

「棒読みで言うな。大根役者かよ」

吐き捨てるように言いながらも、おじちゃんの言葉はやはりどこかうれしそうだった。

「どうやら、うそではないらしい。」

「じゃあ、おじちゃん。その役者さん使って映画撮るんだ」

「ああ。これからスカウトに行く」

「ふーん。こんなところで油売っていいの？」

「これから行く、って言っただろ。今行ってもどうせいないだろうから、それまで暇を潰してるだけだ」

「なるほどね。わたしと同じだ」

「一緒にすんな」

「わたしの親友に、オーディションとか受けてる役者志望の子がいるんだけどさ。よかったらおじちゃんの映画で使ってよ」

「俺とお前の間にそんなコネはねエ」

「ちえ。ケチだなー」

唇を尖らせてそう言うとおじちゃんはまた人を小馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「役者って職業はそんな甘いもんじゃないんだよ。まあ、お前は顔がいいからな。友達はともかく……どうしてもって言うなら、お前は俺が面倒見て育ててやってもいいぞ？」

「……？」

耳を疑った。思わず、準備していた釣り竿を取り落としそうになる。

「わたしを育てるって……パパ活？　いくら積まれても、それはちよつと……」

「ぶつとばすぞ？」

わたしとおじちゃんの会話は、いつも大体こんな感じである。

話を打ち切って、わたしは口元にマイクを寄せた。主に、外で配信する時に使うもので、音量を抑えても声をクリアに拾ってくれる優れものだ。

「はい、みんなこんにちは。今日は予告通り、釣り堀配信やってくよ」

『まっつた』『きた』『このために有給とった』『釣り堀好きだわ』『ゲームじゃなくてリアルで釣りするのほんとすこ』『釣りが趣味のJK』



『放課後釣り堀デート』

「はじめての人向けに解説していくね。釣り堀では、このからしみたいな餌を使うんだけど、大きすぎるとダメなんだよね。まず、エサは少し濡らして柔らかくして。で、金魚の口は小さいから、ほんと小さめに釣り針につけるのがコツ。オーケー?」

『オーケー!』『了解。小さめ!』『解説わかりやすい』『これどこの釣り堀?』『はやく釣ってくれ』『おれがユアユアに釣りたい』『さっさとリリースされろ』『お前如きがキャッチしてもらえるとと思うな』『辛辣で草』

「……」

ひげのおじちゃんは、配信を始めるまではわりと口うるさいくせに、わたしが配信を始めると静かにしていてくれる。で、じつとこつちを見て観察してくる。

最初は「なに見てんだこのオヤジ。ぶつとばしてやろうか」なんて思ったんだけど、感情を読んでそういう気持ちは薄れてしまった。このヒゲのおじちゃんは、わたしに対して邪な気持ちは一切なく。本当に興味本位で、わたしのことを観察しているのがわかったからだ。

そこらへんの大人や配信の視聴者達から性的な目で見られるのに慣れ切っているわたしにとって、それはなかなか大きな驚きだった。あまりにも驚きだったので「おじちゃんってホモなの?」って聞いたら釣り堀に落とされかけた。またべつの日におじちゃんって枯れるの?」と聞いたら、やはり突き落とされかけた。解せぬ。

「ほんととは角が釣りやすいんだけど、今日はこのポジションでがんばっていくよ」

まあ、とにかく。

純粹に興味本位でわたしのことを観察してくる、この不思議なおじちゃんが。

わたしは意外と嫌いではなかったりする。

一時間ほど配信を続けていると、おじちゃんが腰をあげた。

ちらり、と横目で様子を伺うと、メモ帳が目に入った。

『今日はもう行くわ』

わたしも、カメラの外でスケジュール帳の空いたページに、ペンをはしらせた。

『映画、がんばってね』

ヒゲのおじちゃんはニヤリと笑うと、そのまま振り返らずに片手を軽く振って、釣り堀を出て行った。

……まあ、うん。

ああいうところは、ちよつと映画監督っぽいと思う。さてさて。

配信が終わったら、景ちゃんちに直行だ……と、思っていたんだけど。

新しく届いたラインのメッセージの差出人。その名前に、わたしは配信中だというのに、表情が歪むのを抑えられなかった。

「ごめんね、みんな。ちよつとお花摘んでくるねー」

トイレ休憩、という苦しい言い訳をして席を外す。

メッセージの文面は、いたって簡潔。

『あなたに、とてもおいしいコラボの話がきています。すぐに打ち合わせをしましょう』

それは、わたしが世界で二番目に嫌いな男。

最低で最悪で最高に優秀な、わたしのプロデューサーからの連絡だった。

やっぱり今日は厄日だ。景ちゃんの家に、行けそうにない。

★★★☆☆

「1本の映画のために、70億人からたった一人を探し続けている」

一台の車が、夜凧家の前に止まる。

「そういうバカを映画監督というんだが……俺もその一人なんだよ。随分苦労している。どうしても撮りたい映画があるんだ。そのために仲間を探している」

ヒゲ面の男は両手をポケットに突っ込んで。

「ずっと待っていた。お前のような奴が、こっち側に来るのを」  
尊大に、けれど期待に満ちた目で、その少女を見つめていた。

「黒山墨字。映画監督だ。お前は？」

少女は応える。

「夜風景。役者」

## わたしのプロデューサー

駅前のスタバに行くと、プロデューサーはやはり先に席に座って待っていた。

「お待ちしていました」

「うん。待ってもらおうようにちよつと遅れて来たからね」

お前は、ちよつと待たせるくらいがちよつどいい、と。

挨拶代わりのジャブ。嫌味つたらしくそう言ってみたが、プロデューサーはわたしの失礼な発言を意に介することもなく、むしろニコつと笑って皮肉を聞き流した。ゆったりと手で席をすすめるその所作が、完璧に紳士的で逆に腹が立つ。

「かまいませんよ。男性は女性を待つものです。私の時間はとても貴重ですが、あなたのために使うなら惜しくはありません」

「歯が浮くような口説き文句だね。反吐が出そうだよ」

「つれないですね。直接お会いするのはひさしぶりだというのに」

何を言っても、この男の柔和な笑顔は崩れない。

諦めて、わたしは席に腰を下ろした。

「それで？ わざわざ呼び出して話っているのは、なに？」

この男は多忙だ。

様々な業界、多種多様な人間のプロデューサーに手を出して、荒稼ぎしている。実際、それで荒稼ぎできてしまう程度には有能で、いろいろな方面に顔が利く、有能なプロデューサーであることは間違いない。わたしの売り出し方についても、普段はメールやライン、あるいは別の人間を通してやりとりをしている。こうして直接顔を合わせるのは、わりと珍しい。

まあ、わたしが直接会いたくない……ってというのが、一番の理由なんだけど。

「しばらくお会いしない間に、また綺麗になりましたね」

「お世辞はいらないから、早く本題に入ってくれないかな？」

「そんなにカリカリしないでください。プロデューサーする人間と親交を深めることも、プロデューサーの大切な仕事の一つです。私は、あ

なたともつと仲良くなりたいたいと思っっているんですよ、結愛さん」

「わたしは現状の関係で満足しているから、このままでまったく問題ないよ」

「本当につれませんか。ですが、そういうところがまた好ましい。簡単に遊びかない女はそりります。落とし甲斐があるので」

「すぐそこに交番あるんだけど、不審者として突き出してあげようか？」

「冗談ですよ、冗談。私はあくまでもビジネスマン。私の目的は、あなたをスターにすることです。個人的な感情が入り込む余地はありません」

頬杖をついて、鼻を鳴らす。

「わたしは『あなたの見世物』だもんね」

この男とは、そういう契約を交わしている。

「よくわかっていらっしやる」

「……言葉だけでも否定したら？」

「あなたに？を吐いても仕方ないので」

本当に、食えない人だ。

わたしがこの得体の知れないプロデューサーと組んでいるのは、彼の能力が優秀だから……というのも、もちろんあるけれど。それだけではない。

「さて、楽しい雑談はこれくらいにして、本題に入りましょうか」

言うことやること、全てが胡散臭い。でも、この男は、

「今日は、本当に良い話を持ってきたんです」

絶対に、？を吐かないのだ。

？にまみれた人間社会で、稀に見る正直者。

人の心を感じ取れるわたしからしてみれば、それは十分信用に値する彼の美点だった。

まあ、そこを差し引いても性格やら言動やらその他諸々のマイナスポイントで、好感度はぶっちぎりのマイナスにまで振り切れているだけだね。

「結愛さんは、百城千世子という女優をご存知ですか？」

「バカにしてんの？ 知ってるに決まってるでしょ」  
百城千世子。別名、スターズの天使。今、一番売れている若手女優だ。

ドラマに出演すれば視聴率を着実に確実に稼ぎ、映画に出ればどんなくそ脚本でもある程度の興業収入まで持つていく。演技力もずば抜けていて、磨き抜かれた容姿に関しては何うまでもない。

わたしも、彼女の出演作品は何本も見ている。

「その百城千世子から、あなたに共演の企画オファーがきています」

「……へえ。なんで？」

「さて、理由に関しては私もわかりません。むしろ、こちらが聞きたいくらいです」

「プロデューサーが根回ししたわけじゃないんだ？」

「残念ながら違います。この話も、私ではなく別の人間を通してあなたにいきそうになっていましたから。危うく、わたしを抜きにして企画の話が進むところでした。いやあ、あぶないあぶない」

「ふーん。それで、慌てて自分のところで話を止めた、と。プロデューサー、スターズの社長に嫌われてるんじゃないの？」

「……本当に、あなたは聡明ですね。惚れ直してしまいそうです」

「褒めても何も出さないし、気持ち悪いからやめて」

一口、コーヒーを啜って、息を吐く。

「わかった。うけるよ」

「おや、よろしいのですか？」

「いいお話って、さつきプロデューサーが言ってたじゃん」

「それはそうですが、断ることもできますよ」

「百城千世子と共演できるチャンスなんて、いつ巡ってくるかわからないし。それに、わたしに話が回ってきたってことは、こっちの土俵でやらせてもらえるってことでしょう？」

「ええ。企画の詳細はこちらで責任を持って詰めます」

「なら、問題なし」

コーヒーの残りを一気に飲み干して、立ち上がった。

「今回はべつの人じゃなくて、プロデューサーが直接やってね」

「勿論です。私はあなたのプロデューサーですから。万事、お任せください」

「じゃ、詳しい話は次の機会に。また連絡よろしく」

「ああ、帰る前に一つ。よろしいですか？」

「なに？」

『K子ちゃん』のオーディションは残念でしたね」

「……っ」

思わず、足を止めた。

動揺を表情に出さないように努めた。でも、この男には気づかれているだろう。

「……なんで知ってるの？」

「この前の配信で食べていたカレーも、とてもおいしそうでした」

「質問に答えてくれないかな？」

「スターズからきた企画を、すぐに承諾した理由。あなたなりに、K子ちゃんを落としたスターズに対して意趣返しをしよう、ということでしょうか？」

「質問に質問で返す男は嫌われるよ？」

「残念ながら、元々私はあなたに嫌われているので、さらに嫌われたところできして問題にはなりません。嫌われるのは悲しいことですが……少なくとも私は、あなたのことが大好きですよ、結愛さん」

大きく、息を吸った。興奮するのはよくない。このままでは、相手のペースだ。

のせられては、いけない。

「……嫌いな相手でも、一緒に仕事はできるもんね。そこまで、子どもではないつもりだよ」

「素晴らしい。大変結構。ビジネスですから」

パチパチ、と。プロデューサーは軽く手を叩いた。

「いやしかし、結愛さんが夢中になっているだけあって、K子ちゃんはとてもいい子のようですね。顔写真を拝見しましたが、あなたとはまた違ったタイプの美人でした。並んでカメラに写れば、さぞかしい画が撮れるでしょう」

オーディションのことを知っている、ということとは。  
この男はもう、景ちゃんの本名も家族構成もその境遇も、全て把握している。

いつでも『見世物』にする準備ができていたということだ。

「スターズのオーディションに落ちたからといって、落胆することは  
ありません。よろしければ、すぐにでも私が彼女と直接会って……」

「天知さん」

今日、会ってからはじめて。

彼の名前を、呼んだ。

頭を、手のひらで掴む。引き込んで、顔を寄せる。

一言一句。決して聞き逃すことがないように、言葉を突きつける。

「景ちゃんには、手をだすな」

揉め事の気配に、店内がざわついた。

それでもやはり、顔に張り付いた笑みは崩れない。剥がれない。

「それは、これから私が決めることです」

この男、天知心一あまちしんいちは。

わたしに、絶対に？を吐かない。

☆☆☆☆

今日は疲れた。

「あのクソプロデューサーめ……」

悪態を吐いても、キリがないことが自分でもよくわかる。

もう、景ちゃんの家に行く気力すらない。

まあ、そもそも今日はオーディションもあつたし、景ちゃんの方も  
きつと疲れているだろう。慰めてよしよしするのは明日の朝にする  
として、今夜はわたしもはやく寝よう。



「……あれ？」

不審な気配に気がついて、立ち止まった。

家の前に、誰か立っている。お隣の、景ちゃんの家ではなく。わたしの家の前に、人影がいた。

マスクにメガネ、帽子まで被って上着を着こんでいるその姿は、見るからに不審者。でも、明らかに小柄な体つきと、独特な雰囲気があるのを打ち消していた。

たとえば、隠していても。そのオーラを隠しきれていない。

「こんばんは」

身体が、固まった。

聞いたことがある声だったからだ。

メガネとマスク。それに、被っていた帽子を、彼女は外して捨てた。「企画の件、受けてくれたって聞いて。待ちきれなかったので……直接、挨拶にきちやいました」

それは、道端でやるにはあまりにも芝居がかった動きだったけれど。芝居がかった動きを現実に行ける美しさを、目の前の女の子は持っていた。

「今夜は、月が綺麗ですね」

月明かりに照らされる、天使が一人。

百城千世子が、わたしに向かって、微笑んだ。

天使に触れて、触れられて

『月が綺麗』だなんて……漱石ですか？ 初対面の相手に、随分と情熱的な挨拶をなさるんですね。百城千世子さん」

本当に、綺麗な子だと思った。

ショートボブの髪の毛は、触らなくても見ているだけでふわふわだってわかる。夜の闇に浮かび上がる真っ白な肌は、いっそ不気味なほどで。人々の視線を釘付けにする確かな魅力の塊が、わたし一人の前に佇んでいた。

なんて、贅沢。

おかしな表現だけど。完成された名画を独り占めに行っているような。そんな感覚だ。

ぺこり、と。天使は頭を下げた。

「不躰でごめんなさい。でも、私があなたに興味を持っているのは、本当だから」

天使は、笑みを重ねて懐からスマートフォンを取り出す。

「いつも、配信みてます。ファンです」

「……え？」

思いがけない一言に、体が固まる。

視線の感覚を探る。

軽く、息を吸って、

「本当に?! うれしい!」

わたしは、天使の懐に潜り込んだ。

距離を詰めて、その小さな手を握る。感激に、目を潤ませる。声に、熱を持たせる。

「わたしも、百城さんの大ファンなんです！ 出演作も、全部じゃないけどいろいろ観てます！ 今回、コラボのお話があった時もすっごく嬉しくて！ プロデューサーにすぐ「受けます!」って即答しちゃいました。今、こうやってお会いできたのも本当に夢みたいで……」

「うん。ありがとう」

完璧だと思った。

どこにも、何の違和感もないと思った。

けれど、天使は握った手をゆったりと振り払って。

わたしの唇に、人差し指をそつと当てて囁いた。

「でもそれ、お芝居だよね」

イメージが、塗り替わる。

かわいい。美しい。そんな表現だけでは表しきれない、別の何か。

上目遣いの、男を簡単に射止められるであろう視線が。至近距離でわたしの心を突き刺した。

(……うわ。なんだこれ)

感情の色を、一言で表現することができない。でも、例えるなら……まるで全身をまさぐられているような。昆虫を至近距離でじつと観察するような、そんな『純粋な興味』が、真つ直ぐに向けられている。

全身の毛が逆立って、肌が粟立つ。

けれども、わたしは貼りつけた笑みを崩さなかった。

「やだなあ……お芝居だなんて。わたし、？は言っていないですよ」

「うん。そうみたいだね」

今度は、天使の方が自分から。一度は振り払ったはずの手を、握り返してきた。

「お互いにファンだなんて……私たち、相思相愛だ」

「……そうですね」

微笑みには、微笑みを。

表面上のやりとりはできても、深い部分で、戸惑いが隠せない。

この子は、わたしの中に何を見ているのだろうか？

「急に会いに来て、本当にごめんなさい」

捨てた帽子を拾って、埃をはらう。その所作にすら、見惚れてしま  
いそうになる。

ああ、なるほど。

この子も、今。わたしの前で演技をしているんだ。

「多分、近いうちに打ち合わせがあると思うから。また会える日を、楽しみにしてるね」

群衆に紛れるための装備を、再び身につけて。

「直接会えて、よかった」

静かに、一礼。

「さようなら」

天使は、夜の闇の中へ。

それこそ、幻のように消えていった。

「……百城千世子」

あのクソプロデューサーが、企画の話を「断ってもいい」と言った理由が、なんとなく。わかった気がした。

油断していたら、頭から足の先まで。食われかねないからだ。

「こわいなあ……あんなのがゴロゴロいるのか、芸能界は」

スターズの天使。

直接目にして、よくわかった。彼女は、たしかにかわいかった。かわいくて、美しかった……けど。

「なんか……気持ち悪いなあ」

天使を信奉する者に聞かれたら、殺されそうな眩きを。わたしは漏らさずにはいられなかった。

★★★

翌朝。

「では、第151回夜凧家家族会議をはじめます」

「はい」

「はい」

「はい」

「昨日のひげの男。怪しいと思った人、拳手をしてください」

ルイくんはすつと片手を挙げ、レイちゃんはビシッ！と両手を挙げた。なので、わたしは両手を挙げて、さらに足も挙げることにした。「レイ、2人分も挙げないで。不正よ。結愛ちゃんも。3人分も挙げちゃダメ」

「ていうか、ゆあねーちゃんはなんでここにいるの?」

「わたしが夜凧家家族会議に参加しない理由を逆に聞きたいよ、レイちゃん」

「ああ……うん。うん?」

「ゆあねーちゃん、パンツみえてるよー」

「結愛ちゃん、脚と手をおろして。まだルイには刺激が強すぎるわ」

「はい」

挙げていた手と足を戻す。

トーストにジャムを塗りたくってむっしやむっしやと咀嚼しつつ、わたしは己の無力さに打ち震えていた。

くそっ……性悪プロデューサーや気持ち悪い天使やらに絡まれて、わたしが景ちゃんに会いに行けなかった間に、まさかこんなことになっっていたなんて。

昨日の夜、あやしいヒゲ面の男が景ちゃんを自分のスタジオに勧誘しにきたらしい。このわたしのいない間を狙って、だ。まったく、やってくれる。めちやくちやあやしい。そもそもヒゲ面っていう時点であやしい。人間的に信用できない。そんなあやしいやつと景ちゃんを接触させてしまうなんて……この万宵結愛、一生の不覚だ。

朝ごはんを食べながら、レイちゃんとルイくんが口々に文句を言う。

「おねーちゃん美人だから狙われているんだよ。監督は監督でもエッチな監督に決まってるわ」

「そうだね、レイちゃん。わたしの目が黒い内は、景ちゃんにエッチな撮影はやらせないし、景ちゃんとエッチな関係にもさせないよ」

「車おつきくて怖かったしヒゲだし、絶対悪い奴だよ。今度きたらケーサツ呼ぼう」

「そうだね、ルイくん。そんな大きな車にホイホイ乗っちゃったら、マジックでミラーな感じでチョメチョメされて、景ちゃんがあられもない姿になっちゃうよ」

「結愛ちゃんは黙ってて。私、べつにチョメチョメされる気はないし、あられもない姿になる気もないから」

結局、今朝の第151回夜風家家族会議は『ヒゲ面の男、あやしい。ダメ、絶対』ということで決着がついた。

とはいえ、どんなにあやしい事件があっても、学校には行かなければならない。

「あーあ……。一から芸能事務所探し直さないよ」

朝の通学路をきれいなフォームで全力疾走しながら溜息を吐く……。という地味に高等技術を見せてくる景ちゃんに並走しながら、わたしは「まあまあ」と。ネガティブな発言を押し留めて慰めた。「大丈夫だよ、景ちゃん。芸能事務所なんてスターズだけじゃなく、それこそ星の数ほどあるんだし。きつと、景ちゃんの魅力を理解してくれるべつのスタジオがあるはずだよ」

「そうかしら?」  
「そうだよ」

余談ではあるが、景ちゃんは外見だけじゃなく、基礎身体スペックが非常に高い。意思疎通ができない……。というかコミュニケーション能力が低いから団体競技は苦手だけど、走るのとかはめちやくちや速いので、個人競技に関しては一定のレベルでこなせてしまう。

「速っ！ すげえキレイなフォーム！ あの子誰!? あと、その隣走っている子も!?!」

「2年の夜風さんだよ。あと隣はほら、配信やってる万宵さん」

「あの子!?!」

だから、こうして朝の通学路を走っているだけで注目を集めてしまうのだ。脚が速いし、美人なので。

「その2人〜！ よかったらチャンネル登録よろしくねー」

「え? あ、はい!」

せつかくなのできつちり大声で声をかけて宣伝しつつ、景ちゃんの

後ろにぴったりと張り付いて、街の中を駆け抜けていく。

「やっぱり、結愛ちゃんは有名人ね」

「そんなことないよ」

たしかにわたしも学校の中では有名人だが、景ちゃんだって負けていない。

部活どころか遊びの誘いすら全て断っているので、プライベートがミステリアスになった結果。景ちゃんを取り巻く噂には尾ひれがつきまくって、わりと大変なことになっている。中学の頃から新聞配達をダツシユでやっているとか（これは本当）、そのせいで身体能力はアスリート級とか（これに関しての間違ってはいない）、最近は芸能界進出狙っているとか（当然だ。わたしの景ちゃんに不可能はない）、人の？がわかるとか……それはわたしだね、うん。

「結愛ちゃん、先に学校行ってもよかつたのに」

「ダメダメ。ダメだよ景ちゃん。昨日、不審者に声をかけられたばかりなんだよ。通学途中に狙われでもしたらどうすんの？」

「こんな朝から誘拐を実行するような不審者は、さすがにいないと思うわ」

「それは、そうかもしれないけど。でもこういうのは、用心するに越したことはないよ。備えあれば憂いなしって言うし」

「そういうものかしら？」

「そういうものだよ」

小さい頃から景ちゃんと一緒に公園を駆け回って鍛えられたおかげか、それとも純粋にわたしも身体能力が高いのか。こうして凄まじいスピードで走る景ちゃんと肩を並べて風を切ることができるあたり、わたしの運動能力もなかなか捨てたものではない。今度、新規ファン層の開拓にランニング実況でもしてみようか。いや、カメラが揺れるしマイクの音も拾いにくいからダメか。

と、そんなバカなことを考えていたせいだろう。

目の前で急停車し、ドアを開けた一台のワゴン。それに対するわたしの反応は、一瞬遅れてしまった。

「ほっ。」

するり、と。腕が伸びて。

ワゴン車の中に、身長のわりに軽い景ちゃんの身体が、あつさりと吸い込まれる。

「はあ!？」

思考ではなく、身体の方が先に動いたのは幸運だった。

ドアが閉まる前に、わたしも車の中へと飛込み、ドアが閉まるのと同時に、ワゴン車は急発進した。

「おはよう、夜風。迎えに来たぜ」

ハンドルを握って、ついでに景ちゃんの肩を抱え込んでいるのは、見覚えのある……むしろ見覚えしかない、ひげ面の男だった。

「急で悪いが、早速仕事だ。このまま撮影所に連れて行くから、学校に欠席の連絡をいれよう。そっちのは友達か？ 驚かせて悪かったな。次の信号か、もしくは学校の近くで降ろすから、もしよかったらお前の方からも欠席の説明を学校、に……?」

滑らかに、上機嫌で言葉を紡いでいた口が、わたしを見て止まる。まるで油が切れたロボットのように、首を動かした『ひげのおじちゃん』の顔から、ぶわっと冷や汗があふれ出した。

うん。油が切れたロボットのように、っていう例えは適切じゃなかった。

「は、配信少女?」

「おはよう。ひげのおじちゃん」

ロボットは、こんな冷や汗をかかないだろうから。

「どうして、お前がここに……?」

「それはこっちのセリフだよ」

いやはや、まさかまさか。世間っていうのは本当に狭いものだ。

想像もしていなかった。景ちゃん達が言っていたあやしい『ヒゲ』と、わたしのよく知る『ひげ』が同一人物だったなんて。

「結愛ちゃん、この男、殴っていいかしら」

「もちろん状況的にはぶん殴って股間を蹴り上げて縛り上げていいと思うけど、ちよっと待って景ちゃん。この人、一応わたしの知り合いだから」



「え、そうなの？ 本当に？」

「うん。そうなの。残念ながら本当に」

息を拳に吹きかけている景ちゃんを、どうどうと落ち着かせる。運転中の車内でどったんばったん大騒ぎをしたら、それこそ大事故につながるかねない。

フリーズしていたおじちゃんは、ようやく目の前にわたしがいるという現実に関頭が追いついてきたのか、視線をきちんと正面に戻した。

「いや、なんというかアレだな」

「どれだよ」

「いや、驚いたな。まさか配信少女の言う親友の『K子ちゃん』が、夜風だったとは」

「うん。わたしも驚いたよ。おじちゃんが誘拐犯だったなんて」

「断じて違う」

「でも、これ誘拐だよね？」

「誤解だ。配信少女」

「……ふむ」

まあ、とりあえず。？をいつている気配はないし『敵意』や下品な感情も刺さってこない。

素早く『110』の番号をスマホに打ち込んで、ひげのおじちゃんに突きつける。

「車はこのまま走らせていいよ」

「本当か？ それはありがたい」

すっごくあやしいし、完全に信用したわけではないけれど。でもこれは、景ちゃんにとってすっごく大きなチャンスかもしれない。

「た、だ、し」

につこり、と。笑みを添えて。おじちゃんの肩を強く掴む。

「その間に。簡潔に、わかりやすく、説明して。おじちゃんが何者で、何をする人なのか」

「……わかった。とりあえず、自己紹介いいか？」

「どうぞ？」

そういえば、このおじちゃんの名前知らなかったな。

「黒山墨字。映画監督だ」  
わたしは応えた。  
「万宵結愛。配信者」

## はじめてのCM撮影

「……スタジオ大黒天の、黒山と柊です」

車に揺られること、数十分。到着したのは、本当に撮影スタジオだった。

わたしは景ちゃんと並んで、二人の人物と向き合っている。

ひげのおじちゃん……本当に映画監督だった、黒山墨字。

そして、制作担当だという柊雪さん。

はじめは半信半疑だったけど、こうして名刺を出されて、しかも多くの撮影スタッフが出入りしている撮影スタジオにまで案内されてしまうと、これはもう手の込んだいたずらとかそういうレベルではない。

「結愛ちゃん……信じていいのかしら、この人達」

「うん。まあ、いくらなんでも撮影スタジオを監禁場所を選ぶ誘拐犯なんているわけないし。一応、信用してもいいんじゃないかな？」

「はい……そうなんです。このヒゲがあやしくて信用できないかもしれないけど、小さくてもちゃんとした会社なんです……!」

制作の柊雪さんは動きやすそうなラフな格好に髪を後ろで結んで、化粧つ気はあんまりなかったけど、そこその美人さんだった。というか、すごく若く見えるけど、もしかして同い年くらいだったりするのだろうか？

さつきからひげのおじちゃんの頭を掴んで「ほら、急に連れてきたこと謝ってください」「やだ」「謝れ」「やだ」「この子にうちの事務所入ってほしいんでしょ!」「うん。でもいやだからあやまらない」「ヒゲガキいい加減にしろよ!」ていうか隣りの子は誰!」「ついでに連れてきた」「ついでってなんだあ!」だからそれが誘拐だって言ってるんでしょが!」と、バチバチにやり合っている。多分、普段からこんな感じですごく苦労しているのだろう。大変そうだ。

「いやあ……それにしてもまさか、おじちゃんが目をつけていた女優が景ちゃんだったなんてねえ……ほんと、びっくりだよ」

「まったくだ」

「まあ、景ちゃんは見ての通り美人さんだし？ 演技力すごいし？」

間違いないから大ヒットする女優になるからね。おじちゃん、『金の卵』を見る目はあるみたいだね」

「やめて、結愛ちゃん。そんなに褒められると照れるわ」

「目の前で乳練り合ってるんじゃないよ。本題に入れないだろうが」

わたしと景ちゃんがイチャイチャするのを邪魔するなんて本来は重罪だけど、たしかにおじちゃんの言う通り、セットや撮影の準備をしているスタッフさん達をこれ以上待たせるわけにはいかない。

「それで？ おじちゃん。今日やるのはCM撮影だっけ？」

「ああ。そうだ。『父の日にシチューを』っていう、新発売のシチューのウエブCMだよ」

ひげのおじちゃんの説明曰く。

はじめて一人でキッチンに立った一人の少女が、仕事から帰ってくる父親のために慣れない手つきで料理を作っている。喜ぶ父親の笑顔を思い浮かべながら、味見をして顔をほころばせる……そんなシチューエーションらしい。

「なるほどなるほど。すっごくありがちな感じだね」

「わかるか、配信少女。しょうもない企画だが、CMだからな。金になる」

「墨字さん？ うしろにプロデューサーとクライアントいるんだよ？」

マジで言葉選べ」

雪さんは言葉を選ばずに、力でひげのおじちゃんのほほをつねっている。

一回りも年が離れている部下にほっぺたを引っ張られている姿は、威厳の欠片もないけど、しかしこのおじちゃんの監督としての名声は本物だ。こつそりスマホでググってみた結果『黒山墨字』という名前は、どうやら国内よりも国外で評価されているらしい。

「どうする、景ちゃん？ 経緯はどうあれ、デビューのチャンスが転がり込んできたよ」

「デビューのチャンスは嬉しいけど、私……この人が生理的に受け付けないわ」

「あー、わかる」

「わかるわー」

「なんでお前ら頷いてんだ？　そこは俺をフォローしろよ」

「えー、だって……ねえ？」

「そうだよねえ」

景ちゃんだけでなく、雪さんも「うんうん」と頷き合う。なんだか、この人とは仲良くなれそうさ。

とはいえ、ここまで来て「じゃあ帰ります」と言うのは、さすがにおじちゃんの面目が丸潰れだろう。

「おじちゃん」

「なんだ？」

「ギヤラとかどれくらい貰えるの？」

「ん？　そりやウエブとはいえ、企業CMだからな。これくらいは固いぞ」

お金の話は大事である。

提示された金額は、なかなかの額だ。わたしだけ確認して良かった。景ちゃんが見たらひっくり返っているだろう。少なくとも、デビュー前の役者に支払われる金額としては破格なのは間違いない。

「景ちゃんの所属は、これからおじちゃんのスタジオ……『大黒天』になるってことでOK？」

「そういうことになるな」

「契約書とか、今ある？」

「あ？　今日は持って来てな……」

「はい！　一応こちらに！」

「……なんでお前そんなもん持ってきてんだ？」

「アンタが新しい俳優連れてくるって言ったから私が用意してきたんです！」

……おじちゃんはいろいろとあやしさが拭えないけど、雪さんはしっかりしてそうさ。ざっと書類を見てみても、不審な点や不明瞭な部分はない。あとで、プロデューサーにでも送ってチェックしてもらおう。あの人、こういうことだけはめちやくちや役に立つし。

わたしは、景ちゃんの肩にそつと手を添えた。

「景ちゃん。やってみてもいいんじゃないかな?」

「……そうね。わかったわ」

すくつと。立ち上がった景ちゃんは、ゴムで髪を結わえた。

「あの大きなリカちゃんハウス……セットの上で料理を作ればいいのね?」

「ああ、そうだ」

景ちゃんの、記念すべき初仕事、初演技。

どんな形であれ、親友の晴れ舞台は必ずこの目でみて応援しよう、と。そう思っていたけれど、まさかこんな特等席で景ちゃんのCM撮影を見学することができると。それだけは、ひげのおじちゃんに深く感謝してもいいかもしれない。

きつと、景ちゃんは素晴らしい演技でみんなの度肝を抜いてくれるに違いない。楽しみだなあ……

そう思っていた時期がわたしにもありました。

景ちゃんは、たしかにスタッフさんやクライアントさんの度肝を抜いた。

ただし、演技ではなく、調理技術で、だ。

「達人かお前は!」

おじちゃんがキレた。

「俺は』はじめて一人でキッチンに立った少女の役』をやれって言っただろうが!　なんでそんなに手際よくシチュー作ってんだ!?!　真剣にやれよ!」

「真剣よ!?!　味見してみる?」

「真剣に演じろって意味だよ!　真剣に作れとは言ってねえ!」

繰り返しになるけど、景ちゃんの得意なことは『料理』である。

「どれどれ……うわっ!　さすが景ちゃん!　おいしい!」

「ふふっ……でしょう?　この新商品、いいわね。レイとルイにも食べさせてあげたいわ」

「お前もなに味見してんだ!? ええい……くそっ……」

ガシガシと頭をかいて、おじちゃんは景ちゃんのシチューをほおばっているわたしを指差した。

「配信少女！ お前、ちよつと代われー！」

「はい？」

思わぬご指名に、スプーンをくわえたまま首を傾げる。

「そののバカと代わって、手本見せてやれ。できるだろ、お前」

「ちよつと墨字さん!？」

「はあ……? そりゃあ、やれと言われればやりますけど……」

「ちよ!?! ええ!?!」

ただでさえテンパっていた雪さんが、おじちゃんのとんでもない提案に目を回しそうになっている。

ふむ……景ちゃんのお料理教室のせいで、スタジオの空気は弛緩気味。おまけに、うしろで見ているメガネの人とハゲのおじさん……プロデューサーさんとクライアントさんかな? 進まない撮影に、かなりイラついているご様子だ。どうせおじちゃんのことだから「どうしても新人を使いたい」なんて言って、景ちゃんを無理やりキヤスティングしたんだろう。このままだと、景ちゃんのデビューが悪いイメージでいっぱいになってしまう。それはわたしとしても、非常によろしくない。

……よし。一肌脱ぎますか。

「景ちゃん、ヘアゴムかして」

「え? 美術さんに言えば……」

「景ちゃんのがいいの」

「……わかった」

景ちゃんは、高めの位置で髪をまとめてポニーテールを作っていた。イメージが被らないように、自分の髪留めも使って、髪を後ろで織り込むようにまとめた。ついでに前髪もヘアピンで軽く上げる。

「おじちゃん」

「なんだ？」

「わたし、高いよっ」

「ぎつきのと同じ値段出してやるよ」

「太っ腹だね。じゃあ、ちよつとがんばってみるよ」  
すう、と。

大きく息を吸い込んで、叫ぶくらいの勢いで。発声した。

「夜風景に代わって入ります！万宵結愛です！ よろしくお願いします！」

人間は、音を発するものに視線を向ける。

瞬間、緩んでいたスタジオの空気が引き締まるのを。わたしは文字通り、肌で感じた。

注目は得た。空気と意識も引き締めた。

わたしは、景ちゃんみたいにメソッド演技をすることはできない。『過去の自分』を引き出せるわけじゃないし、あそこまで役に入り込むことはできない。

だから、引き出そう。

吸い取ろう。

フィードバックしよう。

でなければ、わたしは輝くことができないから。

わたしを見詰める、すべての人達の感情を。どんな些細なものでも、見逃さないように。

「さて、と」

カメラの位置は確認した。配置も角度も完璧だ。これに関しては、さすがおじちゃんと言うべきか。

「……」

キツチンの前に立つ。

——まずは、軸を決める。

メインはやはり、ひげのおじちゃん。スタッフさん達を取り仕切っている、雪さん。カメラさんからも、重点的に拾い上げることにして……あとは、やっぱりプロデューサーさんとクライアントさん、かな？



最初はこの二人に。  
魅<sup>み</sup>せることからはじめよう。



スタジオ大黒天、美人制作（自称）の柘雪は混乱していた。

黒山墨字が勝手なのは、いつものことだ。雪が持ってきた仕事もいつのまにか断るし、給料の振り込みが遅れたことだって一度や二度ではない。

だが、映像を撮る演出家としての技術と、役者をみる目だけは、絶対に確かだ。

そんな黒山が『金の卵』と称して、素人の役者を引っ張ってきた。それだけでも普通なら考えられないことなのに、今度はその『金の卵』を下げて、別の素人を撮影にあげてねじ込んだ。

正直、意味がわからない。常識外れにも程がある。

ただ、なんとなく。あの万宵結愛という少女が普通とは違う雰囲気を持つていることは、雪にもわかった。

「墨字さん……なんか、あの子すごいですね。これだけカメラ向けられているのに、物怖じしないし。見られることになれているっていうか」

「そりゃ、普段から万単位の人間に見られてるからな」  
「え？」

そういえば。

夜風景が飛び抜けて美人なせいだろうか。なんとなく注意が逸れたいけれど。

あの明るい笑顔、どこかで見たことがあるような……？

「柘。時間も押してる。テストなしの一発でやれ」

「はあ!? 正気ですか!?! これで失敗したら今度こそプロデューサーとクライアントが……」

「いいんだよ。あいつには一発撮りの方が合ってる。うるさいプロデューサーとクライアントを説得する方法はもう考えてあるし、それ

に……」

「……それに？」

カンヌ。

ベルリン。

ヴェネツィア。

世界三大映画祭、すべてに入賞経験を持つ映画監督。

黒山墨字は、確信めいた口調で言い切った。

「あいつの演技を見れば、すぐに黙る」

黒山は笑う。

金の卵を拾ってきた。割ってみたら、黄身が二つも入っていた。

もしかしたら自分は、とんでもない幸運に恵まれたのかもしれない。

## お料理配信（※CM撮影）

それは、派手な演技だった。

包丁を握る手はぎこちなく、うっかり指を切ってしまいそうな危うさは……けれど、見る者の庇護欲をかきたてるような愛らしさに満ちていて。

食材を冷蔵庫から取り出し忘れて、慌てて戻り。

沸騰したお湯に、びつくりして振り向き。

味見した結果に、その場で小さくガッツポーズをする。

ステップを踏むように軽やかに、勢い良く。狭いスペースしかない台所をまるでカメラに写る自分が完璧に把握できているかの如く、彼女は縦横無尽に駆け回る。

万宵結愛の演技に、スタジオ全員の視線が釘付けになっていた。

「……すごい」

「撮り逃すなよ」

黒山から注意を受けて、雪は意識を引き締め直した。きつと、その姿を追うカメラのスタッフも、同じ思いに違いない。

結愛の演技は、別人のように何かが変化したわけではなかった。等身大の美少女がそこにいて、調理をしている。言ってしまうと、ただそれだけのこと。

最初は、どこかぎこちなさがあった。しかし、その『ぎこちなさ』すらも「父親のために慣れない料理を作る少女」というシチュエーションにうまく組み込んで、昇華した。リアルタイムで、カメラの撮影範囲やそこに写る自分の姿を、的確に確実に、信じ難い精度で修正している。

それだけではない。

優れた外見は、役者の強さだ。はじめての撮影で、結愛は自身のそれを一切疑っていなかった。

その証拠に、表情がいい。

明るく、笑顔で。外見の愛らしさを最大限に活かした、自信に満ち溢れた所作が心を引きつけて離さない。

派手な演技は、一歩間違えば見る者の心を冷めさせる。媚びている、と言われるかもしれない。

しかし、カメラの中で踊る少女は演技を見る人間の中を覗き返しているように、決してその境界を間違えない。

黒山は呟いた。

「……火加減の調節が絶妙だな」

シチューが完成する頃には、冷え切っていたスタジオの空気も温かく煮込まれていた。

★★★

「カット！ オーケーです！」

「カット！」

「おーけい！」

終了の合図に、ほつと息を吐く。

「ありがとうございました」

にやあー、疲れたあー。

いつもよりも『見る人』の人数が少ないから楽勝だぜー！なんて思ってたけど、やっぱり配信と撮影はいろいろと勝手が違う。まず、全身を撮られるから意識しなきゃいけない動きや所作がぐっと増えるのがしんどい。カメラを通して刺さってくる感情も、一ヶ所からじゃなくていろんな方向からくるし。

でも、あれだね。こういう形式の撮影だと、カメラさんの感情をキャッチすることが、そのまま『自分の映える角度や見え方』を探ることに繋がるから、それは大きな発見だったかな。

普段は自分で撮ってばっかりだけど、撮ってもらうっていうのも悪くない。

「あっちこっちに、忙しく動き回る演技だったな」

いつの間にか近くに来ていたひげのおっちゃん、ペットボトルに入ったスポーツドリンクを渡してくれた。

「普段は顔と声だけで売っているだけあって、やっぱり身体を使った

細かい演技は苦手か？　大きく動いてごまかしてただろ、配信少女」  
わあ、すつごい。

あれを見ただけでそこまで読み取るなんて、このおじちゃん、ほんとに有能だ。

でも、そういう言われ方をするのは、ちよつとイラつとする。わたしだつて、何も考えずに派手な演技をしたわけじゃない。

「心外だなあ。全身をくまなく写すカメラの前に立ったのは、たしかにこれがはじめてだけど……わたしだつて、ちゃんと空気読んで、あの2人にわかりやすく演じたんだよ？」

すっかり上機嫌になっているプロデューサーさんとクライアントさんをバレないように指差すと、おじちゃんは少し驚いたように固まって、それから鼻を鳴らした。

「なんだお前、そんないらんとこまで気を遣って演<sup>や</sup>つてたのか」

「いやいやいや、めちゃくちや大事でしょ。これで景ちゃんのデビューがぶつ潰れたら、わたし……おじちゃんのこと、絶対ゆるさなからね」

「わかってるよ、うるせえな。ちゃんとそれについては考えてある」

と、噂をすればなんとやら。

プロデューサーさんはメガネを指で押し上げて。クライアントさんは興奮でかいた汗をハンカチでふきふきしながら、こつちに来た。

「黒山！　そつちの子、とてもいいじゃないか！」

「きみ、名前は？」

「あ、万宵結愛です。普段は配信者とかやってます」

愛想はよく。でも挨拶はほどほどに、おつちゃんをちらりと横目で見る。

「配信者……？　最近流行りの業界から引つ張つてきたのか？　やるじゃないか黒山！」

「ええ、まあ」

「最初の子よりも、よかったじゃないか。今日はこれで……」

「いや、それは待ってください。もう一本、さっきのヤツに撮らせるんで」

上機嫌なクライアントさんにおつちゃんは淡々と釘を刺した。途端に、プロデューサーさんが難色を示す。

「……しかし、黒山。いい映像は充分撮れただろう。今さら、さっきの子に拘らなくても……」

「そうだ！ わしはさつきの子よりもその万宵さんの方がよかつたぞ！ リテイクをかけてさつきの子で撮っても、わしは万宵さんをCMに使いたい！」

うわあ……ちよつと媚び過ぎたか？

このクライアントさん、気持ち悪いハゲオヤジだと思っていたけど、景ちゃんよりもわたしの方がいいだなんて……本当に見る目がないハゲオヤジだなあ。ケツを蹴り飛ばしなくなるね。

「ああ、それはご心配なく。CMは二本撮影します」

わたしが汚いケツを蹴り飛ばす前に。おじちゃんが即答した。

「な……二本!？」

「ええ。二本ともきつちり編集して納品しますよ」

「むう、それなら、まあ……いやしかし、これ以上金を出すのは……」  
「ギヤラは、元々の金額のまま結構。コイツの分の支払いは、うちのスタジオが持ちますんで」

あら、おじちゃん。ほんとに太っ腹だ。

「ちよつと墨字さん!?! なに勝手に話進めてるんですか!?!」

「うるせえ！ いいからもう一本撮る準備させろ！」

それから、と。おじちゃんはわたしの方にも向き直って、

「お前も働け配信少女！ 夜風にアドバイスしてこい！」

「えー、それおじちゃんでもできるしよ」

「そこまでがお前の今日の仕事だ。いいからさつきとしろ」

太っ腹だけど、やっぱり横暴だ。まあ、仕方ない。

「景ちゃん」

「……結愛ちゃん」

「どうだった？ わたしの撮影」

「すごかったわ」

「ふっふ。景ちゃんに褒められると嬉しいなあ……」

「……でも、わたしはあんな風には演じられない。だって、父親のために料理を作ったことなんてないんだもの」

瞳が、深く落ち込む。

景ちゃんの演技は『思い出す』ことだ。メソッド演技は、過去の自分の感情を、自在に現在に蘇らせる技術だ。戻るべき過去がなければ、景ちゃんは演技をすることはできない。

「結愛ちゃんは、どうやってあんな風に演じたの？」

「わたしは、本を読むのが好きだからさ。さつきの演技も、なんとなく今まで読んだ本の中から、求められている演技に近い感情とか描写を、拾ってきただけなんだよね」

まさか人の感情がわかる、なんて言えないので、適当にそれっぽいことを言って返す。景ちゃんは、あまり納得していない様子だ。まあ、それはそうだろう。

だから、わたしの演技は上辺を取り繕っているだけなのだ。魔法みたいな力に頼りきった、ひどい偽物だから。この髪を束ねているゴムみたいに、何かの拍子でバラバラにほどけてしまう。

でも、景ちゃんの演技は違う。景ちゃんの演技は、本物だ。

「お父さんにシチュウが作れないなら……わたしのために、シチュウを作ってよ」

「結愛ちゃんのために……？」

「うん。わたし、景ちゃんのシチュウ食べたいな」

ヘアゴムを、ほどいて渡す。

「……わかった。みててね、結愛ちゃん」

「うん。みるよ、景ちゃん」

わたしが作ったシチュウがきれいに片付けられて、キッチンがまつさらの状態になって。再び、カチンコの音が鳴る。時間もない。景ちゃんのこの撮影も、わたしと同じ一発撮りだ。

「よおーいー」

景ちゃんは、すぐに深く潜った。

一目見て、わかる。先ほどまでとはまるで別人のような、ぎこちな  
い手つき。自信なんてない。余裕なんてない。不安で一杯の顔つき  
で包丁を握る手に、ハラハラしてしまう。案の定、指先を切って景  
ちゃんは肩を震わせた。

でも、すぐに笑ってごまかした。

その強がり、わたしはよく知っている。ルイくんやレイちゃん以  
外に、血のつながった兄弟以外で、わたしだけが知っている。今、調  
理をしているのは『お母さんが死んだ直後の景ちゃん』だ。

繊細で、艶やかで、美しい。染み入るように心に伝わってくる。静  
かな演技。

わたしの大好きな、時間を忘れて夢中にさせてくれる、景ちゃんの  
演技。

「お前、夜凧と被らないように演じただろ。静と動。自分の演技と対  
照的になるように、自分の後に演じる夜凧が、もっと映えるように演  
技の方向性を調整したな？」

またいつの間にか隣に来ていたおじちゃんが、知ったようなことを  
言ってきた。

「そんなの、偶然だよ。ただ純粹に、わたしの演技なんかより、景ちゃ  
んの演技の方がすごいってだけ」

「……まあ、べつにいいけどな。一つ、聞いていいか？ 配信少女」  
「なに？」

「夜凧がお前のために最初に作った料理って、なんだったんだ？」

景ちゃんがはじめて包丁を握って、作った料理はカレーライスだ。  
レイちゃんとルイくんのために、一生懸命作っていた。

でも、わたしのために。わたしのためだけに、作ってくれた料理は

「——教えないよ。なんで、おじちゃんにそんなこと言わなきゃいけ  
ないの？」

「……お前、意外とケチなんだな」

当たり前だ。

あの味は、あの横顔は、あの感情は。わたしだけのものなんだから。



「カット！」

「OKだ！」

「シチューがマジで焦げてる！ これは別撮りだ！」  
撮影が、終わる。

景ちゃんがキッチンから降りる前。わたしはカットがかかるのと同時にキッチンの中へ飛び込んで、景ちゃんに抱きついた。

「景ちゃん！ すっごいよかったよー！」

「結愛ちゃん!？」

「これ、味見していい？」

「え？ ちよ、ちよつとまって！ それ、本当に焦げているから食べられな……」

景ちゃんを抱きしめてホールドしたまま、わたしはこつそりと持ち込んでいたスプーンを取り出して、焦げ臭い鍋に突っ込んだ。スプーンに山盛りになったそれを、躊躇なく口の中に運ぶ。

「うわあ……につがい」

「当たり前でしょ!？」

「でも、おいしいよ」

耐え難い苦味と雑味を、念入りに味わって舌の上で転がして。ゆっくりと飲み込む。

これは、景ちゃんがわたしのために作ってくれたシチューだから。焦げてても、苦くても、まずいわげがないのだ。

「……結愛ちゃん、今日も晩ごはん食べにきて」

「いいの？」

「ええ。もっとおいしいシチューを……馳走するわ」

帰りの車の中でも、景ちゃんはずっと撮影した映像の素材を見ていた。

「いつまで素材見て笑ってんだよ気持ち悪い」

「わ、笑ってないわよ！ 結愛ちゃんも私もかわいいなーって、見てただけよ！」

「けいちゃんもゆあちゃんも、カメラ前で演じたのはじめてだったもんねー。いや、ほんとにすごいよ」

「ハンドルを握る雪さんと、その隣りの助手席で偉そうに腕を組んでいるおじちゃんが、茶化してくる。」

わたしは、あらためて隣に座る景ちゃんに聞いてみた。

「景ちゃん、はじめての撮影、どうだった？」

「……驚いたわ」

「驚いた？」

「うん」

ゆったりと。はにかむように。

景ちゃんは、笑った。

「私って、思っていたより綺麗なのね」

ああ、気づいてしまった。

わたしの幼馴染が、自分の価値に、気づいてしまった。

おじちゃんは、優秀だ。きつとこれから、景ちゃんはどんどん忙しくなって、どんどん世間に知られるようになっていくだろう。

景ちゃんのデビューは、とても喜ばしい。幼馴染として、親友として、心の底から祝福してあげたい。その気持ちに、？偽りはない。

「……うん。わたしは、ずっと前から知っていたよ」

けれど、このキレイな笑顔が、わたしだけのものではなくってしまふのが。

少しだけ、惜しい。

「は？ あんな半端な芝居しといて、何が綺麗だ？ ナルシストきわ

めてんのか？ バーカ」

「な、何よその言い方!？」

「そうだよおじちゃん！ わたしの景ちゃんはキレイだよ！」

「結愛ちゃん、抱きつかないで。暑いわ。でもありがとう。うれしい。結愛ちゃんもかわいかった」

「ええ〜？ わたしなんかよりも、景ちゃんの方がかわいいよー」

「けっ……幼馴染のお世辞、真に受けて浮かれんなバアカ！ お前らの才能はあんなもんじゃねえんだよ！ 勝手に満足して自惚れるなよー」

「何よそれ！ ツンとデレどっちよ!？」

「ツンだよ！」

「おじちゃん。今時、ひげのツンもデレも需要ないよ？ やめといた方がいいよ」

「なんだと？」

「暴れんなお前らあ！」

雪さんの一喝で、わたしたちは肩を竦めて黙った。修学旅行のバスの中みみたいだ。

「あ、そういえば、ひげのおじちゃん」

「なんだ？ どうした」

「いやほら。忘れない内に、わたしのCMの話、ちゃんとしておこうと思ってる」

「ああ、心配すんな。お前の分も編集はちゃんとやるし、納品する。ギャラもきっちり払ってやる」

「いや、そうじゃなくて。わたしを撮影とかに使うなら、わたしのプロデューサーに話通してほしいんだよね」

「プロデューサーあ？」

「うん。お給料の話とかも、この人をお願い。基本的に、全部任せてあるから」

前に身を乗り出して、おじちゃんにプロデューサーの名刺を渡す。

そこに記された名前を見たおじちゃんは、なぜかそのまま動かなくなつた。

「……………」

「どうしたの、おじちゃん？ この世の終わりみたいな顔になってる



## 景ちやんと雑談配信

さて、勝負の時間だ。

黒のパーカーを目深に被って、配信を開始する。

「はい、みんなこんばんは！ 元気してた？」

『こんばんは！』『まってた』『この日のために生きてた』『お前ら！アレはもうみたか!』『アレって?』『ああ！それってシチュー?』『コイツはゆあゆあ、おれたちの天使さ』『カードに封印される』『罰ゲーム!』『いつもより盛り上がってて草』

続々と、コメントが流れ始める。

刺さる感情がいつもより多い。そして、濃い。

プロデューサーの予想通りだなあ……と、内心で苦笑しつつ。わたしは微笑む口元が目立って写り込むように調整しながら、視聴者のみんなに手を振った。

「たしかにいつもより視聴者さん多いね。はじめましてのみなさんもらっしやい！ ユアユアです。いつもよりちよつと騒がしいけど、ゆっくりしていつてね」

『どうも、にわかです』『パーカーかわいい』『ご新規さんいらっしやい』『楽園へようこそ』『パーカーかわいい』『ご新規さんはCMを見て来た口かな?』『お前ら！CMはもうみたか!』『見てないわけがないんだよなあ』

「はいはい。今日は雑談配信だけど、いろいろとお知らせがあります！ まず一つ目！ なんとわたし、ウェブCMに出演することになりました！」

『知ってる』『知ってる』『もうみた』『最高』『CMおめでとうー』『恥ずかしながらCMから来ました』『いいぞ、このかわいさを広めろ』『同志よ増えろ』

今日の配信の前に、この前撮影したウェブCMが公開された。自分で言うのもなんだけど、結構話題を呼んでいる。わたしの視聴者さん達も、当然のようによくみているみたいだ。いやあ、熱心なファンがいてくれて、わたしは幸せ者だなあ……

「みんな、みてくれてありがとう！ 商品の方もよろしくね！」

『宣伝がうまい』『あざとい』『だが、それがいい』『くっ……買っちゃまうぜ』『俺ら単純か?』『そうだよ』

反応は上々。

本当は公開される前にわたしの配信で告知したかったんだけど、それはプロデューサーに止められてしまった。なんでも「こういった宣伝には最適なタイミングがあります」とかなんとか。こういうのって公開前に宣伝した方が絶対いいと思うんだけど……まあ、わたしが勝手におじちゃんのCMに出演した件も（おじちゃんといういろいろ話し合っつて）、便宜をはかってくれたらしいし。プロデューサーが『売り出し方』を間違えたことなんてないから……きつと何か考えがあるんだろうね、うん。そういうところは、ほんとに信用しているよ。そういうところだけは。

「さてさて、今日はなんとみんなに嬉しいお知らせが、追加でふたつもありまーす」

ざわざわ、と。困惑がカメラ越しに伝わってくる。

それはそうだろう。CM出演という結構インパクトのある告知を差し置いて、まだお知らせがふたつもあるというのだ。困惑もするし、何だろう？と期待も煽られるに違いない。

だが、安心してほしい。今から告げる『お知らせ』は、わたしのCM出演なんて軽いニュースが軽く吹っ飛ばすほど、ビッグでスペシャルなのだから。

「まずひとつめは〜！ なんと、今日の放送にはスペシャルゲストがきてます！」

『スペシャルゲスト?』『雑談回でスペシャルゲストか』『珍しくね?』『来てるってことは、顔出して一緒に配信やるってこと?』『そうでしょ』『珍しいっていうか、はじめてだろ』『誰だろ?』『芸能人とか?』『俺たちのユアユアも遂に芸能界入りか……』『お父さん鼻が高いよ』『おまえのものじゃない定期』『お父さんじゃない定期』『わかったK子ちゃんだ!』

いつもよりコメントの流れも速いし、人数も多い。いい傾向だ。

目に入った最後のコメントに、わたしはニヤリと笑った。

「お、勘のいい人もいるね……じゃあ、紹介します！ どうぞ、入ってきて〜」

わたしが合図すると、ガラツとドアが開いた。

わたしよりもフードを目深に被ったその子は、ちよつと緊張した様子で隣にぺたん、と。女の子座りで腰を降ろす。

さて。

カメラから一瞬、目線を外して……すごくつまらなさそうな表情で頬杖をついているひげのおじちゃんをみる。手元のパソコンで目の前の配信映像をリアルタイムで確認していたおじちゃんは、やはりつまらなそうに軽く頷いて、右手の人差し指で頭を軽く叩いた。

合図だ。

フードで目線が隠れていても、わたし達は目配せでタイミングを合わせられる。

「せーの……じゃーん！」

ばざりと、フードを上げる。わたしの顔なんて見慣れてるだろうからあんまり意味はないけど……これは演出だ。おじちゃんがやる気のない顔で考えた、けれど効果的でインパクトのある演出。

「今日のゲストはなんと！ わたしの幼馴染であり大親友の『K子ちゃん』こと……夜風景ちゃんです！ イエーイ！」

「い、いえーい……」

強張った笑顔で、ぴすぴす、と。フードをおろして美人極まりない素顔を晒した景ちゃんは、カメラに向かって笑いかけた。

効果は絶大だった。

わたしに刺さる感情が、明らかに目減りする。それだけで、カメラの中から飛び出す感情の多くが、景ちゃんの方に向かっていることがわかった。

さすがは景ちゃん。人の目を惹きつける。スターのオーラというやつだ。

コメントの反応も、また激烈だった。

『はっ』『んんん？』『かわいい』『マジか』『夜風景じゃん！』『え、ちよつ

とまって』『急展開』『理解が追いつかん』『まってまって』『え？ 夜風景がK子ちゃんなの？』『そういうことでしょ』『マジかよ』『はあ!?! C Mのもう片方の子じゃん』『まってくれ、くそ美人では?』『美人だよな』『C Mでも美人だったけど、カメラ近いともっと美人だわ』『わかる』『黒髪美少女』

コメントを見た景ちゃんが、あわあわとわたしの肩を揺さぶった。「ゆ、結愛ちゃん……美人って私のことかしら? どうしよう?..」

あー、もう。景ちゃんはかわいいなく。

『かわいい』『かわいい』『かわいい』『かわいい』

コメント欄一体感ありすぎじゃないの?

「はいはい。そんなわけで……前から声だけはちよこつと出てくれていた『K子ちゃん』こと夜風景ちゃんが、今回、わたしと一緒にC Mデビューということで、顔出ししてくれることになりました! みんな、びっくりした?」

『びっくりとかそういうレベルではない』『ゆあゆああのC Mデビューがふつとんだわ』『ユアユアのC Mデビューの事実はふつとばないだろいい加減にしろ!』『画面内顔面偏差値が高すぎて溺れる』『C M勢はわからんけど、ユアユア古参勢はK子ちゃんをずつと知ってるからな』『すげえ初期の配信から話してたもんな』『古参勢マウント乙』『まっつて夜風ちゃんめっちゃ好きなんだけど』『わかる』『それじゃあ、景ちゃんに簡単に自己紹介してもらおうね。景ちゃん、お願い』

「よ……夜風景です。や、役者です。よろしく」

『かわいい』『かわいい』『かわいい』『かわいい』

いやほんとコメ欄の一体感すごいね。仲良しか? 仲良しなのか? ?

「じゃあみんな、景ちゃんにガンガン質問してっつていいよ」

「え?」

「景ちゃんもドンドン答えてね」

「ちよ……ちよつとまって結愛ちゃん! 急に困るわ!」

ぐへへ……テンパる景ちゃんかわいすぎて顔緩みそうになっちゃ



うね。

『かわいい』『かわいい』『かわいい』『かわいい』

「おいコメント。景ちゃんかわいいのはわたしが一番よく知ってるから、はやく質問出して」

いい加減進行しないので、声のトーンを一段下げる。

『ひえっ……』『ブラックユアユアだ!』『これは彼氏』『尊い』『尊い』『尊い』『イケメンか』『ちよつと男子く、夜風さんいじめないでー』『ちよつと男子い、質問しなよー』『夜風ちゃん、好きな食べ物?』『ふっーに無難なのきたな』

「えつと……魚と納豆?」

『おばあちゃんか?』『渋くて草』『これは日本美人』『景ちゃん、料理めつちやうまいからな』『清楚だわ』

「景ちゃん、ひじきも好きでしょ?」

「あ、そうね! ひじきも好き……です」

『すかさず補足するの草』『ゆあゆあ……お前』『なんなの? ユアユアは景ちゃんの彼氏なの?』『そうだよ』『尊い』『初回からこれとかやばいわ』『尊い』『尊い』『積み重ねが違うからな』『満を持して登場した幼馴染が黒髪美人なの、あまりに解釈一致すぎる』『それな』

「景ちゃん、好きなのは和食だけど、まだ兄弟が小さいから洋食のリクエストが多いんだよね」

「そうね……結愛ちゃんにはこの前のCMの撮影のあと、シチューを作ってご馳走したわ」

ようやく緊張がほぐれてきたらしい。景ちゃんはドヤ顔で控えめな胸を張った。

「うん! 景ちゃんのシチュー、すごいおいしかったよ!」

「ふふっ……よかった」

『俺たちは何を見せられてるんだ?』『美しい友情です』『初回からイチヤつきすぎでは?』『かまわん。続けてくれ』『最高か?』『仲良すぎて嬉しくて泣いてる』『尊さフルマックス』

「はいはい。わたしと景ちゃんが仲良いのは当然だからね」

コメントをあしらいながら、またおじちゃんの方を確認してみると

……あのひげ、スマホいじってやがる。わたしが様子を確認したことには気が付いたのか、ひらひらと手を振った。どうやら、あとは勝手にやれ、ということらしい。さては、もうやる気ないなアイツ……  
まあ、どうせ序盤の演出もプロデューサーに無理矢理頼まれたんだろうし、ここから先、トークを回していくのはわたしの領分だ。おじちゃんの助けがなくても、特に支障はない。

「じゃあ、次の質問どうぞ」

『景ちゃんの特技を教えてください！』

うーん、またオーソドックスな質問で攻めてくるね。

「た、短距離走、とか？ あ、走り幅飛びも得意……です」

微妙に緊張が抜けきってないからちよつと敬語混ざるのかわいいな景ちゃん。

「景ちゃんは運動神経めちやくちやいいんだよね。走るフォームとかもすつこいきれいだし。あ、でも球技とかはちよつと苦手だよね」  
「うん。球を使ったスポーツはちよつと苦手かもしれないわ……」

『美人で運動神経いいとか完璧か？』『背高いし、運動神経はたしかに良さそう』『ふむ、球を使った遊びは苦手、と……』『おい』『おい』『自重しろ』『ゆあゆあがおこだぞ?』

「戯言をほざいてる人はほつといて、次の質問いくね」

『こわい』『こわい』『ユアユア、笑顔のままなのがこええよ』『彼氏怒らせるな』『すいませんでした』『謝ってて草』『いや草』『次の方、どうぞ』『好きな映画聞きたいわ』

「お、いい質問きたね！ 景ちゃん、好きな映画お願いします」

「好きな映画？ そうね……よく観直すのは『ローマの休日』だわ。女優さんが綺麗な作品が好き。あと『カサブランカ』とか『風と共に去りぬ』も外せなくて……あとは『東京物語』も」

うんうん。いい感じにスイッチ入ってきたね。

『おお、手堅いラインナップ』『ちよつと古めのラブロマンスが好きって感じか？』『ローマの休日いいね。おれも好き』『変にマニアックな名作持ってこないのが好感度大』『わかるわー』

「よしよし。景ちゃんも調子出てきたし、ガンガン次の質問いってみ

よう！」

調子が出てきた。これなら、次のビッグなお知らせに入る前に、もう少し盛り上げられそうだと。わたしは完全に油断していた。

『景ちゃんは、ゆあゆあのことが好きですか？』

「なっ……!?!」

直球。ストレート。ど真ん中にきた質問に、思わず思考が固まる。その質問が流れてきた瞬間に、ぞわつと。『好奇』に満ちた感情が、肌をくまなく撫でまわした。

まったく、この視聴者ども……せつかく、景ちゃんの緊張がほどけてきたのに。こんな質問したら、また景ちゃんが恥ずかしがって固まっちゃうでしょ！ まったくもう……!!

「大好き。親友だから」

だが、景ちゃんは即答した。

即答、してしまった。

これまでのどの質問よりも、はつきりと。前を見据えて。

「……………へ!?!」

待つてました、と言わんばかりに、コメントが流れる。

『ユアユアと景ちゃんの親善関係の前途をどうお考えですか？』

『永続を信じます。人と人との間の友情ですから』

それは『ローマの休日』のワンシーン。主人公とヒロインのやりとりを皮肉ったもので、

「め……名作の名言で茶化すなあ！」

赤面を隠し切れず、わたしは思わず叫んだ。

## ハロー・エンジェル

配信、数日前。

スタジオ大黒天にて。

二人の男が、向かい合って密談を行っていた。

「私はね、黒山。嬉しいんだよ」

「俺から金をたんまりふんだくることが、か？」

表面だけは、強気に吐き捨てながらも。黒山墨字は、心の中で冷や汗を流していた。

万宵結愛のことは、たしかに有望な金の卵だと思っていたが……まさか、知り合いの拝金悪徳プロデューサーに『お手付き』されていると、誰が予想できるだろうか？ いいや、予想できない。

対面に座り、いつもと変わらない笑みを浮かべる男……天知心一は、万宵結愛のプロデューサーだ。CM撮影で勝手に結愛を使った黒山に対して、いくらでもふっかけることができる立場にいる。

「もちろん、君から金を取れることは嬉しい」

「こんな貧乏スタジオから、いくら持ってこうとしてんだ。俺がああ配信少女を使わないって言えば、それで終わりだろうか」

「冗談にしてもそれは苦しいよ、黒山。クライアントも、彼女の演技をいたく気に入っているそうじゃないか。無理を通してプロデューサーとクライアントの前でこれ見よがしに撮影しておいて。しかも、二人分の演技を間近で見せて納品を約束しておいて。『彼女のプロデューサーからNGを出されたので、出演はダメになりました』では、話を通らないだろう？ この業界は、信用が全てだからね」

人を喰ったような笑みを伴って、ペラペラとよく口が回る。

「いつにも増して喋るじゃねえか。そんなにお金が欲しいかね、守銭奴天知くん？」

「もちろん。価値ある演技には、それに見合った金額が支払われるべきだ。というわけで……」

男にしては細い指が、リズムカルに電卓を叩く。

「企業の規模、案件の大きさ。あとは単純に、彼女の撮影の拘束時間を

鑑みて……まあ、こんなものでどうだろう?」

「……は?」

黒山は、自分の目を疑った。

高すぎる……のではない。逆だ。

あまりにも、安すぎる。

「……おいおい、どうしたよ天知君。らしくないを通り越して、有り得ないだろ。気持ち悪くて、鳥肌が立ちそうだ」

「さて? 彼女がCMの仕事を受けるのは、これがはじめてだし。私が聞いたところによると、撮影も一発撮りだったそうじゃないか。長時間拘束を受けたわけでもない。これは、いたって妥当で、一般的な金額だと思うけどね」

まあ、と。腹の底が見えない悪徳プロデューサーは、そこで一旦言葉置いて。

「君に不満がある、というのであれば。金額を吊り上げて、この吹けば飛ぶような会社を干上らせるのも、やぶさかでないよ」

「すいませんこの金額でお願いします」

このほくろプロデューサーに頭を下げるのは腹が立つが、背に腹は代えられない。黒山はプライドを投げ捨てて、金額交渉に潔く合意した。

しかし、これで話は終わり……というわけにもいかない。

「……で、俺に貸しを作って、何が狙いだ?」

「ああ。君にしては話がはやくて、とても助かる。私の時間は有限だからね。話は、手早く済ませたい」

天知はニコリと笑って、一つの問いを投げた。

質問、というには、あまりに確信めいた語調で。

「万宵結愛は、良い女だろう?」

黒山は、頷かなかった。

「それに「はい」と答えたら、俺はどんな悪徳契約を結ばされるんだ?」  
「ところで、彼女は渋いことに釣りが趣味だね。屋外配信の時、カメラ

の位置や見せ方に少々苦戦していたんだが……親切でお節介などこそそのむさ苦しいヒゲ男が、撮影に口出ししてくるようになったそうなんだ。その助言を取り入れると、非常にやりやすくなったと。とても喜んで話してくれたよ」

「お前の方が俺をタダで使ってるじゃねーか!？」

黒山は、キレた。

知らない内にタダ働きさせられていたのだから、それはキレル。

「残念ながら、私はそんなお節介な映画監督に心当たりはなかったものでね」

肩を竦めていけしゃあしゃあとのたまう天知は、しかしそこで胡散臭い笑みの一切を表情から消した。

「黒山、君は本来『罰金刑』なんだよ」

空気が、重く固まる。

「……」

「私の『見世物』に勝手に手を出した。許されざる行為だ。それでも、私が君を咎めない理由は、たった一つ。君の存在が、彼女にとってプラスに繋がると信じているからだ」

改めて、確認するように。

「私はね、黒山。嬉しいんだよ」

プロデューサー、天知心一は言う。

「あの黒山墨字が、私と同じ役者に目をつけたことが、とてもうれしい。おかげで、彼女が熟したのだと確信できた」

「……俺に何をやらせる気だ？」

「大したことじゃないよ。私と君の目的は一致している」

「夜風には、手出しさせないぞ」

「ああ。君が目をつけた子か。残念ながら、夜風景に関しては彼女の方からも「手を出すな」と釘を刺されていてね。迂闊に触ろうとすると、私が怒られてしまう」

ただ次の配信には出てもらおうと思っているよ、と。天知は独り言

のように付け加えた。

「お前にしては、随分と気を遣ってるじゃねえか」

「勿論。彼女には既に嫌われているけれど、これ以上嫌われたくはない。好いた女の好感度をキープしたいのは、男として当然の心理だろう?。」

「心にもないことを、よくもまあペラペラと」

「心なら、あるさ」

人差し指を伸ばして。

とん、と。天知は、自身の頭を指差した。

「私は何より、人の心が最も大切だと考えている。なぜなら、ビジネスとはつまるところ、人の心の売買だから」

「心つつて脳幹指すのがお前らしいよ」

「ああ。しかし、彼女もそう思っているだろうね。むしろ、私なんかよりも深くその意味を理解していると、確信しているよ」

「は?。」

前後の文脈が繋がらない。何を言っているんだ、と。黒山は怪訝な声を上げた。

「彼女のプロデューサーとして、一つ。いいことを教えてあげよう」

この世界で最も腹の底が見えないプロデューサーは、流れるように自然な動作で自身の胸に手を当て、言った。

「万宵結愛は、人の心が読める役者だ」

★★★

コメント欄で散々冷やかされてしまった。

多分、わたしの顔はまだほんのりと赤い。ああ……恥ずかしい。こんなはずじゃなかったのに。

「結愛ちゃん、大丈夫?。」

「うん大丈夫大丈夫。わたしは全然平気。超元気」

はあ……心配そうな顔の景ちゃんもかわいいなあ……つて、そう

じやなくて！

わたしには、まだ大事な告知がもう一つあるのだ。いや、もちろん景ちゃんとの共演、景ちゃんのCMデビューを上回る重大ニュースなんて、わたしの中にあるわけがないんだけど。でも、世間の人からしてみれば、今から私が言う『お知らせ』は、きつとなによりも大きな驚きをもたらすに違いない。

景ちゃんは女優としての一步を歩み出した。

だから、わたしも。きつと、今までの道から、一步。踏み出す時が来たんだ。

「さて……いろいろなバタバタしちゃったけど、みんなに、とーっても重要なお知らせがあります」

『なんだろう？』『今日、もう充分驚いたんだけど』『楽しみ』『景ちゃん以上のお知らせとか、早々ないでしょ』『景ちゃんのインパクトが、あまりにも強すぎてな……』

「わたしの、次の配信の共演者が決まりました」

息を吸い込む。

表情を作る。

視線を、カメラへ完璧に合わせる。

わたしを見てきた全ての人達に、わたしが今までで最も真剣だということが伝わるように。

充分な間を取って、その爆弾を、投げた。

「スターズの百城千世子さんと、コラボします」

☆☆☆☆

『スターズの百城千世子さんと、コラボします』

「あつはは……やられたね、アリサさん！ 宣伝に利用されて、しかもそのまま宣戦布告されちゃった」

業界を代表する俳優事務所、スターズの社長室で。

百城千世子は、画面に映る万宵結愛を見て、くすくすと笑っていた。



「……笑い事じゃないわ、千世子」

険しい表情のまま、机の上で腕を組んでいるのは、スターズの社長、星アリサ。千世子の才能を見出して育て上げ、かつては自身も業界を代表する名女優だった傑物である。

アリサは眉間に皺を寄せたまま、画面から目を離して千世子を見据えた。

「あなたが興味を惹かれるのはわかる。でも、この子との企画はやめておきなさい。隣には、あの夜風景もいるわ」

「ああ……アリサさんがオーディションで落とした子だっけ。その子とユアユアさんが親友なんて、世の中、何があるかわからないね。でも、共演はやめないよ。この動画で、もう告知しちゃってるし。今さらやめます！　なんて言っても通らないでしょ？」

「そんなもの、取り止めにして握りつぶせばどうとでもなるわ。あちらのプロデューサーとは、まだメールのやりとりだけで、顔合わせすらしていない段階。今から中止にすることは十分可能よ」

「アリサさんらしくない、強引な力技だね」

「強引な力技を使っても、止めたいのがわからない？」

「スターズの宣伝の一環として、動画関連サイトでコラボ企画を行う……共演する配信者は、私が選んでかまわない。そう言ったのは、アリサさんだよ？」

痛いところを突かれて、アリサは押し黙る。しかし、すぐに反論した。

『『デスアイランド』のオーディションや宣伝も近くにあるわ。あなたはただでさえ、多忙な身。アキラを代役に立てて、この子と共演させる手もある』

「アキラ君はダメでしょ。ファン層的にも、イメージ的にも。こんなかわいい子と二人きりで配信なんてしたら、ファンの子たちから嫉妬されちゃうよ」

千世子の言葉の方が、筋が通っているのは明らかだった。

「アリサさん、この子の動画を見てから、あからさまに態度が変わったよねっ。」

「……少し、観ただけよ」

「そう？ 私は、アーカイブまで全部目を通してるんだけどね」

画面の中の、結愛が笑う。

『みんな、びっくりした？ 私も、すっごくびっくりしてます！』

「アリサさんなら、少し観ただけでもわかるでしょう？ この子、おもしろいもの隠してるよ」

『わたし、前からずーっと百城千世子さんの大ファンで！ だから今回の企画の話をもらった時も、すごく嬉しかったんだよね！』

「表情の作り方も、画面の中の『演じ方』も、私そっくり」

「……千世子」

「だからね、アリサさん」

その決意と執念は、決して揺るがない。

「私、この子と演ってみたいんだ」

社長室のドアが開く。

「ちよつと……今は、誰も入れるなど……」

星アリサは、そこまで声を発して、しかし言葉を失った。

「お久しぶりです、社長」

アポイントメントもなしに訪れたのは、彼を抜いて話を進めようとしたことに対する、意趣返しか。

「しかし、こうして告知したので……そろそろ直接、お話を進めるべきだと思ひまして。失礼ながら、お邪魔させていただきました」

天知心一は、アリサに向けてではなく、百城千世子に向かって微笑んだ。

「百城さん。取り次いでくださって、ありがとうございます。助かりました」

「うん、いいよ」

「千世子、あなた……」

まさか、そこまで。

アリサは、自分が千世子の覚悟を見くびっていたことを、ここに来

てようやく認識する。

そして、気がついた時にはもう遅い。

「それでは社長。彼女が一言、挨拶をしたいそうです」

黒のスーツの影から、一人の少女が進み出る。

「……あなた、どうしてここに」

今、現在進行形で。画面の中で笑う少女が、アリサの目の前にいた。ならば、考えられる答えは一つだ。

「……千世子ー」

「ああ、ごめんね。アリサさん。それ、生の映像じゃなくてアーカイブだって言い忘れちゃった」

少女は、千世子と対照的な、黒のワンピースを着ていた。

緩くウェーブがかかった長髪は艶やかで美しく、人目を惹く容姿であることがすぐにわかる。

だが、違う。

「はじめまして、社長」

映像の中。配信の中の表情と。目の前に佇む少女のそれは、明らかに違う。

まるで、心の中を全て見通すような、透明で透き通った瞳に。

「万宵結愛です。企画のお話、受けて頂いてありがとうございます」

真っ直ぐに見据えられて、背筋が凍る。

しかし、その視線はすぐに別の方向に移った。

「あはっ……うれしい。あなたの方から、会いに来てくれるなんて。来るのは、プロデューサーさんだけかと思ってたよ」

「ええ。でも、前回のお礼もしたかったので」

『今日の配信、見てくれてるかわからないけど……ちゃんと、挨拶しておこうかな！』

垂れ流しにした動画の音声と、

『よろしくお願ひします、百城千世子さん』

「よろしくお願ひします、百城千世子さん」

その肉声が、不気味なほどよく重なって、部屋の中に響いた。

## 天使配信

「打ち合わせ、お疲れ様でした」

「うん。プロデューサーもお疲れ様。大変だったでしょ?」

ほとんど奇襲のような形で行った、打ち合わせの帰り道。

車の中で、わたしは珍しくプロデューサーに労いの言葉をおくった。

「いえいえ。あなたのためなら、この程度。苦でもありませんよ」

いつもと変わらない、歯の浮くような常套句。

それなりに無理を通しただろうに、その労を微塵も感じさせないのは、プロデューサーの数少ない美点だ。

「はじめて会う星アリスは、どうでしたか?」

「うん。さすがは伝説の女優って感じ。雰囲気あつたね。まあ、すつごく警戒されてたし、ちよつと嫌われちゃったみたいだけど」

「おや。そのように感じましたか?」

「うん。感じた」

「それは仕方がない」

いけしゃあしゃあ、と。プロデューサーは言う。

「こつちも、景ちゃんを落とされてるからね。あんまり仲良くはできないかなあ」

完全に私怨だけど、複雑な感情があるのは事実だ。独り言のようなわたしの発言を、プロデューサーは嬉々として拾った。

「私が夜風景もプロデューサーすれば、スターズに落とされた遅れをすぐに取り戻せますよ?」

「すぐに景ちゃんに手を出そうとするの、マジでキモイからやめた方がいいよ」

「現役の女子高生にキモイと言われると、いくら丈夫な私の心でも傷ついてしまいますね」

「そのまま碎けてほしいな」

「それはいけません。わたしが心を碎くのは、あなたのプロデューサーだけで十分です」

まったく、ああ言えばこう言う……

わたしは髪の毛の先をいじりながら、今度は自分からプロデューサーに質問した。

軽口ではなく、少し真面目な質問を。

「ねえ、プロデューサー」

「なんです？」

「狭い画面の中に、女の子が2人。映るところを想像してみてください」

「とても華やかですね」

「うん。でもさ、そうやって綺麗だなーって思ったあと。人は何を考えるかな？」

「ふむ。そうですね……」

わざとらしく、悩む素振りまでして。たっぷり時間を置いてから、答えは返ってきた。

「比べます。どちらがより、自分好みの女なのか」

それが、答えだ。

どっちも好き、と。人は気軽に言うけれど。大抵の場合、AとBを並べれば、人はどちらか片方を自然に選ぶ。

百城千世子は、わたしを食べる気だ。比喻ではなく、実際にわたしという存在を食べ尽くして、自分のモノにする気だ。その本気は、さっきの打ち合わせで伝わってきた。

「天知さん」

「はい」

「今回の企画、楽しみにしててね」

「ええ、勿論」

とはいえ、心配する必要はない。

このプロデューサーは、わたしの売り方を間違えたことなんて、一度もないのだから。

ああ ああ ああ ああ ああ ああ  
しばらくお待ちください……

前回の配信が、かわいく見えるほどの盛り上がりだった。

「はーい！ みんな、こんばんは！」

CMの効果も、もちろんあるのだろう。でもそれ以上に、コラボ企画の告知をしてから、わたしのチャンネル登録数は右肩上がりに増加。そして今、リアルタイムの視聴者数は、今までで最高の人数を最初から叩き出している。

「お待たせー！ 今日はみんなが待ちに待った、百城千世子ちゃんとのコラボだよ！」

最初からテンションを上げていく。

明らかに、わたしのファンの数が霞むほどの百城千世子のファンが、この配信を観に来ている。純粹に、単純に。数字という形で、若手ナンバーワン女優の人気力を見せつけられる。

わたしの隣で、彼女が薄く息を吸う。

今日、はじめての声を、百城千世子はゆっくりと発した。

「みなさん、こんばんは。百城千世子です」

瞬間、コメント欄が爆発する。

『すごい！』『かわいい』『かわいい』『ほんとに百城千世子だ！』『かわいい』『ゆあゆあと千世子ちゃんが並んで……！』『二人とも顔ちっさ！』『画面内顔面偏差値が前回にも増して高すぎる』『ちよつとこの二人かわいすぎない？』『目が幸せ』『耳も幸せだろ馬鹿野郎』『千世子ちゃんの声がこんなに近いのがやばい』『千世子ちゃん！』『ほんとに百城千世子がいるのが信じられない』『この企画素晴らしいすぎる』『これ企画してくれたプロデューサーにありがとうって言いたい』『千世子ちゃん、この前のドラマ観たよ！』『千世子ちゃん、ファンです！』『美人が二人』『コメント読んでくれるかな!』『最初からクライマツ

クスだぜ!』『ユアユアのファンやっててよかった』『あまりに最高』『今日これのために仕事休みました』『視聴者数がえらいことになってますよ』『二人とも最高』『ユアユアさん、はじめてみたけどかわいいね』『百城千世子と並んでかわいいってすごくない?』『俺たちのゆあゆあはかわいいんだ!』『お前らちよつと落ち着け』『落ち着けねーよ』『流れエグくて笑うわ』『千世子ちゃんまだ挨拶しかしてねーぞ!』『ほんとすごいわこれ。永久保存版だわ』『ただでさえ生きがいなのに……』『友人、リアタイできなくて泣いてた』『盛り上がって参りました』『トーク楽しみ』『日本でトツプクラスにかわいいJKが二人』『トツプクラスじゃなくてトツプだろ』『かわいすぎる』『なにやるんだろ』『このままずっと顔眺めてるだけでもいいわ』『わかる』『わかる』『あまりにもわかる』

コメントの流れに追いつけない。

でも、千世子ちゃんはブレなかった。

「来てくれてありがとう。今日はみんなと一緒に、ユアちゃんと楽しくお喋りしたいなって思います」

また凄まじいスピードで流れる言葉の嵐の中で、一つのコメントが目にとまった。

『二人の衣装って、もしかして色違いのお揃い?』

はじめての配信だというのに。

千世子ちゃんは鋭いコメントを見逃さず、すぐにそれを拾い上げた。

「あつ……気付いてくれた人がいて嬉しい。実は、そうなんだよね?」「うん! 大正解だよ。今日の衣装は、千世子ちゃんとお揃いになりました!」

千世子ちゃんは、白のノースリーブワンピースに、黒のチョーカー。

わたしは、黒のノースリーブワンピースに、白のチョーカー。

色違い。徹底的に対比を意識した衣装だ。奇襲攻撃の時と同じ衣装を、しかも今度はチョーカーまで揃えて着ることになるなんて思わなかった。互いに食い合わせようという、プロデューサーの意図が透けて見える。まったくもって趣味が悪い。



「あ、そうだユアちゃん。せっかくお揃いだし、記念写真撮ろうよ」  
さつと。わたしの肩に手を回して、千世子ちゃんはスマホを構えた。

自撮りだ。

軽いシャッター音がして、頬が触れ合いそうなツーショット写真が撮れる。でもスマホを構えた千世子ちゃんの手が邪魔をして、この配信を見てくれている視聴者さん達からは、わたし達の表情はいまいち見えない。

「インスタにあげるね」

「ありがとう。じゃあ、わたしはツイッターにあげようかな！」  
すごい。

最初から、主導権を握りに来た。

普段の撮影とは違う、顔しか映さないカメラ。リアルタイムで流れていくコメント。台本なんて存在しない、自由なトーク。

言わば、普段とは違う演技を求められる舞台で、こうも立ち回ってみせる。

これが、百城千世子。

これが、スターズの天使。

「ありがとう、ユアちゃん。私、ユアちゃんと一緒に配信できて、本当に嬉しいよ」

視線が合う。

瞳が一瞬、こちらを覗き込む。

前は、気持ち悪いと思った。それは今も変わらないけど、打ち合わせを重ねて、本番を迎えて、もっと明確にわかったことがある。

きつとわたしは、千世子ちゃんにとって『珍しい虫』なんだろう。

だから『観察』される。細やかな変化、表情だけでなく、視線や声音に至るまで、隅から隅まで舐め回される。そうやって、満足いくまで観察しきったら。

パクリ、と。

食べちゃう気でののだ。

「うんー、（ちらちら）そー」

ああ、こわい。こわいなあ。

☆☆☆☆

子どもの頃の話をしよう。

百城千世子は、他人の横顔が好きで、変な子どもだった。授業中、隣の席に座る友達の顔。

誰かに見られているなんて、思いもしていない。そういう無意識の表情を盗み見るのが大好きだった。

けれど、人は己の知らないところで、自分という存在を見られることをひどく嫌う。それに気がついた幼少の千世子は、一つの疑問にぶつかった。

なら、私の横顔はどう見られているんだろう？

一度、気になり始めたら、もう戻れない。

他人の目が怖くなった。自分がどう見られているのか、常に意識するようになった。現実の世界がひどく息苦しく感じられて、逃げるように作り物の世界に没入するようになった。ともすれば、そのままずるずると。千世子は、自分の世界に閉じ籠るだけの少女になっていたかもしれない。

救ってくれたのは、星アリサだった。

「役者に向いている」

嬉しかった。

その一言で、千世子の世界は広がった。

彼女の耳元で煌めく、星のイヤリングと。優しい微笑みは、今も心に鮮やかに焼きついている。

こうなりたい。こうありたい、と思った。

千世子はまず、髪を切った。その方が、自分の顔に似合うと感じたからだ。

そして、ひたすら努力を重ねていった。

表情の作り方を練習した。言葉の選び方を学んだ。服装を、所作を、体型を、すべてを調整できるように、極めていった。

自分を映すカメラの性能を、レンズサイズの感覚すらもわかるように熟知した。自分の姿を人々に届けるために、必要な知識を取り込んだ。

エゴサーチから、統計を作った。個人のブログもSNSも、あらゆるネット媒体をまとめてデータに変えた。自分の印象を人々から教えてもらうために、必要な情報を取り込んだ。

千世子は、没頭した。

寝る間も惜しんで、ファン観客が望む自分仮面を作り上げること、心血を注いだ。

努力に応じた結果は、すぐに返ってきた。息苦しかった世界が、鮮やかな彩りを伴って変化した。

駅前のビルの、巨大なスクリーン。そこに映り込む自分の表情が、鑑賞に耐え得る美しい仕上がりに至った時、千世子は確信した。

女優は、私の天職だ。

大衆のために仮面の強度を上げる。より美しく、磨き上げていく。千世子は、自分が天才ではないことを知っている。

だから、結愛とコラボする今日も、万全の態勢で臨んだ。

普通に演技する時よりも、ファンとの距離が近い『配信者』というタレントの形態について調べた。時間の許す限り、徹底的に万宵結愛のファン層を調べ尽くした。

彼女のファンを、彼女ごと。全て食ってやるつもりでいた。

(あれ……?)

それなのに、

「千世子ちゃんは、食べ物、何が好きなの?」

「ビスケットとマシユマロかな?」

「かわいい〜! 好きな食べ物までなんかかわいいね」

「そんなことないよ」

なんだろう? これは。

トークを回す。カメラを意識して微笑む。

なんてことはない。千世子が、これまでずっとやってきたことだ。演技の延長線にあるものだ。できないはずがない。やれないなん

てことは、ありえない。

「わたしは好きな食べ物、そんなにかわいくないなあ」

「そうなの？ ユアちゃんは何が好きなのか、私教えてほしいな」  
なのに、なぜ？

最初はよかった。でも、段々と。少しずつ、千世子はそれに気がつきはじめた。

違和感が拭えない。

視線のコントロール。細やかな所作。イメージを決定する発声。いつもの演技と、行っていることは変わらない。変わらないはずなのに。

「わたしが好きなのは——」

——隣に座る彼女の横顔に。

勝てる気が、しない。

10年だ。

千世子は、10年かけて、自分が被る仮面を完璧なものにしてきた。万宵結愛が、特別な才能を持っているとしても。積み重ねてきた10年が、簡単に負けることなんてありえない。だから、彼女の『特別』を盗んで、より高みへ至ろうと。そう思っていた。

いや、思い上がっていたのだ。

柔らかく、冷たい感触が、不意に襲ってきた。

画面の外。決して映らないテーブルの下で、手を握られる。

自分よりも少しだけ大きい。ぞっとするほど、冷ややかな手のひら。

辛うじて、表情には何も出さなかった。

けれど、

「楽しいから、お喋りが止まらないね！」

心臓を、掴まれる。

被った仮面に、指をかけられた気がした。

★★★★★

画面の外。決して映らないテーブルの下で、わたしは千世子ちゃんの手を握った。

小さくて、温かい。人の手だ。

そう感じるということだ。わたしの手は、千世子ちゃんの手よりも冷たいということだ。

でも、だからって。そんなに怯えた心を向けなくてほしいな。

「楽しいから、お喋りが止まらないね！」

あなたが天使ではないことを、あなたの隣に座るわたしは知っている。

「千世子ちゃん、大丈夫？」

だから、その仮面に浮かぶ小さな綻びを、わたしは決して見逃さない。

時に勇ましく。

時に優しく。

そして、常に美しく。

百城千世子という女優が被る仮面は、完璧だ。完璧に、見えてしまう。

でもね、千世子ちゃん。

完璧な仮面なんてものは、この世に存在しないんだよ。

人は、完璧を目指しても、完璧に至ってはいけない。完璧に至ることなんて、永遠にできない。

きつと千世子ちゃんは、わたしのことを同類だと感じて、親近感を抱いてくれていたんだろう。それは、決して間違いじゃない。わたしと千世子ちゃんの在り方はそっくりで。デビューしてから、10年間。己の仮面を作り上げ、磨き上げてきた千世子ちゃんの姿勢に、わたしは感嘆すら覚える。尊敬する。素晴らしいと、拍手喝采を贈りたい。

だって、わたしは仮面を被ることの辛さを、誰よりも知っているから。

あなたは、10年。

わたしは、17年だ。

同じだけど、同じじゃない。

これ以上なくシンプルな、積み上げてきた時間の違いだ。

生まれてからずっと、人の視線に晒されてきた。

視線なんかよりも遥かに生々しく、もっと無遠慮な、人の感情を浴びてきた。

だから、自分の身と心を守るために、わたしには仮面が必要だった。

子どもの頃の話しよう。

万宵結愛は、自分の横顔が大嫌いな、最低な子どもだった。

授業中、隣の席に座る男の子が、わたしの顔を覗き見てくるのが嫌いだった。

誰かに見られているなんて、きつと気づかないだろうと。まるで、一枚の絵画をじっくりと遠慮なく眺めるように。自分の顔を見られるのが、大嫌いだった。

どうして、わたしのことを見るの？

そう聞いた。

クラスの中でも人気者だった少年は、顔を背けて答えた。

お前なんか見てねーよ、バーカ！ そんなに、自分がかっこいいと思ってるのかよ！

わたしは彼の感情を知っているのに。彼は、向けた感情とは正反対の言葉を口走った。

人は自分の知らない感情を、あるいは自覚している感情でさえも、他人に見せることをひどく嫌う。それに気がついた幼少のわたしは、一つの疑問にぶつかった。

どうして、人は？を吐くのだろう？

一度、気になり始めたら、もう戻れない。

他人の目が怖くなった。相手が？を吐くのか、常に意識するようになった。現実の世界がひどく残酷なものに感じられて、逃げるように作り物の世界に没入するようになった。ともすれば、そのままずるず

ると。わたしは、創作の世界に閉じ籠るだけの少女になっていたかも  
しれない。

そんなわたしを救ってくれたのは、両親でも、友達でもなく。  
幼馴染のお父さんだった。

「きみは、かわいいね」

夜風、というその男の職業は、小説家だった。

## TSヤンデレ配信者は今日も演じる

笑わない子どもだった。

自分の顔が魅力的だということを、うつすらと理解しはじめたのは、物心がついてすぐだった。

学芸会で前に立てば、わたしにばかり視線が集まる。男の子と混じって遊べば、みんながわたしを見てくる。自分の外見が魅力的であることを疑う余地はなかったし、少し学年が上がると、今度は男子だけでなく……女子からの視線がきつくなった。

人の感情は、汚いモノの方が多い。

綺麗なものを純粋に綺麗と思う人は、わたしが想像していたよりも遙かに少なくて。綺麗なわたしを「きれいだね」と言ってくれる人の多くは、心の中が汚かった。

笑わない子どもになろう、と思った。

なるべく人目を惹かないように。笑顔を向けた異性を勘違いさせないように。なるべく冷たく、人と関わらず、注目されない、誰にも見られない、道端に転がる石ころのような存在になろうと努めた。見られなければ、わたしは心を覗く必要がないから。

「結愛ちゃん、おひめさまごっこしましょー！」

「うん、いいよ！ 景ちゃんがおひめさまだね！ 景ちゃん、かわいいからー！」

「かわりばんこじゃなくていいの？ 結愛ちゃんもかわいいよ」

「もちろん！ だって景ちゃんのほうがかわいいもん！」

景ちゃんと仲良くなったのも打算的な感情が根底にあったからだ。今よりもずっと活発で、そして今と同じくらい昔から美人だった景ちゃんの隣にいれば、わたしという存在は少しだけ霞んだ。並んで歩いているだけで、景ちゃんの方に視線が流れるのが、少しだけ楽だった。

もちろん、景ちゃんが？を吐かない、気持ちに裏表のない、ちよつと変わった子だったから……っていうのも大きい。実際、景ちゃんと話すと、わたしは気持ちが落ち着いた。



なるべく、一人の時間を作るように努力した。感情が流れてこない、一人だけの時間がなによりも幸せだった。だから自然と読書が好きになったし、ゆつくりと釣り糸を垂らすことができる釣り堀に入り浸るようになった。

「私のお父さん、お本を書いているんだよ！」

きっかけは些細なこと。子どもが親の仕事を自慢する。ただそれだけだった。

わたしを突き動かしたのは、純粹な興味だ。

本を書いている……『小説家』という職業の人はどんな人なんだろう、と。気になってしまった。だから、景ちゃんの家にお邪魔した時に、わたしはお願いしたので。景ちゃんのお父さんに会ってみたい、と。

——きみは、かわいいね

不思議な人だった。

かわいい、と口で言いながら、彼の感情には『かわいい』という思いは欠片も宿っていなかった。こちらを見下ろす瞳には、純粹に娘の友人を歓迎する温かな色……ではなく、もつと深い海の底のような『感情』が渦を巻いていた。

興味だ。

足の先から、頭のとっぺんに至るまで。わたしに刺さる彼の視線は、興味一色に染まっていた。

人を描くのが自分の仕事だ、と彼は言った。だから、色々な人を観察してしまう悪い癖がある、と。まだ小さいわたしに向けて、苦笑混じりに彼は語った。

「だからおじさんは、わたしに興味津々なんだね」

景ちゃんも、景ちゃんのお母さんもいなくなったタイミングで。

「わたし、人が考えていることがわかるの」

生まれてはじめて、わたしは自分を苦しめる不思議な力を、他人に明かした。

馬鹿馬鹿しい子どもの言葉に、けれど彼は笑わなかった。

——それは、すごい

小説家という生き物は、現実が物語よりも奇であることを知っている。

その視線は、より強くわたしをみるようになった。その感情は、より強くわたしに対して向けられた。

それはわたしが生きてきた中で、最も強く受け取った感情だった。普通の人生を生きていけば、最も強い、最も熱を孕んだ感情は『恋』や『愛』であるべきだったんだろう。

けれど、幼少のわたしは知ってしまった。▪

純度の高い、自分を見詰める蜜のように濃い想いの味を。

彼の仕事場に、よく行くようになった。

わたしが、自分の悩みを話すと、彼はまた笑って答えた。

——すべての人に、愛されるようになればいい

彼は幼いわたしにもわかるように、ゆっくりと語ってくれた。

役者、という職業がある。

彼らは、人に『観られる』ことが仕事だ。だから彼らは、演技する。観客の、作り手の、理想となる登場人物を己のすべてを使って表現する。

——きみは、たくさんの人々の視線を集めてしまうから

だから、きみの生き方は役者のようであるべきだ、と。それは優しい口調だった。

正直にならなくていい。

? 吐きになればいい。

人に好かれるように、人に愛されるように。所作も口調も表情も。自然な笑顔も、悲しみに暮れる涙も。

すべてをコントロールして、人に愛されるように生きればいい。

そんな風に、彼はわたしに言い聞かせた。

わたしの名前は、結愛。

愛を結ぶ、と書いて結愛。

「きみに、ぴったりの名前だ」



放送が終わった。

「ふう……千世子ちゃん、お疲れ様でした」

千世子ちゃんは、伏せた顔を上げない。

今頃、Twitterをはじめとする各種SNSで、わたしたちの放送は大きな話題を呼んでいるだろう。

この共演を、一つの勝負とするならば。

今日のところは、わたしの勝ちだ。

そもそも、配信という媒体そのものが、わたしの舞台。そして、百城千世子を目当てに見に来たファンが『普段見慣れている百城千世子』よりも『その隣にいる知らない少女』に興味を惹かれるのは、当然のこと。逆に、実況配信という媒体に慣れているわたしのファンは『わたしを見ること』そのものが、一種の生活のルーティンになっている。今日限りの出演の千世子ちゃんに、気持ちは流れない。

そして、観る人に向けた『演技』の差も歴然。

放送そのものは百城千世子のネームバリューで集客したけれど、放送後の感想と話題は、わたしで持ち切りだろう。最初からそういう狙いで、プロデューサーもメディア戦略を練っているはずだ。本当に、性格が悪いことこの上ない。まあ、だからこそ信頼しているんだけどね。

「……万宵さん」

「はっ」

「共演してくれて、ありがとう」

「こちらこそ」

「一つ、聞いてもいい？」

「どうぞ？」

伏せていた顔が、こちらを向く。

伏せられていた表情が、こちらを向いた。

「私、万宵さんのことを……私に似ているって思ってたんだ」

「スターズの天使にそう言ってもらえるなんて、ほんとに光栄だなあ。わたし、うれ……」

「でも、全然違った」

「……」

あの天使が、言葉を遮った。

いや、もう天使ではないか。

「あなたは、私とは違う」

柔和で優しく、誰もが見惚れるスターズの天使……だったモノが、わたしを睨んでいる。

ああ、ようやくみる事ができた。

これが、天使の仮面の素顔。仮面を外した、彼女の本当の姿。

「万宵さんは、何のために演技をしているの？」

俳優事務所、スターズの社訓は『俳優は大衆のためにあれ』。

人々が見上げる、満天の夜空の星々。

とてもストレートでわかりやすい。これ以上なくシンプルなモットーは、たしかに美しい。けれど「どうしたいか」よりも「どうありたいか」を優先するその言葉は、一種の呪いに近いものだ。

わたしと千世子ちゃんは、やはり似ている。

きつとわたしも『彼の言葉』に呪われているから。

「そんなの決まってるじゃん」

わたしが、演技をするのは、

「わたしのためだよ」

万宵結愛という存在を、愛してもらうためだ。

「……万宵さん、それは傲慢だよ」

「うん。わたしもそう思うかな」

傲慢でもいいんだ。

わたしは多分、そんな風にしか生きられない。

だから、ごめんね千世子ちゃん。手段は同じでも、わたしとあなたは、目的が違う。

あなたが、天使であるのなら。  
わたしは、自分のために、人々の心を弄ぶ。手のひらの上で、人形を躍らせるような――

「でも、わたしは天使じゃなくていいから」

――悪魔でかまわない。

「……そっか」

百城千世子は、立ち上がる。  
すごいな、と思った。

この子は、すぐに立ち上がれるんだ。

「今日はありがとう。また共演しようね、万宵さん」

彼女は、また仮面を被り直した。

でも、わたしにはわかる。

それは、ここ数年、誰にでも好かれるように生きてきたわたしが、ひさしく忘れていた感情。

向けられるだけで熱い。火傷しそうな嫉妬の炎。

「うん。こちらこそありがとう。またよろしくね、百城さん」

悪意は刺さる。

悪意は不快だ。

悪意は当たり前のように、わたしを傷つける。

でも、極限まで研ぎ澄まされたそれは、ひどく美しいから。

身体で感じる天使の感情の熱は、とても心地良かった。

★★★☆☆

配信者、という活動形態を最初に選んだのは、自分を追い込むためだった。

最も手軽に、最も多くの人にリアルタイムで観られる。カメラ越しでもリアルタイムなら感情を受け取れることがわかった。だから、自分を徹底的にいじめ抜くことにした。

趣味の釣りの時間も、配信に使うようになった。

好きだった本も、読み聞かせや感想を言う配信のネタにした。

一人の時間を削った。視線に、感情に、慣れることにした。

景ちゃんのお母さんが死んで、あの男は、忽然と姿を消した。

それが最低限の義務であるかのように、景ちゃん達に生活費だけは振り込まれている。そして、その支援は今も続けられている。しかし当然、景ちゃんはお金に手をつけていない。

最初は、行方を探そうとした。でもすぐに、探すのをやめた。

彼が新しく出版した、一冊の本を読んだからだ。

その物語の片隅には『人の感情を読む少女』が、ひっそりと登場していた。

すべて、理解した。

表面を取り繕う彼の言葉も、心の奥底から湧き出る感情も、すべては彼が紡ぐ物語のためにあったのだ。わたしはそのために観察され、踊らされていただけに過ぎなかった。

けれど、それでも認めよう。認めざるをえない。

わたしの在り方の根底には、あの男がいる。

だから、名前を決めた。

配信者としての『ユアユア』は『y o u rあなたの結ゆ愛あ』。

今日もこんなにも笑顔で、元気で、人々に愛されていることを示すために。わたしは、あの男の理想を演じ続けている。

わたしは、あの男が嫌いだ。世界で一番、大嫌いだ。

あんなにも純粹な感情で、あんなにも簡単に。？を吐いて、人を傷つけることを教えてくれた。娘を、家族を裏切る様を、まざまざと見せつけてくれた。

許さない。

でもだからこそ、わたしは景ちゃんの側には絶対にいようと、心に決めたんだ。

彼の匂いが染みついた、彼の家だった空間に、わたしは新たな家族

として踏み入る。

「ただいま！ 景ちゃん！」

わたしの呼吸。

わたしの笑顔。

わたしの視線。

わたしの声音。

あの男が、教えてくれた。

わたしのすべては、わたしが愛されるためにある。

わたしにとって、生きることとは演じること。

「おかえり！ 結愛ちゃん！」

愛する幼馴染に、とびきりの笑顔を向けて。

「うん。ただいま、景ちゃん」

だからわたしは、今日も演じる。

## 演劇編

### 格ゲー配信と演劇界の重鎮

わたし、万宵結愛の朝は早い。

朝は五時前には起床して、窓を開け換気。起きて最初に、澄んだ空気を胸一杯に吸い込むことに決めている。

手早く顔を洗い、身支度を済ませて、ジャージに着替えて外に出る。多分、朝が早い女子高生日本一決定戦したら、わたしはかなり上位に食い込めると思う。知らんけど。

家の周囲を、少しだけ散策する。朝は、人が少ない。誰にも見られない。だから気分がいい。この時間帯にすれ違う人は限られているし、そういう人とは大抵顔見知りになっている。道で会釈を交わす程度の関係は、気楽でいい。

軽く散歩を終えたら、家に戻る……わけではなく、そのままウチの隣、要するに景ちゃん家に入る。

合い鍵？ もちろん持ってますよ。でも普段は景ちゃんに「おかえり」って言ってほしいから使いません。ぐへへ……

合い鍵を使って、景ちゃん家のドアを開けて、抜き足差し足。寝室へ向かう。

「けーいちゃん……起きてるっ！」

景ちゃんがひげのおじちゃんのスタジオで働くようになって、ものすごく得するようになったことがある。

それは、景ちゃんの寝顔を見れるようになったことだ。

以前までの景ちゃんは新聞配達のバイトをしていたため、わたしよりも早起きだった。わたしのこの朝の習慣も、新聞配達を頑張る景ちゃんの生活スタイルに合わせてのものだった。

だけど、いろいろあって景ちゃんは新聞配達のバイトをクビになり、さらにいろいろあってひげのおじちゃんのスタジオに所属することになり……その結果、朝のバイトをする必要がなくなった。

故に。故に、である。わたしは朝、景ちゃんを起こしに行ける、と



いうスペシャルかつドラマチックなイベントを毎朝を味わうことができるようになったのだ。

朝、起こしに行くとか我ながらもう夫婦ですよね。結婚していいよねこれ？

ふふ、何度経験してもドキドキするぜ。

襖を開けた先には、絶世の美少女が……涎を垂らしたダサイTシャツ姿で、眠りこけていた。

「……はあ」

美人はずるい。

涎を垂らしていても美人だ。あまりにも美人だ。美人を極めすぎている。天女か？

垂れている涎を拭き取りたかったけど、それは自重して華奢な肩に触れる。着古した薄いダサTシャツは景ちゃんの華奢の体のラインを隠しきれず、よたれた襟首からはこれまたキレイで倒錯的な鎖骨のラインが垣間見える。はだけた布団の隙間からはカモシカのように引き締まった、無駄な肉のない太股が惜しげもなく晒されていた。ああ、眩しい。朝日よりも眩しい。目が焼けそうだ。ラピユタの光か？艶やかな黒髪も少し乱れていて、その乱れ様が見ているだけで愛おしい。今すぐ櫛を通して整えたい衝動と、癖がついた髪をそのまま手のひらで弄びたい欲望が、わたしの中でせめぎあう。マジ天使と悪魔。

危なかった……もしもわたしが男の身体だったらとつくにそういう間違いが発生してとつくにそういう関係に至ってしまったところだった……いや、待てよ？

どうせわたし、美少女（自称）なわけだし、べつにちよつとくらい景ちゃんをつまみ食い（意味深）しても、何も問題ないのでは？むしろ健全なくらいなのでは？

「うへへ……」

「ゆあねーちゃん、朝からうるさいよ」

「うひゃあ!？」

いつの間に起きていたのか。レイちゃんがまるで生ゴミでも見る

ような目を、布団の中からわたしに向けていた。

「れ、レイちゃん……いつ起きたの？ まだはやくない？」

「ゆあねーちゃんがうるさいから起きただけだよ」

あ、はい。なんかごめんなさい。

「ふあ……もうちよつと寝たいから、おねーちゃん起こすならふつうに起こしてね」

「はい」

「へんなことしちやだめだよ」

「は、はい」

レイちゃんは、時々勘が鋭い。さすが、景ちゃんの妹って感じである。

……ガードかたいな

「……ゆあねーちゃんってかわいいけど、時々オヤジ臭いよね」  
うっさいわー！

★★★

今日は休日。

景ちゃん家で朝ごはんをいただいたあとは、とくに予定もなかったのでさっさと準備をして昼間つから配信のお時間である。

「はーい。休日の昼間からPCの前にいるみなさん、こんにちは」

『おっすー』『オラニートー』『開幕早々闇が深いわ』『これがほんとに天使とコラボした配信者のコメ欄か？』『お下品ですわよ』『お上品にいきますわよ』『今のはゆあゆあが悪い』『煽られたら煽り返す』『それが誇り高いコメ欄の流儀だ』

千世子ちゃんとのコラボのおかげで視聴者の数はさらに増加。プロデューサーの各所への働きかけで、わたしの知名度は日増しに上がってきているけど、あのCM以来、大きな仕事は取ってない。

『もうしばらく、普段の配信を続けてください。すでに売り込みは完了しました。これから忙しくなりますよ』

とは、プロデューサーの談である。

わたしはすぐにお芝居の仕事がくると思っていたし、景ちゃんみたいにエキストラでも構わなかったんだけど……でもほら、今まで続けてきた本業を疎かにするのもちよつとアレだし。配信の方も、しっかりやっていきましよう。

「あつはは。千世子ちゃんとコラボしても、わたしは変わらないよ。今日はストレス解消つてことでゲームやっていこうか」

『さすがユアユアだ』『ブレない』『なにやんの?』『最近銃撃つてるユアユア見れないのつれえわ』『サウザンドエンジェルさん最近いらないわ』『サウザンドエンジェル千世子ちゃん説』『ねえよ』『さすがにないわ』『妄想やめろ』『ゲームならなんでもいいよ』

そうなんだよね。最近、サウザンドエンジェルさんイン減ってるんだよね……似てる名前の千世子ちゃんとわたしが仲良くなってるの見て、拗ねちゃったのかな? まあ。仕方ない。今日は違うゲームをやっていくことに決めている。

「今日はね、ひさびさに格ゲーでオンするよ」

ゴソゴソと取り出したのは、メジャータイトルの2D格闘ゲームだ。一時期はそれなりにやり込んでいたんだけど、最近は無沙汰だったこともあってか、ちよつとパッケージが埃を被っている。いかんいかん。わたしがあんまり掃除しないタイプなのがバレてしまう……拭いとこ。

『格ゲー……』『いいじゃん』『ありあり』『ユアユア、格ゲーやるのひさびさじゃね』『わかる』『腕なまってそう』『最近、銃の民だったからな』『あまりわたしを舐めないでもらおうか?』

強気発言でドヤったおかげもあってか、最初は調子を取り戻すまで負けていたけど、徐々に昔の勘を取り戻してきた。いい感じに連勝が続く。いやあ、やっぱりむら……むしゃくしゃしてる時は格ゲーに限るね! うん!

「さーて、次の対戦相手はどいつだったと。今のわたしは負ける気がないよ」

『調子のとてますね』『これは死亡フラグ』『連勝終了のお知らせ』『うるさいわ! おっ……きたきた。きたよ! 次のわたしの獲物』

が！」

ふふ、さてさて。

「レディ！ ファイツ！」

『あれ』『結構強くね？』『ユアユアのキャラの方が相性有利なんだけどな』

なんのこれしき。軽く揉んで……

軽く揉んで……

『押されてるじゃん』『相手強いわこれ……』『動きがアケコン臭い』『ユアユアがんばれ』『まだ舞える』『負けるな！』

も、揉んで……

『ダメだなこれ』『うーんフラグ回収』『いや、ゆあゆあ結構粘ってるぞ』『お、ダメキャン入った』『ワンチャンあるか？』『がんばれ！』『さつきから全然喋らなくて草』『めっちゃ必死』

揉ん……

『あ、おわた』『終了のお知らせ』『コンボすっげーきれいに入ったな』『ミリ残り！』『ねえよ』『死んだわ』『ゆあゆあ乙』『めっちゃくちゃ熟練って感じ』『それな』『これはしゃーない』

「……なああああああ！ ま、負けたあ……」

くっ……キャラ相性わたしの有利だったのに……有利だったのに！

「くそう！ みんな、もう一戦いくよ！」

『これは終われないやつ』『むきになって草』『今日は長そうだな……』

このあとめちやくちや潜った。



都内の、とある稽古場。

まだ役者達が集まる稽古前の、その時間帯を狙って。

黒山墨字は、一人の男と会う約束を取り付けていた。

「面倒をみてもらいたいやつが、二人いる。あんたも、きつと気に入る

はずだ」

対面に腰を下ろし、威圧するように杖をついている老人は、黒山の発言を鼻で笑った。

「気に入らねえな」

老人、というのは適切ではないかもしれない。老人という言葉を使うには、目の前の人物から発せられる圧力はあまりにも強い。

豊かに蓄えた口髭。睨まれただけで身が竦むような、彫りの深い顔立ち。動物に例えるなら、老いた鷲が最も近いだろうか。その鋭い眼光は、今も爛々と輝いている。

舞台演出家、巖裕次郎。

演劇会の重鎮、日本を代表する演出家である。

「何が気に入らないって?」

「最初から何もかもが気に入らねえよ」

取り付く島もない、とはこのことか。

少しでも隙を見せれば刺し貫かれそうなプレッシャーに身を晒しながら、しかし黒山は決して身を引かなかった。

「頼むよ。あんたが鍛えてくれれば、あいつらは確実に伸びる」

「老い先短いジジイを、随分とこき使うじゃねえか。お前、いつからそんなに偉くなった? 潰すぞ、コラ」

「べつに偉くなったつもりはねえですよ。だからこうして頭下げて頼んでるんでしょうが」

「中身の詰まってない、軽い頭を下げられてもな。お前を見ていると、お前の師を思い出して苛つくんだよ」

「あの人は師匠じゃねえつってんでしょ」

軽口の応酬をしてもきりが無い。黒山は、持ち込んできたPCを開いた。最初に夜風景のウェブCMを。次に、万宵結愛の映像を見せる。

「最初に見せたやつは、先に映画のオーディションに行かせる。けど、もう一人の方は先立ってあんたに預けたい」

映像を見た巖の眉尻が、ぴくりと跳ねた。

——よし、食いついた。

ここで、巖を説得するための材料を、全て提示する。身を乗り出して、言葉を続けようと、

「なんだ、ユアユアじゃねーか」

「……は？」

黒山墨字、数秒間の思考停止。

「……ジジイ、今なんて？」

「俺より先に耳遠くになってんじやねーよ、ボケが。ユアユアじゃねーか、って言ったんだよ」

呆れたように鼻を鳴らして、巖はガサゴソと、脇に避けていたゲム機とアーケードコントローラーを手元に寄せて言った。

「ファンだ。今日もコイツで対戦した」

目の前のジジイが何を言っているのか、黒山はちよつとよくわからなかった。

夜風景は止まらない

「……お金、増えたわ」

わたしの隣で、預金通帳を見つめたまま景ちゃんが固まった。

「ああ、この前のCMの出演料？ あと、時代劇のエキストラもやったんだっけ」

「一体……」

「いやあ、景ちゃんもこれで無理なバイトに精を出さなくて済むね」

「食費……」

「わたしも最初はスパチャの金額に戸惑ったりしたけど、景ちゃんもすぐ慣れるよ」

「何カ月分、かしら……?」

うーん、ダメみたいですねこれは。完全にフリーズしてらっしゃいますわ。

「ほら、景ちゃん。ここで立ち止まってるよ邪魔になっちゃうから、外出ようね」

「焼肉……ステーキ? お刺身も……」

とりあえず通帳持ったままご飯のメニューを考えて固まっている景ちゃんをATMから引きずっていき、道路の隅っこに寄せる。すると、タイミングを見計らったかのようにポケットから振動を感じたので、スマホを取り出して電話に出た。

「はいはい、もしもし?」

『おつかれさまです』

愛しの景ちゃんとの放課後下校タイムを遮ってくれたのは、愛しくもなんともない腹黒プロデューサーである。

「プロデューサー、何か用? 急ぎじゃないなら、メールにしてほしいんだけど。声聞きたくないから」

『相変わらずつれないですね。せっかく、あの百城千世子を踏み台にして知名度を大幅にアップしたというのに。もう少し上機嫌で浮かれていてもいいと思いますが』

「わたし、勝ったら兜の緒はしっかり締めるタイプなんだよね」

『それは結構な心掛けです』

プロデューサーが仕掛けた広告の効果は劇的だった。世間の記事は、わたしのことを『百城千世子に並ぶ美少女現る!』とか『天使を超える天使の登場か!』などと、こぞって囃し立てるように書き連ねている。正直、あまりいい気分ではない。わたしが百城さんに『勝った』ように見えるのは、共演の場がわたしのフィールドだったからで、また別の形で競えばどう転んでいたかわからない。しかも、あの日の百城さんはわたしに対して被る『仮面』の精度で真っ向勝負を挑んできた。極論、コラボ配信はすべてがわたしの有利なように転んだと言っても過言ではない。

どちらかと言えば、有利に転ぶように仕組まれた、というべきか。ここからは黒い会話になりそうなので、わたしは景ちゃんから離れて声を潜めた。

「今さらだけど、プロデューサー大丈夫？ 百城千世子を利用するよな形でわたしの知名度上げて、業界トップのスターズを敵に回したら、他の仕事やりにくくなるんじゃないの？」

『おや？ もしかして私を心配してくれているのですか？ うれいのですね。目頭が熱くなってきました』

「あー、うん。もういいや」

この男は、たとえ大手事務所を敵に回しても、手八丁口八丁のらりくらしと立ち回る人間だった。心配するだけ無駄だね、はい。

「本題。はやくして」

『この前のCMの出演料。入金を確認しましたか？』

「ああ、その話？ うん、ちょうど今記帳したとこだよ。おじちゃんスタジオからお金入ってた」

『それはなによりです』

「……わざわざそんなこと確認するために電話かけてきたの？」

『いえいえ、もちろんそれだけではありませんよ。あなたの今後の仕事の方針がまとまりました。とりあえず、黒山の指示に従って動いてください。すでにこちらから、話は通してあります』

「ひげのおじちゃんに？ ん、わかった」



『……疑問などはないのですか?』

「ん? とくにないよー。わたし、ひげのおじちゃん好きだし。なんなら、プロデューサーよりもふつうに好きだよ」

『それはそれは。本当に悲しくて泣いてしまいそうです』

電話越しに、わざとらしくハンカチを取り出すプロデューサーの姿が見える。

「ひげのおじちゃん、あれでもすごい人だからね。わたしのためにいろいろしてくれているみたいだし、いい仕事取ってきてくれるって信じてるよ」

『おかしいですね。何故か、私よりも黒山の方を信頼しているように聞こえます』

「目元に添えてるだけのハンカチ捨てて、自分の胸に手を当てて考えてみたら?」

『そうですね。私の心臓は、あなたへの期待で高鳴っていますよ』

もう切っていいかなマジで。

『詳しい内容については直接説明を聞いてください。ただ、私も大まかな概要は聞いています。あまり黒山ばかり鼻肩されると私が泣いてしまいますが……なかなか、名が知っている人物と話をつけてきたようです。楽しみにしていいでしょう』

「へえ……ドラマとか?」

『いえ、演劇です』

ふむ、なるほど。

次のわたしのチャレンジは演劇、か。

「いいね。楽しみ」



時間は流れて、夜。

スタジオ大黒天、美人制作の柊雪は、淹れたコーヒーをカップに注いだ。

「はい、けいちゃん」

「ありがとう雪ちゃん」

「コーヒーを受け取った景は、きよろきよると周囲を見回した。」

「黒山さんは？ 結愛ちゃんもいないみたいだけど」

「墨字さんはゆあちゃんと打ち合わせだね。なんでも、次のゆあちゃんのお仕事の話を、墨字さんが取り次いできたらしくて」

「そうなの」

頷いた景はコーヒーを一口飲むと……そのまま『ずーん』と沈み込んだ。

「結愛ちゃんはすごいわ……私なんて、エキストラも満足に演じることができていないのに……千世子ちゃんとコラボしたり、新しい仕事をもらったり、どんどん前に進んでいるもの。それに比べて、私は……」

「落ち込まないでけいちゃん！ 誰にでも失敗はあるから！」

目に見えてわかりやすく落ち込んでいる景を、雪は慌ててフォローする。

結愛が百城千世子とのコラボ配信などで一気に知名度を上げている間、景の方も遊んでいたわけではない。黒山に連れられて、時代劇のエキストラを演じたりしていた。ただ、ちよつと役に感情移入し過ぎた結果、侍役の役者に跳び蹴りをかまし、ついでにカットを三回かけて撮影をひっかきまわした挙句、そのまま逃げるように帰ってきただけである。ひどかった。

「……最悪だわ」

「だ、だから落ち込まないでけいちゃん！ 最初は誰にでも失敗はあるから！ むしろあれ、悪いのはいきなり現場に放り込んだ墨字さんだから！」

「本当？ 悪いのはヒゲ？」

「そうだよ！ 悪いのはあのヒゲだよ！」

ヒゲに責任転嫁して、景はなんとか精神を持ち直したようだ。頭と一緒に沈み込んでいた頭の毛が、ぴよんと跳ねる。

「よし、悪いのはヒゲね」

「そう！ 悪いのはヒゲ！」

「でも、私も悪かったし失礼な部分もあったから、あのドラマの人達にはきちんと謝りに行きたいわ。雪ちゃん、あのヒゲに伝えておいてくれる?」

「うん。わかった! あのヒゲに伝えておくね!」

ヒゲの悪口を言う会みたになつていいるが、雪はべつにヒゲの悪口を言うために景を大黒天の事務所に呼んだわけではない。あのヒゲ……もとい、上司である黒山の伝言を伝えて、景と次の仕事の相談をするために呼んだのだ。

「景ちゃんはスターズのオーディション受けたことあるんだよね?」

「ええ。落ちてしまったけど」

「ていうか、審査員に墨字さんいたしね……」

ちようど、そろそろ時間だ。

「実は、墨字さんからこれを景ちゃんに観せるように言われててね」

雪は、リモコンでテレビの電源を点けた。

「……あ」

画面に映つたのは、一人の女優。景がつい最近、幼馴染の配信で観た、日本を代表する若手女優だ。

『スターズ主催、映画『デスアイランド』は24名の若手俳優を起用する予定です。うち12名は、私を初めとしたスターズの俳優が務めさせて頂きます』

百城千世子。

やつぱり、すごく綺麗、と。景は思った。

『残り12名は一般オーディションから募ります』

そこで一拍。呼吸を挟んだ千世子は、にこりと微笑んで、

『私達と一緒に映画を作りませんか』

この映像を見る、全ての人に向けて、そう言った。

「映画の、オーディション……あのヒゲは、私にこれを受けろつて言いたいよね?」

「うん。正直、私は反対したんだけどね。景ちゃん、一回落とされてるわけだし」

雪は、渋い表情で頷いた。

落とされたとはいえ、景はスターズのオーディションで一度、最終まで残っている。スターズが重視するのは容姿やカリスマ性。一次の書類審査と二次の映像審査だけなら、楽に通過できる可能性は高い。自信満々の表情で、黒山は雪にそう語っていた。

しかし、仮に二次まで楽に通過できたとしても、社長の星アリスが景を認めてない以上、最終審査ではじかれて終わりだ。真正な評価など、望むべくもない。黒山はやはり自信満々な表情で「俺が何とかしておく」と言っていたが、雪としては「何とかして何だよ……」って感じである。

「……わかっているとは思うけど、これはけいちゃんにとってかなり不利なオーディションだよ。墨字さんは受けさせる気満々だけど、私は断ってもいいと思う」

「そうね。受けるわ」

「うんうん。やっぱりそうだよね！　じゃあ、墨字さんには私から……受けるの!？」

「受ける」

画面の中の天使を見詰めて、景は言い切った。

「この人、顔が視えない。まるで、仮面を被っているみたい。でも、本当にすごく綺麗で……なんとなくだけど、私にはないものを持っていると思うの」

そして、なによりも、

「結愛ちゃんが共演した相手と、私も共演してみたい」

その言葉には、必ず受かってみせる、という強い決意が滲み出ていた。

「……わかった。墨字さんに報告しておくよ」

「お願いします。あと、雪ちゃん」

「ん？　なに」

「このオーディションを受けること……結愛ちゃんには、秘密にしておいてくれる？」

「え？　なんで」

「……ちゃんと受かったあとに報告して、びっくりさせてあげたいか

ら」

可愛らしい理由に、雪は微笑んだ。

「うん、それも了解。がんばろうね、けいちゃん！」

「まかせて。私、がんばるわ！」

ぐつと拳を握る景は、自信とやる気に満ちていて。

これならいけるかもしれない、と。雪も、不安と心配で一杯だった気持ちが薄まっていくのを感じた。拳を握ったまま、景は集中した様子で画面を見詰めている。きつと、そのきれいな横顔の裏で、オーデイションに向けた秘策を練りはじめたに違いない。

役者のモチベーションの高まりを邪魔するわけにはいかない。景のコーヒークップにおかわりをそつと注いで、雪は部屋を出た。

（配信の時も、2人はとつてもかわいかったし……私も天使さんと現場で仲良くなれるかしら？ お友達になりたい……さすがに共演者だから話をする機会はあると思うけど、でも仲良くなりたいたい時って、何を話せばいいのかわからないのよね。私、結愛ちゃんみたいにくミュカ高くないし……本当に、結愛ちゃんはすごい。あ、そうだし！私も「結愛ちゃんの親友です！」って自己紹介すればいいんだわ！はじめての配信でも、お揃いのお洋服で、あんなに仲が良さそうだったから、結愛ちゃんの話なら間違いなく話題が弾むはず！ ふふ、完璧ね……）

受かったあとのことしか考えてなかった。

「なによこの女！」という芝居でお決まりのアレ

「ひげのおじちゃんさあ……」

「なんだよ？」

「いくらなんでも、打ち合わせするために女子高生を居酒屋に連れてくるのは、どうかと思うよ？」

対面でビールのジョッキを持っているおじちゃんを見ながら、わたしは深いため息を吐いた。

景ちゃんとわかれたあと、今後の確認をするためにおじちゃんに連絡した結果……何故かこうして、居酒屋で打ち合わせをすることになった次第である。しかも、チェーン店の居酒屋とかじゃなくて、明らかに個人経営の、常連の行きつけっぽい居酒屋だ。だっておじちゃんが何も言わなくても最初に生ビール出てきたし。

「おいおいクロちゃん！　なんだよそのかわいい女の子は！」

「羨ましいじやねえか、おれらにも紹介してくれよ！」

「うるっせーな。絡みがうぜえぞ酔っ払いども。仕事の話だ、仕事の話」

「仕事の話って……マジかよクロちゃん」

「いくらなんでもパパ活はやべーと思うぞ……？　そっちのお嬢ちゃんも、悪いことは言わないからやめとけ。そんなヒゲ」

「あ、ビジネスライクなお付き合いなので大丈夫です」

「ビジネス……！」

「ライク……？」

「ああっ！　邪魔だお前ら！　散れっ！　あっちいけ！　しっし！」

ハエを追い払うように、すでに出来上がってる常連さんたちを追い払うおじちゃん。やれやれ、と座り直して、ビールを飲む喉が大きく鳴った。

「……つぶはあ。ったく、おちおち打ち合わせもできやしねえ」

「目の前でお酒飲みながら言われても説得力ないって……あ、すいませーん。やきとり、ぼんじりとかわ、つくねとレバーをタレで。あとポテトサラダ。じゃがいもの潰しは粗めで」

「あいよっ！」

「いやお前もなんで馴染んでるの？ なに勝手に注文してるの？」

「だっておじちゃんの奢りでしょ？ あ、塩キャベツのおかわりいる？」

「いや、いるけど」

「ここ、お料理おいしいね」

「いや、そりや俺の行きつけだからうまいけど」

もぐもぐ、と。お酒の肴をガンガン食べる。普段、景ちゃんの家でご飯を食べていると、こういう居酒屋メニューにはなかなかありつく機会がないので、ものすごく貴重なご飯だ。食べられる時に食べておかねばならない。

「わたしも、はやくお酒飲める年になりたいな。お料理動画でバズってみたい」

「お前、料理できるの？ ああ、でもCMの撮影でシチューは普通に作ってたな」

「そもそも、景ちゃんがあんなにお料理上手だから、わたしが作る必要ないんだよね。もしもクツキング系の動画をやるとしたら、景ちゃんとかコラボして撮るよ。その名も『クツキング景』」

「そのまんまじゃねえか」

「わたしは出来上がった料理で缶ビール飲んで優勝する係やるよ」

「食ってるだけじゃねえか」

「決め台詞は、そう……『ゆあすぎて、ゆあゆあになったわね！』でいきます」

「意味わかんねえし、パクリやめろ」

くだらない雑談をしつつ、一通り食べて飲んでお腹を満たして、そうしてようやくおじちゃんは本題を切り出してきた。

「配信少女」

「なに、おじちゃん？」

「おまえに足りないものは何だと思う？」

「お芝居の実践経験」

「まあ、そうだな。間違っではないない。60点の解答だ」

「平均ギリギリくらいじゃん。低くない？」

辛めの採点に、唇を尖らせて文句を言う。しかし、おじちゃんはわたしの文句を取り合いもせず、机の上の皿を端っこに寄せて、自分のPCを置いた。

「たしかに、お前は実際に芝居をする経験が不足している。が、カメラに向かって演じるって意味では、既に一定のレベルに達してる」

「わー、世界の黒山墨字に褒められるなんて光栄だ〜！」

「茶化してないで、真面目に聞け」

「うつす」

画面に映ったのは、わたしの動画の中で最も再生数が高い百城さんとのコラボ動画……ではなく、わたしがデビューしたばかりの頃に撮影した、釣り堀の配信動画だ。まだ、カメラの設置もトークも、視聴者さんたちに向けた演技も、全部未熟だった頃の動画。いわゆる、黒歴史ってやつである。

「ちよ……おじちゃん！ それどこで見つけてきたの!？」

「ネットの海をサーフィンしたら普通にあったぞ？」

「も〜！ 恥ずかしいから画面閉じてよ！」

「やだ。お前が恥ずかしがってるの、なんかおもしろい」

「いじわる！ 真面目な話するんじゃないの!？」

あまりにもひどい出来だったから、わたしのアーカイブからも消したはずなのに……うう、今さら見られるとか超恥ずかしい。

「……ていうかおじちゃん、わたしの動画観てたんだね」

「あ？ 当たり前前だろ。でなきや、逆光や位置はともかくアングルのアドバイスまでできねえよ」

「あー」

そういえば……と。おじちゃんから受けたアドバイスを思い出す。

——この前とは違うアングルにした方がいい。お前、顔だけはいいからな。そっちの方が画面映えるし、見る方も飽きないだろ

言われてみれば、たしかに。わたしの普段の配信を観ていないと、できないアドバイスだ。

「そんなわけで、俺はお前の芝居をこの前のCM撮影も含めて、ある程



度知っている」

「うん」

「だから、これから芝居をする上でお前に『足りないものを補う経験を積ませたい』

「それが、演劇ってこと?。」

「ああ、そうだ」

おじちゃんはまたPCを操作して、一人の人物を画面に映した。

「巖裕次郎。演劇界の重鎮なんて呼ばれているクソジジイだ。お前には、このクソジジイの舞台に出れるように、演劇の下積みをやってみよう」

「えー、おじちゃんのコネでいきなりその人の舞台に出れたりしないの?。」

「……あのクソジジイの好感度を考えると、それもぶつちやけいけそうなんだが」

「え? なんか言った?。」

「なんも言っていないぞ」

とにかく、と。ひげのおじちゃんはやきとりを咀嚼して、ビールを空にして、言った。

「お前には『インプロ』に出てもらおう」

「いんぷろ?。」

なにそれ?。



三坂七生は、巖裕次郎が主催する『劇団天球』の劇団員である。

七生は、非常に苛立っていた。理由は単純。今日、出演することになったというインプロに、素人の新人を一人ねじ込め、と巖から言われたからだ。

インプロとは、Improvisation……日本語で『即興』という意味の単語の略で、台本なしで行う即興劇のことを指す。演劇以外では、音楽用語として即興曲という意味もある。

似たような印象の演劇用語に『エチュード』があるが、こちらは元々フランス語で『練習のために作った楽曲。練習曲』という意味。インプロもエチュードも、どちらも即興劇であることは変わらない。その大きな違いは、実際に観客を呼ぶか、呼ばないか、という点にある。稽古などの練習で行う即興劇がエチュード。

観客を入れた本番として行うのがインプロ。

近年は演劇のワークとして即興劇が取り入れられることが多く、また即興公演を小規模な催しとして行う劇団も増えてきた。台本やセツトの手間がないことも手伝って、新人の劇団員や演劇学校の生徒が経験を積むのに、インプロは打って付けの舞台である。だから、そこに新人を放り込む巖の意図は理解できないことはない。しかし、納得はできなかつた。

(あー、イライラするなあ……)

軽く憂さ晴らしもしたかったので、七生は早めに会場の近くに到着し、周囲をぶらぶらと散策していた。

七生は犬が好きだ。特に柴犬が大好きだ。なので、散歩も嫌いではない。特にあてもなく視線を揺らして歩いていたせいか、七生は周囲を見回して立ち止まっている一人の女の子に、目を留めた。

(あれ……? ウチのパンフじゃん)

黒のキャップに、白のオーバーパーカーとショートパンツ。キャップに加えてマスクまでしているので顔は見えなかったが、なんとなく顔立ちが整っているのがわかる程度には、美人の気配がした。

演劇の小さな会場の場所は、総じてわかりにくい。特に今回のような小規模なインプロの場合は大きなホールなどを借りることは滅多になく、ビルの二階や地下のスペースを使う場合がほとんどだ。

(開演まで、まだまだ時間あるけど……今日の公演に好きな人でも出るのかな? それで早く来すぎちゃったとか。声、かけてあげた方がいいか? でもなあ……)

七生は迷った。

自分はメガネをかけていて目付きは悪く、おまけに無愛想で、初対面の相手にはこわがられてしまうことが多い。なので、普通に歩いて

いても道を聞かれる機会は皆無だ。同じ劇団のお調子者にもそれを散々からかわれたので、締め上げて制裁したことが記憶に新しい。

どうしよっかなー、と。そんな風に、うだうだと悩みながら少女を眺めていた七生は、ぎよっとした。それなりの距離があったにも関わらず、例の少女がこちら目掛けてまつすぐに駆け寄ってきたからである。

「お姉さん！ すいません！」

「え？ あ、はい」

「この公演の会場ってわかりますか？」

「わかる……っていうか、出演者だけど、私」

「え!? 本当ですか？ ラッキー！ すいません、凶々しいお願いなんですけど、一緒に連れて行ってもらってもいいですか？」

「い、いいけど……」

「やった！ ありがとうございます！」

マスクの下の笑顔に、思わず七生は気圧されてしまった。キャップから飛び出た長いポニーテールが、尻尾のようにぴよこぴよこと揺れる。

「えっと、一つ聞いていい？」

「はい、なんででしょう？」

「周りに、人いたよね？ なんでわざわざ、私に声かけてきたの？」

「それはもちろん、お姉さんがいい人そうだったからです！」

いい人そう。そんな風にはじめて言われたな、と。七生は苦笑した。

「でも、会場に行くにはまだ早くない？」

並んで歩きながらそう聞くと、少女はマスクの下でまた笑った。

「あ、実はわたしも出演者なんですよ」

「そうだったんだ。どこの劇団？」

「あはは……それが、舞台に立つのがはじめての素人なんです、わたし。今日は、巖裕二郎さんの紹介で来て、三坂七生さんっていう方にご指導いただくことになってるんですけど……あれ？ お姉さん？」

少し温かくなっていた心が、一瞬で冷え切った。

目を細めて、七生はメガネの奥から少女を睨みつけるように見る。

——コイツか。

「あんた、名前は？」

「あ！ 申し遅れました。わたし、万宵結愛っていいいます。普段はネットで配信とかやってて……」

「私、三坂七生」

「へ？」

マスクを外した美少女は、明らかに戸惑った様子で目を瞬かせている。

巖裕二郎は、七生に言った。インプロで実際に、お前が万宵結愛の演技を見極めてこい、と。

それだけならよかった。

巖はもう一つ、七生に頼み事をしたのだ。

——あと、できればユアユアのサインもらってきてくれ  
認めない。絶対に、認めたくない。

自分の恩師である演出家が、美少女配信者にどハマりしてるなんて。

「先に言っておくけど……私、あんたのこと大っ嫌いだから」

## 金髪ツインテツンデレメガネっ娘攻略パート

自慢じゃないが、わたしは人に好かれることに関しては結構自信がある。

当然だ。心がある程度読めるのだから、わたしはそれを覗いて相手に好かれるような行動を取ることができる。控えめに言って、テストの解答をカンニングしながらペンを握っているようなものだ。さらに言えば（自慢じゃないが）、外見も非常に優れているので、第一印象も基本的に良い。

今回は、はじめて立つ演劇という舞台。しかも、おじちゃんから知り合いの巖さんとやらを通して、急遽出演を捻じ込んでもらった舞台だ。あのCM撮影の時も、わたしの出番を力技で強引に作ったひげのやることである。もしかしたら「なんだよこの素人」みたいなやつかみを受けるかも……とは思っていたし、そういう印象を持たれていることも織り込み済みで、今日はがんばろう、と。自分なりに気合いを入れてきた。

そう。気合いを入れてきたんだけど……

「先に言っておくけど……私、あんたのこと大っ嫌いだから」

ええ……（困惑）

なんですかこれ？

初対面でこんな暴言吐かれるの、人生ではじめてですよ？

事の次第は単純だ。道に迷っていたら、なんかいい感じに刺さってきた興味と好意の感情があったので、「出演者の人かな？　ちようどいいやく」と、わたしから迷わず声をかけに行った。金髪に二つ結び、メガネの奥からきつい目が覗く、そばかす顔のその女性は、ちよつと近寄りがたい雰囲気醸し出していた。でも、わたしに向けられる感情は比較的柔らかくて「ああ、多分見た目で勘違いされるタイプだけど、いい人なんだろうな」と、安心した。予想通りと言うべきか、彼女は今日の舞台に出演する関係者で、しかも名前を聞いてみるとひげのおじちゃんから事前に聞いていた『天球』の劇団員、三坂七生さんだとわかった。会場入りする前に挨拶ができて「よっしや！　ラッ

キー！」なんて思ったくらいだ。

だがしかし、七生さんの態度はわたしの名前を聞いた瞬間に急変した。

「……巖さんの紹介だし、こっちにも面子はあるから一応面倒はみるけど。でも、あんたと仲良くなる気はないし、馴れ合う気もないから。よろしく」

こんなに敵意に塗れた「よろしく」があるかつ!? (困惑)

七生さんからわたしに向けられる感情の色は、わたしが自己紹介した瞬間にぐるりと反転した。それはもう濃厚でぐちゃぐちゃな、敵意の塊。割合を詳しく説明するなら、単純な『疑念』が五割、『嫉妬』が三割、『敵意』が二割つてところだろうか。なんかもう、悪意のゴールドブレンドみたいになっている。ていうか、純粹に意味がわからない。『疑念』とか『敵意』はまだなんとなく理解できるけれど、自己紹介した瞬間に嫉妬されるとか、理不尽極まりないにもほどがある。

対人関係において、わたしの不思議な力はとっても有用だ。しかし残念ながら、心が読めてもわからないことはたくさんある。七生さんは天球の劇団員だし、なるべく良好な関係を作っておきたい。最初の入り口で躓くと、あとが大変だ。

意を決して、わたしは『話しかけるな』オーラ全開の七生さんに対して、自分から声をかけにいくことにした。

「……あの、七生さん」

「なに?」

「不躰な質問ですいません。わたし、何かしてしまいましたか? 失礼があったなら、謝ります。急にご無理を聞いて頂いて、出演させてもらう立場であることも、重々承知しているつもりです。ですから……」

「大丈夫」

「へ?」

「私があんたに対して当たりがきついのは、私個人の問題だから。あんたが気にする必要はないし、それをどうにかしようとしなくてもいい」

うへあ……取り付く島もないとは、この事か。

「そんなことよりも、舞台、今日がはじめてでしょ？ 集中したら？」

「アツ、ハイ」

くそう……恨むぜひげのおじちゃん。

最初から難易度ベリーハードの修行編だよ、これは。



口ではああ言ったものの、七生の万宵結愛への第一印象は決して悪いものではなかった。

「万宵結愛です！ よろしくお願いします！」

挨拶はハッキリしていて澁みなく、質問への受け答えには明るい笑顔が伴っている。

「あ、わたしそれやります！」

チケットの整理や小道具の準備、清掃に至るまで様々な準備を自分から積極的に手伝っている。

「え？ 千世子ちゃんと共演してどうだったか、ですか？ いや、わたしもう、あの時ほんとに緊張してて……あー、恥ずかしい……」

おまけに、自分がそれなりに有名な立場にいることも決してひげらかさず、その経験や体験も謙虚に語っている。

舞台役者という生き物は、大抵の場合、話好きで語りたがりで、自信家だ。どこの業界でも共通して言えることだが、はじめての場に飛び込んで、円滑なコミュニケーションを取れる人間は強い。容姿が整っていて、話し上手ともなれば、それは尚更だ。

慣れないコミュニケーション、はじめて会う人間相手に、よく馴染んでいる、と七生は思った。多分、元々人付き合いがうまいタイプなのだろう。

「あの巖裕次郎が急に捻じ込んできたって聞いたから、どんな女が来るんだらうって警戒してたけど……ふつうに話しやすくいい子じゃん。よかったね、七生」

「……べつに。人の顔色伺うのが上手いだけでしょ」

顔見知りの共演者は、七生が吐いた毒に苦笑した。

「うつわあ……アタリきついねえ。そんなこと言っていると、あのかわいこちゃんに嫌われちゃうよ?」

「好かれないわけじゃないし」

「巖さんが目をかけてるから拗ねる気持ちはわかるけど、あんまいじわるしたらダメだよ。少なくとも、やる気はあるみたいだし。ちゃんと面倒みてあげな?」

「……わかってる」

耳に痛い忠告を聞き流しながらも、七生は結愛に話しかけた。

「万宵さん。出番すぐだから準備して」

「あつ、はい!」

「わかってると思うけど、インプロに台本はないから。全部アドリブでやるよ。大丈夫?」

「大丈夫です! アドリブには自信あるので!」

「……ふーん」

今日のインプロは短めの出番をいくつかのグループでローテーションしていく形で行う。会場も小さめで、客席も椅子を並べた簡素な設営だ。観客との距離感は、かなり近い。

緊張して台詞が途切れたり、場の空気を明らかに乱すような演技をしたら、即刻叩き出してやろうと考えていたのだが……結愛はそういうわかりやすいミスはしなかった。

(……へえ。思ってたよりもいい演技するな)

率直に言つて、結愛の演技はなかなかのものだった。

表情を作るのが上手く、元々のルックスの良さも手伝って、観客の目を一身に引く。

アドリブを澁みなくすらすと口から紡ぎ、語彙も発想も豊かで柔軟。発声も七生に言わせればやや硬いところがあるとはいえ、概ね聞き取りやすく、よく通っている。普段、配信者をやっているだけあつて、セリフ回しに関しては、そこらへんのアマチュア役者を軽く蹴飛ばせるレベルと評してもいい。

認めよう。たしかに巖が目をかけて、出演を捻じ込むだけの才能は



ある。どうして自分に彼女を預けたのだろう、と七生は疑問に思っていたが、これは逆だ。巖はインプロに出演する七生に、万宵結愛を預けたわけではない。七生がインプロに出演するから、万宵結愛を今日預けてきたのだ。

「万宵ちゃん、うまいじゃん！」

「場慣れしてるね」

「ありがとうございますー！」

休憩時間、他の共演者たちに囲まれて口々に褒められている結愛。しかし、ニコニコと微笑んでいるその笑顔を断ち切るように、七生は言った。

「ダメだよ」

言って、しまった。

しん、と。和気藹々とした空気が、その一言で静まり返る。

「素人にしては、ずば抜けて上手い。それは認めてあげる。でもそんな演技じゃ、天球の舞台に立たせるわけにはいかない。このままの演技を続けるなら、巖さんにも、私はそう報告する」

「ちよつと、七生……」

「事実でしょ」

七生は基本的に、自分のことを『不細工な女の子』だと思っている。結愛と自分を比べたら、明らかに容姿が劣っているのは自分の方で。嫌われるのは、慣れっこだ。

だから、いやなことを言っている自覚があっても。自分の口の悪さを知っていても。言わずにはいられなかった。

(……あーあ。言っちゃった)

喉を湿らせるために、お茶のペットボトルを開く。泣かれるか、喚かれるか、それともキレられるか。

七生はペットボトルに口をつけて、結愛の反撃を待った。しかし、暴言を吐かれた結愛は元々大きな目をさらに丸くして、じつと七生を見詰めていた。

(……なんだろう。なんか、この子)

表情が読めない。

感情が見えない。

彼女自身は感情表現が豊かで、にこやかなタイプであるはずなのに、そんな違和感を覚える。

互いに互いを観察するような奇妙な空気感の中で、先に口を開いたのは結愛の方だった。

「七生さん」

「なに？」

「わたしのこと、キライですか？」

ストレート極まりない質問に、飲みかけのお茶を吹き出しそうになる。

周りの共演者達はさつと距離を取って「修羅場だ……」「喧嘩だ……」「揉め事だ！」と、ニヤニヤしながら七生と結愛を遠巻きに眺める構えに入った。役者が揉めるのは日常茶飯事である。

しかし、当の結愛はそんな共演者たちの視線を気にもせず、じつと七生の方を見詰めたまま、答えを待っていた。思わず、大きいため息を吐く。

「……言わなきゃわからない？」

我ながら、最低な返答だと思うが。嫌な女を地でいく自分に、反吐が出そうになるが。

「私、なんか猫みたいな女が嫌いなんだよね」

「……」

「言いたいこと、わかるでしょう？」

また、七生は言ってしまった。

一つ、補足しておくならば、結愛の芝居に対する評価に、七生は私情を挟んでいない。巖の舞台に立つ人間として、それは責任を持って断言できる。

(……でも)

けれど同時に、不細工な自分とは違う、かわいい女の子。のらりくらりと。気ままに振舞って、それだけで好かれる自然体の美しさ。

そんな様子に、嫉妬心がないかと言えば、それも?になる。

今日、はじめて会った相手に嫉妬する見苦しさ。七生は、自分で自分を笑いたくなくなった。

しかしながら、それを聞いた結愛は怒りもせず、悲しみもせず、ただ淡々と頷いた。

「なるほど」

相当棘のある言葉を投げているにも関わらず、結愛は怯むことなく。むしろ、続けて質問を七生に投げてきた。

「七生さん、好きな映画はなんですか?」

「は?」

なんだそれは。その質問に何か意味があるのか?

「……『ダンボ』と『101匹わんちゃん』。あとは……『美女と野獣』とか?」

「なるほどなるほど」

「……なんでそんなこと聞くの?」

「いえ、なんとなく気になっただけです。ありがとうございます」  
にひやり、と。結愛は破顔する。

その表情を見て、七生はうっすらと背筋が寒くなった。

「七生さん。わたし、夕方にもう一度出番ありますよね?」

「そりゃ、あるけど……なに? さっきの演技、挽回するから認めてくれって。そう言いたいわけ?」

いかにも彼女が主張しそうな言葉を、回り込んで潰す。

「違います」

だが、結愛はそれを否定した。

腹の底が見えない新人役者は、笑顔のまま、

「認めるんじゃないやなくて……わたしのこと、好きになってください」  
「……は?」

迷いなど一切ない、よく通る声と美貌を伴った宣言は、けれどどこか蠱惑的で。

たとえるなら、悪魔に似ていた。

悪魔なんか絶対負けなんだから！（フラグ）

三坂七生は苛立っていた。

（ムカつく……）

人を食ったような、あの笑み。

好きになってください、と口調こそ敬語だったが、言い換えれば「ア  
ンタはわたしを認めるしかない」という宣戦布告にも聞こえる。とい  
うか、七生の側からすればそういう意味にしか受け取れない。

舐めるな、と思う。

演技は、積み重ねだ。芸とは、磨き上げるものだ。

生まれ持った容姿、センス、才能。それはたしかに、役者としての  
人生を左右する大きな要素だろう。

事実、万宵結愛の容姿は優れていて、トークにはセンスがあり、演  
技の節々に交じる所作には才能が感じられた。だが、それだけだ。結  
愛は芝居経験がまるでない素人で、そして役者に最も必要とされる経  
験がない。経験がないからこそ『演劇』というものを根本的に履き違  
えている。

（やっぱり、この子を巖さんの舞台に立たせるわけにはいかない）

七生に演劇を教えてくれた男は、主役の王女も端役の奴隷も、誰も  
彼も等しく美しく、舞台の上で輝かせる魔法を知っていた。

七生に演劇を教えてくれた巖裕次郎は、わざわざ舞台裏にまで会い  
に来たおかしな中学生の話を最後まで聞いて、頭の上に手を置いて、  
言ってくれた。

自分を嫌悪する者が役者を志すのは、自然なこと。それは、今と違  
う自分を、演じたいと思うからだ。

しかし、同時にお前は勘違いしている、とも巖は言った。

ガキが不細工だの化粧だの、外見を取り繕うことばかり考えるのは  
生意気だ。役者が自分を蔑むのは、間違いだ、と。

『手前の美しさを知ることこそ芝居という。だからお前は役者に向いて  
いるんだ』

七生にとって、演劇とは、芝居とは、それが全て。それが根幹。だからこそ、認めるわけにはいかないのだ。

「みんな、聞いてくれ！ 前に説明した通り、午後は『動物』をテーマに、これを使ってやるから！」

今日のインプロ全体を指揮している座長が、ダンボール箱を中央に置く。その中には、頭につけるタイプの被り物やカチューシャ……多種多様な動物の被り物が入っていた。

「ええ、本当に午後はこれ被ってやるんですか？」

「インプロなんだから、身一つでよくないですか？」

「パツと見でわかりやすいテーマだと、観客のウケがいいんだよ。それに、午後は近くの児童館の子ども達を呼んである。一目で何の動物かわかるのは伝わりやすくいい」

もちろん、演じる内容は自由だ、と。言うまでもないことを、しかし素人である結愛のことを気遣ったのか、座長が補足する。文句を言いながらも、なるべく自分のイメージに合うような、あるいは好きな動物の仮装をゲットするために、演者達はダンボールに群がった。

勝手に腹を立てて、勝手に思い悩んでいたせいで出遅れてしまった。どうせアドリブがメインのインプロなのだし、適当に余ったやつでいいか、と七生は思ったが、

「七生さん！」

「うわっ！」

いつの間に死角に回り込んでいたのか。

無駄に顔面偏差値が高い結愛が、七生の間近に顔を出した。

「余計なお世話かもしれないですけど……動物の仮装、取ってきました！ どっちがいいですか？」

そう言う結愛は、それぞれの手に猫耳と犬耳のカチューシャを持っている。

一番人気と言ってもいいメジャーな動物だろうに……かわいい外

見に反して、こういうところはちやつかりしていて、強かで要領がいい。

「べつに……どつちでもいいよ」

「えー、せっかくだから選んでください」

「だからどつちでもいいって。私はいいから、好きな方選びなよ。どうせ、何着けてもかわいいし、自分でも似合うって思ってるでしょ、あんたは」

「正面から結愛を見据えて言い放つ。」

またやつてしまった、と思つたが一度口から出した言葉は取り消せない。結愛の反応を待つてみたが、特に大きな反応はなく。髪色と同じ大きな瞳が、やはりこちらをじつと見据えるだけだった。

「……ふむ。わかりました。じゃあ、こつちで」

結愛が突き出したのは猫耳のカチューシャだった。ついさつき「猫みたいな女がきらい」と言つたにも関わらず、である。

この子なりの、意趣返しだろうか？

突き返したり、文句を言うこともできたが、七生はそれを素直に受け取つた。さすがに持つてきてくれたものを拒むのは、最低限の礼儀に反する。もつとも、今の自分の印象はもう最悪になっているだろうから、そんなことを気にする必要もないだろうが。

「七生さん、午後もよろしくお願いしますー！」

「……よろしく」

普通は、ここまで強く当たられたら、少しは萎縮するだろうに。

随分、人の悪意に強い子なんだな、と。七生は、目の前で微笑む少女の印象を少しだけ修正した。

「……私が、あんたのことを好きになるなんてありえないけど」

続けて、七生は言う。

「でも、演技だけはある隣の隣でちゃんと見る。それが私の責任だから。次が、最後のチャンスだと思つて」

「はいー。大丈夫ですー！」

先ほどの「好きになってください」の発言といい、即答してくる自信といい、やはりこの子はどこかおかしい。

犬のカチューシャを頭につける結愛が何を考えているのか、七生にはわからなかった。



わたしは、自分が美しいかなんて、これっぽっちもわからないけれど。

ただ、自分が美しく『見られている』ことは知っている。

そもそも、疑問に思うのだ。

どうして人はあんなにも、自信満々に『自分』を知っているつもりでいられるのだろうか？

他人がいなければ『自分』なんてモノの価値は、永遠にわからないのに。



客席には、やはり子どもが多かった。

開幕早々、ライオンの被り物をした演者が、わかりやすく前に出て大声で吠え、そしてずっとこけた。どつと、子ども達の笑い声此起彼伏。掴みは上々だ。

声を発したりセリフを言うことだけが、演技ではない。サイレント映画が笑いを届けるように、仕草一つ、身振り一つで、舞台役者は観客の心を掴む芝居をしなければならぬ。

「まったく、人間どもは最悪だ！ おれたちを完全に飼いならしてやる気でいやがる！」

アドリブの芝居は、動物達が人間の悪口を言って盛り上がる……というコメディちつくな流れになった。ライオンが主導する形で、劇が進行していく。

結愛の様子が気になって、ふと横を見る。

(え………?)

そして、七生は驚愕した。

「それでね、それでね！　ウチのご主人ったら、ぼくのエサを減らしちやっただんだ！」

「ひどいご主人だねえ！　わたしも、ご主人様がなかなか散歩に連れて行ってくれなくて大変なんだよ」

それは、たった一回、ただ一度の登壇を経験した上で修正された、演技の方向性だった。

他の演者から振られた言葉に対する、共感。自然な相槌。かわいらしい犬の仕草を添えつつ、結愛の視線が七生を見る。

「猫ちゃんはどうか？」

これが正解なんでしょう？

結愛が、そんな風に、問いかけている気がした。

「……うくん。私は、犬ちゃんみたいに散歩に行かないから、わからないわ」

結愛の演技の変化。そのポイントは明確だ。

先ほどよりも声を抑え、身振りを抑え、演じることそのものを抑えている。演技を地味に抑えることで、自分が過剰に目立たないように、うまく立ち回っていた。

（うそでしょ……？　さっきの今で、本当に修正してきたっていうの？）

ありえない。

今度は、七生の方が動揺を表情に出さないように必死にならなければならなかった。

「犬ちゃんかわいいよ！」

客席から上がった声に、はっとする。

今日のインプロは、観客との距離が近い。そして、子どもが多い。必然、こういった合いの手が入ってしまうこともある。その子どもの声は、不運にもよく響いてしまった。

結果、子ども達に限らず、釣られた他の観客達の視線が一斉に結愛に向き、注目を浴びる。しかし、犬の耳をつけた頭が、動揺に揺れることはなかった。むしろ余裕を保ったまま、ゆっくりと頭を抱えた。「う、うう、悪口言っちゃったけど……やっぱり、ご主人様たちに褒



められると嬉しいわん！」

「犬う！　すぐに尻尾ふるんじやねえ！」

「う、うるさいわん！　ゴリラさんはどうせ尻尾ないから振れないでしょ!？」

「……あ、たしかに」

今日の役者の中で最も体格が大きい男が結愛と顔を見合わせ、それから十分に間を取って客席を向き……「ウホ」と。間抜け面を晒す。ルックスのいい結愛までその変な表情を合わせてやったのが、観客達のツボに入ったらしい。今日一番の笑い声が会場に満ちた。

そこで、結愛はさっと身を引き、今度は観客の注目がアホ面のゴリラに移る。

(今のもそうだ……やっぱり、わかって演じてる)

七生は、結愛に対して演技がどう悪かったのかを言ったわけではない。ただ悪い、認められないと言っただけで、その改善点を示したわけではない。けれども結愛は、自分で己の演技の問題点に気づき、しかもそれを修正してきた。

はじめて立った舞台で、まるで観客の視線が見えているような立ち回りをしながら、

(前に出過ぎない、自然な芝居をやっている……!)

今、この瞬間。リアルタイムで急成長している。

演技の下地が、厚い。

吸収と成長が、あまりにも早すぎる。

(なんなの……この子)

その演技に、驚愕しながら。

七生は、自分の中の感情が、少しずつ揺れ動いていることを自覚した。

★★★★

午前の舞台のわたしの演技は、うまくても独りよがりなものだっ

た。

自分が目立つことを考えて、自分の発言とトークで場を回して、自分のルックスで注目を集めて、自分の動きで盛り上げる。

今までの配信は、それでよかった。一人しか映らないCM撮影も、相手を負かすことしか考えていなかった百城さんとのコラボの配信もそうだった。

でも、お芝居は違う。演劇は違う。決して、一人だけでは回せないし、一人だけでは成立しない。

観客の人たちは、わたしだけを見にきているわけではない。わたしを含めた全員で作る舞台を観にきているのだ。

「その点、やっぱりライオンさんはすごいよ！ 動物の王様だよ！」  
だから、他の役者さんに視線を振る。わたしという存在を矢印にして、場の流れを補助して、滑らかに物語を進める。

ライオン役のイケメンさんが、被り物の下でニツと笑ったのがわかった。それは、さっきまでとは違う、わたしを認めてくれる笑みだった。

——万宵ちゃん、うまいじゃん！

——場慣れしてるね

午前の演技を、みんなは褒めてくれたけど、それは表面上だけ。わたしに向けられる視線には、どこか小馬鹿にするような色が乗っている。ああ、わたしは馬鹿にされていて、認められていないんだな、というのがすぐにわかった。

そんな中、

——ダメだよ

はつきりダメだと言ってくれたのは、七生さんだけだった。

それだけで七生さんが、演技に対してとても真摯なのが、すごく伝わって。言い方は厳しくても、たとえ向けられる感情に『嫉妬』が混じっていても、わたしを想って吐き出された言葉はやはり嬉しくて。表面上だけうまいうまいと、素人役者を心の中で馬鹿にする人と、しつかり言葉に出してくれる七生さん。どちらの存在がわたしにとってプラスになるのかは、火を見るよりも明らかだった。

だからひげのおじちゃんは、わたしを七生さんに預けて、わたしをインプロに出演させたんだろう。

わたしは今まで、画面の中でずっと主役だった。

でも、脚本すらないアドリブの演劇に、配役はない。誰が主演で、誰が脇役すら、何も決まっていない。だから、観客の反応を見て、聞いて、感じて、リアルタイムで修正する。

うん。わたしの最初のお芝居に、ぴったりの舞台だ。

「うええ……狼くんがいじめるよ。猫ちゃん、助けて〜」

上目遣いに、七生さんを見上げる、

自分だけが、舞台の主役ではないことはよくわかった。とはいえ、わたしは自分の在り方を変える気はない。

百城さんに言われた通り、わたしは傲慢だ。

だから、わたしを見てくれる観客の人たちだけでなく、同じ舞台に立つ、他の演者のみんなにも好かれよう。愛されよう。好かれて、愛されて、認められよう。

——私、なんか猫みたいな女が嫌いなんだよね

七生さんがそう言ってくれて、その言葉の裏に？がなくて、わたしはとても安心した。よかった、つてガッツポーズをしそうになっただくらいだ。

わたしは、猫じゃない。

他人にどう思われているか気になって、愛されるように尻尾を振って、手を出されればお手をし、命令されればお腹を見せる。

今、耳につけているカチューシャが示す通り。

わたしはきつと、犬のように卑しい女だから。

「ねえ……お願い、猫ちゃん？」

だからこの人はきつと、わたしのことを好きになる。

「……もう、仕方ないなあ……ワンちゃんは」

見下ろす視線の、演技の裏側で。

好意と悪意の天秤が傾いて、裏返る瞬間が……わたしは、堪らなく

愛おしい。

## 犬と猫

公演終了後。

「……よかったわよ」

後片付けの最中。荷物を運ぶために二人きりになった……なるべく、他の人間が周囲にいないタイミングを見計らって、七生は結愛にそう言った。

「え？」

きよとん、と。

美人がやったらかわいい、いわゆる『小首を傾げる仕草』を、そのまま結愛はやった。そういう仕草まで様になるものだから、また腹が立つ。

——コイツは難聴系鈍感ラブコメ主人公か？

意を決して、七生は鈍感女を真正面から見据えたまま、もう一度言った。

「だから……よかったって言ってるの。あんたの演技。最初の芝居より断然、よくなってた！」

「つ……ありがとうございます！」

「うえっ!？」

それだけ言って、あとは「一応、合格って巖さんに伝えとく」と。伝えたいことだけ伝えてさっさと離れるつもりだったのに、結愛は一気に距離を詰めてきて、しかも七生の両手をしっかりと掴み取った。

「具体的に！ もっと具体的に教えてください！」

「ちよ……!？」

近い。なんとというかもう、いろいろと近い。

具体的に？ そう、具体的には、結愛の胸の女性的な膨らみ——大きめのパーカーを着ているので、そこまで目立っていないが——の存在感を、間近に感じるほど近い。というか、少し当たっている。しかも、わりとがっしりと手を握られているせいで、振りほどいて逃げることもできない。手のひらの温かさ、髪の毛から香るシャンプーの香りに、心臓の鼓動が早くなる。

「どこが!? どこがよかったですか!」

「ま、前に出過ぎないところとか……あと、他のキャストに視線とセリフを振って、流れを調節したり……まあ、そんな感じ」

だから、少し慌ててしどろもどろになってしまうのは仕方がない……仕方がないのだ。

誰も聞いていないのに、七生は心の中の自分に言い聞かせた。

「ありがとうございます! 七生さんにそう言ってもらえるの、めちゃくちゃうれしいです!」

「ちよつ……!」

結愛のコミュニケーションは手を握るだけでは終わらなかった。終わるどころか、悪化した。

やっと手を離れたと思ったその瞬間。今度は両手を大きく広げて、捕食者のようにガブリ、と……平たく言えば、正面から抱きついてきたのである。

七生は、混乱した。それはもう、大いに混乱した。とりあえず、周りに他の人間がいなくて本当に良かったと思った。

(うつわ……やっぱこの子、髪の毛めっちゃいい匂いするな……シャンプーとか何使ってるの? いやいやそうじゃなくて! というかマジで胸でつかい……!?! かわいくて演技できてスタイルもいいとかなにそれ……いや、そうじゃなくて!)

好き勝手に抱きつかれたまま、数秒。七生は結愛の無駄に大きい胸の中から、顔を上げた。

「ちよつとあんた、いい加減に……」

「七生さん」

「なに!」

「わたしのこと、好きになってくれましたか?」

言葉に、困った。

抱きつかれたまま、体温も息遣いも、髪の毛いすらも手に取るようにわかる、この距離で。

人を疑うことを知らないような、人に嫌われないことを疑わぬような、純度の高い透明な瞳に、こんな近くから見詰められてしまったら

……

「……ま、まだわかんない」

……こんな風に、誤魔化すのが精一杯だ。

——へタレか？

心の中でセルフツッコミ。自分の情けなさに七生は顔を覆いたくなつたが、抱きつかれて腕をホルドされているので、それすらもできな

しかし結愛は、七生の返答に気を悪くした様子はなく、むしろその答えがはじめからわかっていたかのように、からからと笑った。

「そうですよね。わたしたち、お互いのこともまだ何も知らないわけですし」

「……当たり前でしょ。今日会ってすぐ、相手のことが好きになるわけがないじゃない」

「ですよねえ」

裏表のない笑顔と、朗らかな声音だった。

「なのでわたし、七生さんのことがもつと知りたいです」  
「え？」

「わたし、まだまだ演劇初心者なので……もつとうまくなりたいんです。だから、個人的に演劇を教えてくださいる人を探していました！七生さんしかいません！というか、七生さんがいいです！」

「え……？ ええ？」

「ダメ、ですか……？」

がくん、と結愛は身体を落とした。腰にすがりつくように、上目遣いにこちらを見上げる視線がひどくいじらしい。

甘え上手な子犬みたいだ、と七生は思った。捨てることなんて、でき

「……ん」

「い？」

「い、いいけど……」

「やった！　ありがとうございます！」

ようやく満足したのか、手をほどいて結愛が離れる。無駄に強い圧迫感から解放されて、七生はほっと息を吐いた。

「七生さん！　連絡先！　連絡先交換しましょう！」

「はいはい」

もう、なるようになってしまえ。

せがまれるままに連絡先やら何やらを交換する。懐かれるのは嫌な気分ではないが、むず痒いものがある。

「あ、そういえば」

スマホをいじり終えた結愛が、ふと思い出したように手を叩く。

「さっき、ようやく気がついたんですけど……七生さんって、舌にピアス空けてるんですね」

「え、あ……うん。そうだよ」

何を言うかと思えば、そんなことか、と思ったが。これはある意味、ずっと握られていた会話の主導権を取り返すチャンスかもしれない。

七生はにんまりと口の端を吊り上げた。

「女子高生からみたら、大人って感じる？」

「はい！　わたしたちは、校則とかもあるので……」

「そうだよね。あんま、こういうところに空ける人いないだろうし……ていうか、ふつーのピアスもまだか。どう？　羨ましかったりする？」

七生はこれ見よがしに、結愛に向けて舌を軽く出してみせた。

特に、深い意味もなく。ただ、自分を振り回す女の子に対して、大人ぶってみたくなった。

七生の行動は、ただそれだけのことだったのだが、

「……そうですね」

結愛はそれを、否定しなかった。

ただし、あからさまに肯定もしなかった。

舌の上のピアスを興味深そうにじっと見ている。

（……あれ？）

結愛の喜怒哀楽は、とてもわかりやすい。相手に気持ちがある程度



きちんと伝わるように。しっかりとメッセージを伴った表情をする。けれど、その瞬間だけは、

「すぐく、えっちです」

七生は、目の前の少女の感情を読むことができなかった。

立ち竦む七生の横を通り抜けながら、透明な美貌が先ほどと同じに……いや、それ以上に接近する。唇が重なるか重ならないか。そんな近くで、囁くような吐息が漏れる。

舌を、舐め取られるかと思った。

「だから、あんまり他の人に見せびらかしちやダメですよ？」

不意打ち、だった。

犬のような少女はそのまま、軽い足取りで片づけに戻っていく。

「……意味、わかんない」

はい、とか。

いいえ、とか。

そういう答えを返す余裕すらなく。

あの不思議な少女に心を掴まれた実感だけが、心の中にじつとりと残った。



巖裕次郎は、広い一軒家に一人で住んでいる。

家族はいない。演劇に打ち込み、のめり込む巖に愛想をつかして、出て行ってしまったからだ。

七生は、今日の公演が終わったあと、ここに直接顔を出すように言われていた。

「巖さん、いる？」

「おう。帰ったか」

「……なに観てるの？」

「ユアユアの配信だ」

チャイムも鳴らさず、開けっ放しの玄関からリビングに入った七生は、早速困惑した。

野球中継を暇潰しに観ているような表情で頬杖を突きながら、PCの前に座って現役女子高生の配信を観る日本を代表する演出家。正直、絵面がシニールと言うしかない。見る人が見れば、その光景に卒倒するだろう。

「舞台のあとでも、配信は欠かさねえつもりらしい」「へえ」

「今、なんてコメントを送ろうか考えている」

「いや、聞いてないし」

「七生……おめえ、なんかいいコメント思いつくか？」

「勝手に考えて」

結愛が絡むと途端にこうだ。相変わらずだなこの人は……と思いつつ、七生は、空いているソファアに腰を落ち着けた。

「で、どうだった？」

「よかったよ。まだまだ荒削りだけど、一気に伸びると思う」

「そうか。見立て通りだな」

見立て通りだな、と。

巖裕次郎に言わせた役者は、果たして彼の生涯の中で何人いただけるか？

七生は、唇を噛む自分の感情を自覚しないように努めた。

「で、お前……『例の物』は貰ってきたのか？」

「例のモノ？」

「ユアユアのサインだよ」

「……ああ」

そういえば、そんなことを言っていた。

「大丈夫、ちゃんと貰ってきたよ」

鞆の中から、サイン色紙を取り出す。

別れ際、結愛は他の劇団員にもサインを求められていたので、その流れに乗って書いてもらうのは簡単だった。色紙まで用意していたことを何人かにかかわれたが「知り合いがファン」ということで押

し通した。事実だし、？は吐いてない。

それを聞いた結愛は「なーんだ。七生さんにサイン書きたかったのに。ちよつと残念」などと。またあざといことを言っていた。当然、七生は自分の分のサインは断った。

「はい」

「ああ」

これは、巖に渡すためのものだからだ。

「……おい、七生。それじゃあ、受け取れねえぞ」

「え？」

気がつけば、七生はサイン色紙を胸の前で抱きかかえていた。

——七生さんにサイン書きたかったのに、ちよつと残念

馬鹿馬鹿しい、と切り捨てていたはずの言葉が、頭の中で反響する。必要ない、と断ったはずの紙切れが、胸の中で途端に重みを増す。

「……巖さん」

「なんだ？」

「結愛、うちの劇団に呼ぶつもりなんだよね？」

「……そのつもりだ」

ああ、よかった。

それなら、問題ない。

「だったら、結愛から直接サインもらえばいいよね？」

「いや、それはそうだが」

「これ、私が書いてもらったサインだから」

「……あ？ おいちよつと待て七生!？」

巖の制止も聞かず、七生はそのまま足早にリビングから立ち去り、巖の家を飛び出した。

歩きスマホは厳禁。なので、適当な電柱の陰でスマホを開き、動画サイトにアクセスしてチャンネルを開く。配信は、まだ続いていた。『それでそれで、すつごくお芝居がうまい女の先輩がいて……! わたしの師匠になってください、ってお願いしてきちゃったんです!』  
師匠。

らしくない響きに、思わず笑ってしまいそうになる。けれどまあ、

悪くない。あの子と一緒にいれば、きっと自分も得るものがあるだろう。

『おつかれさまでした』

コメント欄に、一言と。

『次、いつ会おう?』

個人用の連絡先にも、メッセージを送って。

画面の中でスマホを持って、急に喜び始めた少女の姿を眺めながら、七生はチャンネル登録のボタンを押した。

「……サイン、どこに飾ろうかな」

## 勘違いとすれ違いは加速するもの

わたしが演劇の舞台に立つようになってから、なんだかんだ一ヶ月が過ぎた。

演技指導の方は至って順調。自分でもぐんぐん伸びているのがよくわかるくらいに、知識と技術を吸収している。あの日以来、週一で必ず会う約束を取り付けた七生さんに「結愛って……ほんと強欲だよね」と呆れ顔で言われるくらいだ。へっへ……もう本当にかわいいなあ、七生さんは。そんなに褒めても何も出ませんよ。

ちなみに、一度稽古を観に来たひげのおじちゃんには「強欲だし暴食だよ」と言われた。ますます意味がわからない。技術の吸収に貪欲とか、もつとそういう言い方をしてほしいね、まったく。

そんなわけで、日曜日の今日。わたしが新しく立つ舞台は、七生さんを落と……じゃなくて、仲良くなった時と同じ、インプロである。

「……待っていたぜ、大人気女子高生配信者ッ！ ユアユア！」

仁王立ちして腕を組む、というテンプレ極まるイタイポーズでわたしを待ち構えていたのは、なんかちょっと暑苦しくて空回りしている雰囲気漂う、三枚目にもなりきれないようなメガネの男の人だった。

「えーと……あなたが劇団天球の？」

「そう！ 俺が今日、キミの演技指導を担当する青田亀太郎だ！ ああ、七生から話は聞いていると思うけど、どうか楽にしてほしい。アイツと比べても、俺の演技指導は何ら遜色ない。いや、むしろ上回ると言ってもいい。どうか、大船に乗ったつもりで任せてほしい」

「はい。七生さんから話は伺っています」

「ほう……ちなみに、あいつは俺のことをなんて？」

「美人を前にして調子に乗って先輩面していらんことばかり言うだろうから、半分以上は聞き流していい、って言っていました」

「あのメガネ女っ！」

あなたもメガネですよ。

「ま、まあ、いい……さて、ユアユア」

「あ、なんか面と向かってユアユアって言われるのふつーに気持ち悪いので『万宵さん』って呼んで頂いてもよろしいですか？ 亀田さん」  
「えっ……やだ。めっちゃ他人行儀。なんか、ふつーに傷付く……」  
「女性をイラつかせる言動と殴りやすい顔面をしているから、罵詈雑言を浴びせていい、と七生さんから許可を頂いています」

「あのメガネ女っ！」

ツッコミのノルマかな？

「あー、ゴホン……とにかく、だ。今日、キミに立つてもらおう舞台は、七生の時とはひと味違う。今回、俺たちが出演するインプロは最初からコメディがメインだ。つまり、観客のみなさんにはどっかんどっかん笑ってもらおう必要がある。さて、ユアユ……」

「万宵です」

「……万宵さん。舞台に立つ者にとって最も大事なこと。それが何か、キミにはわかるかな？」

「まだ演劇はじめて一ヶ月かそこらなので、もしわたしが即答できたら演劇の世界は随分底が浅い、ということになると思いますね」

「そうかそうか、わからないかつ！ よろしい！ ならば教えよう

……舞台に立つ者にとって最も大事なこと、それは！」

「……それは？」

やたら長いタメが入ったので、仕方なく合いの手を入れる。

なんちやら太郎さんは、全身を震わせて、すごく気持ち悪い感じに、無駄に舞台慣れしているよく通る声で、はつきりと言った。

「そうっ！ それは『エクスタシー』だッ！」

「すいません。ふつーにセクハラなので帰りますね」

「すいませんでした調子にのりましたちよつとまってくださいお願いします」

「あ、触らないでください。ていうか、近づかないでください。マジで警察呼びますからね」

「引き止めることすらっ!?!」

涙目の亀なんちやらさんに触れられないようにソーシャルデイスダンスを維持して、わたしはジリジリと後退する。なにぶん、容姿が

いいので男の人に迂闊に触れられないように気をつけているんですよ。わたし、操は景ちゃんに立てているので。

「七生さんからウザいとは聞いていましたが、想像を絶するウザさに正直困惑です。なんでそんなに気持ち悪いんですか？ 存在がウザさと気持ち悪さとメガネで構成されているみたいですよ」

「初対面でこれほどの罵倒を……？ おのれ、七生め。いらんことばかり吹き込みやがって……」

ひとしきり肩を震わせて、ようやくおふぎけタイムが終わったのか。亀太郎さんは大きく息を吐いて、今度は大仰に肩を竦めた。

「いやまあ……あの巖さんが夢中になってる配信者ってことで、どんな子がくるのかなって。七生も褒めていたし、実際俺も興味津々だったわけよ」

「はあ……っ？」

なるほど。さっきまでの気持ち悪いハイテンションはわたしを試すための仮の姿だったというわけだ。腐って（異臭を放っているダンボール箱のみかんのような気持ち悪さで）も、劇団天球の劇団員。本来は舞台に対して一途で真剣な好漢……

「で、実際に会ってみたらもうやっぱりモニター越しに観るより超かわいかったからさー！」

……ではないですね、うん無理、

「俺は嘘を吐けない男……だから、正直に言わせてもらう。ぶっちゃけ、顔が超タイプです」

うわやだ、反吐が出そう。

「いやあく、あの百城千世子とコラボして『天使と並ぶ』なんて言われているだけある！ あ、サインもらったいい!? 俺もファンだから！ 悪いけど二枚くれるとすごく助かる！」

「ご丁寧にサイン色紙を二枚突き出されたので、丁寧に頭を下げる。すいません。わたし、生理的に無理なファンの方へのサインはお断りしているのです」

「え、ファンなのに……っ？」

「実はここに来る前、七生さんに亀太郎さんのことを聞いたんですが」

「あ、うん」

「一言で述べるなら『息をしてほしくない存在』って言っていました」

「生きることすら……?」

「あ、息しないでください」

「さっそく使わないでっ!!」

うん。唯一、評価できるのはツツコミへの適性だね。

「ええいつ……とにかく、とにかくだ！俺は舞台の上では手を抜くつもりはない！そう、キミが如何に想い人を待つジュリエットのように美しくても！」

「シームレスに口説こうとするのやめてもらえませんか？」

「ところで舞台から降りたあとの話なんだけど、一緒にお茶でもどう？」

「ストレートに口説けとも言っていないですよね」

帰っていいかな？

「くっ……かなりかわいいからって調子に乗りやがって！」

「急に三下みたいになりましたね」

「舞台に立ったら、こうはいかないぞ！こうなったら、俺は特別な指導はしないからな！どうしても言うなら、手取り足取り、隅から隅まで教えるけど！」

「勝手に吸収するので大丈夫です」

「自由だなっ!」

「七生さんの時も最初は放任主義というか、完全にほっとかれたので」

「え、マジ？ アイツ厳しくない？」

「ですよ。だからこそ、落とし甲斐があつたんですが……」

「落とし……え？」

「あ、なんでもないです」

おっと、口が滑った。

「まあ、いい！とにかく……キミの今日の演技、人呼んで『和製ジム・キャリアー』の俺が、しっかり見極めさせてもらおう！」

「あんまりじろじろ観ないでください。気持ち悪いので」  
「せめて観ることは許して……?」



公演終了後。

「え、エクスタシー……！」

亀太郎さんはわたしの前で膝をついていた。

はい。しっかりと吸収させて頂きました。

ごめんね、亀太郎さん。申し訳ないんだけどわたし、興味のない野郎の攻略パートに時間をかけるつもりなんてまったくないんだ……。しかも、最初から好感度の矢印こっちに向いてたし。ぶっちゃけ、七生さんみたいにツンツンしてた方が攻略する気が起きるし、とてもそそる。

そもそもの話、うっすらと男だったころの記憶が残っているせいで、男性に対して食指が動かないというか……景ちゃんの顔が良すぎて男にあんまり興味が湧かないというか……うん、なんかごめんなきいって感じである。

まあでも、脇役としてもコメディリリーフとしても亀太郎さんがとっても優秀な役者さんなのはよくわかったので、お茶くらいは付き合ってもあげてもいい。もちろん奢りで。

「そんなにしよげないでください」

「ユ」

「万宵です」

「ま、万宵さん……！」

「青太郎さんの演技、とても素晴らしかったですよ」

「名前交じってるよっ!?!」

あれ、そうでしたっけ？

「まあ、とにかく。お茶くらいなら一緒に一緒にしてもいいです」

「マジ!? ほんとに！ 奢るよ!」

「それは当然です」

「あ、じゃあサインも……」

「はいはい。いいですよ」

ここまでせがまれると断るわけにもいかない。わたしは苦笑いしながら、差し出された色紙とサインペンを手に取った。

「かつこよくてイケメンな亀太郎さんへ……って入れてもらえると、とてもうれしい」

「わかりました。一枚目には『呼吸禁止』って入れときます」

「まさかの罵倒付サイン……!?!」

サラサラと一枚目を書き終わり、二枚目に移ろうとしたその時、

「あ、結愛ちゃんいた」

マイフエイバリットエンジェル、景ちゃんがくせつ毛を揺らしながらひよつこりと現れた。

あ、景ちゃんだ〜

「……んん?」

景ちゃん!?

いや景ちゃん!?

どうして景ちゃんがここに!?

「けーいちちゃんっ!」

「あっ!?! ちよ! 色紙!?!」

サインペンとまだ何も書いてない色紙をほっぽりだして、わたしは景ちゃんの薄くて控えめな胸に飛び込んだ。

「なにになっ!?! どうしたの? わたしが恋しくなって迎えにきてくれたの!?!」

多分、ここに来たのはついさつきだろう。

わたしの舞台を観ていないことはわかっている。観客席に景ちゃんがいて、わたしが気がつかないはずがないからだ。ほんとは、一回くらい景ちゃんにもわたしの舞台を観に来てほしかったんだけど……でも景ちゃんだって忙しいし、わがままを言って困らせるわけにはいかない。

「それは違うけど、たまたまこのあたりまで来ていたの」

「そうなんだ!」

「うん。結愛ちゃん、最近すごく頑張ってるから」

「いやあ、それほどでもないよ」

と、後ろの亀太郎さんがわたしの肩をちよんちよんと叩く。

「もしもし、万宵さん。こちらの素敵な女の子は？ 俺にも紹介して

いただけるかな？」

「消えてください」

「今までで一番殺意高いな!？」

亀太郎さんのことは放っておいて、再び景ちゃんに向き直る。

というのも、景ちゃんの視線から、なんだか一言で形容しにくい、複雑な感情を受け取ったからだ。

「景ちゃん、何かあった？」

「……うん。実は私、結愛ちゃんに直接報告したいことがあって……」

「わたしに直接報告……？ おっけー！ 婚姻届だね。あ、でもごめん景ちゃん……わたし、今ハンコ持つてなくて」

「ちがうわ」

くっ……クールでちよつと呆れた感じでわたしを覗てくれるのが  
イイね。ひさびさだからゾクゾクするね。

「私、実はオーディションの最終審査を受けてきて……その時の演技  
でいろいろ失敗しちゃって」

あー、なるほど。おーけー、把握した。

景ちゃんのお芝居はやりすぎちゃうことが多いからね。多分、今回  
もそのパターンで落ちちやっただろう。うん、人生そういう時もある。

「大丈夫だよ、景ちゃん！ オーディションなんて受かる時もあるば  
落ちることもあるって!」

「ううん。オーディションは受かったの」

「受かったの!？」

なんだ！ それならいいじゃん！

今夜は祝杯をあげよう。お酒はまだダメだから、オレンジジュース  
あたりで。

「よかったね〜！ あ、ちなみに何のオーディション受けてきたの？」

最近、忙しいからゆっくり景ちゃんとお話してる時間なかったんだよね。ちようどいい機会だ。今日はたくさん景ちゃんの愚痴を聞いて甘やかしてあげよう。

さあ、景ちゃん……わたしの胸に飛び込んでおいで。

「百城千世子ちゃんが主演に決まっている、映画『デスアイランド』よ」

……はっ？

## 地雷原でタップダンスをする夜風景

「……あー、なるほど。つまり、幼馴染がこの前のコラボで険悪になった百城千世子と共演することになって。あんたはそれがすごく心配だ、と」

「そうなんだよ〜」

まるで溶けたアイスのように。テーブルの上に伸びて呻きながら、わたしは七生さんの言葉を肯定した。

場所は我が家。時刻は休日の昼。わたしは七生さんを自分の家に呼んで、この前景ちゃんから告げられた驚愕の事実について、七生さんに相談していた。

「まさかさ〜、まさかさあ〜。ひげのおじちゃんも、いきなりスターズの映画のオーディション受けさせるとは思わないじゃん？」

「ひげのおじちゃんって、黒山墨字だっけ？」

「そうだよー」

「まあ、有名な映画監督って大抵何考えてるかわからないし……：ていうか、オーディションについてその子から前もって何か聞いてなかったの？ どこの作品受ける、とか」

「だって最近、わたしめちやくちや忙しかったんだもん。そりゃ、映画のオーディションを受ける予定がある、とは聞いてたよ？ でもまさか……」

「それがスターズの。しかも百城千世子の映画だとは、思ってもいなかった、と」

「そういうことっ！」

七生さんとはすっかり仲良くなったので、敬語も抜けている。わたしは一応演技を教わっている立場にあたるので、敬語で接しようと思っていたのだけれど、七生さんの方から「敬語はいらない」と言ってくれたので、そのお言葉に甘えることにした。

「その子、スターズのオーディションには、一度落とされてるんだっけ？」

「ばつちり落とされてるよ〜。だから普通、受かるわけないって思う

じゃん？」

「でも、受かったと」

「がつつり受かってきちやったんだよね……」

もちろん、景ちゃんがオーディションに受かったことはとても嬉しい。すごく喜ばしい。でも、その主演が百城千世子となると、話が別だ。景ちゃんがわたしの親友であることを知られたら何をされるかわからないし、そもそもあの二人の演技の方向性が合うわけがない。絶対衝突するに決まっている。

「それにしても、コラボの配信で、あんたと百城千世子、結構仲良さそうに見えたけど……あれは表面上だけ仲良くしてたってわけ？」

「……あー、うん、いや、その、なんというか……演技の方向性が合わなかったっていうか、微妙に意見が食い違ったっていうか……まあ、そんな感じかな？ 百城さん本人は悪い人じゃないと思うよ。ただ、わたしとは致命的に相性が悪かったっていうか、水と油というか、光と闇というか……」

「誰とでも仲良くなりそうな結愛がそこまで言うなんて、ちよつと意外だね」

「うう……七生さーん」

「はいはい。泣くな泣くな」

わたしは顔を溶かす場所を、冷たいテーブルの上から七生さんの膝の上に切り替えた。

はあ……なんて素晴らしい包容力。これが年上の安心感ってやつなんだね。

「まあ、信じてあげるしかないんじゃない？ 結愛の親友ってことは、悪い子じゃないんでしよう？」

「うん……それはそうなんだけど」

「もしかしたら、意外と仲良くなつて帰ってくるかもよ？」

うーん。そうかな……？ そうかも？

いや、でもなあ……景ちゃんだしなあ……

悩むわたしの頭を撫でながら、七生さんの視線が時計の方向に向いた。

「結愛。そろそろ時間じゃない?」

「あ、ごめんごめん! 今準備するね!」

もう少し甘えていたいたい気分だったけど、ここは我慢して。PCと撮影用のカメラ、その他諸々を取り出す。

「じゃあ、今日はよろしくね。七生さん!」

「……私なんかが出てても、おもしろくないと思うけど……」

「そんなことないよ! きつと盛り上がるよ!」

本日の配信は、はじめて七生さんと呼んで行う雑談回だ。舞台の宣伝も兼ねているけど、正直百城さんのコラボ配信の時よりずっと楽しみだったし、なによりも気楽だった。

今頃、景ちゃんは映画の初顔合わせに行っているはずだ。

めちやくちや心配だけど、今はその気持ちを一旦心の中から締め出して。わたしは目の前の七生さんと配信に集中することにした。



同時刻。

釣り堀で、二人の男が糸を垂らしていた。

「順調みたいじゃねえか」

「おかげさまでな」

巖裕次郎の問いかけに、黒山墨字は至極つまらなそうに鼻を鳴らした。

「おたくの役者の演技を、ガンガン食ってぐんぐん成長してるよ。こわいくらいだね。世界の巖様々ですよ」

「背中が痒くなる世辞はいらねえよ。教えてんのは、うちの劇団の連中だ。俺はまだ直接会ってもいない」

「なんで会わないんだよ」

「いや、なに。ちよつと心の準備がな」

「は?」

「ごつちの話だ」

それよりも、と。

巖は黒山が持ち込んでいるPCの画面に目をやった。

『そんなわけで、次に出演させてもらうのはこの舞台です！ 今日来てくれた七生さんも出るから、みんなもよかったら是非きてね！』

『き、きてねー』

その中では、完璧なスマイルの結愛と、かなりひきつった笑みの七生が、揃って手を振っている。

結愛の配信である。舞台に立つようになってから、定期的に参加した劇団の宣伝や企画の告知をチャンネル上で行っている。最初こそ、ただの客寄せパンダのように思われていたが、実際の宣伝効果と結愛の演技が広まり、少しずつだが天球を通じて他の劇団からも出演のオファーがくるようになっていく。

チャンネル上での宣伝効果は、率直に言って絶大だった。

「こういう拡散効果ってやつも、馬鹿にできねえもんだな。正直、少し驚いた」

「やけに素直だな」

「認めざるを得ないだろうよ。最近の演劇は『閉じているコンテンツ』なんて言われるくらいだ」

観劇は内輪の循環だ、と。言われることがある。

舞台役者が友人に自分の舞台を勧めたり、バイト先で宣伝行為をすることは、決して珍しくない。それはイコールで、互いに課せられたチケットのノルマをクリアし合い、互いに作品を観に行くという閉じた循環に繋がる。結果、ライト層の客を取り入れられず、アマチュアの役者崩れ同士で舞台を消費し合う。

作品の種類にもよるが、舞台一本のチケットはどれだけ安くてもおおよそ二千から三千円。それだけの金を払えば、映画館で話題の作品を観ることができる。巖の言葉は映画監督の黒山から聞くと、多少の皮肉を孕んでいるように聞こえた。

「そういう時代なんですよ。ジジイにや、ちとツライか？」

「アホ抜かせ。俺はまだまだ現役だ。スマホはダメだったが、パソコンの使い方はウチのやつらから教わったぞ」

「最近の演劇の配信も増えてるからな」



「けつ。いろいろと思うところはがあるが……しかし、まあ、お前の言うとおりか。そういう時代なのかもしれないねえな」

年喰ったな、このジジイも。

やけに素直な巖の言葉に、黒山は思わず内心で呟いた。

「そういやあ、お前が前に言ってた『もう一人』の方は、何してんだ？」「心配しなくても、きっちりスターズの映画のオーディションに受かりましたよ。今日は顔合わせに行ってる」

「アリサのところの映画つうと……あれか。『百城千世子』が主演か」

「……勘、いいすね」

「アホ抜かせ。俺を誰だと思っていやがる」

「古い先短いジジイ」

「今ここでぶっ殺すぞ」

餌を変えて、巖は再び釣り針を水面に投げる。

「しかし、お前も随分と回りくどいことをするじゃねえか、黒山」「回りくどい？」

「そうだろう？ 万宵結愛と百城千世子は、本質が似たタイプの役者だ。ユアユアを『役者』とするならば、だけどな」

「本人達にそれを指摘したらキレるでしょうけどね」

「馬鹿言え。お前、コラボ配信で似たようなことしてただろ」

「あれは天使が自分から望んでやったことだつーの」

黒山の発言に、巖は少々意外そうに片眉を吊り上げ、喉を鳴らした。「くくつ……へえ。スターズの天使はアリサのお人形かと思ってたが、そうでもないか。自分が被ってる仮面を、自分の意思で磨き抜いている自負はあるわけだ」

「ていうか、あのコラボをセッティングしたのは、配信少女のバックにいる悪徳プロデューサーだ。俺が責められる理由はありませんね」

「そうかよ」

「そうだよ……おっと。きたきた」

大きめの獲物を釣り上げた黒山には目もくれず、巖は池の中を見る。

「お前が見出した夜風景とやらがどれほどの役者かは知らん。ただ、まあ……」

再び静かになった水面の下には、まだまだ巨大な獲物が潜んでいる。

「……荒れそうだな」

「でなきや、おもしろくないでしょうよ」

☆☆☆☆

同時刻。スターズ所有のビルの一室。

「……はあ」

映画の顔合わせ、といってもそれは形式上のものだったらしい。夜風景は、小さく溜息を吐いた。

通された応接室は、景の人生の中で一番と言ってもいいくらい、とても立派な部屋だった。壁には大きめの絵画が飾られ、部屋の中央には二十人以上が囲んで座れる大きな円形のテーブルが鎮座している。本来は、景達『オーディション組』と元から出演が決まっていた『スターズ組』が、向かい合って打ち合わせをする予定だったのだろう。

だが、十二人いるはずのスターズ俳優は、約束の時間を過ぎても誰一人として現れる気配がなかった。

「ごめんね皆！ せっかく時間通り顔合わせに来てもらったのに、うちの俳優がまだ一人も到着していないんだ。全員、多忙でね。もしかしたら一人も間に合わないかもしれないけど、ま……よくあることだし、気にしないでね。どうせ現場で会えるから」

サングラスが特徴的な手塚という監督はヘラヘラとした口調でそう言ったが、そんな説明で時間通りに来た人間が納得できるはずもない。むしろ、露骨に軽んじられていることがわかって、オーディション組の何人かは苛立った表情が顔に滲んでいた。

景はスターズ俳優の時間を守らないスタンスに、特に腹を立てているわけではなかったが、それでも残念なものは残念だった。

(今日は天使には会えないのかしら……)

「じゃ、台本を渡そうか。軽く読んでみるかい？」

最初から、お世辞にも良い雰囲気とは言えない部屋の空気の中に、

「ごめんなさい。遅れてしまつて」

大きく扉を開けて飛び込んできた『天使』の登場は、だからこそ劇的だった。

真っ白なワンピースに、黒のチョーカー。照明が当たっているように映える、白い肌。弛緩した部屋の空気が塗り替わり、全員の視線が彼女に集中する。

女優、百城千世子はそれが当然であるかのように、柔らかく微笑んだ。

「これでも、撮影急いで巻いたんだけど」

ぐるり、と室内を見回して、一言。たったそれだけの動作で、何人かが息を飲む。

「私以外、誰も来てないじゃん、スターズ。こんな日に顔合わせなんてしたらダメだよ、カントク」

「ま、ぶっちゃけ顔合わせなんてしなくても、作品に影響ないからね」  
「いや、大アリだよ！ 第一、みんなに失礼だよ、これじゃ」

ここに居るのは、監督である手塚を除いて、全員が役者。今、最も名が売れている女優を前に抱く感情は、様々だった。

源真咲は、耳に心地のいいことを言って結局重役出勤じゃないか……と、反感を抱いた。

湯島茜は、磨き抜かれたその美貌に、釘付けになって見入っていた。  
烏山武光は、その一挙手一投足から、売れている役者の個性を感じ取っていた。

「改めまして、遅れてごめんなさい。百城千世子です。よろしく願いします」

そして、夜風景は、

「はじめまして、夜風景です！ よろしくお願いします！」

目にも止まらぬ速さで椅子から立ち上がり、接近し、千世子の両手

を握っていた。

ぽかん、と。それまで天使一色に染まっていた全員の視線が、唐突な奇行に吸い寄せられる。

「え、と……？」

「夜風景、高校二年生です！ 職業は役者！」

「あ、うん。ここに居る人は、みんな役者だからね」

「と、得意なことは運動と料理！ 運動は短距離走とか走り幅跳びが得意で、チームでやるのはちよつと苦手で……あ、得意料理は和食なんだけど、弟と妹がいるから洋食も作れます！」

「へえ、すごいね」

「今日も筑前煮を作って持ってきたの！ よかったらお近づきの印に……」

「あはは、ありがとう」

千世子は笑って受け流していたが、他の人間はそうではない、

ドン引きである。特に、オーディションで景と一緒にだった三人……

真咲、茜、武光は、慌てて顔を突き合わせた。

「おいおいおい。どうなってんだ夜風のやつ。まるつきり距離感つてもんが掴めてないだろ。なんだアレ。こえーよ。初対面で筑前煮押しつけてくるやつ、こえーよ」

小声で真咲がそう言うのと、

「ふつーに百城さんのファンなんやろ。あと、あの子友達いなさそうやし、舞い上がってるんとちやうか？」

オーディションで景と揉めた茜が関西弁で冷たく突き放し、

「いや、昔からの幼馴染がいると聞いたぞ！ 友人がゼロということはないはずだ！」

武光が少し的外れなフォローを入れる。

三人に好き勝手に言われている景は、そんなことを気にする余裕はない。はじめて会う天使を前に仲良くなるろうと必死で、頭の中はパンク寸前だった。

(どうしよう……お土産、筑前煮だけじゃ少なかつたかしら)

景は友達が少ない。というか、結愛以外に友達と呼べる友達がいな

い。ストレートに言えば、わりとコミュ障である。

なので、ここに来る前から考えていた自己紹介のセリフを、景はそのまま言った。

「あ、あとね！ 私、千世子ちゃんがコラボした結愛ちゃんと友達なの！」

ピクリ、と。

それまで当たり障りのない笑顔を維持していた千世子の頬が、ほんの僅かに跳ねた。

「ああ、そっか……夜風さん、K子ちゃんだもんね。万宵さんと友達なんだ」

「そ、そうなの！ 大親友！ 一番の友達と言ってもいいくらい！ 結愛ちゃんとは小さい頃からお隣さんで……」

なんとなく、天使の雰囲気が変わったことは、景にもわかった。けれど、千世子がはじめてまともな反応を示してくれたことに安堵して、さらに口走ってしまった。

大親友、と。

「夜風さんは、万宵さんのこと……好き？」

「もちろん、大好きよ！」

「そっか。奇遇だね」

天使は嗤う。

「私も、万宵さんのこと……好きだったよ」

## 天使の仮面、悪魔の仮面

夜風景という少女は、ちよつと空気が読めないところがあるコミュニケーション障がールだったが、決して鈍いわけではない。

だから、その一言で目の前の天使の雰囲気は明確に変化したことを理解した。

「好き……だった？」

過去形。

今も結愛のことが『好き』であるのなら「好きだよ」と言えばいい。しかし、千世子は過去形で自身の感情を語った。それはつまり……

「今は結愛ちゃんのことを大好きになったってことね!? うれしいわ！」

スターズの天使が。

あの百城千世子が。

ものすごくなんとも言えない微妙な表情で、曖昧に沈黙した。

繰り返しになるが、夜風景という少女は、ちよつと空気が読めないところがあるコミュニケーション障がールである。ついでに訂正しておく、少し鈍いところもあるのかもしれない。

地雷を真正面から踏み抜いてスキップしていく強引なコミュニケーションで、景は全てを解決しようとしていた。あつげに取られていた千世子が、ようやく口を開く。

「……夜風さんは、万宵さんのことが好きなんだね？」

「ええ、大好きよ」

景は即答した。

「結愛ちゃんは美人だしかわいいし、私と違って愛嬌もあるし、誰からも好かれるすごい子なの。運動神経も私と同じくらい……ううん、チームスポーツなんかは結愛ちゃんの方がずっと得意だわ。あ、そうそう！ ゲームも大好きですごく上手！ 修学旅行のババ抜きとかで負けたところ、見たことがないくらい！ 根が優しいから、人の

気持ちをいつも第一に考えてくれるのね。昔からずっと一緒にいてくれて、私が困った時はいつだって助けてくれる大親友よ！」  
長い。

さすが役者というべきか、景は一度もつつかえることなく滑らかに結愛の魅力を語りつくす。しかしあまりにもそれが滑らかで澱みなかったもので、ただでさえ引いていた他の共演者達が、さらにドン引いた。

「…………ふーん」

唯一、百城千世子だけが、景の親友のプレゼンを真顔と言つてもいい色のない表情で聞いていた。

「夜風さんは、どうして私に興味をもってくれたの？ やっぱり、私が親友の万宵さんと配信でコラボしたから？」

「それもあるけど…………」

今、最も売れている女優が「どうして私に興味を持ってくれたんですか？」と、問う矛盾。けれど、景は物怖じすることなく千世子の質問に答えた。

「テレビで観たあなたも、今日の前にいるあなたも、とても綺麗で…………」

もちろん、知っている。

百城千世子は、画面の前でその様に演じているからだ。それはいい。それは許せる。

「なのに、どちらのあなたも顔が視えないから」

ただ、

「人間じゃないみたいだなんて」

あの悪魔を賛美するその口で、人間じゃない、と。

はつきり告げられた言葉が、千世子の心の琴線をぐちゃぐちゃにかき乱した。

(…………あー、ダメだ)

あの日から、ずっと。思い出さないようにしていたのに。

瞬間、フラツシユバックしたのは、あの時、あの瞬間の結愛の表情だった。

——でも、わたしは天使じゃなくていいから

自分とは比較にもならないような、暗く、深く、厚く上塗りされた仮面。絶対に勝てないと悟ってしまった、傲慢な横顔。

アレを。

よりにもよって、アレを好きだと朗らかな笑顔で言いながら。この子は、私を人間じゃないみたい、と言うのか？

抑えきれない気持ちだが、千世子の中でふつふつと煮立った。

「おもしろいことを言うね」

今度は、千世子が景を引き寄せる番だった。

否、正確に言えば引き寄せたわけではなかった。掴まれた手を振りほどいた千世子は、細くしなやかな手のひらを広げて景の胸に当て、軽く押した。

「え？」

とん、と。見た目の長身よりも軽い景の体がぐらついて、床に柔らかく尻餅をつく。

「夜風さん。あなたの芝居、私も見たよ」

千世子は膝を折った。今度は、自分から景に近づいた。舐めるように顔を近づけて、景だけに聞こえるように声の音量を絞った。

それはさながら、獲物を補食する昆虫のような所作だった。

「大丈夫。あなたの芝居はちゃんと人間だったよ。私や万宵さんと違って」

きれいな瞳が、困惑でいっぱいに見開かれる。

「結愛ちゃんと同じって……それって、どういう」

「もちろん、言葉通りの意味だよ」

鈍いなあ、と千世子は苛立った。でも、その苛立ちは景への苛立ちではない。不甲斐ない自分自身を対象にした、空へ向かって吐き捨てた唾が返ってくるような、原始的な自己嫌悪だ。



芝居とは、仮面を被るもの。だから千世子は、己が被る仮面をずっと磨き続けてきた。

しかし、いくら天使という仮面を被っていても、観客に見破られてしまえば、もう天使ではいられない。出来の悪い仮面をおどけて被って踊ってみせるのは、ただの道化でしかない。

夜風景という少女は、万宵結愛という仮面の、その美しさと精巧さの証明だった。

結愛は、千世子と同じ種類の仮面を被っている。完璧に完成された仮面を被り続けながら、おそらく最も長く隣にいたであろう幼馴染に、その偽りを気づかれもしていない。

また、思い知らされた気がした。

百城千世子の顔は視えない。

万宵結愛の顔は観える。

単純な話。それが目の前で千世子を見つめる少女の答えであり、覆りようのない事実だった。

だから、苛立つ。

だから、抑えきれない。

「私の仮面に興味を持つ暇があるなら……大好きな親友の仮面を先に剥がした方がいいんじゃない？」

ああ。

きっと、今の自分の横顔は、天使ですらない。



顔合わせは終了した。

景はすぐに帰らず、なんとなくビルの前で空を見上げていた。

「……はあ」

元々、オーディションの結果に、景は満足していなかった。

オーディションの内容は、他の共演者、景自身を含めて四人で行う形の即興劇。無人島に漂着した場面からスタートし、『制限時間五分以内に四人が殺し合いを始めるように演じる』ことが課題だった。自

分一人では決して成立しない、周りの役者と協力しなければできない演技。奇しくもそれは、演劇で己の課題と向き合う結愛と似た境遇だった。

そして、景は失敗した。独りよがりな芝居で他の役者をかき回し、困惑させて、

——人の気持ちが変わらんなら、役者なんてやめてしまえ！

温厚に、優しく接してくれていた湯島茜のそんな一喝で、景のオーディションは終わった。

結果的に、共演した真咲、武光、茜の三人は全員合格だった。もちろん、景も合格だった。だが、茜に言われたあの言葉は、心の深い部分に突き刺さったまま、まだ抜けていない。

「結愛ちゃんなら……」

まるで、心が見えているかのように思いやりが深い、自分の親友なら。きつと人の気持ちが変わらない、なんて言われなかっただろう。事実、結愛は黒山から紹介してもらった舞台の仕事を着々とこなし、確実にスキルアップしている。それだけではない。舞台で共演した他の役者と仲良くなつて、一緒に配信動画を撮影するほどに交友の輪を広げている。今日、配信をするから帰ってきたら景ちゃんにも紹介するね、と。結愛は笑顔で言っていた。

景は、人の気持ちがよくわからない。わからないせいで、あの百城千世子を怒らせてしまった。ただ、あの苛立ちは……仮面の間から垣間見えた怒りは、自分だけに向けられたものではないように思えた。

なによりも、天使が言ったあの言葉。

「……結愛ちゃんの、仮面」

あなたの隣にいる親友も、仮面を被っているよ、と。つまるところ、千世子はそう言っていた。

今まで、考えたこともなかった。結愛が、そんな仮面を被っているなんて、想像すらしたことがなかった。でも、もし本当に千世子が言う通り、結愛が仮面を被っているとしたら、

「私は、結愛ちゃんに無理をさせている……?」

人の気持ちが変わらないせいで、心の負担を親友に強いてしまつて

いるのではないか？

眩きに、誰かが答えてくれるわけではない。答えをくれるわけではない。

「けーいちゃーん！」

どこまでも沈み込んでいきそうな気持ちを、すくいあげてくれたのは、やはり親友の明るい声だった。

「え？ 結愛ちゃん？」

「そうだよ！ わたしだよっ！」

万宵結愛である。

顔を上げた瞬間、綺麗なフォームで猛ダツシュしてくるゆるふわの茶髪が、視界いっぱい飛び込んだ。

「どうしてここに……？」

「前は景ちゃんが迎えに来てくれたから、今日はわたしの方から迎えにきちやっただ！」

「でも今日、舞台の人と配信するって……」

「もちろん景ちゃんのためになるはやで終わらせてきたに決まってるじゃん！ あ、七生さんはウチで待ってるから、今日はご飯一緒に食べようよ！ 紹介したいし！」

「それはいいけど……」

あれ、と。結愛が首を傾げる。

「景ちゃん、元気ないね。何かあった？」

どきり、と。心臓が跳ねた。

なんでもない。もしも他の人間に聞かれていたならば、そんな風に答えて適当に誤魔化していただろう。だが、目の前の親友に？は吐けないし……そもそも、？を吐いたこともない。

だから、景は言った。

「うん。ちよっと、共演者の人とあんまりうまくいなくて」

一瞬。会話の間というほどでもない、本当に一瞬。結愛の髪色と同じ瞳がうつすらと細められた。その視線に、景は体を固くしてしま

う。

明るくて、朗らかで、陽だまりのような親友が……時々、氷のように冷たくなる刹那。今まではただの気のせいだと思っていたそれが、今日は嫌に長く感じられて。

「……あー、わかるよ。そういうこともあるよね！ 大丈夫！ わたしも七生さんと最初から仲良かったわけじゃないし！ 愚痴は家で聞くから、はやく帰ろ！」

いつものように差し出された手を取ることを、景は一瞬躊躇した。結愛の顔を、みる。

ずっと昔から知っている、やさしい笑顔。ずっと見てきた、親友の笑顔。

そうだ。決して観ているわけでない。ずっと信じてきた親友の横顔が、仮面であるはずがない。

「……うん。帰りましょう」

繋いだ手の変わらない温かさに、景は安心した。

★★★

嫌な予感というものは、外れてほしい時ほどいつも当たってしまうものだ。

百城千世子。

わたしの景ちゃんに、何を言った？

## 万宵結愛、死す

映画『デスアイランド』のあらすじを説明しよう。

修学旅行に向かう途中、24名の生徒を乗せた飛行機が嵐に遭い、墜落してしまう。無人島の浜辺で目を覚ました12名の生徒の傍らには、海に流されたはずのスマートフォンがあった。その中には、謎のアプリ『デスアイランド』がインストールされていた。定期的に発せられる奇妙な指令。行方知れずとなった残り12名の生徒達。絶海の孤島で、クラスメイト達の命を賭けたデスゲームが始まる……！

まあ、大まかにこんな感じである。よくも悪くも最近流行りの、王道デスゲームものつて感じのマンガだ。ただ、あらすじはありがちでもストーリーそのものは結構おもしろく、特に三巻からの展開はヤバい。わたしは主人公のカレンが好きだったので、今回の実写化は正直複雑な気持ちだ、べつに百城さんが嫌いとかそういうわけじゃないし、主演である以上百城さんは完璧に『カレン』を演じるんだらうけど。なんだかなあ……つて感じである。もちろん、景ちゃんの記念すべき初出演映画だし、公開されたら三回観に行つてブルーレイも買うつもりなんですけどね。

### 閑話休題。

わたしにとってなによりも重要だったのは、撮影期間と場所だ。南の島で一カ月の撮影。その間、わたしは当然景ちゃんと会えないわけで、物理的に離れ離れになってしまう。

ぶっちゃけつらい。

めっちゃくちやつらい。

この世の地獄か？ つていうくらいつらい。

一カ月も景ちゃんと会えないなんて、わたしにとって拷問以外の何ものでもない。いやもうマジで吐きそう。想像しただけで無理。

とはいえ、これから一人で撮影に向かう景ちゃんに、余計な心配をかけるわけにはいかない。

「結愛ちゃん、本当に大丈夫？」

「大丈夫大丈夫！ 安心して！ ルイさんとレイちゃんの話は、わたしが責任を持ってお預かりするから！」

景ちゃんがいない以上、ルイさんとレイちゃんの面倒を見るのはわたしの役目だ。あと、ひげのおじちゃんと雪さんも手伝ってくれるという話だったので、そこに関しては特に問題はなさそうさ。

「結愛ちゃん」

「ん？」

「私、がんばるから」

景ちゃんの『がんばる』という言葉には、主語がなかったけれど。その裏にはたしかな決意が滲んでいて。

だったらわたしも、親友として笑顔で送り出してあげるしかないだろう。

「うん。気をつけてね」

よーし！

一カ月間。

景ちゃんががんばっている間、わたしも負けないようにがんばろう

！



結論から言えば、万宵結愛は一週間で限界を迎えた。

スタジオ大黒天、美人制作の柊雪は困惑していた。

「墨字さん……なんでですかアレ」

「知らん。俺に聞くな」

雪が指さした先には美少女……否、美少女だったモノが、精も魂も尽き果てた状態で机に突っ伏していた。仕事から帰ってきたと思ったら、まるで電池が切れたように事務所の隅ですみっこぐらしをはじめめたのだ。

結愛の姿は、それはもうひどいものだった。

いつも艶やかな輝きを保っていた茶髪はうつすらとくすんでいて、ゆるくかかったウェーブは少女の柔らかな印象を形作っていたはず

が、今ではあちこちから飛び出している枝毛で明らかにイメージを損なっている。

「ああ……ううう……ああ」

セーラーの制服姿のまま、ぐったりと不気味な呻き声をあげる少女の様子は、人間というよりもはや獣に近い。

「うう……景ちゃん、景ちゃん景ちゃん景ちゃん……景ちゃん景ちゃん」

いや、怨霊と言ってもいい。

うわ言のように名前を呟く声は、最近舞台で鍛えられているためか、妙な迫力と背中を撫でられるような質感を伴っている。そこらへんのホラー映画が裸足で逃げ出すような不気味さで満ちていた。

雪は顔を青くしながら、黒山の袖を引く。

「ちよつと墨字さん。どうするのアレ。完全にダメでしょアレ。けいちちゃんに会えない寂しさで、理性がぶっ壊れちゃってるよ」

「どうもこうも仕方ないだろ。俺も、まさか配信少女の夜風好きがここまで重症だとは思ってなかったんだよ」

最初の数日は、まだよかった。

結愛もスタジオ大黒天の事務所に泊まり込んで、レイやルイと楽しく過ごし、何事もなく舞台の仕事に行っていた。それが段々と、明らかにぼーつとする時間が増えていき、四日目の朝には「景ちゃんのお味噌汁が飲みたい」と呟き始め、五日目の昼には景の写真を暇さえあれば眺めるようになり、六日目の夜には一晩中「景ちゃん景ちゃん景ちゃん景ちゃん……」と寝言が止まらなくなり雪の安眠を大いに妨害し、そして七日目の今朝は「あれ？ 景ちゃんがいらないよ？ 景ちゃんはどこ？」とうわ言をほざきはじめていたので、雪が尻を蹴って事務所から送り出した。

「ただいま〜」

「ただいまー！ あ！ ゆあねーちゃん、やっぱりしよげてる〜」

帰ってきたレイとルイは、やれやれといった様子で顔を見合わせた。

「さみしがりやさんね！ ゆあねーちゃん、おいで〜」

「うう……！ 二人とも……わたしを、わたしを癒やして〜！」

「しょうがないわね〜」

「ね〜、しょうがないね〜」

机から顔をあげた結愛は、そのまま恥も外聞もなく小学生二人の胸に飛び込んだ。

今では、結愛がレイやルイの面倒を見るのではなく、結愛の方がレイやルイに面倒を見られている始末である。

「はあ……景ちゃんのDNAを感じる……落ち着く」

二人に抱きついて大きく深呼吸をし、精神安定を図る美少女の姿に、雪はどん引きした。

「墨字さん墨字さん。あれヤバイよ絶対。友情を超えた何か二人の中にはあるよ。絶対普通じゃないよ」

「役者のそういう趣味が倒錯しているのはある意味普通だろ」

「言い方アー！」

とはいえ、このまま放置しておくわけにもいかない。

黒山は身を乗り出して、双子を抱きしめて精神安定剤代わりにしている結愛に声をかけた。

「おい、配信少女。お前、どんな手を使ってもいいからその状態なんとかしろ」

「その状態って？」

「だから、夜風に会えなくて寂しくて何にも手がつかない、自分のそのコンディションをなんとかしろって言ってるんだよ」

「え……？ おじちゃん、なんでわたしが景ちゃんが会えなくて寂しくて仕方がなくて死にそうだったってわかったの!?!」

「おい終。鏡もってこい。なるべくデカいやつ」

本当に、予想以上に重症である。

昔からの幼馴染だとは聞いていたが、まさかここまで結愛の景に対する依存が大きいとは。発言の節々や普段の関係性を見る限り、景が結愛に甘えているものだと思っていたが……むしろこの様子を見る限り、どうやら逆だったらしい。

「お前、来週はたしかスケジュール空くだろ？」

配信やるかどうかは



自由だが、とりあえず芝居の方は少し休めよ。気分転換してこい。行きたい場所があるなら、車くらいは出してやる」

「車出すとかパパ活みたいですね墨字さん」

「ぶつとばすぞ柊」

結愛はしばらくきよとん、とした様子で黒山の話を聞いていたが、レイとルイを抱きしめたまま器用にスケジュール表を開き、そして頷いた。

「ん……わかった」

そして、数日後。

「おじちゃん。車出してもらっていい?」

「おう。柊、ちびどもの世話頼むぞ」

「はい」

結愛を乗せて、黒山は事務所のワゴンのハンドルを握った。

「それで、どこまで送って行きやいいんだ? 映画館とかか?」

「景ちゃんが一緒じゃないと、映画観ても楽しくないよ」

「お前なあ……」

「この住所までお願い」

「ん? ああ、わかった」

結愛が示した住所を、カーナビに入力する。どんな場所か確かめようかとも思ったが、今日の目的は気分転換だ。本人の行きたい場所に連れて行ってやればいいか、と黒山は運転に集中することにした。

そして、運転に集中して行き先の詳細を聞かなかったことを、すぐに深く後悔した。なぜなら、到着したビルの前で、顔を合わせたくない男が笑顔で待っていたからだ。

「……天知」

「やあ、黒山」

プロデューサー、天知心一は車から降りた黒山と結愛を、両手を広げて出迎えた。

「なんでお前が出てくるんだよ? 俺は仕事以外でお前と顔は合わせ

たかないんだが」

「それに関しては、私も同意見だ。しかし、今日は彼女の方から私に『お願い』をしてきたものでね。とても嬉しくなったから、直接出迎えてしまったんだよ」

「配信少女が？」

真偽を確かめるために顔色を伺ってみると、結愛は意外なほどあっさり頷いた。どうやら、天知が言っていることは？ではないらしい。

「さあ、こちらへどうぞ」

天知に連れられて、ビルの中に入る。屋上まで直通のエレベーターに乗り込むと、すぐに扉がしまった。

「一体どこに連れて行く気だ？」

「べつに、君を呼んだつもりはないのだけどね。まあ、途中までならいいだろう」

「途中まで？」

答えを聞く前に、エレベーターが屋上に到着する。

都内の、それも高層ビルの屋上なだけあって眺めはとてもよかったが、特に何があるわけでもない。何の変哲もない殺風景なビルの屋上だった。

「それにしても……困るよ黒山。預けた役者のケアはきちんとしてもらわないと」

「あ？ちゃんとケアしてるだろうが。こうして休日に車まで出してやってんだぞ」

「君は毎日が休日のようなものだろう？そもそも、車を一台出した程度で胸を張ってほしくないね」

天知がそう言った瞬間、轟く爆音が黒山の耳に入った。

最初は上空を通り過ぎるだけだと思っていたその音は、しかし次第に圧力を増し……強烈なダウンウオッシュを伴って、結愛の長い髪を揺らした。黒山のひげは揺れるほど長くないので、特に揺れなかった。

「……は？」

空中に滞空した『それ』は、ゆっくりと降下してくる。普段、乗る

機会がない『それ』の登場に、驚くなどという方が無理な話だった。

しかし、一流のビジネスマンであり、金の亡者であり、そして自分の見いだした原石を磨くために、金には糸目をつけない男……天知心一は、平然と言いつ切る。

「こちらは、ヘリを一機チャーターしたんだ。車一台とは比較にもならないだろう？」

呆然と立ち尽くす黒山に対して、結愛は間近に降りてきたヘリに、数日ぶりに目を輝かせ、ぴよんぴよんと飛び跳ねた。

「プロデューサー、すごい！ほんとに用意してくれたんだ!？」

「もちろんですよ。あなたの『お願い』を、私が無下にするわけがないでしょう?。」

やはりいつものように、天知は胡散臭い笑みを顔いっぱい貼り付ける。

「これで、南の島だろうとどこだろうと、あなたの望み通り……夜風景に、すぐに会いに行けますよ」

「うん！ありがとうございます！景ちゃん島まで、これでひとつ飛びだよ！」

黒山は思った。

——いや、アホかコイツら。

## 東京上空実況配信

巖裕次郎は、二人の劇団員を前にして、彫りの深い顔の皺をより一層深くしていた。

「どういうことか説明しろ。亀、七生」

巖の怒りの原因は単純だ。

三坂七生と青田亀太郎は、結愛からサインをもらえた。しかし、巖は未だにサインをもらえていない。ただそれだけのことである。

「ち、違うんだよ巖さん！」

両手を顔の前で振って、七生は言う。

「なんか、サインって意外と貰うタイミングがないっていうか、なんていうか……」

「安い芝居はよせ。俺が配信みてねえとでも思ったのか。お前、ユアユアと最近仲良いだろ」

「……う」

「しかも、元々俺が頼んでいたサインを勝手に自分のものにしやがって」

「それはその……今さら頼むのは恥ずかしいっていうか、なんていうか」

実は結愛と喋るのが楽しすぎて、巖の分のサインを貰うことなんてすっかり忘れていた……とは、口が裂けても言えない七生である。相方が困っている様子を感じ取って、亀太郎が助け舟を出した。

「まあまあ、巖さん。そんなに七生を責めないでやってよ」

「べつに責めてはいねえ」

「サインなら今度会った時、俺が貰ってきてあげるって」

「おめーが貰ってくるサインには、もれなく罵倒がついてくるじゃねえか」

「え？…(褒美でしょ?)」

「ぶっとばすぞ」

亀太郎がもらってくるサインには『存在が四枚目』だの『呼吸禁止』だの、よくわからない罵倒が書き連ねられているのが常だった。巖は

結愛のサインが欲しかったが、べつに結愛の罵倒が欲しいわけではない。罵倒されてエクスタシーを感じるのは目の前の馬鹿だけで充分である。

「……おっと。ユアユアの配信がはじまる時間じゃねえか。おい、亀。パソコンつける、パソコン」

「もー、使い方教えたんだから自分で準備すればいいでしょ巖さん」  
ぶつくさと文句を言いつつも、亀太郎は巖のパソコンを柵から持つてきて、手際よく視聴の準備を整えた。亀太郎はそのまま、当たり前のように巖の右隣に座り、七生もそれに倣って左隣にちよこんと座る。

「……なにしてんだ、お前ら?」

「え? 配信を観る準備だけ?」

「巖さんのPC、ノートだけどモニター大きいしキレイだし。スマホで観るよりこっちの方が絶対いいじゃん」

「俺はこれからユアユアの配信を観るのに忙しいんだよ。帰れ」  
「だから俺たちも観るんだってば!」

ギヤーギヤーと騒いでる内に、どうやら配信の準備が整ったらしい。待機中だった画面に、もはやお馴染みとなったかわいらしい顔と……なにやら狭苦しい、どこかの機内のような背景が映り込んだ。

「え? なにこれ?」

「いつもの部屋じゃないな」

七生と亀太郎が疑問を口にした瞬間、まるでそれを予期していたかのように、衝撃の解答が結愛の口から飛び出した。

『はーい、みんな、こんにちはー! ちゃんと聞こえてるかな? わたしは今、東京の上空にいます』

「はっ」

あっけにとられる七生と亀太郎を尻目に、巖はニヤリと笑った。

「そうか……遂に羽ばたいたか、ユアユア」



ヘリコプター搭乗後。

しばらく外の景色にはしゃいでいたわたしは、改めて座席に腰を落ち着けた。

「……非常に不本意ながら、お礼を言わせてもらおうよ」

このままでは、身体と精神が保たない。そう判断したわたしは、こうして最終手段に頼ることにしたわけだけど……実際、プロデューサーは100点満点に近い解答を持ってきてくれたわけで。

「ありがとう。プロデューサー」

きちんと頭を下げて謝意を述べると、対面の座席に座るプロデューサーは、ニコリと微笑んだ。

「気にしなくて結構ですよ。私の移動のついでのようなものです。それにしても、いやはや、なんともはや……あなたが夜風景に執着していることは、それはもう十分に理解しているつもりでしたが……まさかここまで重症だったとは」

「執着じゃないし。美しい友情だし」

「随分、重い友情があったものです」

「うるさいなあ。プロデューサーはどうせ友達いないから、わたしの気持ちなんてわかんないよ」

「ふふ。あなたがそれを言いますか」

人の気持ちができるわたしが、駄々っ子のテンプレである「どうせわたしの気持ちなんて」構文を使ったのが、随分ツボに入ったらしい。プロデューサーはひとしきりくつくつと笑った後、そのままのトーンで言葉を繋いだ。

「しかし、友達がいらない、と思われているのは悲しいですね。私の顔の広さをご存知でしょう？ 友情はビジネスにおいても重要です。時には情に訴えかけることで成り立つ商談もありますからね。私が最も大切にしているのは……」

「人の心、でしょ？」

ぐだぐだと持論を垂れ流される前に、先んじて頭を抑える。

「だからまあ、こうして『わたしの心』を大切にしてくれたのは、感謝してるよ」

「ええ、ええ。もちろんですとも。しかし実際に、ヘリをチャーターして飛ばすのにも、金がかかるのは事実です」

「……それは、つまり？」

「ビジネスチャンスは常に見逃してはならない、ということですよ」

「がさごそ、と配信用の機材一式を取り出し始めたプロデューサーに、思わずため息をつく。いや、そりゃもちろん、ただでわたしのためにヘリコプターを飛ばしてくれるわけがないとは思っていたけれど……なんというか、本当に抜け目がないプロデューサーである。」

「東京上空、ヘリコプターからの実況配信なんて、またとない良い機会でしょう？ 事前に、配信の告知を出しておきました。盛り上がるように、適当にトークしてください。タイミングを見て外の風景も、もう一台のカメラで映せるようにしておいたので、うまく使ってくださいね」

「準備いいなあ。わたしの行き先とかは、言っちゃっていいの？」

「それは最後に告知しましょうか。デスアイランドの制作側とも、既に話をつけています。島に着いたあと、あなたには宣伝用のインタビューなどをしてもらう予定です。きちんとしたお仕事ですので……よろしくお願いしますよっ」

「よ、用意周到過ぎる……え？ ていうか、もしかしてわたしが景ちゃんに会いたって、お願いするの予想してた？」

「あなたのマネージャーですから」

「うわあ……すごく有り難いけど、なんかそのドヤ顔腹立つ。」

でも、景ちゃんに会うことができ、ついでに仕事もできるなら一石二鳥だ。あくまでも景ちゃんが本命で、仕事はオマケである。これ大事。

「……それにしても、よくスターズの映画の宣伝に、わたしを捻じ込んだね？ 百城さんはもちろんだけど、アリサ社長からの覚えもさぞ悪いでしょ？ わたしたち」

「百城千世子と揉めたあなたはともかく、何故、私が一括りにされてい

るのかは理解に苦しみますが」

「うん。その胸に手え当てて考えてみよつか？」

「いろいろと、やり様はあるということですよ。巨大な組織が一枚岩ではないように、映画という企画も一枚岩では成り立ちません。様々な人物の、様々な思惑が重なり合って、進行していくものです」

プロデューサーの、その物の言い様は「隙さえあればそれを崩すのは容易い」と、巨大な何かを小馬鹿にしているように聞こえた。

「もちろん。今回の仕事が取れたのは、あなたの知名度と人気の上昇あつてこそ。これは、胸を張って喜んで良いことですよ」

「そりやどうも」

まったく嬉しくないお世辞を受取りながら、わたしはマイクをつけて手鏡を開いた。前髪などを少し整える。わたしのお肌や髪の色艶はよほどメンタルに左右されるのか、景ちゃんに会える嬉しさですっかり回復している。それに急遽の配信とはいえ、元々景ちゃんに会う予定で身嗜みは整えてきたので問題はない。

「いつでもいいよ」

「では、はじめましょう」

「さん、に、いち……」

『はい、みんな、こんにちはい！　ちゃんと聞こえてるかな？　わたしは今、東京の上空にいます』

開始早々、困惑……というよりも「は？」みたいな感情の嵐が渦巻いた。いや、うん。そりやそうだよ。いつもみたいにゲリラの雑談配信かと思ったら、急に空飛んでるんだもんね。誰だつてびっくりするよ。

「今日はお仕事の都合でなんと！　ヘリコプターに乗っちゃってます！　いえーい」

『ユアユアが飛んだ!?』『飛んだ！　ユアユアが飛んだ!』『コイツ……飛ぶぞ!』『何事かと飛んで来たら、マジで飛んでて草』『うまくねえよ』『最近演劇関連の配信多いと思ったら、急にぶっこんできて草』『冷



静に考えて東京上空から配信するのすごくないか?』『ユアユア!

ユアユアがなぜ空に!?!』『まさか、自力で脱出を!?!』『おれたちの応援で空を飛ぶゆあゆあ』『天空のゆあゆあ』『そのまま天空から俺たちを見下ろしてほしい』

なんか気持ち悪いコメント混じってるな……まあ、いいや。

「ふっふっふ。みんな驚いてるみたいだね。今日はいい天気だから、すっごくいい眺めだよ! 上空からみた東京の街を、みんなにもおすそ分けするね!」

ちらりとプロデューサーに目をやって、カメラの画像を切り替えてもらう。

『あら、いい景色』『ほんとに飛んでて草』『マジでへりからの映像じゃん』『ゆあゆあ、舞台やったり空飛んだり忙しいな』『最近がんばってるけど、無理しないでね』

やさしいコメントに、胸がじーんとなる。

「ありがとう! でも、わたしは元気だから大丈夫! むしろ、へりコプターに乗れていい気分転換! リフレッシュって感じ!」

『そういえばこれ、どっか向かってるの?』

おっと。早速鋭いコメントがきたね。

予定ではもう少し引つ張って最後に告知するつもりだったけど、コメントを無視するのもちよっと感じが悪い。他の視聴者さんからも『疑問』の感情が刺さってくるし、気になる人が多いのだろう。

またプロデューサーに目配せすると、仕方ない、と言った様子で肩をすくめられた。なんだかんだ、配信中の裁量はわたしに委ねてくれるのがプロデューサーだ。

「そうだねー。ほんとはもうちよっと引つ張るつもりだったけど……目的地をお教えしましょう! わたしは今、映画『デスアイランド』のロケ地に向かつてるよー!」



ロケの開始から一週間と四日が過ぎた。

景は撮影にも慣れ、オーディションで仲違いした茜とも仲直りして、概ね順調にはじめての映画撮影を楽しく過ごしていた。ただ一つ、問題があるとすれば、それは百城千世子と全然仲良くなれていないことだけである。

(まずいわ……千世子ちゃんと仲良くなるどころか、まともに喋れてすらいないわ)

コミュ障の本領発揮、とでも言うべきか。友達になる以前に、まともな雑談の一つもできていない現状に、景は焦っていた。

いや、べつにまだ焦る必要はない。撮影がはじまって一週間経っただけだ。最初のうちは撮影に慣れる必要があったし、ゲロを吐いたり滝に飛び込んだり、いろいろな大変だった。

(そうよ……今まではちよつと忙しかっただけ。チャンスはまだ全然ある！)

休憩時間、景は意を決して、椅子に座っている千世子の側に接近した。千世子はペットボトルのスポーツドリンクを片手に、横向きにしたスマホとイヤホンで動画を観ていた。小さな画面の中で、笑顔で手を振っているのは、景の親友だ。

(あ、結愛ちゃん……)

景は、少し嬉しくなった。

あの時は「大好きだった」と。まるで今はもう嫌いになったかのよう、千世子は結愛のことを語っていたが……こうして配信を観ているということは、千世子はきつと、結愛のことを完全に嫌っている、というわけではないのだ。それなら、結愛の存在が会話の糸口になるに違いない。

そう思った瞬間。

ぐしやり。

千世子の手の中のペットボトルが握りつぶされ、中のスポーツドリンクが周囲に飛散した。

「……………」

ポタポタ、と。原型を留めていないペットボトルから、液体が滴り落ちる。

「……ああ、夜風さん」

濡れた手元をタオルで拭き、イヤホンを耳から抜いて、そこでようやく千世子は、景の存在に気がついたようだった。

「よかったね」

まるで他人事のように、スターズの天使は言う。

「あなたの親友、ここに来るみたいだよ」

そう。

まるで他人事のようなその言葉に、笑顔は一切伴っておらず。抑え込まれた感情が仮面の裏側で煮立っているようだった。

思わず、景は立ち竦んだ。

潰れたペットボトルを、千世子はゴミ箱に向かって放り投げる。綺麗な弧を描いて吸い込まれたそれは、からんと乾いた音を鳴らした。

「楽しみだね」

## デスアイランド編 万宵結愛・ログイン

「また千世子ちゃんを怒らせてしまったわ……」

夕食の時間。景は目に見えてしょんぼりとした様子で、トボトボと夕食の席についた。

「景ちゃん大丈夫？」

「うん、大丈夫……」

「まあまあ、元気出しなよ。何食べる？ とりあえず、景ちゃんの好きな和食メインにセレクトしといたよ！」

「ありがとう……それ食べる」

「いやあ、さすがはスターズ。大きな撮影だと食事も充実してるねえ。ふつーにホテルのバイキングみたいだよ。あ、でもわたしは景ちゃんのお味噌汁が飲みたいなく、なんて。あははは」

「……結愛ちゃん!？」

鯖の塩焼きに手をつける前に、景は飛び上がった。目を見開いた。驚愕した。

気配を殺していつの間にか隣に座っていたのは、ここにはいないはずの存在。簡素なTシャツにパーカー、ショートパンツという、こざっぱりした格好に身を固めた、万宵結愛だった。

……いや、たしかに昼間、千世子に「あの子がくるよ」とは言われたが。あまりにも到着が早すぎる。

「そうだよ、景ちゃんの結愛ですよ」

相変わらずかわいい幼なじみは、しかしそのかわいらしさが一瞬でかき消されるような気持ち悪さでにんまりと景の全身を眺め回したあと、そのまま椅子から飛び上がって両手を広げ、欲望のままに抱きついた。

「んんっ……景ちゃん！ 景ちゃんっ！ 会いたかったよ景ちゃんっ!!」

なでなで。スハスハ。

華奢な腕が、全身をまさぐる。胸に顔が埋められる。流れる黒髪の一本一本にまで、白く細い指が絡む。

結愛の変態性を煮詰めたような、公衆の面前でいとも容易く行われるえげつないセクハラ行為に周囲がざわつく。しかし、景にとつてこの程度のスキンシップはいつもより多少過剰な程度のもので、特になんでもなかった。

「……ツスア……落ち着いたあ……あく癒される〜」  
「それはいいけど……」

問題は、結愛がどうしてここにいるか、である。

「結愛ちゃん、どうしてここに来たの？」

「景ちゃんに会いたくて」

語尾にハートマークがついている。違う、そうじゃない。

「……まさか、結愛ちゃんもこの映画に？」

「いや、出ないよ?」

「宣伝で来たんだってよ」

どかっ。対面の席に座りながら説明をしたのは、結愛本人ではなく共演者の源真咲だった。

「お、夜風ちゃんと会えたんやなく。よかったよかった」

「感動の再会というわけだ!」

次いで、湯島茜、烏山武光と、景と一緒にデスアイランドの出演を勝ち取った『オーディション組』が席につく。

「ったく、いいご身分だよな。わざわざヘリ一機飛ばして、ここまで来るのか……」

「ヘリでっ!」

「いやいや真咲くん。急に入ったお仕事だから、仕方なかったんだよ」  
「でもええね。私もヘリコプター乗ってみたいわ〜」

「うん。わたしも乗るのはじめてだったから、東京を空から見るのは楽しかったよ茜ちゃん」

「茜、ちゃん……?」

「はっはっは! さすがは大物配信者! 俺はまったく観たことがな

いが、万宵はすごいんだな！」

「誤魔化さずにストリートに観たことがない、って言ってくれるのは逆に好感が持てるよ武光くん。山登りしてる動画とかもあるから、よかったら今度観てみてね」

「なにつ!? それは少し興味があるな！」

「ていうか、なんで知らねーんだよ。あの千世子……さん、と共演した配信者だぞ?」

「CMにも出とったしなあ。前からかわいいと思ってたけど、間近で見るともつとかわいいわあ」

「え、照れるなあ」

景は衝撃を受けた。

(わ、私が知らない間に……め、めちやくちや打ち解けてるっ!?)

恐る恐る、ようやく自分の身体から離れた結愛に聞く。

「結愛ちゃん、もしかして茜ちゃんたちと知り合いだったの?」

「ん? ううん。わたし、今日この島に着いたばかりだし、ふつーに初対面だよ。景ちゃんがお世話になってるって聞いてたから、さつきご挨拶はしたけど」

「万宵は今、舞台をメインに活動しているということだな! すっかり意気投合してしまった!」

相変わらずデカイ声で武光が言い、結愛とがっしりと肩を組み、あっはっはと笑い合った。

(こ、コミュカ……これがコミュカなんだわ! 私なんて、茜ちゃんと仲直りするのにも時間がかかったし、千世子ちゃんとはまともに会話すらできていないのに……この差)

景はまたちよつとへこんだ。

「まあ、そんなわけわたしもしばらくこの島に滞在する予定だから、よろしくね景ちゃん」

「う、うん……」

「高見の見物か。いい御身分だな」

「もう、そんなに皮肉ばつかわないでよ真咲くん。大丈夫、ちゃんとお仕事はするし、みんなの演技を見ながら盗めるものは盗むつもり

だから」

ニコニコと、しかし不敵に結愛は言い切った。

「まあ、俺らや夜風みたいなオーディション組はともかく。スターズは急にあんたみたいなのヤツがお遊びできて、おもしろくないんじゃないの？」

「ん、それはまあ、これからがんばって仲良くなるよ」

「ちよつといいか」

真咲が懸念を口にした側から、トラブルの種が降ってわいた。声をかけてきた人物を見て、景は自分の体が強張るのを自覚した。

(あ……この人は)

スターズ俳優、堂上竜吾<sup>どのうえりゆうご</sup>。

景の芝居を見て「俺は認めねえよ。お前みたいな役者」と、啖呵を切った人物である。役作りのためにその場で吐いて体調を崩したり、役に入り込んで滝に飛び込んだり、と。撮影期間中、景は不安定な芝居を繰り返してきた。故に、彼の指摘は至つてまともであり、そう言われても仕方のない部分はあるのだが……正直、景はあまり竜吾のことが得意ではない。

(どうしよう……私のせいで、結愛ちゃんが何か言われるんじゃない……)

竜吾は178ある長身をすつと伸ばして、くせつ毛の間から結愛を見下ろしていた。対する結愛も席に座ったまま、臆せずに竜吾を見つめ返す。数秒間とはいえ、賑やかな夕食の席に気まずい沈黙が流れる様子は異質であり、視線をぶつけ合う二人は周囲の注目をまた集めた。

「……ユアユアさん」

口火を切ったのは、竜吾の方だった。

(……ユアユアさん?)

しかも、なんだか有り得ない単語が口から飛び出した。

すつと。伸ばした背筋が、ほぼ直角に折れ曲がる。尊大な言葉を吐いていた頭が、あつさりと下げられる。まるで叫ぶような勢いで、スターズ俳優は叫んだ。

「ファンですっ！ サインくださいっす！」

景はずっこけた。そして、思わず叫んだ。

「ファンなの!?!」

「あ？ お前はすっこんでろK子ちゃん……じゃなくて、ゲロ女。ユアユアの親友だっていうから期待してたのに、無茶な演技ばっかしやがって」

「……もしかして、私への当たりが強かったのって、結愛ちゃんと友達だから？」

「……ちよつと何言ってるのかわからないな」

「目をそらさないで！」

完全にめんどくさいタイプのファンだった。

「……堂上竜吾さん？」

「は、はい！ え、ていうか俺の名前……」

「もちろん知ってますよ。今をときめくスターズの俳優さんですもんね。ドラマとかで、お顔はよく拝見してます」

「あ、ありがとうございます！ 俺もユアユアさんの配信、いつも観てるっす！」

「ふふっ。スターズの俳優さんにそう言ってもらえると嬉しいですね」

につこりと結愛が笑う。竜吾が目に見えて浮かれる。「竜吾さん、キモい……」と、スターズ女優の一人が呟いた。

「で、どれにサイン書きましょうか？」

「このTシャツにお願いします！」



食い気味に返事をしながら、竜吾が取り出したのは『I ♡ RY UGO』とプリントされた自身の公式ファンTシャツである。結愛の急な来訪で色紙などが用意できなかったので、代わりに持ってきたのだろう。

結愛は慣れた様子で太目のサインペンを取り出し、きゅぽつとキャップを取った。

「なんて書きます?」

「そうですね……では、せっかくなので『YOU LOVE YUAY UA』と。お願いします」

完全に気持ち悪いタイプのファンだった。

「いいですよ。あ、思い出になると思うので、そのTシャツ着た状態で書きますようか? 今、食事中でテーブルの上埋まっていますし」

「いいんすか!? おい、和歌月っ! そこに俺のスマホあるだろ! この瞬間をカメラに納めてくれ!」

「竜吾さんキモいです」

今度は眩きではなくはつきりと。それこそ道端の吐瀉物を見るような調子で、スターズ女優、和歌月千は吐き捨てた。

着ていたTシャツをあっさりとその場で脱ぎ捨て、即座に自身のファンTシャツを着こんだ竜吾は、どこからでもこい! という構えで両手を広げる。

「お願いしまっす!」

「じゃ、書きますね。あ、ちよつと胸元掴みますけど、サイン書くためなので許してくださいね?」

「全然大丈夫です!」

人の身体の上からサインを書くのは、慣れていないとなかなかに難しい。が、結愛は苦もなくサインを書き上げ、ついでに竜吾の胸元にぐつと寄って、シャツの襟元にもペンをはしらせた。

「ハートマーク、おまけしておきますね」

「う、おおお……ありがとうございます」

「……ああ。あと、それから」

シャツを掴む腕に、力がこもった。

背伸びをして、まるで耳に歯をたてるように。

感無量といった様子の竜吾の耳元で、結愛は囁いた。周囲の誰にも聞こえないように、小さな……とても小さな声で。

「次に景ちゃんのことをゲロ女と言ったら、このかわいらしいTシャツを引き千切ります」

「……」

ぶわあ、と。喜色満面だった顔色が反転し、冷や汗が噴き出る。

「はい。できましたよ」

「……あ、ありがとうございます」

結愛は一切顔色を変えることなく、誰もが見惚れる笑顔のまま、声のボリュームを元に戻した。

「わたしはこれから、しばらく撮影を見学させていただきます。スターズのみなさんへのインタビュなども担当させてもらおう予定です。これから、よろしくお願いしますね、竜吾さん」

「……ハイ。お願いします」

まるで油の切れたロボットのようになり、また深いお辞儀をした竜吾は、景の方へ向き直る。そして、先ほどまでとは打って変わったいい笑顔で言った。

「あらためてよろしくな、景ちゃん！」

「え……気持ち悪いわ」

★★★

夕食後、わたしはルンルンとスキップしながら砂浜を歩いていった。いやあ……満たされた満たされた。やっぱりしばらく景ちゃんを吸わないと、禁断症状が出ちゃうね。なんか景ちゃんと仲が悪かったっぽいお兄さんにもバツチリ釘を刺せたし、これで一安心だよ。

「明日からは撮影見学か」

独り言を呟きながら、手を重ねて背中を伸ばす。

さすが南の島、と言うべきだろうか。見上げる夜空とどこまでも広がる海は、とても綺麗だった。キラキラと降り注ぐ月明かりを水面が反射して、白い砂浜をより一層引き立てている。もちろん、昼間に見た方が海も砂浜も、もっと明るいい色で楽しむことができるだろう。でも、わたしはこの静かな波の音も相まって、夜の風景の方が好きになれそうだった。

気ままに、砂浜に足跡をつける。

わたし以外には誰もいない、一人だけの空間。

そんな風に考えていたから、彼女の姿を見つけた時、その背中が人ではないように思えた。

声を、かける。

「こんばんは」

彼女が、振り返る。

白いノースリーブのワンピースと麦わら帽子。夜闇の中で浮き彫りになる白い肌が眩しい。

ここは人が少ないから、はじめて会った時と違って、メガネもマスクも必要ないのだろう。

夕食の時は見かけなかった。わたしと会いたくなかったのか、それとも単純に時間がずれたのか。どちらかはわからないけれど、こうして誰もいない場所で、また二人きりで会えるのだから、やはりわたしと彼女は不思議な縁で結ばれているらしい。

あの夜と同じ月の下、あの夜の彼女と同じ言葉を。けれど、あの夜とはまったく異なる感情を宿して、発する。

「今夜は、月がきれいですね」

月明かりに照らされる、天使が一人。

百城千世子に向かって、わたしは微笑んだ。

## 天使と悪魔

「あの時の、意趣返しのももりかな？」

百城さんが言った。

「ん？ ベつに仕返ししてわけじゃないけど……まあ、好きなように取ってもらって構わないよ」

今夜の月が、とてもきれいなのは本当だ。

だから、わたしは？を吐いていない。

「……何をしにきたの？」

静かな夜の海を背に。けれど、天使の口から発せられる言葉には隠し切れない棘があった。

「景ちゃんに会いに来たの」

即答すると、百城さんは「ふーん」と。まるで景ちゃんに興味がないようなふりをして、首を僅かに傾げた。

「万宵さんは、本当に夜風さんのことが大好きなんだね」

「もちろん、大好きだよ」

「ここに来てから、夜風さんのお芝居をずっと見てるけど……私はあの演技のどこがいいか、いまいちよくわからないな。あんまり、興味が湧かないかも」

「うそつき」

「……何が？」

ダメだよ、百城さん。

心を見るまでもない。感情を読み取るまでもない。特別な力に頼らなくてもわかる。

心の声が、ダダ漏れだ。

「百城さんが、景ちゃんに興味をもたないはずがないよ。だって、景ちゃんはわたしたちと違って『本物』だから」

「……俳優の使命は『本物』を見せることじゃない。観客を虜にすることだよ。素顔を晒してありのままに演じることを人間だって言うなら」

「うん。わたしたちは人間じゃないよね」

言葉尻を先んじて奪い取ると、整った表情がまた少し歪んだ。

いいね。いつものあなたより、そっちの顔の方がわたしは好きだ、ぞくぞくする。

「……顔合わせの時。はじめて夜風さんに会った時にも言われたんだ。私のお芝居のこと「人間じゃないみたい」って」

ああ。なるほど。

「笑っちゃったよ。隣にあなたがいるのに、私のお芝居をそんな風に言うなんて思わなかった」

この子、だから怒っているのか。

案外、かわいいところあるな、なんて。

「ごめんね。景ちゃん、ちよつと天然入ってるからさ」

「天然を言い訳に使われるのはおもしろくないかな」

「心狭くない？ 相手は新人だし、大らかな気持ちで見守ってあげてよ」

「……もう一度確認だけど」

「うん」

「万宵さん、ここに何しに来たの？」

「だから、景ちゃんに会いに来たんだってば」

「……………それだけ？」

「うん。それだけ」

しつこいな。

でも、ああ……………そっか。

「百城さん、嫉妬してるの？」

投げかけた言葉に、天使の仮面がぴくりと反応する。いいな、と思っただけ。

美人はかわいい。造作の整った美しい顔は、見ているだけで心が豊かになる。

でも、かわいい子というのはそもそも、笑顔でいることが多い。笑顔でなくても、自分のイメージに合った表情を作っていることが多い。

い。だから、そのイメージの裏側を覗き見ることが出来るわたしは、時々思うのだ。

その表情を、もつと崩してほしい。

「景ちゃんは、あなたの仮面に気がついた。でも、わたしの仮面には気がついていない。同じ仮面を被っていても、明らかな差があるって……景ちゃんの言葉は、それを証明しているもんね」

心のままに。

感じるままに。

自分に正直に、感情を表情にのせてほしい。

「……………」

ほら、とてもいい顔が出てきた。

百城千世子のこんな表情を見たことがあるのは、わたしくらいじゃないだろうか。

我ながら趣味が悪いと思う。

でも、仕方がないよね。

「だから、苛立つのはわかるけど。景ちゃんに余計なことを吹き込まないでほしいな」

わたしの『大切なもの』に、先に手を出してきたのはそっちなんだから。

「……………ふふっ」

不意に。

「荒れ狂っていた百城さんの心の波が、ずっと冷めた。

険しさに満ちていた表情が、自然に和らいだ。

「……………なんで笑うの？」

「ごめんなさい。でも、おもしろくて」

指先を口元に添える、上品な所作を伴って、

「……………」そんなに大切にしているのに、素顔で話せないんだ」

天使は言った。

「……………」

一瞬、言葉が抜け落ちた。

もちろん、わかっている。これは、安い挑発だ。わたしの煽りに対して、百城さんも煽り返してきただけ。べつに、腹をたてる必要はない。

ああ、でも。やっぱり、面と向かって、知ったような口で言われるのは――

「やだなあ。仮面が大好きなあなたに、そんな風に言われても困っちゃうよ」

――  
煩うるさいいな。

意地の悪い天使は、また微笑んだ。

「べつに、私は夜風さんをどうしようというつもりはないよ。だから、それについては安心して」

「……そっか。よかった」

「うん。せっかく来たんだから、ゆっくり観ていくといいよ。私と夜風さんの演技」

「そうだね。参考にさせてもらおうかな」

これ以上、話すこともない。

「じゃあね、万宵さん。また明日」

「うん。また明日」

それだけ言って、百城さんはまた砂浜を歩いていく。夜の闇の中を、ステップを踏むようにして。

黒い空に、月明かりが一つ。白い砂浜には、落ちてきた天使が一人。寂しい背中だな、とは思ったけれど、同情する気は欠片もない。

わたしには、景ちゃんがいるから。

☆☆☆☆

おもしろいな、と千世子は思った。

あの悪魔が、あんな表情をするなんて。



翌日。

この島に来て、二日目。全体の撮影工程で言えば十二日目……の夕方。

さすがスターズ、とまた言いたくなるような宿泊施設の大きなロビー。そのソファアに座って、わたしは収録した編集前の映像を見ていた。

今日の撮影は、浜辺で一般客を呼び集めて行われた。半分、宣伝目的でもあったのだらう。わたしもマイクを握ってリポートを行いつつ、百城さんの演技を見ていた。が、さすがにリポートをしながら演技を観察するのは限界があったので、こうして映像を借りて観直しているというわけだ。

『カレンはいつも綺麗事ばっか！ 私達に死ねって言うの!?!』  
ホースで降らせた人工の雨の中、百城さんと対峙する茜ちゃんが叫ぶ。

いいお芝居だ。迫力も感情も伴っていて、セリフの発声も激みない。編集前の映像でも……いや、編集される前だからこそ、その熱をダイレクトに感じられる。

それを平然と受け止める百城千世子は、やはり異常だった。

「……うまいなあ」

思わず、呟く。

舞台をいくつか経験して、わたしは理解した。役者の演技には、やはり感情がのる。そして、得てして感情とは不安定なものだ。不安定である以上、コンディションや体調に左右されるし、常に100パーセントのパフォーマンスを発揮できるわけではない。

でも百城さんは、どんな時でも常に、とても安定している。カメラの位置を把握して、時には共演者のミスまでカバーするほど、広い視野と余裕を保っている。常に100パーセントに近い演技を維持するその姿は、プロの鑑と言ってもいいだろう。



例えるなら、景ちゃんの演技は、過去の自分の体験を掘り出す博打である。運と感覚にオールインする、センス任せのテクニク。当たればデカいけど、当然失敗するリスクも常に孕んでいる。この場合の『失敗』とは、演技の内容やクオリティだけでなく、演出上の意図から外れること、撮影に遅れをもたらす可能性を指す。

けれど、百城さんにはそれが無い。失敗が有り得ないのだ。統計に基づいて徹底的に計算され尽くした演技に、運と感覚が絡む余地はない。だから、強い。

「あ、結愛ちゃんや」

耳に入ってきたのは、柔らかい関西弁。顔をあげると、映像の中で迫力のあるお芝居を見せている生徒と同一人物とは思えない、朗らかな笑顔がそこにあつた。

噂をすれば、なんとやら。湯島茜ちゃんだ。

笑顔に応えて、わたしもにっこりと微笑んだ。

「なあに？ 今日収録分観とるん？ 恥ずかしいわ〜」

「茜ちゃん！ 撮影、お疲れ様！ すっごくいい演技だったね！」

最初は年上ということもあつて敬語で話していたけど、少し喋るとすぐに仲良くなつて「敬語はええよ」と言ってくれたので、そのお言葉に甘えることにしている。

「あはは。氣い遣わんでええよ。映像で見返してるならわかるやろ？」

少しでも爪痕残したろ〜ってがんばってみただけ……全然あかんかった」

「……」

わたしは何も言わなかった。

下手なお世辞は、却って彼女のプライドを傷つけることになると思つたからだ。

「やつぱりすごいね、千世子ちゃんは」

「それは……百城さんがスターズのトップ女優だからだよ。下手に共演させると、同じスターズの間でも食べちゃうもん」

それだけのカリスマ性が百城千世子という女優には備わっていて、だからこの映画で百城さんと共演する役者はオーディション組が多

めになっている。スターズ俳優の存在感を霞ませないように……：スターズの役者同士で『共食い』をさせないようにするためだ。

正直、ずるいと思う。でも、そういうずるさと役割分担で成り立っているのが、芝居の世界だとも思う。

「でも、結愛ちゃんはその千世子ちゃんと二人つきりで、同じ画面でやり合ってたやろ？ しかも、互角以上に」

「そんなことないよ。配信と演技を、同列に語ることはできないって」「互角以上って部分は否定しないんやね」

「……えつと、それは」

「ごめんな。今、へこんでるから、ちよつといじわるなこと言ったわ」手をたてて、軽く拝まれる。茜ちゃんから向けられるその感情に、わたしはなんとも言えない気持ちになった。いつもはこの力を便利に使い倒しているわたしだけど、こういう時は本当に嫌になる。

親しみと感謝。謝意と恥ずかしさ。陽だまりのような善意と申し訳ない気持ちしがブレンドされた白い感情の中に、ほんの少しだけ。誤魔化そうとしても誤魔化しきれない、見逃そうとしても見逃しようがない、黒い感情があった。

羨望と嫉妬。

私はダメだった。でもこの子ならもしかしたら？

私はだめだった。でもこの子みたいな外見があれば？

私は駄目だった。でもこの子みたいな才能があれば？

そういう気持ちだ。

茜ちゃんはすごいと思う。きちんと自分の能力と結果を割り切つて、その上でわたしと会話してくれている。それでも拭いようのない黒い感情が、わたしには視えてしまう。感じてしまう。

「……大丈夫。人間、誰だって落ち込む時はあるよ」

「結愛ちゃんはやさしいなあ。夜風ちゃんが懐くわけやわ」

……だから嫌いなんだ。心が視えるのは。

意図的にうっすらと、表情に不快の色をのせる。茜ちゃんはわたしの顔色の変化をすぐに読み取って、話題を変えてくれた。

「万宵ちゃんは、やっぱり夜風ちゃんの演技、好きなん？」

「もちろん、大好きだよ」

わたしは景ちゃんの演技が好きだ。

どこまでいっても、芝居は芝居。映像の中、舞台の上の偽物ではない。どれだけ真に迫る芝居をしようと『演じる技』でしかない。だから、百城さんのような人が業界のトップに立ってるし、わたしのような偽物でもすぐに技術を吸収できてしまう。

でも、景ちゃんは違う。景ちゃんは天才だから。

「夜風ちゃん、千世子ちゃんに食らいつこうとがんばってるよ」

「そうだね。景ちゃんは頑張り屋だから」

「きつと、千世子ちゃんみたいな演技がしたいんやろなあ」

「……百城さんみたいな演技、かあ」

申し訳ないけど、それはちよつと的外れかな。

たしかに景ちゃんは百城さんの技術を吸収しようとしているし、多分ひげのおじちゃんからもそれを目標にして今回の撮影に参加するように言われている。でも、景ちゃんは決して百城さんになろうとしているわけではない。あくまでも、自分の演技の完成度を上げるため、役の幅を広げるために、吸収しようとしているだけに過ぎない。牛になるために、牛肉を食べる馬鹿はいない。肉を喰むのは、ただ食らって己の糧にするためだ。

余計なことは言わず、地味に過ぎそうと思っていたけど。その一点に限っては訂正の言葉を言わずにはいられなかった。

「でも、景ちゃんの演技の到達点は、百城さんとは違うところにあると思うよ」

わたしは、景ちゃんのようにはなれない。

百城さんも、景ちゃんのようにはなれない。

景ちゃんは、わたしたちのようになる必要がない。

だから結局、わたしの演技の参考になるのは景ちゃんじゃなくて、百城さんなんだよなあ……。いろいろ思うところはあるんだけど、そこは認めなくちゃいけないね、うん。

「せやね」

丸めた紙のように、くしゃり、と。茜さんは笑う。

「私、千世子ちゃんに言われたんよ。「皆に夜風さんみたいな芝居をしてもらう訳にはいかない。私が主人公じゃないといけないから」ってな」

それは……またなんというか、彼女らしい言葉だ。

「だから、あー、負けたらって思ってたな」

「また百城さんと共演する機会があるかもしれないよ。その時にリベンジすればいいじゃん!」

「結愛ちゃんは人を励ますのが上手いなあ。きっと、誰とでもすぐ仲良くなれるんやろな」

「そんなことないって」

顔に笑顔を貼り付けて、真逆の言葉を垂れ流す。

そうだ。わたしは誰とでも仲良くなれる。人の心を、盗み見ることができるからだ。

その時、その人が最も欲しい言葉を、慰めを。わたしは聞こえのいい声で囁くことができる。愛らしくやさしい『万宵結愛』を、演じることが出来る。

「一個、聞いてもええかな?」

「……? うん。どうぞ?」

だからこそ、

「結愛ちゃんは、なんで役者をやろうと思ったん?」

その質問は、不意打ちだった。

あの時、コラボ配信をした後。演じる理由を、百城さんにも問われた。でも、茜さんが聞く「役者をやる理由」は、それとは違うように思えた。

「……えっと」

わたしが、役者をやる理由。

「景ちゃんって、昔から映画が大好きで。それで役者さんになりたいうってずっと言ってたんだよね」

わたしが、役者をやる理由。

「だから、わたしもなるべく景ちゃんについて行こうと思って!」  
わたしが、役者をやる理由。

—  
なんだろう？

## 天使VS悪魔VSゴジラ〜南の島の大決戦〜

手塚由紀治は、映画『デスアイランド』の監督である。

彼は今回の撮影を通じて、百城千世子という女優の仮面を外してみたい、と考えていた。

手塚は彼女が所属する事務所、スターズの雇われ監督だ。スターズが望む映画を撮り、手堅い作風で手堅い作品を撮る。それで業界からは重宝されるようになった。用意された有名原作、準備された有名俳優に、ルーチンワークと化した演出を添える。それである程度の数字は約束されてしまうのだから、まったくもって笑えない。

今回もいつも通りのはずだった。いつものように百城千世子を完璧に撮るだけの、簡単な撮影。

百城千世子という女優は、完成された完璧である。

完璧とは、欠点がまったく見当たらないこと。

完成とは、それ以上成長の余地がないということ。

だから売れている。だからトップにいる。

けれど、手塚はこうも思うのだ。

映画監督に限らず、役者に限らず。何かを表現するアーティストという生き物は、完成と完璧を否定し続けなければならない。

芸術とは、人の心に訴えかけるもの。そして、人の心には正解がない。数式によって導き出される答えも、法則性も存在しない。

故に、完成された完璧はいつか飽きられてしまう。年をとっても生き残る役者とは、自身の美貌や魅力に胡坐をかかず、変化する外見とそれに伴う最適な役作りを見極めることができる者だ。

簡潔に言ってしまう。百城千世子には消費期限がある。賞味期限ではない。消費期限だ。千世子の人気は、今が絶頂。ファンが老いれば、需要がズレ始める。けれど、アイドルはファンに老いた姿を見せてはならない。何故なら、天使の美貌と魅力は、永遠のものでなければならぬからだ。

「……うん。中々崩せないな、この仮面」

自室で一人、収録した映像を見ながら呟く。

手塚は映画監督として、百城千世子という女優を信頼している。主演として完璧だと思う。ただ、飽きていた。そして、このまま消費期限を迎えるであろう彼女に同情していた。

だから、完成された仮面を壊したくなかった。夜風景をキャストイングしたのも、そのためだ。

「仮面？」

ひよっこりと。

その夜風景が、横から顔を出した。

「……」

手塚は固まった。

至近距離で見ると、やはり顔が良い。いや、そうではなくて、

「……えっと、夜風ちゃん。ここ、一応僕の部屋番号だからノックして欲しいな……」

「ごめんなさい。でも、鍵がかかってなかったから」

今度からきちんと鍵をかけておこうと、固く決意した。

「すみません。ちよつと、相談があつて」

「なに？」

「私、最後のシーン演じられないかも知れない」

景が演じる『ケイコ』は、原作にはいない映画オリジナルキャラクターだ。言うまでもなく、コミックの実写化でオリジナルキャラクターをねじ込む、という手法は原作を大切にするファンから非常に叩かれやすい。

手塚も、それはよくわかっている。そもそも、脚本の出来に関して千世子も「ひどい台本」と漏らしていたくらいなので、最初からある程度割り切っている節があった。オリジナルキャラクターである『ケイコ』も、大した役割があるわけではなく、次々に襲い来る理不尽な展開に振り回されるばかりの脇役だ。

ただし、物語の終盤。彼女には、大きな見せ場がある。

「私、千世子ちゃんのことを好きじゃないんだと思う」

千世子の身代わりになって、自ら死を選ぶワンシーン。

それが『ケイコ』の唯一にして最大の活躍だ。

主人公の代わりに死ぬ、という何とも古典的な役割。けれど、夜風景にとってありふれた演出と展開は、別の意味を持つ。

千世子の代わりに死ぬ役を演る。それは景にとって「千世子の代わりに死んでも構わない」という感情を持つことを意味する。役に入り込んで演じる景は、千世子のことを本当に好きにならなければ、千世子の代わりに死ぬことができない。

「……なるほどね」

難儀な役者だ。

「夜風ちゃんはさ。友達いる？」

「え？ い、いますけど……」

景の目が泳ぐ。あ、この子友達少ないな、と手塚は確信した。

「へりで来た配信者の子いるじゃない。万宵結愛ちゃん。あの子、君の友達でしょ？」

「も、もちろん！ 結愛ちゃんは親友だわ！ 昔からの幼馴染で……」

「じゃあ、例えばの話なんだけどね」

サングラスの奥から。ちらりと、彼女の心を覗くつもりで、手塚は問いを投げた。

「親友の万宵ちゃんのためなら、夜風ちゃんは死ぬる？」

「うん」

覗くまでもなく、顔色を伺うまでもなく、反応を見極める暇すらなく、景は即答した。

（返事、早くない……？）

手塚は、少し冷や汗を流した。

「もし、私が死んで結愛ちゃんが助かるなら、私……喜んで結愛ちゃんの身代わりになると思う。あ……でも、レイとルイを残して逝くことになるし……結愛ちゃんなら二人の面倒は見てくれるって信じてるけど、やっぱり心残りが……定期的にお墓参りには来て顔を出してもらわないと」

「いや、うん。そこまで想像を膨らませなくていいから」

手塚は、少しひいた。

「でもまあ、想像できるなら大丈夫かな」



身代わりになった自分を想像できて、その後にも思いを巡らすことができるのならば……あるいは『友達を代用して千世子を創造すれば』、演じることが出来るだろう。

手塚は、正直に話すことにした。

「この映画の製作費、六億円なんだけどさ」

「ろ、ろくつ……!?!」

「それだけの金額が動くっていうことは……それだけ大きな作品に主演として出演するっていうことは、相応の責任を負うってことなんだよね」

もちろん、動く金の額が作品の全てだとは言わない。それでも、莫大な製作費と興業収入への期待は、主演女優に大きなプレッシャーとしてのしかかる。その重圧は、華奢で儂い少女が背負うには、あまりにも重すぎるもので。

けれど千世子は、今に至るまで、若手のトップ女優としてそれを背負い続けてきたのだ。

「百城千世子だって、最初から天使だったわけじゃない。計り知れない重圧を組み伏せて、数え切れない期待に応えて……そうやって、彼女はあも強くも美しい『天使』になったんだ」

天使になるために、百城千世子には仮面が必要だった。

「彼女が天使なら、君は……えっと、ブルドーザー?」

「ぶ、ぶる……? 重機?」

「あるいはゴジラ?」

「怪獣だわ……」

「あはは、ごめんごめん。でも、僕が君に期待してるのは、そういう役割なんだよね」

「……ブルドーザーで、ゴジラ?」

「そう。とにかく君のパワーで、あの仮面をぶっ壊してほしいってこと」

景の前で、余計なことを言う気はないが……万宵結愛とコラボした後の千世子の立ち振る舞いは、どこか余裕がなくなっているようだった。まるで自身の仮面をより強固にすることを目指しているような、

そんな印象だ。

だからこそ、千世子の仮面を壊したい、という欲求が強くなっているのかもしれない。

「仮面を……ぶっ壊す」

ポツリ、と。景は呟いた。

★★★

「私、千世子ちゃんと友達になろうと思うの」

わあ。また景ちゃんがおもしろいことを言い始めたぞ。

わたしは、対面に座る景ちゃんのほっぺたに手を伸ばして、むにむにした。

「結愛ちゃん。大丈夫。私、寝ぼけてないわ」

「みたいだね」

撮影18日目。残り12日。朝食の時間です。

「夜風が意味わかんねえことを言いだすのにも、なんかもう慣れてきたな」

「やっぱり夜風ちゃんっていつもこうなん？ 結愛ちゃん」

「あー、うん。大体こんな感じだよ」

はあ……なるほどね。しかし「友達になる」とききましたか。なんとなくか、また景ちゃんらしい解決法を提示してきたなあ。千世子ちゃんの友達にならないと、代わりに死ぬような友達の演技ができない。だからまずは友達になる……ってところかな？

いやまったく、ほんとに景ちゃんらしいね。

「大丈夫？ 景ちゃん、百城さんとはあんまりうまくいってないみたいだけど？」

「そ、それはそうだけど……なんとかするつもり」

なんとかするつもりか。そっか。

絶対になんとかならない気がするけど……まあ、わたしがこうしてデスアイランド収録に立ち会えたのも何かの縁だし？

上手く立ち回れば、景ちゃんと百城さんの仲を取り持つくらいはで

きるだろう、多分。うん、できるといいな（願望）。正直、わたしは百城さんと仲が良くないし、百城さんはわたしのことが嫌いだと思うけど……百城さんから景ちゃんを守るって意味で、わたしは近くにいた方がいいだろうしね。

「ねえ、結愛ちゃん。私、千世子ちゃんと友達になれるかしら？」

……友達、ね。

「うん！ 景ちゃんならきつとなれるよ！」

そんなわけで、今日の撮影は景ちゃんと百城さんの共演シーンの撮影だ。わたしは茜ちゃんたちと、ハラハラしながら遠巻きに二人の様子を見守っていた。

今は撮影の合間の休憩時間、声をかけるには、絶好のチャンスタイム。

お！ベンチに座っている千世子ちゃんに、景ちゃんが自分から声をかけに行つたぞ！

「こ、ここに座つてもいい？」

「うん。もう座ってるね」

ほんとに、もう座ってるね。そこそこ横幅があるベンチだから余裕を持つて隣に座ればいいのに、景ちゃんは何故か百城さんに寄り添うようにして隣に腰かけた。くそ……ちよつと羨ましい。いや、そうじゃなくて。

でも、さすがにアレはダメだ。景ちゃん、相変わらず他人とのパーソナルスペースの測り方というか、リアクションを交えた距離感の詰め方がど下手くそすぎる。よくあれで普段から演技してるなあ……

「なんでそんな詰めて座ってるんだ……？」

信じられないと言いたげに、真咲くんが小声で毒づく。

ほんとだよ。ちよつと近すぎるから離れてほしい。

「人と仲良くなる方法がようわからんのやろな」

茜ちゃんがやはり小声で、ハラハラとしながら言う。はい、正解です。景ちゃんは基本コミュニケーションです。

明らかにドギマギしている景ちゃんは、しばらく百城さんと並んで座っていたけれど、意を決した様子でようやく口を開いた。

「千世子ちゃんのこと……千世子ちゃんって呼んでいい?」

いや、会話下手か?

「うん。もう呼んでるね」

いや、ツツコミ容赦ないな?

空気が重い。見ている、ハラハラする。そのくせ、真咲くんが言った通り二人の距離感が近いのが、ちよつと気になって腹が立つ。いや、景ちゃんに他意がないのはわかるよ? 百城さんと友達になりたいっていう景ちゃんの気持ちは、あくまでも演技のため。他意がないのはわかる。

でも、やつぱり、ちよーつと近すぎるよねあれ……

「わたしもまーせて!」

なので、割り込みます。

「ゆ、結愛ちゃん!?!」

「……万宵さん」

景ちゃんは、驚きながらも顔を輝かせて。

百城さんは、驚きすら表に出さず冷たく。

わたしは、密着していた二人の間に、強引に体を滑り込ませた。

「なにしにきたの?」

「いやあ、べつに? ただ、景ちゃんと百城さんが話してるところが見えたからさ。わたしもお話したくなったただだよ。ほら、わたしって、配信でトーク慣れしてるし!」

百城さんが目を細める。疑念と苛立ち。「本当は、夜風さんが手を出されないように、守りにきたくせに」という言葉が、透けて聞こえた。

「過保護だね」

「ん? 何が?」

「まあ、べつにいいけど」

そりやまあ、百城さんが景ちゃんに害を為すようなことを言うなら、もちろん止めるよ?」

でも、わたしは基本的に景ちゃんの演技と、この映画が成功してほしいって思ってるし、そのために百城さんと仲良くなる必要があるから、それを手伝おうっていう分別くらいは持つてる。

だから、百城さんにそんな風に敵意を剥き出しにされても困るんだよね。

景ちゃんに気づかれなないように、視線を交わす。ぶつけ合う。数秒、気まずい沈黙を経て、今度は百城さんの方が先に口を開いた。

「夜風さん、もしかして私と仲良くなりすぎてくれたの?」

「え?」

いや、景ちゃん「え?」って……気づかれてないでも思っていたのかな?

誰がどう見ても一方的に距離を詰めて、仲良くなろうとしているのが丸わかりだったんだけど。

「千世子ちゃん、なんで……?」

「そりや想像つくよ。夜風さんは芝居をするのに、心が必要なんかもんね」

へえ……百城さん、興味ないとか言ってたくせに、わたしが思ってた以上に、景ちゃんのことよく見てる。

その通りだ。景ちゃんのお芝居は、演じる役に合わせて心をまるごと入れ替える。だから、千世子ちゃんの友達を演じるために、友達に近い感情が必要なのだ。

百城さんの言葉に、景ちゃんはかわいらしく首を傾げた。

「……役者さんは、皆そうなんじゃないの?」

百城さんの表情が、能面のように固まる。

おっと、景ちゃん。それはこの子にとって『地雷』だよ。

でも正直、景ちゃんはその地雷を踏むだろうな、と思っていたので、わたしは驚かなかった。この二人は、演技へのスタンスがまるつきり逆だからだ。

景ちゃんは、心の芝居。

百城さんは、仮面の芝居。

二人の芝居は、交わらない平行線上にある。

だから、

「私達は友達になれないよ」

「え」

「……って、言ったらどうする？　夜風さんは、私と演じられなくなるの？」

百城さんが怒るのも、無理はない。

「だからお芝居に、心はいらないんだよ」

立ち上がった天使は、ちらりとわたしを一瞥する。うん、こわい顔だね。整った顔の下で煮えたぎっている、熱い激情がとても魅力的だ。でも、今はどうか抑えてほしい。

……その熱を景ちゃんに向けることを、わたしはきつと許さないから。

残念だけど。景ちゃんと百城さんは、やっぱり友達にはなれないみたいだ。

「まって！　千世子ちゃん！」

羽が生えていそうな、華奢な天使の背中が、ぴたりと止まった。

「……なに？」

「私、あのグラサンの監督さんに言われたの。千世子ちゃんの仮面を壊してほしいって」

……いや、マジか。景ちゃんのキャスティング、何か裏の事情があるとは思ってたけどそういう理由で？

ていうか、景ちゃん。それ、本人に直接言っちゃダメなやつでしょ。

「……だから、なに？」

こつちに向けられていた百城さんの感情が、明らかに減った。景ちゃんに、ターゲットが変わった。

うん……これはもう、潮時だ。これ以上、百城さんの感情をいたずらに煽ると、演技にまで支障が出てしまいそう。わたしが言えた口じゃないかもしれないけど、それでもわたしが間に入って止めないと……

「でも……私がぶっ壊したい仮面は……素顔を見たい人は、千世子ちゃんだけじゃないの」

……え？

「ねえ、結愛ちゃん」

わたしの大好きな声が、

「正直に答えて」

その瞬間だけ、不穏な響きを伴って。

向けられた視線。

向けられた感情。

向けられた、心。

ああ、まずい、と。感覚でわかった。

「結愛ちゃんは、私と一緒にいる時……仮面を被っているの？」

## 「親友」

ふと、昔のことを思い出す。

映画を夢中になって観る、幼馴染の横顔を見るのが好きだった。お母さんが死んで、あの男が家からいなくなつたばかりの頃の景ちゃんは、本当に塞ぎ込んでいて。レイちゃんとルイクんの前では気丈に振る舞っていたけれど、二人には気づかれぬ場所で、よく泣いていた。

「景ちゃん、映画観ようよ」

息をするように映画を観る景ちゃんの習慣を作ったのは、もしかしたらわたしだったのかもしれない。

テレビのスイッチを点けて、ビデオデッキにテープを入れれば、下を向いて俯いてばかりの景ちゃんが、少なくともその間だけは前を見してくれるから。だから、景ちゃんが泣いていると、決まって一緒に映画を観るようになった。

わたしはべつに、映画が好きではない。好きな映画もない。

だって、映像の中の役者の感情は、わたしには視えないから。

もちろん、様々な表情を見せてくれる彼らの演技が、とても素晴らしいものであることは子ども心にもよくわかった。ただ、人間の生の感情を小さな頃からずっと観察してきたわたしにとって、画面越しに『観る』ことしかできない映画の世界は、どこか物足りない、嘘臭いものに感じられた。

あれは演技で、あれはお芝居で、あれは偽物だから。そんな思いが、拭えなかった。

なによりも、わたしの隣には、わたしよりもずっと豊かな心で映画の世界を楽しむ幼馴染がいてくれた。だから、映画の世界に没入するより、きれいな横顔と、キラキラした心の中を覗き見る方が楽しかったのだ。

エンドロールが流れ終わると、わたしはきまって問いかけた。

「景ちゃん。今の映画、どうだった？」

映画の感想を夢中で語る間、景ちゃんはいやなことをきれいさっぱ



り忘れていて。わたしはそんな景ちゃんの話聞きながら、相槌を打つのが大好きだった。

わたしはべつに、映画が好きではない。好きな映画もない。でも、映画には感謝している。

映画は、景ちゃんを救ってくれた……綺麗な？だから。

人間は、？を吐く生き物だ。

小さな？、大きな？、取り返しのつかない？。？には様々な種類があるけれど、人生の中で一度も？を吐いたことのない人間なんて、きつと一人もいないだろう。

わたしは、人の感情が読める。でも、ただ感情を読んだからといって、それが？かどうか、すぐにわかるわけではない。言葉の意図を読み込み、こちらに向けられた感情を吟味して、口の動きと心の動きに、差がないかを判断し……そうして、ようやく発せられた言葉が？かどうかわかる。

様々な？を見てきた。

わたしを騙そうとする、純粹でどす黒い悪意のような？。

わたしを遠ざけようとする、薄っぺらい誤魔化しのような？。

わたしを気遣って発せられる、ほんの僅かな罪悪感を含んだ？。

？に添えられる感情は、まさに千差万別と言っていいほどに多様で、わたしはそれらの数え切れない？のほとんどを見抜きながら、時には容赦なく暴き、時にはそつと蓋をして、今日まで生きてきた。

わたしは、それが悪いことだとは思わない。自分以外の誰かと良好な関係を築き、友情や愛情を得るために。人の口から紡がれる？は、絶対に必要なものだ。

「結愛ちゃんは、私と一緒にいる時……仮面を被っているの？」

ねえ、景ちゃん。

仮面を被っている、っていうのは……わたしが？を吐いているってこと？

「……仮面、かあ」

眩きながら、その瞳をじつと視返す。どうして景ちゃんが、わたしにその問いを投げたのかはわからない。百城さんがきつかけなのか、何か自分で気がつくきつかけがあったのか。それは、本当にわからない。

ただ、景ちゃんから発せられる感情には、悪意も疑念も、わたしを傷つけるような色はこれっぽっちもなく。むしろ、純粋な興味と探究だけが向けられていて。

そういうところ、あの人お父さんにそっくりだよな。

口に出しかけた言葉を、黙って飲み込んだ。

こんな時に、こんな形で気付きたくなかった。それでもやつぱり、あの人と景ちゃんは親子なんだなって思ってしまう。ほんとに……ほーんつとに、そういうところだよ、景ちゃん。でもさ。

景ちゃんのお父さんが、わたしに言ったんだよ？  
すべての人に、愛されるようになればいい、ってさ。

百城さんは、その在り方を傲慢だと言ったけれど。でも、最も多くの人の視線を集めて、最も多くの人に愛される職業。それが、役者でしよう？

なら、わたしの在り方は、景ちゃんにとって理想的であるはずだよ？

正直にならなくていい。  
？吐きになればいい。

あなたに好かれるように、あなたに愛されるように。所作も、口調も、表情も、自然な笑顔も、悲しみに暮れる涙も。すべてをコントロールして、わたしはずつと側にいた。

だから、わたしから景ちゃんに返せる言葉は、一つだけ。

「わたしは、仮面を被っている……」

景ちゃんの表情は揺らがない。

「……って。そう言ったら、景ちゃんはわたしのこと、キライになる

？」

やはり、景ちゃんの表情は、揺らがない。さすがは役者さんだ。でも、わたしは心が視えるから。だから、何を考えているか、見たくなくても視えてしまう。

「百城さん！ 夜風さん！ そろそろお願いします！」

スタッフさんから声がかかる。

残念ながら、時間切れだ。

「……景ちゃん、またあとでね」

「あ、結愛ちゃん、まって……」

引き留める声を、振り払う。

足早にその場を去るすれ違い様、百城さんがポツリと呟いた。

「ズルいね」

その通りだ。

こんな力に頼って、聞きたくない答えをはぐらかすわたしは、きつと……ものすごく狡い。



撮影の用意が整った。出番のある俳優が、その場から離れるわけにはいかない。景は、結愛を追いかけることができなかった。

謝らなくちゃ、と思う。

傷つけるつもりはなかった。ただ、知りたかった。千世子の言葉が本当なのか、結愛の仮面が何なのか。結愛が仮面を被っているとして、その裏側には『何が』在るのか。知りたかった。

——わたしのこと、キライになる？

嫌いになんて、なるわけがない。だって、結愛は誰よりもかけがえない、大切な親友で……

「ねえ、夜風さん」

衣装担当のスタッフに身を任せながら、景の隣に立つ千世子はいたって普通の世間話を振るように、言った。

「夜風さんは、どうして役者になったの？」

問われて、景は考え込んだ。

「……」

おねーちゃん、役者さんじゃないなら可愛い、とレイに言われた。お前は役者になるために生まれてきたんだ、と黒山に言われた。

お前とまた演じてみたい、と武光は言ってくれた。

演じる中で、芝居を経験する中で、少しずつ、自分と関わってくれる人が増えて、演じる理由も増えていくように思えた。

「……私は」

けれどふと、昔のことを思い出す。

幼馴染と一緒に観る、映画が好きだった。

母親が死んで、父親が家からいなくなつたばかりの頃の自分は、本当に塞ぎ込んでいて。レイとレイの前では気丈に振る舞っていたけれど、二人には気づかれられない場所で、よく泣いていた。そして、しばらく隠れて泣いていると、結愛は必ず自分を見つけてくれて、テレビのある居間まで連れ出してくれた。

——景ちゃん、映画観ようよ

息をするように映画を観る習慣のきっかけは、もしかしたら結愛だったのかもしれない。

食い入るように、画面を見詰めて、映画の世界に没入した。本編が終わってエンドロールが始まると、とても寂しくて、映画が終わるとまた現実に戻らなければいけないのが、本当に嫌だった。

でも、映画という夢から醒めた一番心細い瞬間に、結愛はいつも景の手を握ってくれていた。

そして、きまっつてこう聞いてくれるのだ。

——景ちゃん。今の映画、どうだった？

映画の感想を夢中で語っていると、また辛いことを忘れられた。だから、その時間がなによりも楽しかった。

景の役者としてのルーツの一つは、間違いなく結愛と過ごしたあの時に在る。

けれど結愛は、自分と一緒に映画を観てくれる時間の長さとは裏腹に、あまり映画が好きではないようだった。好きな作品を聞いても、

曖昧に笑って誤魔化すだけで、はつきりとした答えをもらったことは一度もない。

「……私は、結愛ちゃんを夢中にさせたい。結愛ちゃんに、私の演技をみてほしいの」

自分の親友は、大切な幼馴染は、画面の中には興味がないみたいで。だから夜風景は、そんな結愛を夢中にさせる演技を……本物を、目指している。

☆☆☆☆

「……私は、結愛ちゃんを夢中にさせたい。結愛ちゃんに、私の演技をみてほしいの」

答えを聞いて、千世子は目を細めた。

それは、自分が『本物』だという確信がなければ出てこない言葉だ。それは、結愛とは違う意味での『傲慢』だ。

この子はきつと、？を現実にすることを芝居だと思っている。でも、それは間違いだ。現実を決して美しくないから、だから？は美しく加工しなければならぬ。

芝居とは、商品なのだから。美しくない商品は、手に取ってもらえない。

だから千世子は、景の芝居をまるごと加工しなければならない。

おもしろいな、と思う。景は結愛を大切にしている、結愛も景を大切にしている。でも、芝居という舞台に立った時、二人の在り方はまるで正面から向かい合うように、対極に位置してしまうのだ。

偽物を振り向かせようとする、本物。

本物を騙しながら愛し続ける、偽物。

正しいのは、どちらだろう？

(……どっちでもいいや)

千世子のやることは、変わらない。

いい映像を撮る。それだけだ。

「本番、よおーいー」

この島に来てから、はじめてとなる一対一の共演。けれど、不安はない。

千世子は目の前に立つ相手への意識を、景から『ケイコ』に切り替えた。

カメラの位置を把握する。空模様が良くないから、なるべく一発で決めたい。呼吸を整え、表情を作り、視線を前に向け……発声する。

「ケイコ！ よかった……無事で。他のみんなは？」

「分からない……夢中で逃げているうちに、離れ離れになってしまつて」

淀みないやりとりが続く。千世子は、心の中で感心した。

本番直前に友達になりたい、なんて言ってくるものだから、どんな不安定な演技をしてくるのだろう、と身構えていたのだが。想像していたよりも、景の演技はずっと自然だった。

きっと景は、千世子の存在を『結愛』に置き換えて演じているのだろう。ついさつき、仲違いをして別れたとは思えない。安定した表情と所作だ。

本当に親友の身を案じているような表情で、景は千世子に視線を向けてきた。

（いや、違うな……そっか。夜風さんは、本当に、今この瞬間。いなくなつた万宵さんを心配しているのか）

きっとこの子は、今すぐにもでも結愛を探しに行きたいに違いない。でも、それはできない。できないから、その焦燥感を千世子との芝居で、カレン<sup>千世子</sup>を案じる感情に置き換えて用いている。

だから、景の芝居はこんなにも真に迫っているのだ。

それが無意識の再利用だとしても。親友との仲違いすら、演技と感情の素材にしてしまう、その貪欲さは、たしかに『本物』と呼ぶに相応しい。

熱っぽい、それでいて少し湿った、感情の熱。自分に向けられるそれは、景と結愛の仲の深さを推し量るには、充分過ぎるもので……

（なんか、見せつけられてみたいでやだな）

演技に、雑念が混じりそうになる。千世子はそれを振り払って、声

を絞り出した。

「そっか。ケイコだけでも無事でいてくれてよかった」

台詞を言い切った瞬間、絶妙なタイミングで景が抱きついてくる。想像していたより、細い身体だった。

肌が触れ合う。息遣いが近い。心臓の鼓動が聞こえる。

(万宵さんにとっては……これも？なのかな)

ふと、千世子はそう思った。

★★★

気がつけば、ロケチームからかなり離れた場所まで、ふらふらと歩いてきてしまっていた。

「……なにやってんだろ、わたし」

自分の行動が自分でも馬鹿らしくなって、独り言を呟く。わたしはべつに、こんなところまでできて景ちゃんとケンカをしたかったわけじゃない。ただ会えればそれでよかったのに。わざわざ百城さんとも揉めて、本当に馬鹿みたいだ。

そもそも、お芝居の世界に中途半端に足を突っ込んだのが今回の原因なわけで……ひげのおじいちゃんや七生さんは、わたしの演技を褒めてくれていたけど、そろそろ潮時なのかもしれない。

「……ばか。景ちゃんのバカ」

バカなのは、わたしなのに。

胸の中に溜まったモヤモヤを、吐き出さずにはいられない。

「やめよっかな……お芝居」

ぽつんと。下を向いた地面に、雫が落ちた。一つ、二つ、三つ。とめどなく落ちるそれが、乾いた地面に滲みを作る。

今日は朝からずっと曇りで、天気が危なかった。だからきつと、雨が降り始めたのだろう。

そうに決まっている。だって、わたしは泣いてないから。

「おや……おやおやおや。珍しいこともあるものですね」

背後から響いたのは、ねっとりとした全身に絡みつくような声。

慌てて、目元を拭って振り返る。

「あなたが泣いているなんて、私とはじめて会った時以来では？」

こんな島の、こんな山の中で、ビジネススーツを着こなす人物は一人しかいない。

「泣いてないし。何しにきたの……プロデューサー」

「いえ、そろそろ潮時かと思ひまして。お迎えにあがりました」

わたしのプロデューサー、天知心一はそう言いながら笑うと、大仰に空を見上げて、

「ああ、使いますか？」

手に持った黒い傘を、わざとらしく広げた。



## 天使とゴジラ

「景ちゃんはねえ……昔からちよつと自分勝手なんだよ!」

「ほほう」

「何かあつたら何でも一人で抱え込もうとするし! それなのに困つたら一人で泣いてるし!」

「ほうほう」

「そのくせ、ちよつと映画観るとすぐ元気になつてさ! わたしがたくさん慰めてあげるより、映画一本観た方が元気になることだってあるんだよ!」

「それはウケますね」

「ウケないよつ!」

本当に雨も降つてきそうですし、森の中で立ち話はしたくないのでどこかに入りましようか、と。いたつてビジネスマン的思考のプロデューサーに連れられて、わたしはカフェでコーヒーを飲みながら景ちゃんへの不安をぶつけていた。

対面に座るプロデューサーは涼しい顔で紅茶を嗜みながら、わたしの話(という名の愚痴)に適当な相槌を打ってくれている。この野郎、その額のほくろもぎ取つてやろうか。

「……プロデューサー、わたしの話、ちゃんと聞いてないでしょ」

「もちろんちゃんと聞いていますよ。しかし、どうしてあなたがそんなに苛立っているのか、私には理解しかねます。夜風景に、あなたが仮面を被っている事実を知られた。一体、そのどこが不都合だというのでしょうか?」

「だって」

「だって、嫌われたらどうしよう、ですか?」

「っ……」

たった一言。その一言で胸中を見事にいい当てられて、わたしは押し黙った。

ニコリ。プロデューサーは微笑む。

「ふふ。あなたの年相応の可愛らしい葛藤を、こうして間近で見聞き

することができるのは……ええ、ええ。私個人としては、とても喜ばしいことです」

「うっさいだまれ」

「それにしても、何をどうして、そんなに悩むことがあるのやら……夜風景の前では、ありのままの自分でいればいい。ただ、それだけのことではないのですか？」

むしろ、仮面を被る必要がないなら、あなたにとっては気楽でしょうに、と。プロデューサーはまるで他人事のように、半分ほど口をつけた紅茶の中にミルクを落とした。

実際、他人事なのだろう。

今、わたしと景ちゃんの話聞いているプロデューサーの心の中には、わたしを憐れむような感情は一切ない。ただ淡々と、思ったことをそのまま口に出している。相も変わらず、？を吐かない人だ。

だからこそ、思ったことをそのまま言われているからこそ、

「ああ……なるほど。ありのままの自分では彼女に好かれる自信がないから、そんなに焦っているんですね」

こんなにも、心に言葉が突き刺さる。

ここが人目のあるカフェでなかったら、掴みかかっていたかもしれない。けれど、プロデューサーが言うことは全て凶星で、的を射っていて、正論だった。

そうだ。景ちゃんのことをバカって言う資格は、わたしにはない。

勝手に距離を置いているのはわたしの方で、勝手に怒っているのはわたしの方で……そして、勝手に怖がっているのが、身勝手なわたしだ。

嫌われたら、どうしよう。幻滅されたらどうしようって。そんな不安ばかりが、心を捉えて離さない。

「べつに、嫌われてもいいんじゃないですか」

「え」

嫌われてもいい？

自分でも間抜けに思うほどに、拍子抜けした声が喉から漏れた。

「いえ、ですから。嫌われてもいい、と言ったんですよ。あなたは人に

好かれることを当然のように思っている節がある。しかし、普通の人間はそうではない」

ミルクを入れた紅茶に、砂糖までたっぷり注いで。甘い甘いそれを、腹の底が見えない男は口の中に流し込んだ。

「人に好かれるというのは本来、とても大変なことです。そうですね……例えばまず、不潔な人間は嫌われます。だから最低限、自分の見た目を整える。そのためには、金と手間がかかりますね」

このように、とプロデューサーはいくらするかわからないスーツの襟を正してみせた。

「衣服は買い揃えることができますが、顔は生まれ持ったものです。顔を変えたいなら、整形するためにもっと金がかかる。ですが、逆に言えば金が必要なだけです。これは極論になりますが……外見だけに限るのであれば、金と手間さえあれば、人間の印象はどうにでもできてしまう」

自他共に認める守銭奴であるプロデューサーがこう言うのだから、その言葉には嫌な説得力があった。

「……でも、人は外見だけで他の人のことを好きになるわけじゃない」「ええ。仰る通りです」

プロデューサーは飲み切った紅茶を置いた。

「だから私は、人の心を何よりも大切だと考えています。なぜなら……」

「人の心はお金で買えないから……とでも言うつもり？」

先ほどの意趣返しに台詞を取ってやると、今度は底意地の悪い喉がくつくつと鳴った。

「その通り……と言いたいところですが、少し違いますね。いつも言っているように、私のビジネスは人の心の売買です。まあ、つまるところ……心というのは、金を積みめばある程度買えるんですよ」

無造作に、紙の束がテーブルの上に置かれた。ただの紙でない、一万円札だ。厚さを見るに、ざっと三十万円といったところだろうか。

普通の人にとっては大金だが、プロデューサーからしてみればただのはした金だ。

「仮に、私が夜風景にこれをプレゼントしたら、彼女の私への好感度は大幅にアップするでしょう。もしかしたら急に大金を恵んでくれた私に感激して、深く信頼してくれるようになるかもしれないよ」

「いきなり知らない人からお金を渡されたらどん引きだよ。ていうか、お金で買う信用なんて、本当の気持ちじゃないし」

「そう。それです」

「は？」

「あなたがそうやって軽々しく口にする『本当の気持ち』。それは普通なら、どう足掻いても見えない……いくら金を積んでも、目に見える形にできないものなんですよ」

唇が、にんまりと弧を描く。

「人間は常に相手を疑いながら会話をする生き物です。言葉はコミュニケーションのツールとして限りなく優秀なものですが、しかし人の口から紡がれる言葉が常に真実であるとは限らない。まあ、稀に私のような正直者もいますが」

白々しい。

「いいですか、結愛さん。割り切ることを覚えましょう。嫌われても構わない、と。割り切れば、それだけで楽になれますよ」

「……でも、景ちゃんはわたしの親友で……」

「親友、ですか。でも、友情に証明書はないでしょう？　こうして金額を積んで、その価値を証明できるわけでもない」

広げた札束をしまい込んで。プロデューサーは、今度は鞆からPCを取り出して広げた。

「その点、あなたの活動は素晴らしい。このように見れば、あなたが愛されている証拠が、明確に表れる。一目見れば、あなたがファンからとても好かれていることがよくわかります」

画面の中で流れるのは、わたしの配信。

再生数。コメント。評価。たしかにプロデューサーの言う通り、わたしは明確に数字として見える形で返ってくるそれを、好いている。愛している。

でも、わたしと景ちゃんの関係は……わたしが今、求めているもの

は、きつとそれではない。

そんなこと、この非人間のプロデューサーに言っても理解されないだろうけど。

「……ふふ。わかっていますよ。あなたが求めているものは『これ』ではない」

は？ 今、なんて？

「……プロデューサー？」

「ですが、まあ……」やめよっかな……お芝居」などと呟きながら泣いている姿を見てしまうと、こちらとしても少々困ってしまうので「っ……さっさっきの、聞いてたの!?!」

「ですからこうして、客観的なデータをお見せするのが、手っ取り早いと思っただけです」

「質問に答えてよ!?!」

赤面するわたしの質問は無視して、プロデューサーはキーボードを軽く叩いた。切り替わった画面には、わたしのお芝居に関する様々な感想が書き込まれていた。

「これって……」

最初の頃より、どんどん演技が上手くなっている。

立ち回りが良くなった。

はじめて舞台を見に行っただけど、おもしろいと思った。

今はまだ荒削りだが、光るものを感じる。

厳しい意見もあったけれど、それは約一ヶ月……芝居のために努力したわたしの成果だった。

「目に見えないものはどうか知りませんが……少なくとも、あなたの芝居を認め、もっと観たいと望む人々の存在は、はっきりと証明されています。ある意味、これもまた、人々の心を買うビジネスの形の一つ、と言えるでしょう」

「……天知さん」

「なんです？」

「もしかしてわたしのこと、励ましてくれてるの?」

「ええ、それはもちろん。私は、あなたのプロデューサーですから」

やっぱり底の読めない顔で、プロデューサーは笑う。

「役者とは、人々に観られ、愛され、憧れられる、そういう職業です。私は、あなたが役者に向いていると思っていました。だから、黒山にちよっかいをかけられていても、それを黙認した」

「……うん」

「私は目に見える成果として、コメントを出しましたが……逆に言えば、芝居の世界であなたが積み上げてきた成果は、まだたったのこれだけです。それこそ、配信のファンの数とは比べるまでもない」

「うん」

「だからこそ、あなたが芝居を諦めるのは早計である、と。私はプロデューサーとして、釘を刺しておきましょう」

わたしと、景ちゃんの関係。

わたしが、芝居をやる理由。

「夜風景との関係も……『視えるもの』だけに囚われていては、大切なことを見逃してしまうかもしれないよ」

「……それも、プロデューサーとしての意見？」

「いいえ。一人の大人としての、忠告です」

添えられた笑顔は胡散臭くて、かけられた言葉は信じられないくらい甘ったるくて。

でも、わたしのプロデューサーは嘘を吐かないことを、わたしが一番よく知っている。



「おい、亀。ユアユアへの応援コメントってのは、本当にこれで上手く届くのか？ 紙に書いて送らなくてもいいのか？」

「うるさいなあ……大丈夫だって」

「巖さん、ほんとそういうところマメになったよね。正直、信じらんない」

「ああ、あと聞きたかったんだが……『スパチャ』ってのはどうやるん

だ？」

「それはやめとけ」



「不味いですね。これ、台風みたいです。急激に発達してるみたいで、いつ過ぎ去ってくれるか……」

外を見ながら、撮影スタッフの一人が言った。

島の天気は変わりやすい、とよく言うが、外の雨はもはやはにわか雨で済まされるような勢いではなく、水雫が窓の縁を強く叩いている。

映画の撮影スケジュールは、時間との戦いだ。多忙なタレントが多いスターズ主導の映画ともなれば、それは尚更のこと。予報によれば、この天気は明日、明後日まで続く。仮に、屋内から優先して撮影していったとしても、出演者達の中で最も予定が詰まっている千世子の撮影スケジュールがどうしてもかみ合わなくなってしまう。

「……参ったね」

そう呟く手塚の表情は、サングラスに隠れて見えない。

撮影予定が狂うという事実に対して、手塚はどうする、とは言わなかった。ただ「参ったね」と呟いた。方針を示さない監督の沈黙に、スタッフたちは顔を見合わせる。

「脚本、変えるしかないですね」

故に、先んじて発言したのは、この映画の制作プロデューサーだった。

「クライマックスのこのシーン……夜風さんだっけ？ この子との共演なくせば？ 元々原作にもなかったシーンでしょ。これ、変えちゃいましょう」

「……あはは。何言ってるの。ダメですよ、プロデューサー。クライマックスなくしちゃうなんて」

「そもそも原作にない展開をクライマックスについてファンからの印象悪いですし。これ以外方法な……」

「駄目だ！」

手塚という監督は、滅多に怒鳴らない。

だからこそ、その怒声は部屋の中にひどく印象的に響いた。気圧されたスタッフ達がしん、と静まり返る。

自分で作ってしまったその空気を緩めるように、手塚はおどけて肩を竦めた。

「……だってほら、ここ感動的なシーンじゃない！ 僕、気に入って……」

「監督。らしくないですよ」

今度は、プロデューサーが手塚の発言を遮る番だった。

「あなたが何に拘っているのかは知りません。急に脚本を変えたり、夜風さんをキャスティングしたり……ただ、勘違いしないでほしいのは、あなたの仕事は拘りを追求することではなく、売れる作品を撮ることだ、ということですよ。そのために、必要な選択をしてください」

彼の言葉は、正論だ。

撮影スケジュールをこのまま進めても確実に間に合わない。作品を無事に完成させるためには、何らかの手を打つ必要がある。どれかを諦め、どこかを切り捨てなければならぬ。

「私と千世子ちゃんのシーン、なくなっちゃうんですか？」

いつの間に入ってきていたのか。

プロデューサーの背後に立っていたのは、息を切らした様子の夜風景だった。

「……聞いてたんだ。ごめんね。見せ場削られて悔しいのは分かるけど、こればかりはね」

口先だけのプロデューサーの謝罪。景の瞳が、縋るように手塚を見る。

「……よくあることなんだ。天気には勝てない」

そう。天気には勝てない。

手塚の勝手な願望と、たった一人の出演者のわがままを優先して、



撮影をねじ曲げるなど有り得ない。百城千世子が主演の映画に、泥を塗ることは許されないのだ。

「監督。私、千世子ちゃんともっと演じたい。だから……」  
「ダメだよ」

その声は、とてもよく響いた。  
それこそ、舞台の主演のように。

「……千世子ちゃん」

ふんわりとした印象の私服に着替えた百城千世子は、静かに手塚を見た。

「天気は勝てない、なんて。らしくないね、監督」  
「……え？」

予想だにしていない主演からの言葉に、ぎよつとしたのは話しかけられた手塚ではなく、プロデューサーの方だった。

「台風だろうとなんだろうと、私と夜風さんのシーンは撮らないとダメだよ」

「い、いや……千世子ちゃん。でも……」

「後、2日。台風がくるのが遅かったら改稿のしようもあつたかもだけれど……もう遅いよね。三幕構成くらい守らないと、流石にお客さん騙せないよ」

それは、百城千世子だからこそ言えること。

「撮ろうよ。私なら巻ける。全然間に合うよ」

思ってもいなかった援軍の登場に、景はぽかんと口を開けて千世子を見ていた。

凛々しい横顔が、いたずらっぽく表情を変える。

「意外そうな顔をしているね」

「……えっと」

「万宵さんに見せる芝居を撮りたいんでしょう？」

そつと、周囲には聞こえないように、千世子は景の側へ顔を寄せた。

「あの子の仮面、私なんかよりもずっと分厚いよ。それでもやる？」  
「やる」

即答だった。

最初から、迷うことなどない、と。景の表情は口に出さなくても、その物語っていた。

愚直なほど真っ直ぐな瞳を覗くのが眩しくて、千世子は思わず目を細める。

「私は、売れる作品を撮るためなら何だってする」

それが、百城千世子が仮面を被る理由。

天使が胸の内に秘める、映画へ懸けるささやかなプライドだから。

「嫌だつて言っても、最後まで付き合ってもらおうよ夜風さん」

そう。これはプライドの問題だ。

景が結愛を振り向かせたいように。

千世子もまた、結愛を振り向かせたい。仮面を？がし、その裏側を見たい……という景の目的とは違う。ただ、自分の演技が、彼女のそれを上回ることを証明したい。

だからこれは、

「ふふっ……さしずめ、天使とゴジラの共同戦線つてやつかな」

「……千世子ちゃんまで、私のことゴジラっていうの？」

「ブルドーザーの方が良かった？」

「そういうことじゃないわ……」

げんなりとした表情の景に向けて、千世子は微笑む。

敵の敵は味方、というわけではないけれど、目的は合致した。

「やるよ、夜風さん」

「うん」

舞台の上で、ようやく役者が肩を並べる。

——さあ、悪魔の心を射落とそう。

## TSヤンデレ配信者は今日、演じない

撮影の雰囲気、大きく変わった。

台風の影響でズタズタになったスケジュールを立て直すために、百城さんは率先して一発撮りと長回しを行うようになった。

失った撮影期間は、一日半。その遅れは、8シーン42カットにも及ぶ。残りの撮影期間の中でそれを取り戻すのが厳しいのは、部外者で素人のわたしにも、よくわかった。

けれど、百城さんは当然のようにスケジュールを巻いていった。

五分以上の長い台詞を、一発で撮り切る。

絵コンテまで把握して、時間短縮のためにスタッフと情報を共有し、時には細かい調整にまで参加する。

リテイクなしで、しかも本来はもっと細かく分けて撮るはずだったシーンを一気にまとめて撮影してしまう百城さんは本当に場慣れしていて、さすがと言う他なくて。自分から撮影スタッフに指示を出す姿は、わたしですら思わず見惚れてしまいそうになるほどに、生き生きとしていた。

役者の領分を超えた立ち回りに、しかし文句を言う人は一人もおらず……むしろ、百城さんを中心に現場の一体感は大きく増しているようだった。

当然だ。間近であんな風に一生懸命な姿を見せられて、心を動かされない人なんていない。

映画という作品に対する姿勢が、在り方が、情熱が。彼女が『役者』であることを、端的に示していた。

それでも、どんなにがんばっても、人間の力ではどうにもできないこともある。

『台風22号に続き南の海上で発達した台風23号の影響で、大雨や暴風雨に厳重な警戒が必要です。気象庁によりますと……』

撮影24日目。残り6日。

どうやら神様という存在は、どこまでもいじわるらしい。百城さんたちの努力を嘲笑うかのように、二つ目の台風がやってきた。

「どうしてこの時期に……」

「最後まで撮れるのか……?」

テレビから流れる気象情報に、ざわざわと騒がしい食堂の中で。景ちゃんはそんな雰囲気になされることなく、黙々と台本を読み込んでいた。

「……台風、またきちやったね」

「……きちやったわね」

あの日の問いかけ以来、わたしと景ちゃんの間には微妙にぎくしゃくとした空気が流れていて、まったく会話がないうわけではなかったけれど、ちゃんと互いの顔を見て話すような機会は明らかに減っていた。

恐る恐る、ゆっくりと。景ちゃんの隣に腰かける。

「この調子だと、最後まで撮影できないかもね」

「そうね」

「……も、百城さんもすごいがんばってたのに、なんていうか、すごい残念だね」

「うん。でも、千世子ちゃんはまだ諦めてないと思う」

景ちゃんは、台本に目を落としたままそう言った。

感情が読めなくてもわかったと思うけど……でも、感情を読めるからこそ、わたしはそれを敏感に感じ取ってしまう。

景ちゃんの気持ちは今、一切わたしに向けられていない。これっぽちも、それこそ小指の先ほども、わたしを見てすらいない。

多分、わたしと会話をしながら……その意識の全てを、手元の台本に全て注いでいる。

「景ちゃんはさ」

「うん」

「お芝居、好き?」

「好きよ」

呼吸をするように返ってきた返事。わたしが何かを言う前に、景

ちゃんはもう一言、付け加えた。

「千世子ちゃんも、お芝居が好きなんだと思う。私と同じくらいか、それ以上に」

うん、わかるよ、と。

言おうと思えば言えたはずなのに、わたしはそれを口に出して言わなかった。

「大丈夫」

そこでようやく、景ちゃんは台本から顔をあげて、わたしの顔を見た。

「私、絶対に結愛ちゃんを夢中にさせるお芝居を試してみせるから」

★★★

風が吹き荒れる。

木が軋む。

レインコートを着ていても、すき間から雨が入り込んでくる。

それほどの豪雨の中で、景ちゃんと百城さんは、二人並んで立っていた。

「……うそでしょ」

信じられない。

台風が接近する中、撮影を強行するなんて。

「いやはや、まったく無茶をしますね」

「……プロデューサー、帰らなくていいの?」

「この嵐ではヘリも飛びませんよ」

「泳いで帰ればいいじゃん」

「それは、流れるプールみたいで楽しそうですね」

わたしの隣に立つプロデューサーは、涼しい顔で言った。

手塚監督が、雨に濡れるのにも構わず、景ちゃんと百城さんの前に出る。

「危険な撮影だが、これでも僕らはプロだ! 君達のことはず僕達  
が守る! 宜しく頼む!」

「はい……」

「はい」

百城さんは、豪雨の中とは思えない涼しい顔で。

景ちゃんは、少しだけ緊張した表情で。

それぞれの返事が、雨音に負けることなくはつきりと響いた。

「これは、どのようなシーンでしたっけ？」

「……景ちゃんと百城さんのクライマックス。山場の一つだよ。

元々、雨が降っている想定シーンだけど……」

「なるほどなるほど。だから台風を利用して撮影してしまおう、というわけですか。百城千世子も、思ったより無茶をしますね」

「無茶過ぎるよ……もし、怪我でもしたら、大変なことに……」

撮影が始まる。

百城さんが演じる『カレン』と景ちゃんが演じる『ケイコ』が、黒幕の意図に気づき、手を取り合って雨の中を走る。それが、今から撮影するシーン。この映画のクライマックスだ。

嵐の中を、景ちゃんと百城さんが駆ける。

無茶だ。普通じゃない。おかしい。イカれている。

そんな言葉ばかりが、わたしの中でぐるぐると渦巻いて。でも、わたしには理解できない、その芝居への情熱が、景ちゃんと百城さんわたしに繋いでいるように見えた。

わたしはこの撮影に参加していない。

わたしは部外者だ。

わたしは関係ない。

だから、あの二人の間に入れないのは当然で、わたしがあそこに立っていないのも当然で、

「素晴らしいですね」

不意に。プロデューサーが言った。

「彼女たちのような役者は、アーティストです。ああいう生き物は、いつも私の想像を超えてくる」

「アーティスト……」

「作品を作るために、時には命まで賭ける馬鹿のことを、そう呼びま

す」

一本の映画という作品を、作るために。

景ちゃんと言城さんは、危険を冒してまで撮影を強行した。

いや、二人だけじゃない。この嵐の中、セットの準備をした大道具の人たちも。今にも崩れそうなイントレ……撮影用に組んだ足場に立つ、カメラマンさんたちも。声を張り上げて指示を出す、手塚監督も。全員が一丸になって、撮影に望んでいた。

わたしが偽物だと決めつけていた映像には、数え切れない人たちの情熱が詰まっていた。

「A地点通過！ 発破いくぞっ！」

地面に仕込まれた火薬が、嵐に負けることなく起爆する。

まるで、この映画に関わる人たちの熱意をそのまま凝縮したかのような、凄まじい爆発。この嵐の中で、間違いなく、問題なく作動する発破を仕込むために、スタッフの人たちは、どれほどの労力をかけたんだろう？

『カレン！ 大丈夫?!』

そして、景ちゃんは……そんなみんなの期待に、120%の演技で応えてみせるんだ。

『伏せて！ 遠くから狙われてる！ 私達を近づかせないつもりだわ！』

ああ、すごい。

今、景ちゃんの目には、予め設置されていた火薬の点火が、きつと本物のミサイルの着弾に見える。

そして、わたしの目は、予め設置されていた火薬の点火を、まるで本物のミサイルのように見てしまった。

百城さんを庇うその腕が、親友の無事を確かめるその横顔が、お腹の奥から張り上げるその声が、わたしの視線を捉えて離さない。

あれは『本物』だ。

画面の中に映る景ちゃんは、わたしの知っている景ちゃんじゃない。『ケイコ』になっていた。数え切れない人たちの、計り知れない情熱を背負って、景ちゃんは今、本物を演じている。

役者、夜風景の一挙手一投足に、わたしは心をかき乱される。

「……なるほど」

パチパチ、と。

吹けば飛ぶような軽い拍手をしたのは、プロデューサーだった。

「あれが、夜風景ですか。あなたと黒山が夢中になる理由が、ようやくわかりました」

「……」

「くやしそうですね」

「……だって」

だって、だって……あんな表情の景ちゃんを、わたしは知らない。

親友を庇って勇敢に前に立つ景ちゃんを、わたしは知らない。嵐の中、全力疾走する景ちゃんをわたしは知らない。

わたしの知らない景ちゃんが、目の前にいて。

そして、わたしの知らない景ちゃんの隣を、ケイコの親友として走るのは、百城さんだ。

景ちゃんが『ケイコ』を演じるということ……『カレン』を、百城さんを親友だと認識し始めているということ。

たったそれだけの事実に、わたしの心は今この瞬間も吹き荒れる嵐よりも強く、強く狂ってしまいそうだった。

『……カレン』

立ち上がろうとする百城さんの手を、景ちゃんが掴んで引き留める。

台本にはない動き。役に入り切っている証明。

それは、これ以上に進んで、カレンが傷つくことを恐れる……心の揺らぎ。これ以上ないほどに、繊細で壊れてしまいそうな、ガラス細工のアドリブだった。

『ケイコ、大丈夫』

それでも、スターズの天使はブレない。

百城さんは、膝を折った。座り込んだままの、景ちゃんと視線を合わせて、一言。

『行く』



たった、一言。けれど、景ちゃんのアドリブに対する、完璧な返答。柔らかな笑みの中に、プライドが見える。

百城千世子の芝居は、夜風景には喰わせない、という……一人の女優としてのプライドが。

だからわたしは、その一言に込められた意味に、身体が芯から熱くなった。

景ちゃんが……いや、『ケイコ』が、ゆつくりと立ち上がる。

『うん。行こう』

画面の先。あの中は、二人だけの世界。

「……景ちゃん」

あの世界に、わたしはいない。

☆☆☆☆

ずっと、自分の仮面は偽物なのだと思っていた。

百城千世子には、目標にしていた役者がいた。だが、千世子が彼のようになるためには、天性の『才』とでも呼ぶべきものが、ほんの少しだけ欠けていた。どちらが上か、どちらが下か、という話ではなく。ただ、彼は『持っていて』、千世子は『持っていなかった』。ただ、それだけの話だった。

多分、万宵結愛もそうなのだろう、と。千世子は思う。

あの子はきつと、自分にはない『何か』を持っていて。きつとその『何か』が、彼女が被る精巧な仮面を形作っているのだ。

磨きあげ続けてきた仮面で、上を行かれたことは、やはりショックだった。立ち回りも、表情の作り方も、細やかな所作も。役者に必要な全てにおいて、結愛の方が上に思えて……自分が負けたという事実を、千世子は受け入れたくなかった。結愛が芝居を学び始めれば、すぐに追いつかれてしまう、と。芝居の精度をさらに向上させることに、躍起になっていた。

でも、隣を走るこの子が、夜風景が、自分とは違う芝居の形を、思い出させてくれた。

「見えてきたよ、ケイコ」

そう。だから、みえてきたのだ。

芝居の台詞と、心の声が、奇しくもリンクする。

百城千世子は、一人の女優として夜風景の演技を肯定はしない。ただ、否定もしない。

千世子には千世子の信じる芝居があつて、景には景が大切にする芝居があつた。表情の作り方に、マニュアルはない。それぞれの役者が思い描く『いい演技』の形は違う。だから役者という生き物は、常に自分の理想を思い描いて演じるのだ。

認めよう。万宵結愛の仮面は、百城千世子よりも上だ。でもそれは『女優・百城千世子』が負ける事と、決してイコールでは繋がらない。

千世子は、結愛の演技が……彼女の仮面が自分よりも上だと、決めて、諦めていた。最初から、戦うことを放棄していた。でも、違うのだ。

——だって、彼女の隣で、主演の芝居はこんなにも輝いている。

演じることに、ワクワクしている。この映画を、最後までより良いものにしようとしている。

映画に向ける、芝居に対する、この情熱だけは。絶対に負けない。

——だから……見てるよね、万宵さん。

あなたが大好きな夜風景だけじゃない。

百城千世子の芝居も、必ずその目に焼きつけてみせる。

そんな風に。

そんな風に、らしくない熱を芝居に込めたせいかもしれない、と千世子は思った。

「……あ」

小さく、声が漏れる。

増水。溢れ出た水。まるで川のような水量のそれに、千世子は足を取られた。

判断が遅れた。反応が間に合わなかった。

——まずい。流される。

自分の事故は、そのままスターズの打撃に繋がる。

顔を守れば、リメイクのチャンスはあるだろうか？

ダメだ。撮影期間はもうない。この撮影で決めなければ、チャンスはない。

足か腕か。どこか怪我をしなければ、顔だけ無事でも残りのシーンに支障をきたす。

ごめんね、夜風さん、と。千世子は薄く引き伸ばした思考の余白の中で、謝罪した。

せっかく、ここまでできたのに。ようやく、自分の仮面と、演技と向き合ってくれたのに。

それが、こんな終わりに——

「カレンー！」

その瞬間すらも、夜風景はケイコだった。

千世子は、目を見張った。

景が伸ばした手に、手首を掴まれる。自分の腕を引き上げる力は思っていたよりも強くて、それでも景の軽い体では千世子を引き上げるには足りず……結果的に、二人の位置は入れ替わった。

振り回すように、遠心力を活かして体を放り出される。増水した水の流れの外に、はじき飛ばされる。

「行って」

短く。ただそれだけを言い残して。

千世子の身代わりになった景は、水に流されて斜面を滑り落ちていった。

夜風さん、と言いかけた喉が、

「ケイコー！」

別の名前を紡ぐ。

それは、ほとんど反射のように絞り出した台詞で。  
それを言った瞬間に、千世子の頭は真っ白になった。  
あれ？

次の台詞は？

違う。台詞なんて言っている場合じゃない。

ケイコを助けなきゃ。

ケイコを助ける？

景は、何と言った？

行つて、と。そう言つた。

ああ、そうだ。言つて、と。それが、景のメッセージだ。

私は、役者だから。

あの子も、役者だから。

だから。

言え、台詞を。

作れ、仮面を。

それが、私の仕事だ。

最後の、台詞は――

「――ありがとう」

★★★

綺麗な横顔だと思つた。

頬を伝うそれは、雨粒と見分けがつかないはずなのに。流れるそれが涙だと、はつきりとわかつた。

わたしと同じ、仮面じゃない。本物の表情で景ちゃんへの想いを吐き出す、百城千世子の横顔がそこにあつた。

頭が真っ白になる。ただ、見入つてしまう。呼吸も思考も、すべてを忘れて。

紛れもない『本物』の横顔が、そこにあつた。

「カット。オーケー」

呆然と呟いた手塚監督も、きつとわたしと同じ思いだったのだろう。

事故だ、と。誰かが呟く。

そう。あれは台本にあった動きじゃない。あれは事故だ。じゃあ、景ちゃんは……

『お願い！ 夜風さんを助けて！』

カメラ越しに響く百城さんの悲痛な叫びは、演技ではなく肉声だった。

それが、わたしを現実の世界に揺り戻した。

「……っ！」

「……結愛さん！ ダメです！」

プロデューサーの焦った声を聞くのなんて、いつぶりだろうか？

でも、わたしはその制止を無視して、台風の中へ飛び出した。

突風で、被っていたレインコートのフードがめくれる。

——どうでもいい。

「君、待ちなさい！」

監督から、怒号のような制止の声と感情が突き刺さる。

——どうでもいい。

雨があつという間に髪を濡らして、顔に張り付く。

——どうでもいい。

景ちゃんが、景ちゃんに何かあつたら、わたしは。

それに比べたら、わたしのつまらない葛藤なんて、

——どうでもいい。

走る。走る。走る。

雨の中を、ただひたすらに走る。

わたしは、二人の世界に入ることにはできない。こうやって、二人が駆け抜けた道を、追うことしかできない。それでいい、そんなことは、本当に、

——どうでもいい。

百城さんへの嫉妬なんて、

——どうでもいい。

ぐちゃぐちゃになっていた、わたしの感情なんて、

——どうでもいい。

だって、わたしは……



横合いからの鉄砲水だった。

体力には、自信があつた。最適なコースを、最短で走り抜けてきたつもりだった。だから、背後で千世子が足を取られた瞬間も、頭の中は妙に冷静で、至極当然の判断を下した。

私が身代わりになればいい、と。

ケイコはそう思った。そして、景もそう思ったのだ。

自分の撮影は今日で終わる。でも、千世子の撮影はまだ残っているから。ここで怪我をさせるわけにはいかない。

ケイコのカレンへの感情は、景の千世子への思いと、当然のように合致した。

「夜風さん！ 夜風さん！ 大丈夫!？」

こんな聚焦した千世子の声を聞くのは、はじめてだ。

背中に当たる感触は、やわらかい。スタッフが事故を防止をするために、事前に張り巡らせてくれていたネットに引っかかったのだと、景はようやくよく思い至った。

瞼を開く。

濡れた全身が、気持ち悪い。でも、それを言うのは今更か。台風の中を走りぬけたせいで、スカートの中までぐしゃぐしゃだ。

だけど、それよりも。一番気になるのは、

「千世子ちゃん。私……顔、怪我してない?？」

食い入るように顔を覗いていた千世子の瞳がすつと細まり、そして笑った。

「役者さんだもんね。大丈夫。綺麗なままだよ」

「綺麗じゃないよ、バカあ……」

「え？」

急に横合いから割り込んできた声に、今度は景が目を丸くする番だった。

ずっとずっと、聞き慣れている親友の……けれど、とても珍しい涙声だった。

「せつかく綺麗なのに、こんなに泥だらけになって……あんなに無茶して、身体も冷やして」

「私も、泥まみれなんだけど？」

からかうように、千世子が言う。

「百城さんはいいの！ でも、景ちゃんはダメなのっ！ この、バカっ……バカバカ。バカっ！ 景ちゃんのバカあ！」

ボキヤブラリーののない罵倒を伴って、覆い被さるように抱きつかれる。

「結愛ちゃん……私のこと、心配してくれたの？」

「当たり前でしょバカっ！ 親友なんだから！」

そうか、と景は今さら気がついた。

泥まみれになって、びしょ濡れになって、それでも抱き締められて、ようやく気がついた。

人の気持ちかわからない。だから、親友が自分のことをどう思っているのかもわからない。景はそんな風に、そんなつまらない理由で、結愛のことを疑ってしまっていた。

「ほんとに……ほんつとに……心配かけないですよ……もう」  
「ごめんね」

「いつも、謝ればいいって思ってるでしょ……」

「うん。結愛ちゃん、やさしいから」

「……バカあ」

でも、そんなことはどうでもいいのだ。

普段の言動が、言葉が、所作が、すべて演技だつて構わない。仮面を被っていたとしても関係ない。

だって、夜凧景と万宵結愛が積み重ねてきた関係は、それだけで？  
なるほど、脆くはないから。

それに景は、自分をこんなに強く抱きしめてくれるこの腕が、冷えた身体に感じる温もりが、演技ではないことを知っている。

そうだ。演技なんかじゃない。

本物か、偽物か。

最初から考える必要もなかった。比べる意味もなかった。

息を切らして走って駆けつけて、自分のために自分よりも顔をぐしゃぐしゃにして、泣いてくれる。そんな親友の言葉を、振る舞いを、本当か？かで判断する方が間違いだ。

ゆつくりと自分の身体に移っていく熱を感じながら、景はそう思った。

「結愛ちゃん……落ち着いた？」

泣いている子どもを、あやすように言う。

「景ちゃん、ごめん……離れるね」

だけど、謝る親友の声が、なぜか急にいじらしくなって。

「もう少し」

「え？」

「もう少し、このままでいて」

「でも……こんなにくっついたままじゃ、顔も見えないよ」

「それがいいの」

今度は景の方から結愛を抱きしめた。

顔なんて、見えなくていい。



仮面なんて、どうでもいい。

だって、確認する必要がないから。

万宵結愛は、夜凧景の親友。

景が結愛を想い続けている限り、その事実は絶対に揺らがない。心配することも、疑うことも、何一つない。

景は、結愛の肩に頭をのせて、聞いた。

表情は、見えない。

見ないまま、聞く。

「ねえ、結愛ちゃん」

「なに？」

「私に、夢中になってくれた？」

どくん、と。

重ねた胸の心臓が、より一層跳ねた気配がして、

「……惚れ直したよ、バカ」

やっぱりその顔をみておけばよかったと、景は少し後悔した。

## 宵過ぎて夜。百の星へ手を伸ばす

景ちゃんは、丸まって寝ることが多い。

丸まって寝る人は、心理学的に甘えん坊の人が多いそう。景ちゃんはずつかり者のお姉さん、という印象が強いし、実際そうなんだけど……でも、こんな風に身体を丸めて寝ている姿を見てしまうと。本当は誰かに思いつきり甘えたいんだろうな、って。そう思えてならない。

あの日の撮影のあと、景ちゃんは風邪をひいて寝込んでしまった。やっぱり、長時間雨に打たれたのが祟ったらしい。お医者さんによると、一カ月続いた慣れない撮影の疲れも出たのだろう、ということだった。今もぐつすり眠っていて、起きる気配はない。

丸くなっているせいで、抱き枕のようになつて微妙にはだけているタオルケットをかけ直そう……として、思い留まる。せっかく休んでいる景ちゃんを起こしてはいけない。かといって、はだけたまま体を冷やしてもよくないので、棚から予備のタオルケットを取り出して、ゆつたりと全身を覆うようにつけた。エアコンの設定温度もゆるめにしておく。

「よし、と……」

かわいい寝顔から離れるのは名残惜しい。景ちゃんの寝顔なら、ぶつちやけ何時間でも眺めていられる自信があるけど、この島でわたしができることはもうない。

「……じゃあ、わたしは先に帰るね、景ちゃん」

小さな声でお別れを言って、そつと部屋のドアを閉める。

またしばらく、景ちゃんとはお別れだ。わかっているけども気分が沈むことに変わりはなく、廊下に出たわたしは目を閉じて深く溜息を吐いた。

「夜風さん、起こさなくていいの?」

「うっひゃあ!」

繰り返しになるが、目を閉じて深く溜息を吐いていたので、背後から気配なく、それも耳元で囁かれたその声に、わたしは死ぬほどびつ

くりした。

「あ、ごめんね。そんなに驚くと思っただけでなくて」

「も、百城さん……？」

セーラーの襟がかわいらしい、ワンピースの私服姿の百城さんは「しーっ」と人差し指を立てて笑った。

「あんまりおっきな声出すと、夜風さん起きちゃうよ」

たしかに、と思う気持ちと、そっちが後ろから声かけてきたからじゃん！ という気持ちとが半々でまた叫びそうになったけれど、わたしは大人なのでお口にチャックをして頷いた。

「……百城さんも、景ちゃんのお見舞い？」

小声で聞く。

「んー、それもあつたけど。どちらかといえば、万宵さんとお話したくて探してたんだ」

「わたしと？」

「うん。部屋を訪ねてみてもいなかったから。あなたのプロデューサーさんに聞いたから『まず間違いなく夜風景の部屋でしょう。間違いありません』って」

あのホクロ、ほんと余計なことしか言わないな……

「夜風さんのお見舞いもしたかったから、一石二鳥って思ってたんだけど……やっぱり寝てるよね？」

「ぐっすりお休み中」

「そっか。じゃあ、起こさない方がいいね」

頷いた百城さんは、また笑って、

「ねえ、万宵さん。私とちよつとデートしようよ」

「あ。わたし、景ちゃん以外とデートしない主義なので」

デート、という単語に反応して、反射的に何も考えずにそう返す。それは脳ではなく、脊髄に頼った返答だった。

しまったと思った時には既に遅く。百城さんは信じられないようなものを見る目（と感情）で、大きな瞳をぱっちり開いて数回、瞬きを繰り返し……遂に堪えきれなくなったのか、くつくつと喉を鳴らした。

「……万宵さん。私、一応『百城千世子』なんだけど  
はいはい、存じ上げていますよ。」

「私のデートのお誘いを断られる人、なかなかいないよ?」

あー、うん、そうだね。わたしもそう思うよ。

でも、ここはあえて……こう返させてもらおうかな。

「それは傲慢だよ」

「うん。そうかも」

あ、くそ……

軽く流されたな!

「じゃあ、デートじゃなくていいから、帰る前にちよつと私とお話しようよ。浜辺でも散歩しながらさ」

★★★

夕焼け空はもう落ちて、空に星が輝き始める時間帯。

浜辺には、わたしと百城さん以外に人はいなかった。

「万宵さんは、先に帰っちゃうの?」

「うん。最初の予定より、かなり長居しちゃったしね」

「そっか。夜風さんにちゃんと挨拶していかなくていいの?」

「大丈夫。今は平気」

「……ふうん」

あれだけ対立していた百城さんと、こうして普通に会話できているのが、なんだか少し不思議だ。

「百城さん」

「んー?」

「昨日の演技、すごくよかった。見惚れちゃった」

だから称賛の言葉も、驚くほど自然にするりと喉から出た。

前を歩いていた百城さんが、足を止める。

「……ありがとう。嬉しい」

振り返って笑うその表情はいつもより少しあどけなくて、本当に嬉しそうで。

百城さんの素顔の一面が、ひよっこりと顔を出したようだった。

「あの時の演技……自分でも見返して、びっくりしちやつたんだ」

風に揺れる髪に手を当てて、視線が自然に上を向く。

『ありがたい』って。ただその一言を言うだけの、私の表情……ぐちやぐちやで、不細工で、感情のコントロールなんて少しもできていない、酷い顔だった」

でも、と。天使は朗らかに笑う。

「そういう私の横顔も、意外と綺麗だった」

見上げた先には、輝く星がきらめいていて。

今、そういう顔をできる彼女が……やつぱり羨ましいな、と。わたしは思った。

「景ちゃんのお芝居に、引つ張られたね」

「引つ張られるどころか、引きずられたよ。あの子、ブルドーザーでゴジラだから」

「あゝ、それは、まあ……」

なんとなくわかるなあ、その例え。言い得て妙、というか、ぴったりというか。

熱線を吐きながら土木工事している景ちゃんを想像していると、少しおもしろくて、わたしもまたくすりと笑った。

「すぐくおもしろい子だね、夜風さん」

「うん。景ちゃんはすぐくおもしろい子だよ」

「接している内に、万宵さんがどうして夜風さんのことを大切にしているのか……なんとなく、わかっちゃった」

それは……なんか、嬉しいようで困るような、複雑な気持ちだ。

景ちゃんの良さを知ってもらえるのは嬉しいんだけど、景ちゃんのそういうところはわたしだけで独占しておきたいっていうか。

「万宵さん、ごめんね」

不意に、百城さんが頭を下げた。

「……それは、何に対する謝罪？」

「いろいろ。一番はやつぱり、二人の関係にちよつかいを出しちやつたことかな」

顔をあげて、真っ直ぐにわたしを見ながら、百城さんは言った。

「私ね、嫉妬してたんだ」

ポツリ、と。でも、はつきりと。

「私よりも精巧な仮面を被ってる人に、興味を持って、勝手に比較して、負けた気になって。だから、もっともっと、綺麗な仮面を作らなきゃ、って。そう思ってた」

わたしに向かって話しかけている、というよりも。

それは、自分自身に対して独白しているかのように、淡々と並べられる言葉だった。

「でもね、夜風さんと一緒に演技をして気づいたの」

力強く、決してブレることのない、

「私の芝居は、もっと上手くなる」

自信と信念の証明。

それは、否定であり肯定だ。

景ちゃんの芝居を通して見つけた、新しい可能性。自分の芝居に疑問と嫌悪を抱いたからこそ、百城さんは景ちゃんの演技を受け入れた。景ちゃんが仮面の演技を、百城さんの映画への想いを大切にしたからこそ、百城さんは自分の芝居を再認識できた。

暗い闇の中、手を伸ばし続けてきたからこそ届いた、新しい可能性。

「だから……夜風さんもあなたも喰らって、私はもっと上へ行く」

星のような輝きを伴う、百城千世子という女優が、わたしの目の前にいた。

「万宵さんは、どうするの？」

眩しい問いだった。

試すような視線。

挑発するような口元。

本当に、いたずらっ子な天使だ。

「追いかけるよ」

ずるいよね。

そんな目で見られたら。

そんな『期待』の感情を向けられたら。

応えるしかないじゃん。

そう思える自分が、今ここにいることに。わたしは驚いた。

「……映画の世界に、魅力なんてないって思ってた」

夜空に浮かぶ星を見ても、ただ漠然と「きれいだな」と感じるだけで。星になりたいとは欠片も思わなかった。

作られた台詞。

作られた表情。

作られた所作。

それらをまとめて、演技と呼ぶ。

ずっとずっと、意味のない偽物だと思っていた。

「でも、二人の走る姿を見て……目が離せなくて……釘付けになっちゃった」

景ちやんだけでも、百城さんだけでもなく。

二人が揃っているからこそ、二人の演技にわたしは心奪われた。

「わたしも同じだよ。嫉妬したんだ」

画面の中。降りしきる雨の中。

冷たさを感じさせない、有り余る激情の熱。まったく知らない景ちやんの感情を、わたしは見た。

二人だけの世界を、わたしは見せられた。見せつけられた。

卑しくても。

浅ましくても。

見苦しくても。

ああ、認めよう。

「どうして、わたしはあそこここににいないんだろう、って」

わたしは、あれがほしい。

「ふふっ……いいね」

くるり、と。上機嫌に回るワンピースの裾が揺れる。

「夜風さんに、心奪われたって顔してる」

「元々、大好きでぞっこんだよ」

まあ、そんなことを言っても、

「まあ……その感情すらも仮面だつて言われたら、わたしは否定しきれないんだけどね」

笑われる、と思ったけど。

百城さんは、わたしのその皮肉を笑わなかった。

「そっか。自分の顔は、鏡がないと自分で見れないもんね。でも、大丈夫。私が保証してあげるよ」

そつと、左の指先が結ばれた。

ぐつと、右の指先が頬に触れた。

「仮面を被ったままじゃ、あんな涙は流せない」

……まいったなあ。

若手きつての売れっ子女優に保証されたら、照れ隠しでも否定できないよ。

「……本物だつて。思ってもいいのかな」

「うん。私と同じ。不細工でかわいい泣き顔だった」

はつきり言うなあ……もう。

でも多分、わたしが百城さんの横顔に見入っていたように。

百城さんも、景ちゃんを抱き締めるわたしの横顔を、しっかりと見てくれていたんだろう。

「万宵さん」

「うん」

「また私と、共演してくれる？」

コラボ、ではなく。

共演、と百城さんは言った。

「わたしでよければ、喜んで」

そのためにまずは、二人がいる場所まで追いつかなきゃいけないけ



ど。

でも、少なくとも……追いつきたいと思えるようには、なったからだから、きつと大丈夫だ。

「よかった。でも私、やっぱり嫉妬深いから」

百城さんの細い指先が、顔から落ちて胸元に添えられる。

「今度共演する時は」

手のひらが開く。

指先が伸びる。

「私が、万宵さんの心を鷲掴みにするね」

そして、掴まれた。

「……っ。」

揉まれた。

「……………」

もみもみ。

「あああああああ!?!」

絶叫。

「なにすんのっ?! 千世子ちゃん!?!」

「…………ちっ。やっぱりおつきいね」

胸を抑えて慌ててうずくまると、天使は柔らかい笑みを浮かべたまま、先ほどの感触の余韻を楽しむかのように指をうねうねと動かして、軽く舌打ちした。

いや、勝手に触ってきたのそっちなのに、なに舌打ちしてんの!?!

「け、景ちゃんにもこんなに強く揉まれたことないのに……!?!」

「あはは。万宵さん、押しが強いタイプに見えるのに、こういう咄嗟の行動には弱いんだね」

咄嗟の行動には弱いんだね、じゃないよ!?!

誰だって突然おっぱい揉まれたらびっくりするわ!

「もうやだ……汚されたあ」

「ただのスキンシップじゃん」

「う、訴えてやる……」

「スターズの権力で握り潰すから大丈夫だよ」

「何も大丈夫じゃないっ！」

「これで、夜風さんとは違う関係になれたね」

「嫌だよこんな爛れた関係っ!? ていうか絶対認めないし!」

ああ、やだやだやだ。まるでペットをいじり倒すような、形容し難い感情がふわふわ刺さってくる。

「ところで万宵さん、いつ帰るの?」

「明日の朝イチ」

「そつか。じゃあちよつと、ゲームでも付き合ってよ」

言いながら、百城さんは懐からスマホを取り出した。

「いいけど……一緒にやれるゲーム、あるかな?」

「いつも配信でやってたやつ、あれやろうよ」

起動された画面を見て、わたしは二重の意味でぎよつとした。

まず、それが百城さんのイメージに合わない……銃をバリバリ撃ちまくる、バトルロワイヤルゲームだったこと。

そしてなによりも、そこに表示されたプレイヤーネームに、とても見覚えがあつたことだ。

「サ、サウザンドエンジェルさん……?」

「うん。散弾銃が好きなのサウザンドエンジェルさんだよ」

前に言わなかったつけ、と。百城さんは真顔のまま小首を傾げる。

「『いつも、配信みてます。ファンです』」

はじめて会ったあの時と、まったく同じ声音でそれを言われると、もはや苦笑いすら浮かべられない。

「じゃあ、デュオでいい?」

「いいよ」

浜辺に、腰を下ろす。

企画でもない。仕事でもない。誰に見せるためでもなく、肩を寄せ  
てゲームをする。

「どこ降りる？」

「人がいっぱいいるところ」

「好戦的だなあ」

夜空には、百の星。

ポリウムは最大。

わたしたちのわだかまりを、打ち消すように。

無骨な銃撃音が、涼やかな潮騒に混じって響いた。

## 銀河鉄道の夜編 登山配信

見上げれば、雲一つない青い空。

青々とした緑が、目にとても優しい。

デスアイランドで見た、景ちゃんと千世子ちゃんの演技。あの二人の世界へ、自分も飛び込みたい、と。心機一転、役者になる決意を新たにしたわたしは、今……

「……あゝ、ほんと、自然はいいねえ」

山登りをしています。

山登りをしています。

ええ、はい。

大事なことなので二回言いました。

『これはいい景色』『絶景かな』『ゆあゆあの声と美しい大自然、ベストマッチ！』『ほんとか？ この山絶対手入れされてないだろ。草ボーボーじゃん』『詳しいな』『登山自信ニキ、解説オナシヤス』『いや、これ明らかに一般の登山道じゃねーもん』『へー、そうなんだ』

ああ、すでに勘のいい視聴者の方は気付いていらっしやるね。コメント欄の登山ニキが仰る通り、わたしが今登っているのは一般向けの登山道ではなく、わりと……というか、かなり荒れ果てた急勾配だ。景ちゃんと同じく、わたしもそれなりに体力には自信がある方だけけどこの斜度は中々足腰にくるものがある。

「はあゝ、きつつ……」

『がんばれゆあゆあ』『負けるなユアユア』『ビール飲みながら応援してるぞ』『クス』『酒カス』

かーっ、わたしもビール飲みてえゝ。舐めたことしかないけど！

「わたしはスポドリで充分かなあ……」

山登りでは、水を飲み過ぎると逆に疲れてしまう。ほどほどに休憩しつつ、脱水にならないようそれなりに水分を補給しながら、前に進む。

さて、ここでわたしの装備を説明しよう。下は動きやすいガゼットクロッチが施されたハーフパンツに、撥水速乾性に優れたブラツクのスポーツタイツ。上は白のトレッキングシャツに加え、薄手のマウンテンパーカーを着ている。髪の毛は編み込んでまとめて、帽子を被った。ここまでなら普通に登山を楽しむ森ガールなんだけど、わたしは片耳にイヤホンを仕込み、ついでに背中のリュックから小型カメラを覗かせている。言うまでもなく、この登山の様子を配信するためだ。

「…………ふう」

『さすがのゆあゆあも口数が少ないな』『そりやそうだろ』『むしろ配信しながら登山する体力が異常』

「あはは、口数減ってごめんねえ。まあ、しばらくはわたしの息遣いと大自然を楽しんでよ」

耳に仕込んだイヤホンは、コメントを倍速で読み上げるように設定してある。画面を見ずに安全に配慮しつつ、首もとにつけたマイクで楽しく会話をしながら、登山ができるという寸法だ。他に登山客がいれば、きつとわたしは独り言をぶつぶつ呟く不審者に見えたに違いない。

ま、この山、全然他の登山客とすれ違わないんですけどね〜！ わはははは！ ……はあ

どうして、わたしが山登りをする羽目になったのか？

事の発端は、デスアイランドから帰ってきた直後まで遡る。

★★★★★

「ひげのおじちゃん！ ただいま！ 帰ってきて早速なんだけど……わたし、このままじゃダメなの！ もっとちゃんとしたお芝居がしたいのー！」

「そうか。じゃあ山登ってこい」

★★★★★

やっぱ。

回想するほど中身がないわこれ。概要を簡潔にセリフだけ書き出したら、四行分くらいしかないわこれ。

もう少し、ちゃんと思り返してみよう。

★★★

「はあ!? 登山?」

山に登れ。

いきなりそんなことを言われて「はいそうですか、じゃあ行ってきます」と返す人間がこの世にいるわけがない。

当然だ。おじちゃんの話に脈絡がないのはいつものことだけれど、さすがに意味がわからない。説明しろ! 説明!

「あのさあ、おじちゃん……映画の撮影見学から帰ってきて、やる気に満ち満ちている今のわたしに、いきなり登山しろ、はないでしょ。なに? 大自然の景色に触れて表現力を養おう、みたいなスピリチュアルな試み? そういうのは間に合っているんだけど」

「まあ、当たらずも遠からずだな」

「当たってんの!?!」

このひげ、わたしがゴネをゴリ押ししてデスアイランドに旅立ったから、腹立てて適当なことほざいてない? 大丈夫?

「べつに適当ぶっこいてるわけじゃねえよ。良かったな、役者をやる理由ができて」

……なあんだ。お見通しか。

わたしがデスアイランドの撮影を見学して、何を得て戻ってきたのか。

ひげのおじちゃんは、ちゃんとわかっているようだった。もしかしたら、プロデューサーがそれとなく伝えていたのかもしれない。

「……まあ、こっちの事情をある程度理解してくれているのはわかったけどさ」

「おう」

「せめて、何をしに行けばいいかくらいは教えてくれない？」  
「そうだな……俺が前に居酒屋で話したこと、覚えてるか？」

「おまえに足りないものは何だと思う？」

「お芝居の実験経験」

「まあ、そうだな。間違っていない。60点の解答だ」

「平均ギリギリくらいじゃん。低くない？」

「ああ……あの60点ってやつ」

「それだ。役者としてお前に足りないもの、残りの40点をきっちり拾ってこい」

「さっき言ってた『役者をやる理由』は40点分にはならないの？」

「当たり前のことかもしれないけど、わたしとしては結構大きな変化だったんだけどな。」

でも、おじちゃんはまた首を横に振った。

「それじゃまだ半分だ」

「じゃあ、山に登れば、残りの20点分が見つかるってこと？」

「ああ。その山には、ちょうど舞台のために山籠もりしている役者がいる。そいつに会って『役作り』について学ぶのが、次のお前の課題だ」

は？

舞台のために役作り？

実際に山に登って？

？でしよ？

「名前は明神阿良也<sup>みょうじんあらや</sup>。最近、お前が世話になってる劇団天球の主演俳優で、巖のじいさんの秘蔵っ子だよ」



それにしても、それにしても、だ。

千世子ちゃんとは比べてわたしに芝居の実践経験が不足しているのはそりやもう痛いほど理解しているつもりだけど。しかしかといって、こんな山の中にまで役者さんに会いに来る価値が、本当にあるのか。甚だ疑問である。

もしかしたら体力作りみたいな別の目的や意図があるのかもしれないけど……うーん、でもなあ。わたし、元々体力にはそこそこ自信あるしなあ。意味があるとは思えないんだよなあ。

まあ、世の中には女兒向けアニメのテーマソングを流しながら有り得ない急斜度を進んでいく登山家の人とかもいるらしいし。今回の登山も、配信者として貴重な経験になるって考えるべき……なのかなあ。

悶々と思いを回しながら黙々と歩いていくと、そこそこ開けた場所に出た。隅の方には、こじんまりとした小屋もある。もしもこの山がもつと整備された登山道だったなら、休憩所とかがありそうな雰囲気だ。ちようどいいので、ここで一休みしていくことにしよう。

「よいしよつと……ここらへんでちよつと機材の整備とか兼ねて、休憩しまーす。マイクとカメラも一回切っちゃうから、みんなまた後でね〜」

『おつかれ〜』『ユアユア、乙』『休憩大事』

「ふい〜、結構登ったなあ……」

マイクとカメラをオフにしてリュックサックを下ろし、大きく伸びをする。さつきまでは鬱蒼と茂っていた木々で視界を遮られていたけど、ここまで登るとさすがに眺めがいい。

ちようど休憩もしたかったところだし……うん。本当に、ちようどよかった。

「配信用のマイクとカメラは切ったよ。いい加減、隠れていないで出てきてくれないかな？」



誰もいない茂みの奥に向かって、語りかける。

草の濃い緑に紛れて何も見えなかったけど、こちらに向かって刺さる『驚愕』と『困惑』の感情が、そこに人がいることをはつきりと示していた。

まったく。

わたしにかくれんぼで勝てるわけがないんだから、早く出てきてほしい。

「……驚いたな、いつから気づいてた？」

「あなたがわたしの後をつけはじめた、最初から」

がさごそ、と。茂みの奥から陽炎のように、一人の男が顔を出す。

背丈は、180ほどの痩せ形。背中の中ほどまである、ぼさぼさの艶のない黒髪を括っついていて、目元も隈が濃い。顔立ちは端正な部類に入るだろうけれど、草と泥にまみれた今の彼を見て、一目惚れするよ  
うな女の子はいないだろうと断言できる。

ただ、その瞳には惹かれるものがあつた。

決して大きいわけではない。造形が特別整っているわけでもない。それでも、こちらを品定めするかのように爛々と輝くその瞳は、思わず見入ってしまうような不可思議な魅力に満ちていた。

なるほど、役者だな、と。思わず納得する。

彼が、明神阿良也。

演劇の世界で賞を総なめになっている、巖裕次郎の秘蔵っ子。

とりあえず、印象が良くなるように笑みを貼りつけて、わたしは会釈した。

「……はじめまして、明神さん。万宵結愛です。舞台役者としては駆け出しですが、七生さんや亀太郎さんにお世話になってます」

「うん。聞いている」

大きく足を上げて草むらから出てきた明神さんは、手に猟銃を持っていた。そう、動物を撃ち殺すための『猟銃』だ。

「……それ、本物ですか？」

「……？ 当然だろ。俺は今度、マタギの役をやるんだ。本物の銃

じゃないと、本物のマタギの経験を喰えないじゃないか」

経験を喰う、と。

当たり前のように、彼は言った。

なるほどね……こういうタイプか。なんとなく、おじちゃんの狙いが読めた気がするよ。

「……それにしても、巖さんの考えていることがわからないな」

無造作に猟銃をぶら下げたまま、明神さんはゆっくりとこちらに近づいてくる。

その動きは、まさしく獲物を仕留めるために品定めするマタギのようだった。

「どうしてきみが『巖さんのお気に入り』なのか。こうして、実際に会ってみればわかると思っていたんだけど」

視線に交わる感情から『好奇心』が消え失せていく。

逆に、色濃く、ねっとり絡みついてきたのは『嫌悪感』と『嫉妬』だ。

「やっぱり、理解できない」

ていうか、わたしが……巖裕次郎のお気に入り？

実際に会ったこともないのに？

明神さんは、何を言っているんだろう……？

「いい役者は臭う。たしかに、きみからは独特の臭いがするよ」

パーソナルスペースを、完全に割って。

そのまま舌を伸ばせば、わたしの頬を舐め取ることができそうなほどに顔を近づけて、明神さんは囁いた。

「本当に……鼻が曲がりそうな、ひどい臭いだ」

## 共喰い

初対面の男に臭いと言われました。

なんだコイツ……失礼な人だな。

ていうか何？ 千世子ちゃんといい、この人といい、名が売れてる役者は最初に何かインパクトワードを吐かないと気が済まないの？

「……あ、あはは。そうですね。わたし、ここまでがんばって登ってきちゃったから、結構汗かいちゃって。汗臭いですよね！」

その物言いにはとても腹が立ったが、わたしはこの人から教えを乞うように、ひげのおじちゃんから言われている。最初から仲違いしたりケンカをするのは、あまりよろしくない。わたしは誤魔化すように苦笑いを浮かべて、マウンテンパーカーの前を開け、パタパタと仰いだ。

すると、明神さんはまた目を細めて……否、今度は露骨に、至極嫌そうに顔を顰めた。

「きみ、それ……無意識にやってんの？」

「え？」

「だから、それが臭いって言っているんだよ」

人当たり良く笑いかけたはずが、返ってきたのはより強い不快感。

それが……臭い？ 意味がわからない。それって、一体どれのこと

？

「巖さんには巖さんの考えがあるんだろうけど、俺はきみを認めない」

ああ、なるほど……。

わたしは、ようやく気がついた。

大仰に。鼻をつまむような所作を伴って。

役者、明神阿良也は、わたしを小馬鹿にしていたのだ。

「俺はきみに興味がないし、きみに教えることも何もないよ。自分の役作りで忙しいんだ。帰ってくれ」

言いながら、明神さんは猟銃を担いで立ち上がる。そして、さつさと歩いてまた森の奥へと消えていった。

「うわあ……」

取り付く島もない、とはこのことか。

「どうしよう……」

臭すぎる、というあの言葉の意味。

実際に猟銃を手にして打ち込む、役作りの姿勢。

ひげのおじちゃんが次の課題として、わたしを明神さんに会わせた意味は、うっすらとだけ見えてきた。しかし演技を教わるためには、そもそもわたしに興味を持ってくれないと、どうしようもないわけ。

あまり、悠長に悩んでいる暇はない。そろそろ、日も落ちてしまう。

「マタギの役作り……獣……臭い……」

明神さんにわたしを観てもらうためには、どうしたらいいだろう？

考えろ。

考えろ。

考えろ。

そう、例えば……景ちゃんなら、どうする？



「憑依型カメレオン俳優。明神阿良也」

黒山はあらためてその名前を確認するように、呟いた。

「役作りってのは、どんな役者でも大なり小なり行うもんだが……コイツは異常だな。マタギの役をやるからって、普通は猟銃の免許まで取らねえだろ」

黒山の隣に座る巖は、それを鼻で笑う。

「べつにおかしいことじゃないさ。あいつは『経験を喰う役者』だ。役作りに必要なことなら、なんでもやる。それに、一度銃を撃つてみたって言ってたってたしな。ちやうどいい機会だったろ」

「……冗談か？」

「冗談だ」

「真顔で冗談言うなジジイ。笑い所がわからねえんだよ」

巖は真顔で冗談だ、と流したが……少なくとも、本当に熊が出没する山に売れっ子の舞台役者を放り込むのは、冗談では済まされない。

「それにしても、よく許可が下りたもんだ」

「昔馴染みの伝手を頼ったらどうにかなった」

あつさりそう言つてのけるあたり、演劇界の重鎮は伊達ではない。

「……心配じゃないのか？」

「あいつも、もうガキじゃねえよ。信頼できる猟師に指導も受けさせたいし、とりあえず銃が扱えるようになったのは俺も立ち会って確認した。なにより、実際に熊に出会うとは限らん」

「もしも出たら？」

「それこそ、阿良也が望んでいたことだ。いい芸の肥やしになる」

「イカれてんな」

「違うな。俺たちがイカれてるんじゃない。役者っていう『イカれる生き物』の手綱を握って指導する。それが俺たちの仕事なのさ」

だから、役者が望む『役作り』のためなら、最大限のサポートを惜しまない。

巖は阿良也の役作りに対して、どこまでも真摯に向き合っていた。

「……ところで黒山、ユアユアの登山用具を揃えたのは、テメエか？」

「あん？ そうだが……それがどうした？」

「ついさっきの配信を見た。よく似合ってる。テメエにしてはいいセンスだ」

「……冗談か？」

「本気だ馬鹿。ウチの芝居が落ち着いたら、そっち系統の広告に出るのもアリかもな」

黒山は無言で天井を仰いだ。

冗談だと言ってくれ。

「あんたが阿良也の心配をしてないのはわかったよ。けど、ウチの小悪魔娘をそんな山に放り込んだのは心配じゃないのか？」

「心配に決まってるんだろ馬鹿野郎。当たり前のことを聞くんじゃないよ。ぶん殴るぞ？」

黒山は眉間を指でもみほぐした。

このジジイ、情緒が不安定である。

「問題は熊だけじゃねえ。最近は大人しくなってるが、阿良也は元々女癖が良くない。昔は女の家を転々としていたくらいだから。正直、ユアユアと二人きりにさせるのはものすごく不安だ」

「……冗談だよな？」

「本当だ。俺があいつを拾ったのも女の家だった」

「いい加減にしろよクソジジイ」

黒山はキレそうになった。初耳の情報が多すぎる。

「本当にそれでよく配信少女と阿良也を会わせようとしたな……！」

「そりゃ、必要なことだからだ。一通り経験を積んで、気持ち的にも一皮剥けたみたいだが、まだ足りねえ」

「何が足りない？」

「お前もわかってんだろ、黒山」

老人らしい乾いた指先が、鼻に向けられる。

「万宵結愛は臭すぎる」

わかってんだろ、と。

そう言われたあたり、巖も結愛の演技に関する問題点をはつきりと理解しているようだった。

「……臭すぎる、ね。でも、あんたが好きなのは臭い役者だろ？」

「あん？ 俺は元々ユアユアが好きだぞ。何をわかりきったこと言ってるんだテメエ」

てめえこそ何言ってるんだボケジジイ、と口走りかけたが、黒山はなんとか抑えた。

「……どんな演出家でも、映画監督でも。普通に考えりゃ、下手な役者よりも上手い役者を使おうとする。だがな、黒山。良い演技つてのは、なんだ？」

「あん？」

舞台演出家、巖裕次郎が。

映画監督、黒山墨字に問い掛ける。

「耄碌したか。今さらそんな問答して何になるってんだ」

「御託はいい。答えろよ、小僧」

自分のことを『小僧』呼ばわりできる人間は、この広い業界の中でも少ない。黒山は溜息を吐きながら、頭の後ろを雑にかいた。

そして、答える。

「本物を伝えられること」

「はっ……ドキュメンタリー映画の名手らしい答えだな」

本物を撮ること。

本物を伝えること。

本物を観客に見せること。

肯定も否定もせず、巖は黒山の発言を鼻で笑った。だが、それは馬鹿にしている、というよりも最初から答えを知っていたような、そんな反応だった。

「観客に、演者の意図を、表現を……伝えたいことを伝える。なるほど。そういう観点から言えば、すでにユアユアは一定以上のレベルに達しているだろう」

だが、と。老人は言葉を重ねて、

「万宵結愛という役者は、自分を観てくれる人間がいなければ演じることができない」

一言で、その核心を突く。

流石だな、と。黒山は内心で感嘆した。

巖は、七生や亀太郎が結愛と共演したほとんどの舞台に、映像で目を通してしている。逆に言えば、巖はまだ結愛と直接会ってすらいない。直に演技を見なくても、二人が結愛に対して抱いた印象と、映像の中の演技だけで、現状の問題点を正確に言い当ててしまう。演出家としての年の功は伊達ではなかった。

「……配信少女の所作と演技は、視聴者に観られることによつて培わ

れたものだ。それがアイツの長所でもあり、弱点でもある」

「ああ。観られることが前提の演技。それ自体は間違いじゃねえ。演技も、役者も、表現も……芸術つてのは、見られることに意義がある。だが、最初から観られることだけを意識した演技は、突き詰めていけばいつか破綻する。それは、匂いのきつい香水を全身に振りかけているのと同じことだ」

だから巖は、万宵結愛を臭すぎる、と言うのだ。

そう感じるのは巖だけでなく、阿良也もそうだろう。

「テメエにいい様に使われるのは癪だが……しかしまあ、そういう意味でも、ユアユアを俺に預けたのは正解だ。黒山」

舞台は、演技を映像として加工して届ける映画よりも、観客と役者の距離が近い。より実況配信に近い形態で、演技に触れることができる。

結愛が役者として凄まじいスピードで成長しているのは、舞台を通して演技を学んでいるからだ。もしも最初から映画やドラマなどに触れていれば、結果はまた違ったものになっていただろう。

「……阿良也は、配信少女を成長させてくれると思うか？」

「さあな。阿良也の役作りも、言ってしまうえば『普通の役者』とはかけ離れている。理解できずに潰れちまうかもしれないし、それこそ熊に食われちまうかもな」

「おい、ジジイ。いい加減に冗談は……」

「冗談じゃねえよ」

眼光は鋭く、声音は低く。けれど、どこか楽しげに、堪えきれない期待を滲ませて。

「役者なんて生き物は所詮、喰うか喰われるか。それだけだろ？」

★★☆☆

夜になった。

山の中に光はなく、周囲は真っ暗な闇に満ちている。猟銃を肩にかけ、自分で起こした火を頼りに夜を過ごす。これも、実際に山の中に



入ってみなければわからなかったことだろう。

パチパチと音をたてる焚き火の中に、阿良也は細枝を投げ入れた。

(万宵結愛、か……)

阿良也と巖は、長い付き合いだ。口に出してこそ言わないが、役者としてはもちろん、人間としての自分をここまで育ててくれたのも、巖裕次郎だと阿良也は思っている。

だから、巖がどんな役者を好むのか。どんな役者を求めているのか。それは十分に理解しているつもりだった。だが、あの女だけはわからない。

万宵結愛の話は、事前に七生と亀太郎から聞いていた。二人とも、結愛の演技に随分と惹かれていたようだったが、阿良也には少し上達の早い新人の域を出ない、凡庸な役者にしか見えなかった。

(あれは、人の顔色を窺うのが上手いだけだ。そんな役者に価値はない)

舞台に出演したところで、話題性のある客寄せパンダにしかならない。直接会えば何かわかるかもしれない、と思っていたが、結果はますます失望させられるだけだった。

あんな女のために自分の役作りの時間を割く気はないし、ましてや巖裕次郎の舞台上に上がる権利などあるわけがない。

(戻ったら、巖さんに進言するか。また、俺の配役に口を出すな、とか言われるだろうけど……)

そこで、思考が中断する。

ささくれだった感情に支配されていた阿良也は、ふと森の奥を見た。

かさり、と。

物音がしたからだ。

(万宵か……？ 俺を探して戻ってきたのか？ こんな夜更けに?)

一瞬、そう思考した阿良也は、しかし直後にそれが間違いだったことに気がついた。

がさり、がさり、がさり。

明らかに二足歩行ではない、足音。即座に猟銃を構え、阿良也は闇

の奥に目を凝らした。

(熊……じゃない。サイズが小さすぎる。野犬か)

火を焚いていれば寄ってこない、と思っていたのは甘かったか。

阿良也は大きく深呼吸をする。

自分は今、役者ではない。マタギだ。獣を狩る人間だ。

銃を携え、猟を生業とする人間が、野犬如きに足を竦ませてはならない。

阿良也が『マタギになる』のと、奇しくも同時に。今までで、最も大きく地面を踏みしめる音がした。

(くる……っ！)

殺意を、向ける。

飛びかかってきた影は、予想よりも小さかった。

「ちっ……っ！」

爪をたてられた。頬から、血が流れる感触。だが、構うことはない。

阿良也は飛びついてきたそれを力のままに組み伏せ、銃口を突きつけた。そのまま、迷うことなく引き金を引こうとし……

「……は？」

すんでのところで思い留まることができたのは、本当に幸いだったと言えよう。

組み伏せた二の腕には、柔らかい感触があつた。視界が悪い闇夜の中で、自分を襲ってきた『それ』の正体を、遂に正しく認識する。

「うう……はっ……はあ」

阿良也が馬乗りになっている『それ』の息は荒く、地面に組み伏せた際の衝撃のせいか、目尻には涙が滲んでいた。

「……万宵？」

野犬、ではない。

阿良也が組み伏せ、銃口を突きつけている『それ』は、獣ではなく少女。

万宵結愛だった。

「……なんで」

一歩間違えれば、撃っていた。そのことにも血の気が引いたが……なによりも、今、この瞬間に至るまで、目の前の少女を野犬だと信じて疑わなかったことに、阿良也は絶句した。

（押し倒すまで……実際に触れるまで、本当に動物だと思った。思い込んでしまった……俺が？ 思い込まされたのか？）

普通なら、近付いてくる人間を、獣だとは思わない。だがそこで、ようやく阿良也は気がついた。

闇の中で妖しく浮かび上がる、白い肌。自分が今、馬乗りになっている少女が衣服と呼べるものを、一切身に付けていないことに。

全裸だ。冬ではないとはいえ、この山の中で衣服を全て脱ぎ捨てる、その異常。一糸纏わぬ肢体を見下ろして、努めて冷静に、なんとか声を絞り出す。

「……万宵。なにしてんの？」

阿良也は、問う。

「……あはっ」

結愛は、笑った。

興奮していたのだろう。なんとか息を整え、ぐちゃぐちゃになった表情はそのままに、切れた唇が言葉を紡ぐ。

「やっと……こっちを見てくださいね」

「なにしてんの、って。俺は聞いてるんだけど？」

「なにをしている、と言われても……明神さんと同じですよ。役作りです」

「は？」

こんな間抜けな声が自分の喉から零れるなんて。

新しい発見だな、と阿良也は思った。

「わたしの親友なら、きつともっと上手くやると思います。でも、わたしは演技がヘタクソだから……だから、形から入ることにしたんです」

「それが、服を脱いだ理由？」

「はい。ちよつと寒かったんですけど」

形から入る。そう言うのは簡単だ。実際、役作りとしてそれは有効ではある。阿良也も今、マタギの役を掴むために猟銃を握っているのだから、役者としておかしいことは何も無い。

むしろ、そういう意味では納得できる。

たしかに、獣は服を着ない。当たり前の話だ。けれど、それを本当に実行する馬鹿が、どこにいる？

(……目の前に、いる)

阿良也は、続けて問いかける。

「どうして、こんなことを？」

「だって、明神さんはマタギなんでしょっ？」

その身体を抑えつけられたまま、女は嗤う。

当たり前のように、淡々と。己の思考を口にする。

「だったら……わたしが獣にならないと、明神さんはわたしを観てくれないじゃないですか」

上気した頬は赤い。

本来は艶やかなはずの髪の毛は泥だらけで。

唇の端からは、唾が漏れて。

そして、自分を見上げる瞳には獣のような卑しさが満ちていた。

「……へえ」

なるほど。これは獣だ。

彼女が何を追って、何に執着しているのか、阿良也は知らない。

けれど、この女は……本当に、自分を喰らおうとしている。

「いいね」

明神阿良也は、今まで数え切れない経験を喰ってきた。数多の人間の人生を、喰らってきた。

だが、

「こんなに必死で俺を喰おうとしてくる役者は、きみがはじめてだ」

興味が湧いてきた。

役者を名乗るには、それ相応の覚悟が必要だ。

——人の道を、外れる覚悟。  
この女は、それを持っている。

## 覚醒

「……じゃあ、とりあえず服着たら？」

明神さんはわたしを押しさえつけていた腕を解くと、少し視線を右にずらしてそう言った。

へえ。最初はいけ好かないくそ野郎だって思ってたけど……どうやら、紳士なところもあるらしい。なにより、今度はちゃんとわたしを見ている。

少し気分が良くなって、わたしは地面に寝そべったまま、明神さんを見上げて言った。

「素っ裸のわたしを見て何か言うことはないんですか？」

「エロい身体してると思うよ」

前言撤回。やっぱわたしの胸ちら見してるじゃねえかこの野郎。

でもまあ、とりあえずわたしに対していかがわしい、男の原始的な感情はほんの少ししか抱いていないみたいだし（わたしの力はこういう時も便利だ）、そこに関しては信用することにしよう。

身体を起こして、肌についた土や葉っぱをはらう。

「明神さん」

「阿良也でいい」

言いながら、明神さん……もとい、阿良也さんは上着を脱いで渡してくれた。いくら野犬の演技をしていたとはいえ、いい加減肌寒かったので、ありがたくいただいて羽織らせてもらう。

「服、どこに置いてきたの？」

「どっかそのへんにまとめて」

「……呆れたな。野犬でも、自分の荷物を置いてきた場所くらいは覚えてるんじゃない？」

「ごめんなさい。バカ犬なんです」

手首を丸めて舌を出すと、阿良也さんは言葉通り本当に呆れ果てたといった様子で肩を竦めて、焚き火の傍に座り込んだ。わたしもそれに倣って、近くに腰掛ける。

「それで、少しはわたしのことを観てくれる気にはなりましたか？」

「うん」

即答。にしやり、と。無邪気な笑みが添えられる。阿良也さんが笑うと、見た目の印象よりも幼い雰囲気が出た。

「最初と違って、おもしろいと思ったよ」

おもしろいと思った。

きっとそれは、この人にとって相手を評価する基準の一つなのだろう。

「でも、まだ足りない」

「……足りない、ですか？」

「うん」

阿良也さんは猟銃を火に掲げて照らした。年季の入った、けれどよく手入れされていることがわかる銃口が、鈍く輝く。

「君は、銃を持ったことはある？」

「ありません」

日本に生まれて普通に生活していたら、銃を持つ機会なんてない。わたしの答えが最初からわかっていたみたいに、阿良也さんは頷いた。

「だろうね。俺もそうだった。生まれてはじめて銃を持って、その重みを両手に感じて、命を預けて……今、こうして夜を過ごしている」

その銃の重みは、実際に手にしなければわからないもので。その銃が夜の闇の中で、どれほどの安心感をもたらしてくれるか。それは、実際に山に入ってみなければわからない。

「もちろん、免許を取るために銃を何回か撃ったことはあるよ。でも、俺がこの銃を一番頼もしく感じたのは、ついさつき……君という『野犬』に組みつかれた時だ。あれは、いい経験になった。ありがとう」「どういたしまして。わたしも身体を張った甲斐がありました」

人を実際に撃ちかけておいて「ありがとう」と言う阿良也さん。体に風穴が空きかけたにも関わらず、それを気にしないわたし。

どちらがイカれているのか、それともどちらもイカれているのか。悩ましい問題ではあるけれど、そもそも役者という生き物はイカれているのが正解、みたいなどころがあるので、正直どうでもいい。

「まあ、つまるところ……役者っていうのは、そういう生き物だと思うんだ」

「……え、どういうことですか?」

「役を一人演じる度に生まれ変わる。そのために……生きてる?」

「いや、なんで疑問形なんですか?」

「うん。とにかく、そんな感じ」

「どんな感じですか!?!」

説明になつてないよ! わからないよ!?

最初から天然っぽい雰囲気はあったけど……この人、さては役者のくせに口下手だな?

「わたしに何が『足りない』のか。はぐらかしてないで、教えてください。阿良也さん」

「……教えるも何も、君はもう気づいていると思うけど」

そこで、阿良也さんは言葉を区切り、自分の上着を羽織っているわたしをまじまじと見た。

「……なんですか?」

思わず、上着の前を強く締める。阿良也さんに『そういう感情』は一切なかったけれど、逆にそれが一切ないことが気持ち悪いということかなんというか。

「例えば、万宵は普段から裸になる?」

「なるわけないでしょう。裸族じゃあるまいし」

家の中で素っ裸で過ごす健康法、とかもあるらしいけど、わたしはそんな変態さんじゃない。

「うん。だよね」

チャキリ、と。

阿良也さんが握りなおした銃が、まるでオモチャのような音を立てた。

「普段は服を着ている君は、野犬になるために裸になった。だから、そういうことだよ」

ぬあーっ!

意味がわからないってば!



翌朝。服を回収して無事に野良バカワンコから人間に戻ったわたしは、阿良也さんに付き添って山を散策することにした。

朝の空気は気持ちよく澄んでいて、空もきれいに晴れている。だというのに、阿良也さんはどんどん山の奥に進んで、鬱蒼と木々が生い茂った森の中を突き進んでいく。

段々と周囲が薄暗くなってきた。

「そういえばこの山、本当に熊とか出るんですか？」

「出るらしいよ」

興味本位で軽く質問してみると、わりとあっさり返された。

いや、本当に熊出るんかい。ひげのおじちゃん、そんなところにわたしを放り込むとか、どうかしてるよ……帰ったら危険手当とか請求してやろうかな？

「なんでわざわざ森の奥の方に進むんです？」

「なんでって……奥に行かないと、狩れる獣に出会えないじゃないか」

「……え、本当に狩る気なんですか？」

嘘でしょ。

「べつに熊じゃなくてもいいけど、実際に獣と対峙して銃を撃たないと、役作りにならない。ここにきた意味がないよ」

狩る気満々の阿良也さんの発言に、わたしは思わず天を仰いだ。だめだ。あんまり空の青が見えなくなってきた。つらい。

「昨日の野犬を撃てればよかつたんだけど……逃したからね」

「……撃たれる前に逃げる賢い犬でしたね」

前方からは失笑の気配。最初の険悪っぷりを考えたら、軽口を叩ける仲になったのはとても良いことだけど、しかしわたしはこの人から何を盗めばいいのか。おじちゃんに出された課題の意図が、未だに見えてこない。

阿良也さんの役作りに対する姿勢は、間違いなく本物だ。それは疑いようがない。でも、わたしは別にマタギの役をやるわけじゃない

し、阿良也さんの真似をして銃をぶっ放しても意味ないしなあ……

「少し、休憩しようか」

「あ、はい」

「あつちに川があるから、顔でも洗ってくるといい」

「えっと……お気遣いありがとうございます？」

「どういたしまして」

思考はまとまらず、気分もすっきりしなかったので、お言葉に甘えてありがたく休憩させてもらう。阿良也さんに言われた通り、道に見えないような獣道を踏み分けていくと、本当に小さな川に出た。

水の中に手を差し入れると、それだけで指先がじんわりと冷えた。軽くすくって、顔をすすぐ。

「ふう……」

ひげのおじちゃんにも、

——おまえに足りないものは何だと思う？

阿良也さんにも、

——でも、まだ足りない

同じことを言われた。足りない、と。

何が足りないのだろうか？

役作りへの熱意？

役者を続ける覚悟？

「……」

水面には、わたしの顔が写っている。他人より整っているとは思いますが、ただそれだけの女の顔だ。

景ちゃんののように、天性の才を持っているわけじゃない。

千世子ちゃんののように、少しずつ積み重ねてきた演技への情熱があるわけでもない。

わたしは……

わたしは、なに？

水面には、わたしの顔が写っている。

ありのままの、わたしの顔が写っている。

——悪寒がした。

「っ……」

はつと顔をあげる。

気がつかなかつた。

わたしの特別な力は、基本的に人の感情の色を受け取るものだ。だから、考えに耽っていたせいもあるけれど、あまりにも原始的で直線的なその欲求に、反応が遅れた。

川を挟んで、わずか十数メートル先。大きな茶色の塊が、わたしを見ていた。

熊だ。

どこからどう見ても、熊だ。

こちらを見ている。感情が、突き刺さる。

犬や猫と戯れる時は感じなかった。意識したこともなかった。

『食う』

ただそれだけが、向けられる。

ある日、森の中、クマさんに、出会った。

いや、いやいやいやいや……洒落にならない。

熊、クマ、くま……

熊対策、熊対策つて、何をしたらいいんだっけ？

死んだふり？ 木に登る？ 背中を向けて走る……？

そうだ。阿良也さんなら……阿良也さんなら、銃を持っている！

「あら……」

やさん、と。叫ぶ前に、熊は動いた。

想像していたよりも、ずつとずつと速く。見た目よりも遥かに俊敏にそいつは動いて、わたしに向かって突っ込んできた。

身体を真横に倒して、地面を転がる。砂利が体に食い込んで、強く痛む。でも、気にしている暇はない。

はやく逃げ……

視界の隅を、大きな塊が横切った。

熊が腕を振った、と気がついたのと。わたしの体が大きく引き寄せ

られ、吹き飛んだのは同時だった。

(リュック……引つ張られて)

人間って軽いんだな、と。頭の冷静な部分がるで他人事のように考えて、数瞬遅れて体に衝撃がはしった。

川の中に落とされた。そう理解するのに数秒。水の冷たさに、体が震える。

「う……」

ああ。これは、ダメだ。

死ぬ。

わたしが。わたしという存在が。

食べられて。咀嚼されて。

ここで消える。消えてなくなってしまう。

わたしが？

「いや……」

誰かに対して、ではなく。

ただ、純粹に。わたしの唇が、言葉を紡ぐ。

「死にたく、ない」

銃声が、響いた。

「……え」

熊が大きくよろめいた、その隙を突いて。

熊とわたしの上に、割り込むようにして人影が飛び込んだ。

「デカイな」

短く、ただ一言。目の前の獲物を見定め、そのマタギは銃を構えた。明神阿良也ではない。一匹の熊と対峙する一人のマタギは、熊の懐に向かって飛び込んだ。

「この距離なら」

その姿はまるで、本当に手練れの猟師のようで、

「外さない」

その一発で、頭を撃ち抜かれた熊は、大きくよろめいて倒れ込み、そして動かなくなった。

わたしの目の前で、命のやりとりが、終わった。

熊の荒い息遣いも、地面を踏みしめる音も、耳をつんぎくような銃声も。全てが夢だったかのように、山の静けさが引き寄せられて、元に戻る。

「……はあ、はあ、はあ……」

わたしの吐き出す早い呼吸の音だけが、耳に入る。

「……大丈夫？」

振り返ったマタギは、もう阿良也さんの顔に戻っていた。

「大丈夫に、見えますか？」

「ううん。全然」

本当に、この人はもう……

わたしの体はびしょびしょで、頬や唇も多分切れていて、涙か水かわからないもので濡れている。とても人に見せられるような姿じゃない。

でも、

「ふふっ……くくっ……あはははっ！」

なぜか、笑い声が喉の奥から、心の奥から漏れ出た。

ああ、おもしろい。

身体が熱い。心が熱を孕んでいる。当然だ。もう少しで死ぬところだったのだから、興奮しても仕方がない。

その興奮が、とても心地良い。

「ねえ、阿良也さん」

「なに？」

「わたし、死にたくないって思った。わたしが、死にたくないって、そう思ったの」

自然と、敬語は外れていた。

阿良也さんも、それを気にしていないようだった。

「……そりゃ、熊に襲われれば誰でもそう思うんじゃない？」

「うん。でもね……でもわたし、ひさしぶりに自分を思い出した気がする」

ずっと、人に見られることを意識してきた。より良く自分を観られようと、心を読んで、演技をして、ずっとずっと生きてきた。

でも、この山の中で、わたしを見る人は阿良也さんしかいなくて。

誰にも見られていない。

誰かに気を遣うこともない。

誰かの心を読む必要もない。

そんな自然の中で、ただの肉の塊として、生きるための餌として、あの熊はわたしを見ていた。

ただの餌として死にかけたわたしは、ただ死にたくないと。心の底から、叫んだ。その純粋な欲求が、声として漏れた。

だから、

「死にたくないと願うわたしは、間違いなくわたしなんだなって！」

笑う。

演技をするために、必要なもの。

ありのままの自分自身。

基準となる己があつて、役を演じる基盤があつて、はじめて深い演技は成立する。役に潜ってきたあと、元に戻る。マタギの顔から、いつもの顔に戻った阿良也さんのように。

普段の生活すらも演技の延長線上にあつたわたしは、そんな簡単なことを忘れていたんだ。

だから、臭かつたんだ。

だらりと、猟銃を下げた阿良也さんは、こちらを見下ろして微笑んだ。

「……ようやく、少しいい臭いになったな」

火薬の香りが色濃く残っている手が、ゆったりと差し出される。

その手を取って、わたしは立ち上がった。

「阿良也さん」

「なに」

倒れ込んだ熊と、それを仕留めた阿良也さんを、交互に見詰めて。

気を遣わず、遠慮もせず、心も読まず、欲求のままに。わたしは言う。

「食べていい？」

「」

一瞬の沈黙を挟んで、阿良也さんは破顔した。

「ああ、いいよ」

## 逆転

デスアイランドの撮影も終わり、女優としての仕事に一区切りがついて。

夜風景は悩んでいた。

「最近、結愛ちゃんの様子がおかしいの」

「……おかしい、とは？」

対面に座る柊雪は、きよとんと首を傾げ、景の発言を反芻でもするかのように繰り返した。

「まず、朝から勝手に私の布団に潜り込んでくるのが減ったわ」

「布団に潜り込んでくる」

「前はレイが止めなければ、少なくとも週に三回は潜り込んできたのに」

「週三で」

「今週は一回しか潜り込んでこなかったの」

「潜り込んでるじゃねえか」

思わず、鋭くツツコンでしまう。

「それだけじゃないわ。朝ご飯を食べに来たらすぐに出て行っちゃやし」

「それは舞台のお仕事があるからじゃない？」

「私に抱きついてくる回数が明らかに減ったし」

「普通の友達はそんなに抱きついたりくっついたりしないんだよ？」

「私が着替えている時に覗かなくなっただし」

「うん。ちよつと結愛ちゃん予想以上に気持ち悪いね」

「とにかく最近、結愛ちゃんの様子がおかしいの！」

「正常な関係に戻っている、の間違いでは？」

雪は思った。ツツコミが追いつかねえ。

「えーと、つまり？」

「最近、結愛ちゃんの様子がおかしいの」

「うん、それはさつき聞いた」

「きつと何かあったのよ」



「何かって?」

「それがわからないから聞いているの。雪ちゃん、何か聞いてない?」  
「うーん……私はいつも通りだと思うけどなあ」

と、何の身にもならない会話をしている景と雪に、後ろから黒山が爆弾を落とした。

「男でもできたんじゃないか?」

ぶふう、と。景の口からオレンジジュースが噴出して雪の顔面に直撃する。

「げほっ……ごほっ……お、男っ!」

「ちよ……墨字さん! タオル! タオル取って!」

ニヤニヤと胡散臭い笑みを浮かべる黒山は、雪のヘルプコールを無視して、動揺を隠せない景に追撃を仕掛ける。

「最近の舞台の仕事でいろいろな人間と関わる機会も増えたしな。配信少女は、外面の性格もルックスもいいし、言い寄られても不思議じゃないだろ」

「はあ!? なに言ってるのこのひげ? 結愛ちゃんに限ってそんなことあるわけないでしょう!? 絶対にありえないわ!」

「まあ、たしかに。ゆあちゃん、けいちゃんにぞっこんだもんねえ。墨字さん、あんまりからかつちやダメですよ」

「おい。俺のシャツで顔ふくな。柘」

黒山のTシャツで遠慮なくオレンジジュースを拭きとった雪は「うわ、親父くさ」と、的確に成人男性のウィークポイントを突く呟きを添えつつ、言葉を続けた。

「でも、たしかに最近がんばってますよね、ゆあちゃん。なんか、一皮剥けた感じっていうか。役者としてももちろんですけど、配信の方もこの前SNSでバズってたし」

「ああ。あのクマ食べる動画な」

雪が話題に出したのは、結愛が先日、山登り配信のあとに投稿した『お腹空いたのでワイルドにクマ食べます』という動画だ。現地のマタギに仕留めてもらった熊をその場で調理して食べる、というぶつとんだ内容がたちまち話題を呼び、かなり再生数を伸ばしていたのが、

記憶に新しい。

「くくっ……あのジジイが絶句してる姿を見れたのは収穫だったな」  
「ジジイ？」

「あー、こっちの話だ。気にすんな。とにかく、夜風。お前もこんなところでそんなくだらないこと悩んでる暇あったら、なんか他の有意義なこと時間使え」

「だったらさっさとお仕事寄越しなさいよ、ひげ」  
「……ん、そうだな。ちょうどいいか」

そこで何かを思い出したように、黒山が懐に手をやる。

無造作に突き出されたのは、二枚分の舞台チケットだった。

「これって……舞台のチケット？」

「ああ。勉強代わりに観てくるといい」

「あー、明神阿良也の舞台！ 景ちゃんいいな〜！」

「明神阿良也？」

「今、一番売れている若手俳優の舞台だ。配信少女を誘って観てこいよ。最近、二人で出かけてないだろ？」

たしかに。思い返してみれば、景はデスアイランドの撮影、結愛は舞台の仕事、とここ最近はお互いに忙しく、ゆっくりとどこかに出かける機会もなかった。このひげにしては、珍しく気の利いた提案だ。

「わかったわ。じゃあ……」

「なにになに〜？ わたしの噂でもしてた〜？」

「結愛ちゃん！」

事務所の扉を勢い良く開け、スキップしながら上機嫌で入ってきたのは、まさしく話題の張本人だった結愛だ。スポーティーなピンクのジャージ姿から見ると、また仕事の舞台帰りらしい。

「結愛ちゃん！」

「なにになに〜、どしたの景ちゃん？」

「次のお休み、えっと、その……一緒に舞台を観に行かない？」

「舞台？ 景ちゃんと一緒に？ もちろん行くよ！ いついつ？」

きらきらと目を輝かせ、まるで猛禽類のように食いついてきた結愛の姿を見て、雪と黒山は顔を見合わせた。どこからどう見ても、いつ

も通りの万宵結愛である。夜風景が大好きな、いつもの万宵結愛だ。  
「あ」

だが、鼻歌を口ずさみながらスケジュール帳を開いた結愛は、何かに気がついたように片手で頭を抱えた。

「ごめん……景ちゃん。わたし、その日行けないや。先約があるんだ」  
「え」

結愛に誘いを断られる。

その事実にも、景は完全に固まった。

★★☆☆

「ああ、なるほど。だからせっかく舞台を観にきたのに、そんなに落ち込んでいたんだね」

観劇当日。

事の経緯を聞いた星アキラは、ようやく納得できた、といった様子で苦笑いを浮かべた。

「ええ……結愛ちゃんに断られたから、せめて千世子ちゃんを誘って一緒に楽しもうと思っていたのに……」

「あはは……それはなんとというか、本当に申し訳ない。千世子くんも急に仕事が入ってしまったんだ。許してほしい」

景は変装用のメガネと帽子を身につけているアキラを見て、頬を膨らませた。

結愛に演劇（デート）の誘いを断られ、せめて慰めてもらおうと千世子を誘った結果がこれである。急に仕事が入ってしまった、来れなくなった千世子の代役として来てくれたのが、アキラだった。

「そうよね。千世子ちゃんだって仕事で忙しいものね……仕方ないわよね……ありがとう。結愛ちゃんも千世子ちゃんも来てくれなかつたけど、せめてアキラくんが来てくれて私とても嬉しいわ」

あの星アキラが目の前にも関わらず、ため息を吐いてしよんぼりする女子は、かなり希少である。

「君、実は芝居へタなんじゃないか……?」

芝居が絡まない時の夜風景は基本的に変人ポンコツ女なので、仕方なかった。

とはいえ、いつまでもくよくよしていてもはじまらない。気持ちを切り替えて劇場の中に入ると、景はその席数の多さに驚いた。

「大きい……それに、広い」

「そうだね。客席の数は三千を超える。とても大きな舞台だ」

「演劇って、お客さんの前で直接演じるのよね……本番中に吐きそうになったらどうするのかしら？」

「いや、そんな心配するのは君くらいだと思うけど」

役の感情に入り込んでしまう景特有の懸念にまた苦笑しつつ、しかしアキラは鋭い目線で舞台を見た。

「でもたしかに、舞台は勉強になるよ。夜風君の言う通りお客さんの目の前で、カメラもマイクもない中、自分の身体一つで演じ続ける。失敗だって許されない。誤魔化しの利かない役者同士の体当たり。それが舞台だからね」

映画やドラマといった映像媒体とはまた違う、芝居の世界。それが舞台だ。

「僕も学ぶべきなんだろう。さて、そろそろはじまると思うんだけど……」

アキラは腕時計を見た。開演予定時間から数分過ぎているが、アナウンスがない。客席も、少しざわつきはじめていた。

「おい、みたか？」

「みたみた。事故だってよ。かわいいそうに……どうするんだろうな」

「……？ すいません、何かあったんですか」

後ろの席に座る男性二人に、アキラが声をかける。すると、片方の男性客が、慌てた様子でスマホの画面を見せた。

「それが……女性の出演者の一人が、事故にあったそうなんですよ」「え？」

「だから多分、代役をどう立てるか、揉めてるんじゃないですかね？」  
「普通の舞台ならいざ知らず、明神阿良也の舞台だからなあ……生半可な役者を立てちまったら、食われて終わりだろうし」

舞台通らしいもう一人の男性が、腕を組んで唸る。景は隣に座るアキラを不安げに見た。

「お芝居、観れないのかしら……?」

「ううん……」

どう返すべきか、言い淀んだアキラがなんとか言葉を紡ごうとしたその時。会場の照明がふっと落ちた。

『大変お待たせ致しました。これより、開演致します。会場内のお客様は——』

「ああ、よかった。はじまるみたいだよ」

だが、先ほどの情報がさざ波のように観客の中に伝わっているのだろう。照明が落ちても客席はまだどこか浮足立っていて、引き上げられた幕に意識が向いていないようだった。

しかし、

「その罨に親父が喰われたのは、俺が十五になった夜のことだった」

芝居に関係のない、余計な意識が。望む芝居を観ることができないのではないか、というその懸念が。

彼が発したその台詞によって、一分の隙なく塗り替えられる。

「親父はマタギだった」

景は、その役者に自分の視線が釘付けになっていることを自覚した。

景が座る席は、決して彼に近いわけではない。黒山が苦心して用意してくれたのであろう席は、むしろ舞台からかなりの距離がある。だけど、けれど。

その距離を感じさせない、この近さは、何なのだろうか？

「逃げろ！」

ただ一言。

彼が発した怒声が、客席の全てを鋭く貫く。

「腸を溢した父親が、俺に叫んだ！」

彼の一挙手一投足に、目を奪われる。

「親父を背にして俺は逃げた！」

幕が上がってから、まだ一分も経っていない。

「……後悔はない。俺が生きのびることが、親父の望みだったから」

ただ、純粋な演技力だけで、別の方向に向いていた観客の意識を完璧にねじ伏せた。

たった一人。

ただ一瞬で。

この舞台の主役は自分であることを。

自分を観ろ、と突きつけた。

「恨みはない。ただ今夜、奴を殺して喰うのはこの俺だ」

——刮目せよ。

これが、演劇界の怪物。

憑依型カメレオン俳優、明神阿良也。

「すごい……」

知りたい、と景は思った。

あの人のことを、あの人がどうしてあんな演技をするのかを。

景も含めて、全ての観客の意識が、明神阿良也に集約される。

そこに、

「兄さん。またあの山に入るの？」

割り込む声が、響いた。

いや、割り込んだわけではない。

極めて自然に、観客の意識が阿良也に向いていることを理解したまま、その合間に滑り込んだ。

「え……？」

力強い阿良也とは対照的に、その発声は嬌やかで美しく、儂い。だ

というのに、声音には確かな芯があり、景の耳にもしつかりと届いた。質素な着物に、乱雑にまとめた髪。けれど、阿良也を見詰めるその横顔には華がある。

何故なら景は、その横顔をずっと間近で見えてきたからだ。

「結愛ちゃん……？」

ずっと彼女に見られてきた夜風景は、この日、はじめて。

万宵結愛を、観る側になった。

## 『暴食』

わたしはしよげていた。

「はあああああ……」

せつかくの景ちゃんからデートのお誘いがあつたのに、断るしかないなんて……神様はどうしてこんなにも意地悪なのだろう。わたしの行動原理は、一に景ちゃん、二に景ちゃん、三に景ちゃん、四を飛ばして五に景ちゃん。シックス、セブン、エイト、テン、オールパーフェクト景ちゃんだ。普通なら、どんな用事を蹴り飛ばしても景ちゃんが最優先される。

だが、舞台役者としてお金を貰って活動している以上、どうしても断れないお仕事もあるわけで……

「万宵さん、次はこっちお願いね」

「はい」

登壇する予定はないとはいえ、今日の阿良也くんのお芝居……『そのマタギ』の裏方で雑用は、どうしても断れない仕事の一つだった。そもそも、わたしが阿良也くんの芝居と稽古を間近で観させてもらうために、例の山での一件のあと、頼み込んでなだめすかしておねだりをして、素っ裸のわたしを押し倒したことをちらつかせて、強引にスタッフとして紛れ込ませてもらったのだ。わたしの勝手な都合でドタキャンすることなど、許されない。

舞台上立つ役者はもちろん、裏方さんの一人だって、欠員が出たら簡単に替えは利かないのだから。

「大変だ！」

「事故だって!？」

「命に別状はないらしいが……足の骨が折れているらしい」

「どうするんだ？ 代役は!？」

……とか言ってる側から、出ちやいましたね、欠員。

本当に、つくづく神様は意地悪で残酷な仕打ちがお好きらしい。メインで出演する予定の女優さんが、会場入りする途中に事故に遭ってしまったらしい。わたしのようなスタッフにも気さくに声をかけて



くれるいい人だったので、少し心配だ。今度、お見舞いに行かなきゃ……と、わたしが能天気になんか彼女のことを心配できるのは、わたしがただのスタッフだからであって、演者のみなさんの懸念は既に『目の前に開演が迫る舞台をどうするか』ということに向いている。

「……どう思う、明神君」

演出家から声をかけられた阿良也くんは、鬱陶しそうに瞼を持ち上げて、首を軽く捻った。

うわあ……役に入り込むために集中してるんだから邪魔すんじゃないよ、って顔してるよ。阿良也くんらしいけど、さすがにどうかと思う。

まるで夢から醒めたように。あるいは自分の中で作っていた役作りを一度リセットするかのようによく息を吐いて、この舞台の主演俳優は口を開いた。

「出られないなら、代役を立てるしかないんじゃない？」

「しかし、そうは言っても彼女の代わりが務まる代役なんて……」

「いるでしょ。そこに」

言いながら、阿良也くんはわたしを指さした。

「は？」

はい。わたしが指さされました。

「明神くん。ふざけているのか？」

「……？ べつにふざけてないけど」

つい先ほどまで空気のように佇んでいたわたしに対して、ざわり、と。部屋の中の視線と感情が隆起して、一斉に突き刺さる。

困惑と動揺。そして、疑念。とてもじゃないけど、向けられて気持ちの良い感情じゃない。やだなあ……。

「結愛」

名前を呼ばれて、顔をあげる。

「できるよね、代役」

そんなこと、聞かないでほしい。

出られなくなった彼女の役どころは、主人公のカタギ……阿良也くんの妹だ。出番そのものはそこまで多くはないとはいえ、主演の次に

舞台上に登場する。物語への没入感と、主人公の人間性を掘り下げる、重要な登場人物だ。

そんな大役をできるかとは言われれば、

「はい。できます」

もちろん、頷くに決まっている。

「ん。じゃあそういうことで」

軽く頷いた阿良也くんは、また目を閉じて、さっさと自分の世界に戻っていく。

「ちよ、ちよつとま……」

「すみません。衣装とメイクお願いできますか？ 台本は結構です。セリフは全部入ってるので」

「え、は……う？」

演出家さんも、他の出演者さんも動揺しまくってるけど、あんまり構っている暇はない。わたしだって、急に役を振られて驚いているのだ。衣装やメイクはもちろん、必要な準備を済ませないと、阿良也くんと同じ土俵にすら立てない。

「……ああ、そうそう」

阿良也くんが、何かを思い出したように目を閉じたまま言う。

「代役とはいえ、俺と一緒に立つ舞台上で中途半端な芝居をしたら……撃ち殺すよ」

明神阿良也は、既に役に入っている。

ざわつく室内を鎮めるのに、主演の言葉はこれ以上ないほど強烈で。

そのプレッシャーと色濃い感情を真正面から浴びたわたしは、にんまりと微笑んだ。

「うん」



スポットライトの光を浴びる。

今まで立つてきた舞台とは比較にならないほど、大きな会場。数え切れない客席。けれど、不思議と緊張はなかった。

眩い光に照らされるのと同時に、この舞台における二人目の登場人物であるわたしに、観客達の感情が突き刺さる。注目される。

あの明神阿良也から、視線を奪う。

キモチイイ。

その快感だけで、この舞台に登る価値がある。

(それに……)

広い広い客席のどこかに、景ちゃんがいる。

わたしを、観てくれている。たったそれだけの事実で、わたしの肌は粟立って、興奮で身悶えてしまいそうだった。

「兄さん。またあの山に入るの?」

けれど、それは今のわたしには……この役には不要な感情だ。

だから、そつと蓋をして、阿良也くんを……『兄さん』を見詰めた。

「もうやめて……兄さんまで失ってしまったら、私、耐えられない!」

返答はない。

阿良也くんは、ただそつと目を伏せた。

その所作に、その演技にセリフはない。でも、声に出して発することがない、観客に訴えかける情感は充分だった。

すごいな、と思う。

阿良也くんだけではない。

デスアイランドで見た……魅せつけられた景ちゃんと千世子ちゃんの芝居。アレを見てから、わたしはずっと、ずっとずっと考えてきた。

「無理に猟に出る必要なんてないじゃない! 今の蓄えがあれば、今年の冬は越せるでしょう!」

あんな風に演じられたら？

あんな風に感情をぶつけられたら？

そして、その感情を受け止められたら？

画面の中の二人の世界に、わたしは手を伸ばすことしかできなくて。

この胸の内に溢れる衝動は、留まることを知らず、心の中で膨らむばかりで、わたしはずっとそれを、浅ましいものだと思っていた。

「お願い……お願いよ、兄さん」

でも、違った。

「私を、置いていかないで」

だって、それがわたしだから。

ありのままの自分自身だから。

餓えて、欲しがって、我儘に泣き叫ぶ。情けなくても醜くても、それが万宵結愛という女だから。

だから、だから、だから。

——喰い漁ることにした。

足りない経験を、噛み砕く。

知識を吸収して、飲み込む。

持てる時間を、わたしの今の全てを、芝居に注ぎ込んだ。

この舞台の稽古を、ずっと間近で見て『わたしならどう演じるか』を考え続けた。見学した。見て学んだ。それを自分の中で、ひたすらに掘り下げていった。

意識を集中させるためのガソリンは、マイナスの感情でも構わない。

どうして、阿良也くんの隣に立っているのはわたしじゃないんだろう？

わたしなら、こう演じるのに。わたしなら、違う声を発するのに。わたしなら、わたしなら、わたしなら……

——そう。わたしなら。

自分本位のその欲望に、油を注ぐ。

配信という虚構で、なんとなく自分を満たして。隣にはいつも、な

んとなく景ちゃんがいて。その当たり前の幸せのぬるま湯に、わたしは浸かりきっていた。

景ちゃんは、わたしを大切にしてくれている。

わたしは、景ちゃんを大切にしている。

でも、わたしは本当に欲張りだから、わたしの知らない景ちゃんが  
いることが、許せない。

夜風景という存在を、骨の髄まで食べ尽くしたい。

けれど、積み重ねたモノがなければ、あの世界に踏み入ることはでき  
ないから。

じつくりと、育てた。

羨ましいという感情を。

丁寧に、丹念に、入念に。

その渴望に、肥料を与えてきた。

「兄さんは……私のことが、大切じゃないの？」

役者なんて生き物は、所詮はエゴイスト。

物語という嘘を彩る、虚構の立役者。

だから、この気持ちには取繕わなくていい。

「ねえ……こつちをみてよ」

阿良也くんほどの役者が相手なら、気を遣う必要はない。むしろ、  
わたし如きの演技で、その存在を霞ませる心配をすることこそが、お  
こがましい。

全身全霊で、わたしという存在を発露させる。ぶつける。受け止め  
てもらう。

相手は、明神阿良也だ。

関係ない。

——喰ってやる。

出番の長さなんて関係ない。

台詞の一つを、細やかな挙動を、今ここに在るわたしを、観客に刻み込む。

さあ――

「――私をみて」



観客席で、その老人は息を吐く。

「ちつ……阿良也め。仕方ないとはいえ、代役を当てやがって」

阿良也と結愛を引き合わせることは、最初から想定していた。むしろ、結愛の面倒をこちらでみることを決めた時点で、互いに刺激を受けさせることに狙いがあったと言ってもいい。

しかし、なにも山の中で熊を食えと言った覚えはないし……なににより、結愛をここまでの状態にするつもりもなかった。

とはいえ、ようやく最低限、彼女は彼の舞台に立つ準備を終えたわけだ。

「随分と食いしん坊になったじゃねーか、ユアユア」

巖裕次郎は、誰にも見られることのないその喜びを、静かに浮かべていた。

## 星アキラの災難

天才、と呼ばれる人種はどの業界にも存在する。

常人には理解できない発想。常軌を逸した行動。それらがまるで予定調和のようにピタリと噛み合い、華やかな成果として結実する。

星アキラは、自分の隣に座る夜風景を、そうした『天才』の括りに入れていた。

そして、万宵結愛はこちら側の人間だと思っていた。

直接話した機会は少なく、共演した経験もないが、少なくともアキラから見た彼女は、夜風景に比べれば平凡で普通だった。結愛が出演したCMもチェックしたが、その立ち振る舞いを見たアキラの感想は、景の演技のそれに対する「理解できない」という複雑な感情ではなく、むしろ「参考にしたい」という、共感と理解だった。カメラと視線を意識した、わかりやすい動き。スポンサーの意図を明確に汲み取ったのであろう、商品をプレゼンするキャッチーな笑顔。

即ち、動画配信というコンテンツで培われた観られることに特化した技能。

千世子が結愛を「おもしろい」と評したのも、彼女の在り方が自分達に似通っているからだ、と。この舞台を見る瞬間まで、アキラはそう思っていた

だが、アレはなんだ？

まるで、餓えた獣のようだ。

発声も身体の動きも、決して派手ではない。それでも、染み入るような声音からは、無理矢理蓋をされた情動の熱が、沸々と感じられる。段々と溢れ出すそれが、止め処なく吹き出してくる。

ともすれば、主演を食ってしまいそうな……剥き出しの感情を、傷口にねじ込むかのような、静と動が混じり合った演技。

もしもアキラが結愛の立場であれば、一步引いた形で芝居をしていただろう。しかし結愛の演技は容赦がなく、熱に満ちていて、だからこそ観客を惹き付けるものがあつた。

アレは、本当に万宵結愛か？

そんな疑問が、嫌な形で心の奥底を掠める。

自分の中で膨らんだそれを押し潰すように、アキラは「なぜ結愛が明神阿良也の舞台に出演しているのか？」という当たり前の疑問を口に出した。

「どうして、万宵くんがこの舞台に……？　夜風くん、きみは何か聞いて」

いないのかい、と。そこまで言いかけて、己の口を閉じる。

隣に座る夜風景の耳には、既にアキラの言葉は欠片も入っていないようだった。

綺麗な横顔だ、とアキラは思った。

集中し、没入している。深い海の底に沈んでいくような、研ぎ澄まされた視線。見るもの全てを自分の糧にすることを望む瞳は、ある意味で捕食者のそれに似ていて、アキラは背筋が寒くなるのを感じた。景は、食い入るように舞台を見詰めている。

主演の阿良也だけではない。彼と並ぶ結愛のことも、その演技の隅々までを観察するかのようには、観詰めていた。その鑑賞の姿勢だけで、アキラはまた自分に足りないものを突きつけられた気分だった。星アキラは、天才ではない。努力を重ねただけの、凡人に過ぎない。それはアキラ本人が一番よくわかっていることで、故にこうして本物の演技を見るたびに、それを深く実感させられる。

わかっている。理解している。弁えてもいるし、泣き喚く気もない。

ただ、自分と同じだと思っていた存在が、自分よりも高く果てしない場所に立とうとしている……その事実をこうして見せつけられるのは、やはり中々に堪えた。

結愛の出番はすぐに終わった。しかしその演技は間違いなく、観客を物語へ深く誘導する助けとなり、明神阿良也も当たり前のようにそれを自分のために活かした。

それは、舞台の上でなければ成立しない信頼関係。天才達だけの領域だ。

「……」



幕が下りる。満足感をそのまま表したかのような拍手の音に、形だけ合わせてアキラも手を叩いた。

「……いこうか、夜風君」

声をかけても、景は動かない。余韻に浸るように、視線は舞台に向けられたままだった。

「結愛ちゃんがいたわ」

「っ……ああ、僕も驚いたよ。彼女が舞台に出ることは、聞いていたのかい？」

「ううん。はじめて知った」

景の声は、驚くほど平淡だった。

「結愛ちゃん、やっぱりすごい」

その平淡さに、アキラは僅かな違和感を覚えた。

「今までも、動画の中の結愛ちゃんは見えてきたけど……でも今日は今までで一番、結愛ちゃんに夢中になっちゃったわ。あんなにすごい主演の人と共演して、多分代役で舞台に立ったのに、淀みなく演じて……本当にすごい」

夜風景の芝居に対する執着は異常だ。

磨き抜かれた純粋な演技への在り方は、アキラも認めている。だからなのだろうか？

平淡に聞こえる、その声音に。曇りのないスタンスに、別の感情が混じっているかのように聞こえるのは、

「——でも、ずるい。私より先に、私以外の人とあんな風に演じるなんて」

きつと、勘違いではない。

何かが、裏返った感触。

アキラはそれに気がついたが、気がつかないふりをして、言葉を紡いだ。

「……明神阿良也。実力派若手俳優といえば、まず彼の名が挙がる。恥ずかしながら、僕も彼の芝居を観たのははじめてでね。なんといい

か彼は、君に似てる」

「私に……」

景の視線が、ようやくこちらを向いた。

「私に似ているから、結愛ちゃんはあるのと同じ人と共演することを選んだのかしら？」

「それは……どうだろうね」

あ、これは地雷だな、と直感した。

なので、アキラは言葉を濁した。

「アキラ君。私、あの人のサインが欲しい」

それはきつと本心なのだろう。景は間違いなく、明神阿良也の芝居に魅了されていた。

しかし同時に、その声音には彼を「倒すべき目標」として認識したような……そんな頑なさも含まれていて。

(……そうか。夜凧君は、すでに明神阿良也の芝居を超えようとしているのか。彼の芝居に魅せられただけでなく、それを踏み越えて自分の芝居を磨き上げようとしている)

流星だ、とアキラは思う。

というか、そう思うことにした。これ以上深入りすると、自分にも良からぬ火の粉が降りかかってくる予感がしたからである。

「あと結愛ちゃんのサインも貰うわ」

「……それはいつでも貰えるんじゃないか？」

「貰うわ」

「あ、うん」

やはり、天才の考えていることはわからない。

アキラは深い溜息を吐いた。

「このあと、主演俳優へのインタビューが組まれてるって話だから、そこに行こうか。知り合いの記者が多いから、多分入れてもらえるはずだよ」



多少のハプニングこそあったものの、初日の舞台はまずまずの成功という形で、幕を下ろすことができた。

「みなさん、お疲れさまでした〜!」

「よかったよ!」

「お疲れさま!」

「すごく助かった!」

「ありがとうございます〜!」

気持ち悪いほどくるりと裏返った称賛の声と温かい感情に、形ばかりの笑みを添えて頭を下げる。直前まであんなに渋い顔でわたしを見ていた演出家のおじさんでさえ、今は満面の笑顔だ。

やれやれまったく、人間とはこういう生き物である。結果が伴えば、簡単に掌が裏返る。まあ、よくわからない配信者の小娘が急に主演俳優のご指名で舞台に立ったわけだから、こういう反応になるのはわかりきっていたけど。それが視えちゃうわたしがめんどくさいだけなんだよね。

いやあく、それにしても疲れた〜。

前々から予想はしてたけど、やっぱり阿良也くんとお芝居するのは、めちやくちやカロリー使うわ……。舞台の上で必要なエネルギーの総量が違うっていうか、なんていうか、うん。そんな感じだ。

「すいません。あら……明神さん、どこにいるかわかりますか?」

「ああ、お疲れさま。今日は初日だからね。記者の人達から取材受けてるよ」

「わかりました。ありがとうございます」

お礼を言つて、取材の会場に向かう。

今すぐにも景ちゃんと合流して、わたしのビューティーかつスペシャルな演技の感想を聞きたいところだけど……でも、今最初に会うべきは阿良也くん。ピンチヒッターとはいえ、一緒に舞台に立つことができた。現時点でのわたしの演技の感想を、いち早く阿良也くんから確認しておきたい。

それにしても、全ては景ちゃんに追いつくためとはいえ、景ちゃんに会うのを我慢して阿良也くんから演技の反省を貰うのを優先する

なんて……ふふ、少しはわたしも役者として成長したってことかな？

裏手の方から回り込み、取材会場の方をこっそり覗き込む。

あれ？　なんか記者の人達が立ち上がって人だかりできてるな？

あー、わかった。阿良也くん、言葉足らずでコミュニケーション下手くそだし、また何か変なこと言ってる……

「いいね、君。すごく臭う」

その人だかりの中心で、阿良也くんは景ちゃんをくんかくんかして  
いた。

……うん。

その人だかりの中心で、阿良也くんは景ちゃんをくんかくんかして  
いた。

……ううん？

その人だかりの中心で、阿良也くんは景ちゃんをくんかくんかして  
いた。

大事なことなので三回言いました。ではなく、

「俺好みの臭いだ」

「なにしてんのーっ???  
!!!!???

わたしは思わず絶叫した。

「……なんだ、結愛か」

「あー！　結愛ちゃん!？」

こちらを向いた記者の群れをかき分け、わたしは人だかりの中心に  
突っ込んだ。

「おい、あれ……」

「今日の代役の……!」

「百城千世子と共演した配信者の!」

「撮れ撮れ！」

「……っていうか阿良也、今呼び捨てにしなかったか？」

ええい！ うるさいっ！ 散れえ！ 記者ども！

阿良也くんは演技をしていない時の、とろんとした目でこちらを見た。

「……結愛、なにしてんの？」

「それはこっちのセリフだよ阿良也くん！ 景ちゃん大丈夫!? 何か変なことされてない!? ていうかなんでここにいるの!?!」

「大丈夫……だけど。でも結愛ちゃん、阿良也くんって……え？ お互いに、名前呼び……?」

「ま、万宵君。その、明神さんは夜凧君に何かしたわけではなくて、僕たちも彼にサインをもらいに来ただけで……」

「星アキラ!? なんで星アキラがここにいるの!?! 千世子ちゃんが代わりに来るんじゃないの景ちゃん!?!」

「ちよつと落ち着きなよ、結愛。いやあ、それにしてもいいねこの子。君が夢中になるわけだ。今時珍しい無添加無着色の……そう、この前一緒に食べた熊肉に似てる」

「景ちゃんを熊肉なんか例えないで！ 熊肉はおいしいけど景ちゃんは熊肉じゃないから！」

「この前一緒に食べたって……あ、アキラ君、どうしよう？ もしかして、やっぱり、結愛ちゃんとの役者さんって……」

「よ、夜凧君。動揺するのはわかるけど、そんなにくつつかないでくれ」

「星アキラっ！ なに景ちゃんにくつついてんの!?! はやく離れて！」

「い、いや。僕がくつついてるんじゃない、夜凧君がくつついてるといふか……くつつかれるのは僕としてもまずいというか」

「はあ!?! 景ちゃんにくつつかれて何がまずいの!?! 幸せでしょうが！」

「ああ、結愛。今日の芝居は悪くなかったよ。70点くらいかな」「阿良也くんはちよつと黙ってて」

「あ、うん」

「また名前で呼んだわ……」

カメラのフラッシュの音は、しばらく鳴り止まなかった。

## 演劇会の重鎮・巖裕次郎

「何をしているんですかあなたは」

喫茶店で、ひさしぶりに会うプロデューサー……天知心一は、注文したコーヒーが置かれて早々、わたしに対して不躰にそう言ってきた。

「……いや、べつに。何もしてないけど？」

「いやべつに、ではなく。実際にしてるでしょう。実にバ……愉快でおもしろいことを」

「ねえ今バカって言いかけたでしょねえ？」

プロデューサーはその質問には答えず、メガネとマスクで顔を隠しているわたしの前に、大量の週刊誌とスポーツ新聞の切り抜きをぶちまけた。

『星アキラ、熱愛発覚!』

『お相手はデスアイランドの共演者!』

『新人女子高生女優、スターズのスターを射止める!』

書き連ねられているのは、ゴシップの雨あられと言わんばかりに品のない文字の羅列である。ビキリ、とわたしは自分の額に青筋が浮かぶのを自覚した。

「……クソブンヤがあ」

インクと紙の無駄の極みみたいな記事を、無言で握り潰す。

「ちなみにこれは私の私物です。読めなくなるのはとても困ります。弁償して、また切り抜いてもらいますよ?」

無言で広げて、丁寧に元に戻す。わー、ちよつとだけ皺が寄っちゃったなく。でもまだ全然読める。うん、平気平気。大丈夫、問題なし。

プロデューサーはニコニコとコーヒーを口に含みながら、また別の切り抜きの記事を差し出してきた。

「それに、こちらはこちらでおもしろいことになっていますし」

『明神阿良也、熱愛発覚!』

『お相手は大人気配信者!』

『演劇界の新星を食らう!』

「このクソブンヤがあ!」

誰と誰が付き合ってるって!?

あんな変人目の下クマ男と付き合うわけないでしょうが!

「声が大きいですよ」

プロデューサーに言われて首を竦めるが、それでも納得はいかない。変装用のマスクをずらして鼻息荒くコーヒーをすするわたしとは対照的に、プロデューサーはどこまでも上機嫌だった。

「いやあ、しかし……本当に大したものです。やり方と取り上げられ方はともかく、これだけ多くの雑誌で話題をかつさらうとは。私でも、事前の根回しと金がなければできません」

「褒めてんの? けなしてるの?」

「もちろん、とても褒めていますよ、ええ。この調子でがんばっていきましょう」

この腹黒プロデューサーに褒められても欠片も嬉しくないな……マジで。

「ですが結愛さん」

「なに?」

「注目されるということとは、とても素晴らしいことです。がリスクも伴います。多くの人々の、理由なき悪意に晒される機会が増えるということですからね」

「わたしにそれを言うのは今更じゃない?」

「念を押ただけですよ。あなたがこれから立つ舞台は、配信という今までのフィールドとは違う。百城千世子との配信はあなたのホームでしたが、巖裕次郎の舞台はあなたにとって完全にアウェーです」

さつきはあれほど自分の私物であることを強調した週刊誌の切り抜きを、プロデューサーはくしゃくしゃに丸めて破り捨てた。

「こんな吹けば飛ぶような三流週刊誌の記事は、利用するだけ利用して名前を売り込む足掛かりにすれば良いでしょう。私が根回しして、少し金を添えてやれば印象の上書きも簡単にできます」

特に頼んでもいないけど、それは心強いね。



「ですが、舞台でああなたの演技を見る観客の印象、評価は私の力ではどうにもなりません。それは……」

「わたしの実力次第、って言いたいんでしよう」

今日、一番深いため息を、わたしはプロデューサーにもよく伝わるように大きく吐き出した。

「ごめん。でもはつきり言うね。それが一番いらぬ心配だよ、プロデューサー」

またニコリ、と微笑んだプロデューサーは、無言のままハンカチを取り出した。

「……なに？」

「ああ、いえ。娘の成長を実感するときつとこういう気持ちになるのだらうな、と。少し目頭が熱くなってしまっ……」

「役者の前でウソ泣きすんな。その目薬しまえ」



「何をしているのあなたは」

「いや、そのなんというか……」

「いやなんというか、じゃないわ。実際に撮られているでしょう。夜風景といるところを」

星アリサは憂鬱だった。というか、胃がきりきりと痛かった。

デスクの上に積み上げられた週刊誌、スポーツ紙の記事には、アキラと景の熱愛をほのめかす記事が乱立している。一体どうして、こんなことになってしまったのか？

「ふふっ……アキラちゃんと夜風さんが熱愛……熱愛だつて」

しかも、執務室のソファアの上では百城千世子がソファアでごろごろしながらそれらの週刊誌を読み漁り、堪え切れない笑いを他人事のように漏らしているので、アリサの心労は倍増だった。いや、もちろん千世子にとっては完全に他人事なのだが、白のワンピースの裾をひ

らひらと揺らしながら、足をばたつかせてニコニコと整った顔立ちを歪めている様は、アリサにとって別の意味で目の毒である。

「千世子君。アキラちゃんはやめてくれ」

「千世子。行儀が悪いからやめなさい。それに、アキラのイメージダウンはスターズ全体の損失に繋がるのよ。笑い事で済まされることではないわ」

「でも、元はといえばアリサさんが悪いんだよ。私がせっかく夜風さんと約束してたのに、急なお仕事入れちやうから」

ニコニコと笑顔を浮かべながらも、微妙に千世子の機嫌が悪い理由はどうやらそこにあるらしい。アリサはまたさらに胃が痛くなるのを感じながら、気だるげに手を振った。

「ええ。こんなことになるのなら、仕事に穴をあけてでもあなたに行ってもらえばよかったわね」

アキラの背が、目に見えて縮こまる。

アキラの人気は、子ども向け特撮番組をメインに、若い女性から子どもたちの母親まで、幅広い年齢層で構成されている。アキラ自身の年齢を鑑みても、色恋沙汰をすっぱ抜かれるには少々早く、今後の活動を考えると明らかにマイナスにしかならない。

交際相手を頻繁に変えてもまったくスキャンダルにならない女優……例えば『環蓮』のような特殊な役者もいるにはいるが、大抵のタレントにとって結婚を前提にしない交際のスキャンダルはイメージの低下にしか繋がらないのだ。

とはいえ、過ぎたことをいつまでもぐちぐちと言っていてっても仕方がない。

「アキラ、劇団天球の舞台に出なさい」

「……天球の舞台に？」

「黒山に確認を取ったの。夜風景は明神阿良也と天球の舞台に出演する予定だと聞いているわ。そこにあなたも捻じ込んで、夜風景とは『出演予定の舞台の主演の芝居を観にきた、ただの共演者』ということにします」

「あはっ。強引」

千世子がまた笑う。

「これでひとまずは、なんとか収まるでしょう」

「いいなあ……アキラ君、天球の舞台に出れるなんて」

どこか物欲しそうな眩きが漏れる。びくり、ときつきままでとは別のプレッシャーに、アキラが肩を震わせた。

そのままソファから細い身体を起こすと、千世子はアリサに向き直った。

「ねえ、アリサさん。強引ついでに、私も一つお願いがあるんだけど」

「……聞くだけなら聞いてあげる」

「やだなあ。そんなに恐い顔しなくても。べつに変なお願いじゃないよ」

千世子は週刊誌の一つを手に取り、目の前で広げて、

「この、万宵さんと『ネツアイ』してるらしい、明神阿良也って役者、気になるんだけど」

潰した。



夜風景は少し緊張していた。

目の前には、はじめて入る稽古場の扉。黒山からここに行くように言われた時はとても心が踊ったが、はじめて来る場所というのはやはりどうしても身体が固くなってしまふ。ましてや、ここにはあの役者がいるのだ。

(ここに、あの人が……)

明神阿良也。彼の芝居は千世子とはまた違うものだった。千世子の芝居が画面の向こう側で輝いている、ある種手の届かないものだとしたら。阿良也の芝居は観客の共感を引き出し、寄り添うもの。阿良也が泣けば悲しくなり、阿良也が笑えば嬉しくなる。観客と役の境目がなくなる演技、とでも言えばいいだろうか。観客と役の境目

見ている、鳥肌が立つ役者だった。

(ちよつと……ううん、すごく変な人だったのが気になるけど)

景自身も一般常識に当てはめてみるとかなり変な人の部類に入るのだが、残念ながら本人にその自覚はない。

(結愛ちゃんとの距離感が近かったのも……なんだかすごくモヤモヤするけど)

景自身もアキラとの距離感がものすごく近く、結愛をかなりモヤモヤさせているのだが、本人にその自覚はない。

(でも、黒山さんも絶対いい勉強になるって言ってくれたし……うん、がんばるわ!)

心を決めて、扉を開ける。

「こんにちは! 今日からお世話になります! 夜風景で……」

「結愛。俺のものになってよ」

景の呼吸が、自然に止まる。

スタジオに稽古場に入つてまず最初に目に入ってきたのは、壁際に追い込まれ、阿良也に自然な形で壁ドンされている結愛の姿だった。

簡潔に言えば、幼馴染が男にものにされかけていた。

夜風景、フリーズ。

「……どう?」

「いやいや阿良也くん。何もわかってないよ。なんかねえ、こう、雑。雑なんだよね。もっと少女漫画とか恋愛小説とか読んで勉強した方がいいと思うよ」

「小説はあまり読まないな」

「やっぱここは俺に代われよ阿良也。俺が完璧な壁ドンってヤツを見せてやるから」

「あんだ結愛に壁ドンしたいだけでしょ。気持ち悪いから離れな」

その気の抜けたやりとりも、フリーズした景の耳には届かない。すでに景の頭の中は、男に迫られている結愛をどう助けるかで一杯だった。

腰を落とし、助走距離を確保する。走り出した足は自分でも驚くほ

ど軽く、十分な助走距離と速力を得た景の身体は、重力に逆らって宙を舞う。

「結愛ちゃんっ!」

「え、景ちゃ……?」

「ん?」

結果。夜凧景の全力の飛び蹴りを食らった明神阿良也の身体は真横に吹っ飛んだ。

★★★

「ほんとうにごめんなさい」

景ちゃんが土下座する。とてもきれいな土下座である。わたしはとりあえず後ろに回って、そのきれいな臀部の形を視界におさめた。いいおしりですねえ。

「ああ、うん。まあ、俺も挨拶でライダーキックを食らうのははじめてだったからね。いい経験になったよ」

「どんな経験だよ」

阿良也さんの間の抜けたフォローに、七生さんがツッコむ。まあ、景ちゃんが来る前に『少女漫画で見るようなキュンとする壁ドン演技勝負』をやっていたわたしたちも紛らわしいっちゃ紛らわしいけど……でも、さすがにいきなり飛び蹴りをしてるのは想定外だった。

「とりあえず土下座やめて頭あげなよ」

「……はい」

はあ、しょんぼりしてる景ちゃんもかわいいねえ。

でも景ちゃんは、わたしを阿良也くんから助けるためにこんな風に身体を張ってくれたわけで……くう……やっぱり景ちゃんはさすが景ちゃんだね。そこに痺れるし憧れるし最初から最後まで愛してるよ。

わたしは立ち上がった景ちゃんに近づいて、手を突いた。

「景ちゃん。結婚しよう」

「え、なに? どこからの流れでゆあゆあはそのセリフ発してるの

「? どういうこと?」

「聞いてはいたけど、ほんとに大好きなのね……」

亀さんと七生さんが呆れたように言うけど、聞こえない聞こえない。そもそも最近は景ちゃん成分が不足気味だったからこうやって多めに摂取しないと死んじやうんだよわかりますか?

「……なるほど。夜風の方が身長が高いのに、わりと様になってる。いい壁ドンだ。熱を感じる」

「阿良也は馬鹿なの?」

いや阿良也さんは馬鹿だよ。

「結愛ちゃん……なんかすぐここの人たちと仲が良いというか……馴染んでるのね」

「え? ああ、うん。だってわたし、ここにいる人たちともうほぼ知り合いだしね」

「そうなのね……」

ああ、だからそんなにしょんぼりしなくても大丈夫だよ景ちゃん。わたしがついてるから何の心配もいらなからね!

「おっと、結愛。イチヤイチャするのもいいけど、そろそろやめておいた方がいいよ」

「は? なんで?」

「巖さんが来た」

その名前に、わたしは思わず背筋を伸ばした。

景ちゃんには劇団天球のほとんどの人と知り合いになった、と言っただけど、実はわたしがまったく面識がない人間が一人だけいる。それが、演出家であり天球を束ねる長である、巖裕次郎さんだ。

理由はなんとなく察しがつく。きつと、配信者上がりで役者の世界に入ってきたわたしのことを快く思っていないのだろう。嫌っている、とまで言ってもいいかもしれない。事実、わたしはこの稽古場に何回か足を運んでいるのに、一度も巖さんに会わせてもらうことができなかった。

「集まってるな」

低く、威厳のある声が稽古場に響く。景ちゃんの表情も、あからさまに緊張したものに変わった。

顔に刻まれた皺は深く、眼光は鋭く。さつきまでふざける声で満ちていた稽古場に、杖を突く音だけが綺麗に木霊する。

すごい。存在感だけで一癖も二癖もある実力派揃いの天球の役者さんたちを黙らせる『庄』がある。

「……」

これが、日本演劇会の重鎮。巖裕次郎。

ごくり、と。生唾を飲み込む。

意を決して。わたしは自分から進んで前に出て、巖さんの前に立った。

「はじめまして、巖さん。万宵結愛です」

視線が、こちらを向く。

「……ああ。はじめまして、だな。ユアユア」

「………ん？」

あれ？

えつと……え？

わたしは戸惑った。

どんな感情が突き刺さってくるのか、身構えていたのに……ん？  
なにこれ？

え、なんかこう……なに？

「早速だが、頼みがある」

巖さんからわたしに向けられている、このくすぐったいような、照れくさくなるような、この感情の色は……

「サインください」

「えっ……あ、はい」

## ただのファン

【速報】演劇界の重鎮が、わたしの大ファンだった件について  
渡された色紙に頼まれるがままにサインをして渡すと、子どもが泣き出しそうなくらい険しい顔をしている巖裕次郎さんは「ありがとう」と呟いて、両手で大切に受け取ってくれた。

いや、ギャップすごいな!?

「大丈夫？ 結愛？」

「ああ、うん。大丈夫大丈夫。ちよつと驚いてるだけだから」

「巖さんがファンでびっくりしたんでしょ？」

「いたずらっぽい表情で七生さんに言われる。そりやびっくりするわ！」

わたしが劇団天球の舞台上に上がることについて、絶対一悶着あると思ってたのに……実際はこれだ。顔はこわいけど、巖さんからはめちゃくちゃ幸せそうなオーラが出てる。最初に感じた重圧はどこへやら。わたしに向かって放たれているのは演劇界の重鎮のプレッシャーなどではなく、ほわほわしたあたたかい感謝と感激の気持ちだった。

なんというか……こう、めちゃくちゃ気難しいおじいちゃんを想像していたので、調子が狂う。ギャルゲーでいうと、ツンデレの攻略対象が最初から好感度マックスだった、みたいな感じだ。

「本当によかったね……巖さん」

「ようやくユアユアのサインがもらえたなく」

七生さんと亀さんがまるで孫を見守るおばあちゃんとおじいちゃんのような優しい笑顔で、うんうんと頷く。これ、構図逆じゃない？

「七生お……亀え。てめえらがもつと早くユアユアのサインを貰ってくりゃ、こんな待たずに済んだ。そう思わねえか？」

「あ、あはは……」

「ちよつとなに言ってるかわからないデスネ……」

何のことを言っているのかはよくわからなかったけど、七生さんと



亀さんがすごすごと引き下がる。ふむふむ、なるほど。どうやら力関係は明確に巖さんの方が上みたいだ。まあ、当然と言えば当然だけど。

「やて……」

巖さんの鋭い視線が、今まで完全に蚊帳の外だった景ちゃんの方に向く。

「お前さんが、夜風か」

「は、はい！」

直前にライダーキックをかましてしまった一件もあってか、まるで獲物に狙われる小動物のように景ちゃんは縮みあがっている。

はあ……怖がって縮みあがっている景ちゃんもかわいいねえ……よしよしなでなでしてあげたいねえ……

「結愛。顔が気持ち悪いよ」

うつせえわ。

「黒山から話は聞いている。ユアユアとまとめて、面倒をみるように頼まれてな。とりあえず、自己紹介しろ」

「よ、夜風景17歳！ 料理と運動が得意です！ よろしくお願いしますー！」

「身長は168センチ。体重はシークレット。部活は帰宅部。好きな映画はローマの休日、カサブランカ。あと、風と共に去りぬ。得意料理は和食全般だけど、わたしは特にかれの煮つけと肉じゃが、あとひじき煮が好きです。よろしくお願いしますー！」

そこだ！

すかさず、横から景ちゃんの自己紹介を補足する。

「なんで結愛がそんなイキイキと紹介すんの？」

「好きなんだから」

七生さんと亀さんにはすぐく呆れられた目で見られるけど、気にしない気にしない。そうですよ？ わたしは景ちゃんのことを大好きですけど、それが何か？

「なるほど。本当にK子ちゃんと仲が良いみてえだな」

「ええ！ そりゃもちろん！」

……ん？ 聞き間違えか？

今、この強面おじいちゃん、景ちゃんのことを『K子ちゃん』って言った気が……

「巖さん」

と、そこで今まで沈黙を保っていた阿良也くんが、会話に割って入る。

「なんだ。阿良也」

「鼻つまつてんの？ 結愛はともかく、この子を舞台に入れたら、あんなの最後の舞台、潰されるよっ。」

「俺の配役に口出すのか。ずいぶんえらくなったな、クソガキ」

「そうだよ阿良也さん。景ちゃんの才能はすごいんだよ？ それこそ、わたしなんて吹けば飛んじやうくらいすごい演技力なんだから！」

「みる。ユアユアもこう言ってる」

「結愛。少し黙っててくれ。きみが会話に挟まると巖さんと会話にならない」

なんかよくわかんないけど、このおじいちゃんのわたしに対する好感度、ほんとに高いな？

阿良也さんが珍しく呆れた様子で、やれやれと首を振る。

「結愛はいいよ。この俺が直々に山で鍛えたからね」

「阿良也さん、言い方」

誤解を招く言い回しはやめてほしい。景ちゃんがまたすごい顔になってる。

「でも、夜風まで使う必要はあるの？」

「何度も言わせんな。俺が使えると思ったから、役をあてて使う。それだけだ」

まだ不満そうな阿良也さんに向かってそう吐き捨てた巖さんは、台本を取り出した。そして、景ちゃんに向き直る。

「夜風景。公演は三ヶ月後だ。台本を渡す。演目は『銀河鉄道の夜』。知ってるな？」

「は、はいー」

銀河鉄道の夜。

宮澤賢治の童話の中でも、教科書にのるくらい有名な話だ。

「主演、ジヨバンニに明神阿良也。そして、ジヨバンニの友人、カムパネルラを夜凧景、お前に演じてもらおう。主演の一人だ」

「主演……私が？」

さすがの景ちゃんも、びつくりしたように目を丸くする。正直、わたしも驚いた。いきなり飛び入り参加した劇団で、それもあの劇団天球の舞台上で主演を貰えるってだけでもびつくりだけど……だって、カムパネルラは。

「ちよつとちよつと巖さん！ うそでしょ!? この子がカムパネルラ？」

カムパネルラは、男の子なのだ。

「なんだ？ お前もなんか文句あんのか、亀？」

「あるよ！ っていうか無理だって！ だってこの子、ちんちんついてないじゃん！」

「亀さん、ころすよ」

「あ、ごめんなさい……」

わたしの神聖な景ちゃんに向かって、ちんちんという単語を使うんじゃないわ。汚らわしい。

七生さんが、隣に立つ景ちゃんに問いかける。

「景、実のところ、どうなの？ ちんちんついてるの？」

「ついてないわ！ でも私、ついてなくてもがんばる！」

「七生さん？」

「ごめんで」

だからわたしの景ちゃんに、ちんちんはついてないって言ってんだろうが！

「まあ、カムパネルラは無垢な少年ってイメージが強いし。それに、女が男の役をやることも、演劇じゃ珍しくない」

「そうなの？」

「うむうむ。だから、夜凧がちんちんをつけようと思えば、つけられるとは思うけど」

「亀さん、マジでころすよ」

「ほんとすいませんでした調子にのりました」

わたしの景ちゃんにちんちんをつけるな。

「でも、巖さん。いくら結愛の紹介だからって、いきなりこの子を主演にする?」

「お前も不満か? 七生」

「結愛は、私や亀、阿良也のところに行って、舞台に立つための経験を積んでる。巖さんのお気に入りとか、そういうのは関係なしに、劇団天球の舞台に立つ資格が充分にあると思うよ。でも、この子はどのような?」

七生さんからわたしへの評価が高くて、光栄だね。

しかし、景ちゃんを主演に据えるのは、みんな不満みたいだ。とはいえ、こればかりは仕方がない。全然舞台の経験がない、ずぶの素人の役者を外部から持ってきて使おうっていうんだから、そりや不満も溜まるだろう。

よしよし。そういうことなら、ここはわたしが景ちゃんのプロローを……

「役者に免許はない。お前のその言い方だと、素人とプロを区別するものは、経験ってことになるな」

「違う?」

「なら、すべての子役は素人か?」

「……」

おお。すごいな巖さん。短いやりとりで、七生さんを論破しちゃった。

押し黙った七生さんを他所に、巖さんはこちらを見て問いかけてきた。

「……ユアユア。素人とプロを区別するものはなんだと思う?」

え、なに?

この流れでわたしに振るの、その話。

「んー、そうですねえ」

かわいらしく小首を傾げてみせたけど、わたしに向けられる巖さん

の感情に、変化はない。相変わらず、ほわほわと温かい感じはするけど、その温かさの中に、わたしを見極めようとするような……どこか冷たいものも感じる。

適当な答えを言っただけならかすのも無理そう。わたしは、なるべくゆつたりとした口調で言葉を紡いだ。

「嘘を吐く覚悟、かなって」

「……」

おっと、巖さんの中で何か揺れたな。

「……もう少し、詳しく説明してくれねえか」

「わたし、人間ってそもそもみんな役者だと思っただけですよ。手を合わせて、わざとらしく微笑んでみる。」

「ほら。演劇で、有名な一節があるじゃないですか。」

『All the world's a stage  
And all the men and women  
merely players』

「『この世は舞台。人はみな役者』。ジェイクイズだな。演出家を相手に、シエイクスピアの講釈をする気か？　そういうのは配信でやってくれ」

「でも、的を射ていると思いませんか？　発声をして、表情を作って、身振り手振りを交えて。演技の上手い下手はともかく、みんな自分という人間を演じて生きている。だから、そもそも役者とそうでない人を区別するのはちょっと違うと思いますけど……」

しかし、わたしは学んだ。

阿良也さんと潜った山の中で、必要だったから獣になった。その逆に、飢えた獣に襲われることで、自分という人間を思い出した。

この世は舞台。人はみな役者。稀代の劇作家は、本当に良い言葉を残したと思う。

わたしにとって、生きることとは演じること。

その考えの根本は今でも変わらないけれど……でも、少しだけ変わった。阿良也さんが役者という生き物の在り方をみせてくれたから。なにより、わたしが魅せられた『夜風景』と『百城千世子』が、明

確に『役者』だったから。

「嘘を本物にできる人。その覚悟を持っている人だけが、役者だらけのこの世の中で……本当の意味で『役者』を名乗れるんだろうなって。そう思います」

巖さんの険しい視線を、真正面から受け止める。

恐くはない。むしろ、心地良い緊張感に笑みを返す。

甘いよ。おじいちゃん。

そちらがわたしを見極めようとするなら。わたしも、あなたを見極める可能性を考慮してほしいものだ。

「……なるほど」

巖さんは、静かに頷いた。

そして、皺だらけの手のひらが、こちらに向かって開かれ、伸びる。思わず身構えたわたしは、

「やっぱりユアユアはかわいいな」

ものすごく、優しく。

頭を、撫で撫でされた。

……はあん？

「……なあ、七生。あれってセクハラだよな？」

「亀がやったらセクハラだけど、巖さんの年齢ならギリセーフなんじゃない？ ねえ、阿良也」

「どうかな。年齢関係なく、ファンとしてお触りは厳禁だと思うよ」

団員達の呆れた視線を意にも介さず、日本屈指の演出家は言った。

「よし。お前ら、稽古はじめんぞ」

なんなんだ。このクソジジイ。

## そしてはじまる乗車試験

『巖裕次郎!』

電話の先から聞こえてきた大声が、こちらまで響いてくる。単純な音量に由来するその爆音に、耳を寄せていた景ちゃんもスマートフォンを取り落としそうになった。

布団の上でわたしと戯れていたルイくんとレイちゃんも、そちらが気になったらしい。

「おねーちゃん、誰と話してるの?」

「もしかして彼氏!」

「はいはい。景ちゃんお話中だから、二人とも邪魔しないの。あと、景ちゃんの彼氏はわたしだから」

「ゆあねーちゃん、女の子なのに彼氏できるの? ちんこついでるの!?!」

「ついてないけど大丈夫だよ。わたしの心のちんこは、そこらへんの男の粗ちんには負けないから」

「すっげー!」

「ゆあねーちゃん、ルイに変なこと教えないで」

「はい。すみません」

レイちゃんに怒られて頭を下げる。なんかわたし最近ちんちんとかちんこぼつか連呼してるな。気のせい?」

それはともかく、景ちゃんの電話の相手は烏山武光くん。デスアイランドで共演した役者さんの一人である。言うまでもなく、声の大きさが特徴だ。

「う、うん……私、その人の舞台で主演を演じることになって……」

『主演!? 巖さんの舞台で!? ……いや、お前のことだ。そういうこともありえるのだろう。とにかく、すごいじゃないか! おめでとうっ!』

「あ、ありがとう……それで、武光君って舞台が専門の役者さんでしょう?」

『ああ! 基本的にはそうなるな!』



「だから、巖さんがどんな人なのか聞いておきたくて……」  
『なるほど』

そこで武光くんはようやく声のトーンを一段落とし……しかし、もう一度語気を強めて叫んだ。

『いいか夜風!? 巖さんには気をつけるよ!』  
「え?」

『身の危険を感じたらすぐに逃げろ! いいな!』

「身の危険!? 身の危険があるの?」

景ちゃんの顔色が目に見えて青くなる。

芝居の稽古で身の危険ってなんだろう、って思うけど。デスアイランドの撮影の時も滝の上から落ちたり、大雨で濁流に流されたりするので、景ちゃんが絡む撮影はそもそも大体危険な気がするな……ハリウッドか何かか?

「おねーちゃん顔色悪いよ、大丈夫?」

その表情の変化を、レイちゃんが目敏く指摘する。

わたしはぬるりと横から手を伸ばし、景ちゃんの手のひらからスマートフォンを取り上げた。

「あっ……ちよつと結愛ちゃん、勝手に」

「もしもしー、武光くん? やっほー」

『その声は……万宵か! どうして夜風の電話から万宵の声が?』

「わたしと景ちゃんは一心同体だからね」

『なるほど』

「なるほどじゃないわ」

景ちゃんとお揃いの『キーゼルバツハ部位Tシャツ』を着込んでお泊まりに来ているわたしは、もはや景ちゃんと一心同体と言っても過言ではない。

それはともかく。重要なのは巖さんの情報だ。

「それで武光くん。巖さんってそんなにヤバいの?」

『ああ! 業界の中でもかなり厳しい指導で知られている人だ! 直接会ったことがない俺でも、噂に聞くほどだからな!』

「そっか……たしかにヤバい感じはしたけど、やっぱりそうなんだね」

『流石は万宵だ。人を見る目があるな。その口ぶりだと、もう巖さんとは会ったのか?』

「うん。初対面で頭撫でられた」

『……撫で……え?』

武光くんの声音に、はじめて困惑が宿る。

「とにかく、いろいろありがとねー。その舞台、わたしも出るから、今度チケット送るよ。じゃあ、おやすみー」

「あ、結愛ちゃん!」

景ちゃんの制止を待たず、わたしはさっさと武光くんと電話を切ってしまった。

「どうしたものかな……」

「どうしたものかって?」

「いやほら、ぶっちゃけわたしはいくら撫でられても触られてもいいんだけどさ。景ちゃんにあのおじいちゃん魔の手が伸びるのだけは、なんとしても阻止しなきゃいけないじゃん?」

「そうなの?」

「そうだよ!」

どうしてこう、自分がかわいいっていう自覚がないのかなあ! どのかわいいう幼馴染は!

「でも私、お芝居はしたいわ」

「うん。それはわかる。景ちゃんだしね。まあ、今回はデスアイランドの時とは違ってわたしも近くにいますし、大丈夫っちゃ大丈夫か」

「そうね。巖さんはもちろんこわいけど……私、他の人達とも仲良くになりたい」

結局、あの日はほとんどまともな稽古もできないまま帰されてしまった。わたしはここ数ヶ月の下積み期間のおかげで地球の役者のみなさんとは面識があるし、既にそれなりの関係を構築できているけど、景ちゃんは違う。

「ああ、そうだね。でも、景ちゃんの実力なら大丈夫! きつとみんなすぐに受け入れてくれるよ。七生さんはツンデレだけど優しいし、亀さんは変態で気持ち悪いけど優しいし。阿良也さんは……ちよつと

仲良くなるのが大変かもしれないけど」

「阿良也、さん……」

結愛と共演していた、劇団天球の顔とも言える役者。

その顔と、舞台の上の結愛の姿を思い出して、景は下を向いた。

「結愛ちゃんは」

「ん？」

「結愛ちゃんは何か、阿良也さんとは随分仲が良さそうよね？」

「ふへ？」

あかん。

声がきれいに裏返ってしまった。

「いや。いやいやいや！ ベつに、その、ほら……阿良也さんには、たしかにいろいろ教えてもらったけど！ 教えてもらったけれども！ それはあくまでもお芝居のためっていうか、ビジネスライクな付き合いつていうか！」

「でも、一緒に山に籠ったって言ったわ」

「えつと……それは、まあ、はい。わたしの演技力向上のために」

「何もなかった？」

「な、ナニモノカッタヨー」

言えるわけがない。

阿良也さんの前で全裸になって、ワンコごっこして、熊に襲われて、その後おいしくいただきました、とか。絶対に景ちゃんに言えるわけがない。

だって、客観的に見て自分でもドン引きするもん！

本当は景ちゃんに隠し事はしたくないけど、こればかりは黙っておこう。胸の内になってしまうとおこう、うん。

「何もなかった……なら、いいけど」

ぎゅい、と袖を引かれる。

普段は見上げる側の景ちゃんは、今はわたしを上目遣いに見上げていて。

いつもは凜とした印象の横顔は、今は熱を孕んだように潤んでいて。

……いや、うん。その、なんというか。  
これはダメだ。こういう顔をするのは、あまりにもすぎる。  
かわいすぎる。

「結愛ちゃん和阿良也さんがそういう関係じゃなくても、ちよつと……妬いちやうわ」

「これ、食べちやつてもいいかな？」

「ゆあねーちゃん？」

「はい。すみません」

☆☆☆☆

「どうしたの結愛？ 寝不足？」

「うん。昨日ちよつとむらむらして」

「むらむら？」

「やっぱりわたしの心にもちんちんはあつたみたいだよ」

「ちよつとなに言ってるかわからないんだけど」

ふふ……景ちゃんにむらむらして全然寝れなかったぜ。でも、一周回ってすごく元気な感じなんだよね。徹夜明けのハイテンションつてやつ？

「よくないね。役者が体調管理を怠るものじゃない」

「いつも目の下に隈浮かべてる阿良也さんに言われたくないんですけど？」

「俺はこういう顔だからいいんだよ。それより……」

いつもと変わらず気だるそうな阿良也さんは、景ちゃんの方を指差して言った。

「あれ、なに？」

景ちゃんはぶるぶると震えながら、箒を握りしめて巖のおじいちゃんと向かいあっている。

「す、すみません……昨日、台本読んだんですけど、全然頭に入ってこなくて……でも、がんばりますので、痛くしないでください」

「その箒はなんだ。やる気か teme」

「や、やる気は！ やる気はあります！」

景ちゃんは今日もかわいいなあ……。

「ねえ、結愛。あんたの幼馴染って見た目美人だけどさ……」

「あ、七生さん気付いた？ 見た目はかわいいけど、基本的に中身変人でポンコツだよ」

でもそこが愛せるってわけよ。

「七生！ 亀！ 阿良也！ ちよつとこい。ユアユアもだ」

おっと、呼ばれてしまった。

ていうか、どうでもいいけどあのおじいちゃん、指導の間わたしのことずっと「ユアユア」って呼ぶつもりなのかな……？ わりとヤバくない？

「K……じゃねえ、夜風」

「え、あ、はい」

おいジジイ。また景ちゃんのこと『K子ちゃん』って呼びそうになっただらう？

「喜怒哀楽を表現してみる。簡潔にな」

「喜怒哀楽……？」

少し考え込んだ景ちゃんは、意を決したように前を向いた。

「喜」

ぱあ。

「怒」

むっ。

「哀」

しゅん。

「そして、これが楽！」

びすびす。

「……」

「……」

「……」

うん。くっそわかりづれえ。

「巖さん巖さん。こいつこいつはけてますよ」

「ふざけてないわ！ 真剣です！」

そうなんだよね。ふざけてないんだよなあ……。景ちゃん、これでも至って真剣にやっているんだよなあ。

もちろん、小さな頃から景ちゃんの表情の変化を見てきたわたしから見れば、その心情は手に取るように把握するのは容易いこと……。なんだけど。残念ながら、一人の役者さんとして見た場合、これは景ちゃんの明確な弱点だ。

「話になんねえな。おい、亀、手本見せてやれ」

「うっす！ よく見とけよ夜風！ この和製ジムキャリーの芝居を！」

「ジムキャリーに謝れ」

七生さんの鋭いツツコミをもともせず、亀さんがうきうきと前に出る。

「はい、喜い！」

びーん。

「怒おおおお！」

どおおおん。

「哀……」

ズーン。

「そしてこれが……エクスタツ……」

「おっと」

手が滑った。

「あぼおあ！」

わたしがぶん投げた小道具が、亀さんの顔面にクリーンヒットする。うん、我ながらナイスコントロール。

「いってえんだけど！ なんて俺の名演の邪魔すんの!？」

「いや、下ネタの気配がしたもんで」

「マジでジムキャリーに謝れ」

わたしのちんちんセンサーに不快な反応がびんびんきたからね。景ちゃんに不快な汚物を見せるわけにはいかない。

ふざけた亀さんをヘッドロックして締め落とすつつ、巖さんがやれ

やれと首を振る。

「だがまあ、俺たちを不快にした時点で、演技としては夜風のそれより上等だ。少なくとも、表現力は伴っている」

ちらり、と。鋭い視線がこちらに向く。

「ユアユア。やってみろ」

「……はい」

いつの間にか、それぞれ練習をしていた他の団員のみなさんも集まってきた。景ちゃんはおろおろと周囲を見回しているけど、わたしとしてはこちらの方がやりやすい。

ここは天下の劇団天球。わたしをじっと見詰める役者達は、正しく感情表現のプロフェッショナルだ。表現の基準にするのに、これほど適した人材もいない。

「はい。喜。怒。哀。楽」

もはや、いちいち区切るのも面倒くさかった。

時間にすれば、それぞれ数秒ずつほど。でも、感受性が高いこの集団を相手に表現するには、それで充分なくらいだ。むしろ、派手過ぎず、地味過ぎず。スピーディーに表情を入れ替えてみせた方が、アピールとしてはちようどいい。

ほう、と。感嘆や感心の感情が寄せられる。

「ふっ……流石だな、ユアユア」

だからなんなのこのジジイ？

めちやくちや得意気な顔するじゃん。

「いいか、夜風。『深さ』と『伝わりやすさ』を両立しろ。お前が今までしてきた芝居を否定するつもりはねえが、芝居は妄想じゃねえ。表現であることを知れ」

「表現……」

「10日以内に、今の課題をクリアしろ。できなきゃお前は降板だ」

しばらくあっけに取られていた景ちゃんは、ようやく自分の置かれた状況に理解が追いつきはじめたようで、じっと考え込みはじめた。



巖のおじいちゃんが一人になったタイミングを狙って、わたしは話しかけに行った。

「巖のおじいちゃん」

「ユアユアか。夜風についてなくていいのか？」

「演技力向上のために、一人で考える時間は絶対に必要だからね。それくらいは弁えてますよ。なんせ、親友なので」

「そうか」

もちろん景ちゃんのことは心配だけど、今はそれよりも気になることがある。

「ねえ、巖のおじいちゃん。さっきのわたしの演技を見て、どう思った？」

「よかったぞ」

「うそつき」

「……」

たしかに、口では褒めてもらった。得意気な顔もしていた。

でも、非常に申し訳ないけれど。わたしには心や感情が視えるので……わたしの演技を見ていた巖のおじいちゃんが『何も思っていない』ことは、手に取るようにわかる。

そう。何もなかったのだ。わたしを見詰める巖裕次郎の感情には、何の色も宿ってはいなかった。

「演技をしながら、俺の反応まで盗み見てやがったのか。食べねえな、ユアユア」

「食えないのはそっちでしょ。わたしのファンだっていうのも、もしかしてうそだったりする？」

「いや、それは本当だが」

「……」

「本当だが？」

わかったから繰り返し返さなくていい。



「いいか、ユアユア。俺はユアユアが好きだ」

「やめてくださいそういうのはちよつとほんとむりです。わたし好きな人がいるんで」

「だが、今のユアユアの演技が……劇団天球の舞台に相応しいとも思っていない」

……なるほどね。

「何をしたら認めてもらえる?」

「夜風と同じだ。特別扱いはしない。課題を与える」

景ちゃんと同じ、ね。おじいちゃんの反応にはちよつと引つかかるところがあるけれど、何かしらの課題があった方が、わたしとしてもやりがいがあつておもしろい。

「……って、ちよつと待って。もしかして、その課題って」

「おう。察しがいいじゃねえか」

わたしはまだ、役を貰っていない。

目の前に座る老獪は、これ見よがしに口の端を吊り上げた。

「銀河鉄道の夜で、自分が演じる役を……自分で見つけてみせろ」

## 天才と凡人と取引と

「はーい、みんなひっそりぶりー！ 元気にしてましたかー？」  
『まったた』『ひさびさに長めの配信枠、うれしみ』『最近舞台出演多  
かったもんな』『ユアユアの顔が！ 近い！』『ステイステイ』『紳士的  
な距離を保ちな！』

ひさしぶりに会うファンのみんながあったかくてうれしい限りだ  
よ。涙がちよちよ切れそうだね。

「まあ、もう知ってる人は知ってると思うんだけど、ご存知の通り最近  
のわたしは舞台俳優としての活動に精を出しております、ちよっ  
と配信頻度が減ってるのが現状です。でも、配信をやめるつもりない  
ので、そこは安心してね？」

そう言うと、やはりほっとした気配が画面から流れてきた。なんだ  
かんだ、わたしは今まで配信者として長くやってきたので、役者とし  
ての活動が増えていくことに不安を感じている視聴者さんは、やっぱ  
り多かつたみたいだ。

『やったぜ』『舞台も応援してるぜ！』『俺、この前観に行つたわ』『舞  
台とかあんま興味なかったけど、普通に楽しかった』『それなく！』  
「ありがとうありがとう。もう観に来てくれてる人がいっぱいいるみ  
たいで、うれしいよ。ありがとね！」

視聴者のみんなの熱がのってきたところで、告知を畳み掛ける。

「そんなわけで、今日はお芝居関係で一つ、超重大発表があります！  
なんとわたし、万宵結愛は……劇団天球の公演、銀河鉄道の夜に出演  
することが決定しました！ いえーい！」

『劇団天球!』『劇団天球!』『劇団天球!』『劇団天球が3体!』『くる  
ぞ遊馬!』『すまない、演劇には詳しくはないので、誰か解説を頼む』  
『界限では有名な実力派集団だよ』『演出家は日本一って言われるくら  
い』『めちやくちやすごい』

おー、おー。良い反応だ。ありがたい。

『ユアユアは何役で出るの?』

あー、そうだよなあ……当然くるよなあ、この質問。

「ふっふふ……わたしの役は、残念ながらまだヒミツだよ〜！」

『なにつ!?』『おいおい、勿体ぶるじゃねえか』『ワクワクしてきたぜ』『出演決まってるのに役伏せることってあるの?』『普通にあるよ。シークレットキャストとか』『ユアユアは今回、外部から参加って形になるから、そういう形にしたんじゃね?』

よかった。いい感じに深読みしてくれてる。助かる。

「わたしが銀河鉄道の夜で演じる役が何なのか、みんな楽しみにしててね!」

うそです。まだ何も決まってません。誰かわたしを助けてくれうおおおん!

「結愛ちゃんん。ご飯できたわ……」

がちやり、と部屋の扉が開く。

あ、しまった、景ちゃんに「今日配信するよ」って言うの、すっかり忘れてた。

「ご、ごめんなさい。配信中だった?」

わたしのうしろにエプロンをした景ちゃんの姿が映り込んだ瞬間に、コメントの流れが一段早くなる。

『景ちゃんキター!』『エプロンキター!』『当たり前のように夕ご飯のお誘いキター!』『進む百合の波動が3体!』『くるぞ遊馬!』

相変わらず景ちゃんのことになると、コメント欄の一体感半端ないな。

「あ、言い忘れてたけど、景ちゃんも銀河鉄道の夜に出るよ。カムパネルラ役で」

ざわつと、みんなの感情が揺れる。

『カムパネルラ!?』『カムパネルラ!?』『メインじゃん!?』『さすがおれたちの景ちゃん』『おれたちのじゃないぞ、ユアユアのだぞ』『おいおい、アイツ死んだわ』

ふー、助かった。景ちゃんがカムパネルラ役を演じるっていうのは、やっぱり話題性抜群だから、意識がそっちに良い感じに流れてくれたね。

「じゃあ景ちゃん! ……で一言どうぞ!」

「え？ え……えつと……」

わたしの雑なフリに景ちゃんはお目々をぐるぐるさせて、とりあえず画面に向かってピースした。

「今日のお夕飯は、肉じゃがです！」  
違う。そうじゃない。



星アキラが参加する、はじめての稽古日がやってきた。

「スターズから来ました。星アキラです。みなさんと一緒に演技ができる機会を得られたこと、心からうれしく思います。がんばります」  
好意的に迎えられるとは思っていなかったが、思っていた以上にアウェーな雰囲気、アキラは内心でため息を吐いた。

無理もない。完全実力主義の役者が集まった、演劇集団、劇団天球。タレント性を重んじる、スターズ所属の役者とは、売り出し方が根本的に正反対だ。

遠巻きにアキラを見守っていた役者たちの中から、一人がすつと抜け出してきた。

「星くん。はじめまして明神です」

「あ……はじめまして」

「やっぱりだ。ある意味、すごいな君」

無感動な平坦な口調で、阿良也は言った。

「何が、ですか？」

「驚くほど何の臭いもしない。逆に珍しいよ、君みたいな役者は」

アキラは知っている。阿良也が、景を指して『臭う』と言っていたことを。

「……あまり良い意味じゃなさそうですね」

「別に良いも悪いもないよ。ただ、俺が好きじゃないってだけ。巖さんも好きじゃないと思うけどね」

それだけ言って、彼はすたすたと去っていく。

明神阿良也。やはり、一筋縄ではいかない危険な役者だと思った。

と、阿良也と入れ替わるようにして、もう1人が前に出る。

「はじめまして、万宵結愛です」

「いや全然はじめましてじゃないよね?」

なんかもつとやベーヤツがいた。

おそろしいほどに整った顔立ちをあからさまに歪めて、結愛は舌打ちする。

「はあ? 初対面ですけど」

「いや、だって夜風くんと一緒に舞台を観に行った時に……」

「はあ? あなたは景ちゃんと舞台になんて行ってないんですけど?」

ヤバい。事実を塗り替えられている。

「おい夜風、お前の親友はいつもああなのか?」

「結愛ちゃんは怒ってる時は基本的に人の話を聞かないわ」

「散々だな。スターズの王子さまも」

勘弁してくれ、とアキラは思った。いや本当に勘弁してほしい。

「景ちゃんみたいな美人と熱愛報道されて、さぞご満悦でしょうね?」

「だからまってくれ。あれは誤解だし、熱愛とかじゃなくて共演のための下見だったと、会見で説明もしたし」

「でも景ちゃんと熱愛報道されていい気分だったんでしよう? めちやくちやいい気分だったんでしよう?」

「いやべつに」

「はあ!? 景ちゃんと熱愛報道をされておいて、べつにつてなに!」

「じゃあ何を言えば満足するんだ!」

ひとしきり結愛とやりあってから、アキラは我に返って巖の方を見た。挨拶の直後に、演出家の前でケンカのようなことをしてしまった。ただでさえ印象が悪いのに、これでは……

「怒っているユアユアか。レアだな。良い」  
「!」

アキラは本当に不安だった。



わたしと景ちゃんは、それぞれ違う課題を出されている。

景ちゃんの課題は、10日以内に感情表現をものにする。わたしの課題は、10日以内に銀河鉄道の夜で自分に相応しい役を見つけ出すことだ。

なんだかんだで、すでに3日の時間が過ぎてしまっている。景ちゃんは、放っておいても大丈夫だろう。演技という分野に関して、景ちゃんは間違いなく天才だ。問題はわたしの方。正直、他人の心配をしている暇はない。他人の心配をしている暇はないのだが……

「万宵君、何をしているんだい？」

「みてわからないの、星アキラ」

「まったくわからない」

「景ちゃんの撮影だよ」

わたしはゴツい一眼レフカメラを構えて、公園で感情表現の練習をする景ちゃんの姿を撮影していた。

隣には、べつに話したくもないのに、星アキラがあきれた表情で立っている。わりと気配はちゃんと殺していたつもりだったんだけど、見つかってしまった。腐っても役者か。

「そのカメラは？」

「景ちゃんを撮影するためのものだよ」

「それ、盗撮じゃないか？」

「大丈夫だよ。わたしたち幼馴染だから」

「君、幼馴染って言ったならなんでも許されると思っていないか？」

うるさいなあ、このイケメン。はやくどっか行ってくれないかな。わたしにとって景ちゃんを見ることは呼吸と同じなんだよ。息ができなきや、生き物は死ぬに決まってるでしょうが。おっと、この横顔は光の当たり方も相まって最高ですね。連写連写連写ア！

カシャカシャと撮影を続けるわたしの姿勢に文句を言う気も失せたのか、アキラくんはため息を吐きながらわたしの隣に腰掛けた。なんで隣に座るんだよこのイケメン。わたしは景ちゃん秘蔵アルバムのコレクションを増やしたいんだよ。さっさとどっか行ってくれ。

「……夜風くんは、すごいな」

「急にどうしたの？　もしかして、ようやく景ちゃんの魅力に気がついた？」

「僕はデスアイランドの時から、彼女のことをすごい役者だと思っ  
ているし、尊敬しているよ」

「なぜか不格好な人形を取り出して、外国人らしき女の子に話しかけ  
はじめた景ちゃんを見詰めて、アキラくんは言った。

「認めるよ。演技に関して、彼女は間違いなく僕より上だ」

「ごめんちよつと黙ってて。今、景ちゃんが幼女と戯れてるめちやく  
ちやエモい画が撮れそうだから」

「……」

よしよしよし、完璧だ。パーフェクトだ。最近良い写真が撮れてな  
かったけど、これはマジで素晴らしい。あとで引き伸ばして額縁に入  
れて部屋に飾っておこう。

「あ、ごめん。それでなんだっけ？」

「いや、もういいよ」

「うそうそ。ちゃんと聞いてたよ。景ちゃんが才能に溢れすぎてい  
て、自分がクソ雑魚ナメクジに思えてつらいつて話だよね？」

「そこまで言ってないが!？」

声を荒げてアキラくんが立ち上がった衝撃で、わたしのバッグが倒  
れて、中身が溢れ出た。ちよつとこのイケメン何してくれてんの？

「あらら」

「ご、ごめんー!」

「べつにいいけど、ちゃんと戻してね」

「……万宵君、これは」

「これは、って言われても。見ての通りだよ」

やれやれ。何故か勝手に固まっているアキラくんを押しつけて、わ  
たしは地面に散らばってしまった宮沢賢治の本を拾い集めた。作品  
集はもちろん、伝記から評論に至るまで。中身は違えど、これらはす  
べて宮沢賢治の本だ。

「最近、舞台に精を出していたおかげか、そっち方面からわたしのこと

を知ってくれるようになったお客さんも増えてね。宮沢賢治に関する本でオススメを教えて下さい、って配信で聞いたら、もうたくさんメッセージがきたよ。こういう時、集合知は力だって実感するね」

「じゃあ君は、教えてもらった本を全部？」

「うん。これは今日買い足した分だよ。まだまだ読み切れてなくて。だから景ちゃんを見て気分転換しに来たってわけ」

「……すごいな、君は」

それは、本当に心から尊敬の念を感じているかのような眩きだったが。

そのやつすい称賛を、わたしは鼻で笑った。

「うそつき」

「え？」

「すごいだなんて、全然思っていないでしょう？」

「いや、そんなことは」

「思ってるよ」

わたしは無遠慮に手を伸ばして、アキラくんの腹に触れた。撫でるように、下から上へ指先を伸ばす。服の上から少し触れただけでもわかる、鍛え上げられた肉体だ。普段から厳しいトレーニングを日常的にこなさなければ、この体は作れない。

「だって、アキラくんもこの程度の努力ならやっているでしょ？」

胡乱に細められていた目が、はつきりと見開かれた。

「凡人同士。お互い、星に手を伸ばすのは大変だね」

「……僕は、君のことを凡人だと思ったことはないよ。これがうそじゃないのは、わかるだろう？」

「うん、たしかに。天才っていうのは自分で名乗るものじゃなくて、周囲が決めるものだからね」

再びカメラを構えて、景ちゃんをレンズ越しに見る。きれいな顔立ちには喜びの感情がありありと浮かんでいて、その華やかと楽しさに、さつきまで泣き出しそうだった女の子は釘付けになっていた。

魅力がある。華がある。そこに立っているだけで、惹きつけられる何かがある。



ああ、やつぱりすごいなあ。

景ちゃんはいつも、わたしの前を歩いてる。

「凡人は、ある意味楽だよ。自分で名乗れるからさ」

カメラをしまつて、わたしは立ち上がる。

担ぎ上げた本の山は、ひどく重い。けれどわたしはきつと、この重さにまだ甘えているのだ。

だから、わたしはまだ自分を凡人だと思っているし、わたしを天才と呼ぶ声を、断固として拒絶する。

人の心を感じられる。こんな力に頼らなければ、役者として対等の舞台にすら立てない自分を、心の底から軽蔑する。

でも、わたしは景ちゃんの隣に立ちたいから。かつこ悪くても、ダメくても、利用できるものは全部利用して、景ちゃんと同じ舞台に立つ。

「……万宵くん」

「まだ何か？ わたし、もう帰るんだけど」

「君の家、夜凧君の隣だろう？ 送っていくよ。その本、重いだろう？」

……やれやれ、本当にこのイケメンは。

「今度は、わたしとの熱愛がすつば抜かれないように気をつけてね」  
「善処するよ」



「こんな洒落た店に連れてきて、会わせたいやつってのはどんな野郎かと思ってたが……胸糞わりいな、黒山。俺は男の顔を肴に飲む趣味はねえぞ」

「俺だつて、できれば会わせたくなかったよ」

「それは悲しいですね。私は、早く会いたくて会いたくて仕方ありませんでした。それこそ、恋に焦られる乙女のように、お会いする機会を待ち望んでいましたよ」

黒山墨字を、挟む形で。

男が二人、高級店のテーブルを挟んで向かい合っていた。

「お初にお目にかかります、巖裕次郎。そのご高名はかねがね……」

「年寄りには気が短けえって習わなかったのか、若造。御託はいい、さつさと本題に入りな」

「これはこれは。商談が進めやすくて助かります」

「本題に入れ、って言っただ。てめえと商談をするとは、まだ一言も言っただねえ」

「いやはや、これは手厳しい」

巖は普段口になっているものよりもずっと高い酒を、雑に煽った。並の役者なら一睨みされただけで萎縮してしまうであろうその眼光を前にしても、天知の笑顔は崩れない。

「いやになるぜ。まさか、俺のユアユアのバックについてたのが、こんなうさんくせえヤツだったとはな」

「褒め言葉として受け取っておきますよ。あなたほどの舞台演出家なら、わたしの大切な見世物を預けるに相応しい」

巖裕次郎と天知心一。

決して相容れない、両者の剣呑な雰囲気は挟まれて。

早く帰りたいなー、と。黒山は心の底からそう思った。

## 悪魔との契約

もう、何冊読んだかわからない。何回、繰り返し読んだかもわからない。

ページを捲る。

自分が他人にどう見られるか。常に考えて生きてきた。

だから、わたしは他人に見られることに慣れているし、どうすれば自分が魅力的に見えるか、よく知っている。

呼吸、視線、所作。声のトーン、表情の切り替え、指先一つの動きに至るまで。相手がわたしを見詰める時、わたしのすべては相手がわたしを評価する要素に成り得る。他人は自分自身を写す鏡だといふけれど、わたしはそれが正しいと思っている。

巖のおじいちゃんは、わたしに言った。

—— 銀河鉄道の夜で、自分が演じる役を……自分で見つけてみせろ。

それはつまり、与えられた役をただこなすのではなく、演じる役を自分で決めろ、ということだ。

だから、本を紐解きながら思考する。銀河鉄道の夜という作品で、わたしという存在を最も魅力的に写し出す鏡はどれなのか。

ページを捲る。

巖さんは景ちゃんに「台本は渡したが、まだ台本読みはしなくてもいい」と言っていた。景ちゃんが出された課題は、感情表現だ。それは役柄以前の問題、言うなれば土台作りのようなもので、台本の内容はほぼ関係ないからだろう。厳しくぶっきらぼうなように見えて、効率的に課題に取り組みせようとしているおじいちゃんのやさしさが垣間見える。

だけど、巖のおじいちゃんはわたしには何も言わなかった。台本を読め、とも、読むな、とも言わなかった。つまるところ、最初から、ヒントはあったのだ。

ページを捲る。

キャスティングの大部分は、既に決まっている。演劇の台本は原作

そのままではないから、いくらかの違いはあるけれど、明らかに原作にセリフがあるにも関わらず配役が削られているキャラクターがいる。

「これか」

見つけた。

でも、納得はできない。

これは本当に、わたしが輝くことができる役なのだろうか？



「どうですか？ 万宵結愛は」

「ああ？」

巖は、また剣呑な声を返した。天知の問いかけが、あまりにも漠然としたものだったからだ。

「良い役者だ、とでも言ってほしいのか？」

「そうですね。日本最高の演出家からお墨付きが貰えれば、彼女の今後の活動にも箔が付きます」

「バカバカしい。てめえは良い役者がほしいんじゃないやねえ。売れる役者がほしいだけだろう」

「演劇もビジネスである以上、売れなければ意味がないでしょう。違いますか？」

「金のことしか頭にないヤツと、芝居の話をする気はねえ。帰れ」

品の良い背広に包まれた肩が、大仰に竦められる。

「では、質問を変えましょう。あなたは、自分がいなくなったあとの劇団地球が、問題なく存続できると思いますか？」

「何が言いたい？」

「臍臓に悪性の腫瘍があるそうですね。余命はおよそ半年ほどだと伺っています」

唐突に放り投げられた爆弾に、巖の口が動かなくなった。

「天知、テメエ！」

声を荒げて立ち上がったのは、巖ではなく黒山だった。

「ああ。その反応を見るに、やはりきみは聞かされていたようだね、黒山」

「この拝金主義者が！ 医者まで買収したのか!？」

「人間きが悪いね。君は巖さんの健康状態について随分前から聞かされていたようじゃないか。それなのに、私には何の連絡もなかったなら、伝手を使って調べるのは当然というものだろう?」

そこでようやく、天知は手元の杯に口をつけた。

「君が夜風景を預けているように、私は万宵結愛を劇団天球に預けているんだ。君が知っていて、わたしが知らないことがある、というのは、あまりにも筋が通らない」

「それは」

「健康というのは、ビジネスの世界でも重要視されるものだよ。体調の悪い人間に仕事を頼もうとは思わないし、身体の自己管理もできない人間に、スケジュールの調整ができるとも思えない」

「……ユアユアを、俺から取り上げる気か?」

「それは、あなた次第です」

「……はっ。くそ生意気なプロデューサーだ」

巖は、迷わなかった。

「余命宣告こそ受けたが、身体にはまだ余裕がある。公演の最後まで、役者たちの面倒を見ることに関しては、なんの問題もない」

信じられないものを見るような目で、黒山はそれを見た。事実、信じられなかった。

「頼む。あの子を、俺に預けてほしい」

あの演劇界の重鎮が、巖裕次郎が、一回りも二回りも下の若造に向かって、頭を下げている。

「……なるほど」

軽く頷いた天知は、席から立ち上がった。

次はどんな爆弾がその口から飛び出してくるのか、と。黒山は身構えたが、

「いちいち、よろしくお願いします」

予想以上に丁寧に下げられた頭に、拍子抜けした。

「……天知」

「勘違いしないでほしいな、黒山。私は君と違って常識というものを弁えているんだ。必要なら頭も下げるし、土下座もするさ」

「そうかよ。お前の土下座はいつか見てえな」

「まあ、君に見せることは絶対ないだろうけどね。君が私に土下座する機会は、この先いくらでもあるだろうが」

「ほざいてろバカが」

不快な思いをした分、せめて飲まなければやってられないと黒山は酒を呷った。

懐に手を伸ばした天知は、名刺をすつと抜き出して、巖に両手で渡す。

「私の連絡先です。劇団天球の今後に関しても、前向きにご検討ください」

「それとこれとは話がべつだ。同じことを二度も言わせんな。演劇を金儲けの手段としか考えてないヤツとは、死んでも組む気はねえよ」  
「そのように言われるのは些か心外ですね。演劇とは人の心を写すもの。私は何より、人の心が最も大切だと考えています。なぜなら、ビジネスとはつまるところ、人の心の売買ですから」

天知は、伝票を取り上げる。

「そうそう。彼女のプロデューサーとして、一つ、いいことを教えて差し上げます」

本当に、これを教えるのはサービスだ、とでも言いたげに。

「万宵結愛は、人の心が読める役者です」

口元が、いやらしいほどきれいな弧を描いた。



家に帰り着いた巖は、ソファーに座り込んで、深く息を吐き出した。予想以上に食えない男だった。彼女の背後に有能な人物がいるのはなんとなく察していたが、あんな男がいるとは思っていなかった。

「あ、おかえり〜」

そして、家の中に先程までの話題の張本人がいるとも思わなかった。  
た。

ぬるり、と。

電気も点けずに、暗がりから唐突に現れた少女に対して、巖は努めて平静を装って問いかけた。

「……ユアユア、なぜここにいる？ どうやってウチに入った？」

「いや、本当は入口で待ってようと思っただけだね。玄関、開いてたから中で待たせてもらおっかなって。だめだよ、巖のおじいちゃん。老人の一人暮らしなんだから、戸締まりは気をつけないと」

「わかった。気をつけよう」

「素直なの？」

言い返されることを想定していたのだろうか。

調子が崩れた、といった風に、結愛は大仰に肩を竦めて。なんとなく、その所作が先ほど会ってきたあの男に似ているな、と。巖は思った。

「それで、何の用だ？」

「課題のことだよ。終わったって早く伝えたくて」

「そうか。で、どの役を選んだ？」

「選んでなんていないよ。もしかして演出家って、みんなおじいちゃんみたいに性格が悪いの？」

「何の話だ？」

「見つけてみせろ、なんて言ったくせに。わたしに演じさせる役、最初から決めてたでしょ？」

肩を掴まれた。

それは、不意打ちだった。

「食えないジジイだね」

予想以上に強い力で、抱きつかれて。

老いた体は、若く瑞々しい肢体に押し倒された。

「……これは、あれか？ 壁ドンならぬ、床ドンってやつか？」

「詳しいね。おじいちゃん」

「年寄り扱いするんじゃないねえ」

「どう？　ぴちぴちの女子高生に押し倒された気分は」  
「わるくねえ」

吐かれた息が、近い。

舐めるような結愛の視線には、どこか巖を試すような色が含まれていた。

「間近で見ると、ますます良い女だな」

「ありがとう」

この、良い女を。

自分は、残された余生で、良い役者にしなければならぬ。

床の冷たい感触を背中で感じながら、巖は結愛を真っ直ぐに見つめ返した。

だから、だろうか。

「巖のおじいちゃん、もしかして、もうすぐ死ぬの？」

たった一言で、少女はその核心を突いた。

——万宵結愛は、人の心が読める役者です。

驚きよりも、なるほど、という妙な納得があった。

見下されたまま、見上げたまま、巖は言葉を選んだ。結愛も、それを待っているようだった。

「……ああ。臍臓が悪いんだ。もう、そんなに長くない」

「助からないの？」

「無理だな。余命宣告も受けている」

「……そんな、だめだよ……死んじやだよ」

ぽとり、と。老人の乾いた頬を、雫が落ちて濡らした。

万宵結愛は、泣いていた。

巖は、演出家だ。嘘泣きと本物の涙の違いは、すぐにわかる。唐突に、驚きを伴って溢れたその涙が、紛れもない本物であることは、明白だった。

ああ、この娘は、自分のために泣いてくれるのか。

巖は、年頃の娘らしいその反応に、思わず軽い溜息を吐いて、



「巖のおじいちゃんが死んじゃったら……誰がわたしのお芝居を完成させてくれるの?」

続けて紡がれたその言葉に、目を見開いて硬直した。

「……くくっ」

巖は、笑った。

それは、驚愕と安堵が矛盾なく混ざりあった笑みだった。

病に冒された老人を前にして、命よりも芝居の心配をする少女の言葉は1人の人間としては最低以外の何物でもなかったが、

「……ああ、最高だな」

演技の向上を望む1人の役者としては、何よりも正しかった。

そうだ。これでいい。

本当に救いようがない芝居馬鹿である巖裕次郎という演出家は、自分の命よりも自分の芝居の行く末を案ずる少女の姿に、満足してしまっていた。そのエゴに塗れた芝居への欲に、この瞬間も心惹かれていた。

「ユアユア」

「なに?」

「俺は、もうすぐ死ぬ」

「それはもう、聞いたよ」

「……俺の心が、見えるか?」

「うん」

ブラウンの髪が、さらりと揺れて巖の頬を撫でる。

くすりと。形の良い唇が歪んだ。

「すごいね、おじいちゃん。死ぬのがこわくないの?」

「怖いさ」

「うそつき。だっておじいちゃんの心の中、芝居のことしかないもん」

「そうだな」

「イカレてるね」

「芝居は馬鹿じゃなきゃできねえんだよ」

この子は、この瞳は。

本当に自分の心の中にあるそれを覗き込んでいるのだと、巖は確信した。

「お前の役は、死を身近に感じることで完成する」

「そうだね。わたしもそう思うよ。だから、どうしたら良い？」

「……マンツーマンで、指導してやる。俺が死ぬ前に、お前を役者として一つ上のステージに引き上げてやる」

「約束してくれる？」

「ほんとうに？」

「ああ、約束だ。だから、俺からも質問する」

「なあに？」

頭の中を過ぎったのは、いくつかの可能性。

あるいは、その迷いすらも覗かれているかもしれない。だから最初から、問いを投げけることを迷う必要すらなかった。

「俺の死を、喰えるか？」

「もちろん。それで、景ちゃんと同じ舞台上に上がれるなら」

即答だった。

笑みの隙間から、赤い舌がちらりと垣間見える。

「皮と骨しか残ってないように見えるけど、ちゃんと食べさせてね？」

「……生意気だな」

元々、ハートを鷲掴みにされていたようなものだったが。

その夜から、巖裕次郎は悪魔に心臓を握られた。

「あ！じゃあわたし、明日から巖のおじいちゃんの家に住むから」

「……え」

「ご飯もちゃんと作ってあげるね！ここで配信やるけど、べつにい

いでしょ？」

「……………え？」

あと、胃袋とその他諸々の大切なものも、握られそうだった。

## 「推しがいる生活」

巖裕次郎の朝は、それなりに早い。

おおよそ、6時ちようどには起床し、朝食を摂る。とはいえ、独り身の寂しい家だ。大したものは作らない。精々、目玉焼きを焼いて葉物野菜をサラダ代わりにちぎる程度である。洗面所で顔だけ洗って、台所に向かう。

「あー！ おはよう！ 巖のおじいちゃん！」

「……」

なんか、エプロン姿の推しがいた。

巖はもう一度洗面所に戻り、念入りに顔を洗った。それはもうめちゃくちゃ念入りに顔を洗った。

「おはよう！ 巖のおじいちゃん！」

「……」

巖はさらにもう一度洗面所に戻り、重ねて念入りに顔を洗った。もう巖の顔面はぴかぴかのつやつやである。洗うところが残されていないレベルだ。今度こそ、と三度台所に向かう。

「はあ……おはよう、巖のおじいちゃん」

「……」

「いや戻らないで。座って。夢じゃないから。わたしに何回おはよう言わせれば気が済むの？」

まだ自分は寝惚けているのだろうか、と巖は思った。

白いセーラー服に、紺色のエプロンを身に着けて。茶色のポニーテールを揺らしながら、台所で料理の味見をしている美少女がいた。どこからどう見ても、万宵結愛である。巖裕次郎の推しである。巖は、医者に注意されても一度も気にしたことがなかった血圧を気にしながら、深く大きく深呼吸した。

「いやあ、やっぱりおじいちゃんは早起きだねえ。あ、食材とかウチから適当に持ち込んだから、冷蔵庫使わせてもらってるよ。そうそう！

これから生活を共にしていくわけだし、先に聞いておきたいんだけど、お味噌汁は赤と白どっち派？」

「……赤だな」

「あー、そっかー！ 赤かあ。ごめんおじいちゃん、申し訳ないけど、今日はわたしの趣味ってことで、白で我慢してね。でもちよつと意外かも。なんかお年寄りって濃い味より薄味が好きなイメージがあったから」

「メシの味付けは濃い方がうめえだろ。あと、俺を年寄り扱いするな」  
「はーい」

結愛の口は相変わらずよく回っているが、それに負けないくらい手もテキパキと動いている。焼き魚をメインに味噌汁と副菜が添えられた朝食が、すぐに完成した。

「はーい、いただきますー」

「いただきます」

いただきます。独りで食事を摂っていると、昔は当たり前に言っていたはずのその言葉も、自然と言わなくなってしまう。誰かが対面に座っていることに奇妙な違和感を覚えながら、巖はまず最初に味噌汁を口に運んだ。

「……うまいな」

「ほんと？ よかった」

「心なしか、空気もうめえ」

「うん。換気扇つけるね」

結愛はドン引きしながら換気扇のスイッチを素早く入れた。

「それにしても、料理が上手いのは、夜風の方だと思っていた」

当然のことだが、巖は結愛の配信にはすべて目を通して、K子ちゃん、もとい景ちゃんがとても料理上手で、その料理をいつも結愛が楽しみにしているのを知っている。

「いやあ、さすがに景ちゃんはどうまくはないけどね。でも、昔から隣に立ってお手伝いしてきたわけだから、それなりのものは作れますよ」

「なるほど」

「お夕飯は何がいい？」

「ハンバーガー」

「もつとお年寄りっぽいメニューにしてくれない?」

「俺を年寄り扱いするな」

箸を進めながら、その合間に会話もポンポンと進んで行く。

「食べながらで悪いんだけど、これからの予定を確認していい?」

「ああ」

「まず昼間は学校に行くし、景ちゃんとあんまり離れてるとわたしが保たなくて死んじゃうから、景ちゃん家とおじいちゃん家と学校と稽古場をぐるぐる回る感じになると思うんだけど」

「わかった」

当然のことだが、巖は結愛の配信にはすべて目を通してしているので、K子ちゃん、もとい景ちゃん成分が枯渇した結愛がどうなってしまうかはよく把握している。訓練されたファンは推しへの理解が深い。

「昨日も言ったと思うんだけど、基本はここで寝泊まりする感じにしたいから、配信もこっちでやっちゃいたいんだよね。あんまりスケジュール崩したくないし」

「当たり前だ。配信は俺の楽しみだぞ」

「なんでえらそうなの? ていうか、本人が目の前にいるんですけど?」

「それとこれとは話がべつだ」

べつである。べつと言ったら、べつなのである。

まあいいや、と結愛はさらに引き気味な笑顔を浮かべながら、続けて提案した。

「だからまあ、どつか空いてる部屋借りて、なるべくうるさくしないようにするからさ。おじいちゃんがわからないゲームの配信とかもやるけど、気にしないでね」

「なに言ってるんだ。俺もゲームくらいやるぞ。何度も言わせんな。年寄り扱いするんじゃないやねえ」

「あー、はいはいすごいすごい。で、なにやるの?」

巖は無言で立ち上がり、居間に入って戻ってきた。

その手には、少し前まで結愛が頻繁に遊んでいた2D格闘ゲームのアーケードコントローラーが握られている。プロ仕様の一番高いも

のである。

「……っ!？」

どこに出しても恥ずかしくない美少女が、味噌汁を吹き出した。  
ああ、この表情はレアだな、と。巖裕次郎は思った。

「ごほっげほっ」

「大丈夫かユアユア？ テイツシユだ。布巾はこっちにある。ウエツトテイツシユも使うか？」

「あ、ありがとう」

幸い、エプロンをつけたままだったので、セーラー服は汚れずに済んだ。

「あ、あのさ。おじいちゃん」

「なんだ？」

上目遣いに、結愛が問う。

「……配信、一緒にやる？」

「やる」

即答だった。



スターズ所属の俳優、堂上竜吾はそこそこ売れっ子である。

アキラのような子役時代からの叩き上げの役者とは異なり、竜吾はティーンオーデイションを経て芸能界入りした、いわば正統派の男性俳優だ。事務所の顔である千世子やアキラと肩を並べて、映画デスアイランドにも出演し、知名度は上々。これから売れていくスターズ俳優のお手本のようなコースを歩んでいる、と言える。

そんなそこそこ売れっ子の堂上竜吾は、非常に浮かれていた。今日の仕事は、そこまで大きなものではない。地上波のバラエティ番組の出演でも、ドラマのレギュラー収録でもない。だが、竜吾にとって、今日の仕事はこれまでで最も待ち望んだものだと言えた。

「……待ってるよ、ユアユア！」

そう。今日の竜吾の仕事は、あの万宵結愛とのコラボ配信である。

実は、竜吾はスターズでデビューした頃に動画サイトにチャンネルを開設しており、それなりの登録者がいる。具体的には大体10万人ちよい。売れっ子のスターズ俳優であることを考えると少ないくらいだが、竜吾本人が動画編集をめんどくさがって更新をサボっていたので仕方ない。今回の仕事のことを同僚の和歌月に話したら「え、竜吾さんってチャンネル持ってたんですか。へー、知らなかったです。あ、興味もないです」とか言われた。正直、竜吾はちよつと泣きそうになった。

だが、今回はそんなほぼ死んでいたチャンネルが仕事に繋がった。なんでも、結愛側のプロデューサーが、千世子以外のスターズとのタレントともコラボを、ということまで打診してきたらしく、それならトーク力があり若年層を中心に知名度がある竜吾に、と白羽の矢が立つたらしい。あの天知とかいうプロデューサー、めっちゃくちゃ良いヤツだな、と竜吾は深く感謝した。

「あの男と仕事をするのは非常に癪だけれど、今や万宵結愛の知名度は無視できないものになりつつあるわ。良い機会だから彼女を通して、配信関連のノウハウを学んで吸収してきなさい。ただし、はしやぎすぎないように」

とアリサから言い含められている。

だが、そんなことはどうでもいい。死ぬほどどうでもいい。竜吾にとってなによりも重要だったのは、あのユアユアと一緒に仕事ができるということ。ただその一点である。竜吾はただの万宵結愛のファンだった。

今日のコラボ配信の内容は、有名タイトルの格闘ゲームのオンライン対戦。何事にもハマりやすくすぐに飽きる趣味の範囲が広く浅い竜吾は、以前からこのゲームに触っており、それなりに強い方だった。具体的にはスターズ組でオフの日に遊んだ時に千世子を一方的にボコボコにして、舌打ちされた程度には強い。

『はーい、そんなわけで、今日はなんとスターズから特別ゲストをお呼びしています！ 堂上竜吾さんです！』

ついに、出番が来た。

モニターの準備、よし。コントローラーの準備、よし。

大きく深呼吸をしてから、竜吾はカメラを入れて、マイクを口元に寄せた。

「ど、どうもー！ みなさんこんばんは、堂上竜吾ですー！」

『竜吾くんだー！』『スターズゲストシリーズ第二弾』『誰だ』『誰……？』『誰なの!?!』『こわいよお!』『いや竜吾くんはわかるやろ』『おれはアキラくんがよかった』『ホモ乙』『竜吾くんトークおもしろいから好きよ』  
ずらずらとコメントが流れていく。

めちやくちや緊張しているのが、自分でもわかる。しかし、ここでへマをするわけにはいかない。

『竜吾さんは、公開予定の映画デスアイランドで、千世子ちゃんや景ちゃんとも共演されています！ わたしがデスアイランドの取材に行った時も、撮影を案内してくれた、役者の先輩さんなんだよー！』『いやあ、はっはっは！ それほどでもありませんー！』

『わたしの配信も観てくれるんですよね？』

「もちろん観てるぜー！」

おっと、オタクが出そうになった。

竜吾はあわてて声のトーンを抑えた。

『仲間か』『竜吾くんへの、好感度が、上がった!』『ユアユアのファンがスターズにもいてくれて鼻が高いよ』

『今日はなんと、竜吾さんが格闘ゲームで対戦してくれまーす!』

「ふっ……俺は強いぞ！ 勝負だ！ ユアユア！」

『うん！ 受けて立つよ……と、言いたいところなのですが』『ん?』

『実は今日、もう1人飛び入りゲストが来ておりました、わたしの隣でスタンバってくださいます！ まず、竜吾さんにはその人と対戦してもらいたいと思います!』

「え?」

打ち合わせにはなかった内容である。竜吾は戸惑った。そして、戸惑いとはまた違う感情が心の内から湧いてくるのを感じた。

——ユアユアの、隣に？



おれはここ数日の特訓で積み上がったエナジードリンクの積まれた寂しい部屋の中で、孤独にコントローラーを握りしめているのに、そいつはユアユアの隣に!?

ビギイ、と。竜吾は自分の額に青筋が浮かぶのを自覚した。だが、堂上竜吾は腐っても役者である。

「……受けて立つぜ」

怒りは胸の内に秘めて、勝つための糧にすればいい。

『ROUND 1・FIGHT!』

戦いのゴングが鳴る。

竜吾のコントローラーが、指先の凄まじい動きと共に唸る。そこから先の勝負は、あまりにも一方的だった。

「なん……だと」

『ボコボコで草』『え、強くね?』『これは相手が悪い』『ていうか、このプレイヤーネーム、前もいなかった?』

もはや、コメント欄の文字など目に入らない。コントローラーを握り締めて、竜吾は呟いた。

「くそっ……こんなはずじゃ……!」

『まだまだだな、若僧』

予想より遙かにしわがれた声に、竜吾は一瞬喉を詰まらせた。しかし、すぐに持ち前の負けん気を取り戻して、声を張り上げる。

「若僧、だとお……てめえ、何者だこのジジイ! 名乗りやがれ!」

ぴっ、と。モニターの小窓が開いて、対戦相手の顔が映る。

ひゅ、と。竜吾の呼吸が比喻抜きに止まった。

『おう。名乗るのが遅れて悪かったな。巖裕次郎だ』

『はい! そんなわけで、本日の特別ゲスト、ナンバーツー! 演出家の巖裕次郎さんです!』

『?』『?』『?!』『?』『は?!』『ワロタ』『おじいちゃん!』『誰だこのジジイ』『なにやってんですか巖さん……』『バカ、お前!』『演劇界の重鎮だぞ!』『日本を代表する演出家だぞ!』『有名なん?』『いやあ、詳しくな

きや知らないでしょ』『でもお前、大御所だぞ』『昔この人の舞台観たけどめっちゃ良かったよ』『竜吾くんこの顔晒されてかわいそう』『巖さんなにやってんの?!』『クソワロタ』『とんでもないゲストでワロタ』『あのさあ……ほんとになにやってんの?』『普通にお茶吹いた』『コーヒーこぼした』『俺も出たかった!』『まじ?』『演劇業界には詳しくない。誰かいい感じに例えてくれ』『RX78のパイロットがテム・レイだった』『ポケモンの対戦してたら相手がオーキド博士だった』『ふざけんな』『バカッ!!』『とんでもない神回で草』



星アリサは疑問だった。

アリサは、かつて巖裕次郎の舞台に出演した経験がある。だから、彼がどれだけ芝居を愛し、芝居に狂っているかもよく知っている。

夜風景の起用は、理解できる。あの黒山が目をつけた役者だ。千世子も、デスアイランドの共演では、彼女の演技にいろいろと思うところがあったようだった。良い影響を受けたらしい。

だが、万宵結愛と星アキラ。この2人を起用した理由がわからない。後者のアキラに関しては、こちらがねじ込んだから、と言ってしまえばそれまでだが、少なくともアキラは劇団天球の芝居についていけるレベルの役者ではない。

万宵結愛に関してもそうだ。動画配信者を舞台にあげるなんて、昔の巖裕次郎なら絶対に有り得なかった。

——なにを考えているの……巖裕次郎。

「アリサさーん」

思考を遮ってアリサを現実に戻したのは、無遠慮で楽しげな声だった。

「千世子。入るのなら、ノックくらいしなさい」

「ごめんごめん。でも、これ早くみてほしくて」

千世子が差し出したのは、タブレット端末である。そういえば、今日は竜吾と彼女のコラボ配信だったか。アリサは、画面を覗き込ん

だ。

『すぐに近づくからテメエはダメなんだ。勢いがあるのは悪いことじゃねえが、敵の間合いを把握しろ。考えて指を動かして、技を出せ。そもそも、そのキャラの特性は……』

『うす！ 勉強になります！ 師匠！』

『じゃあもう一戦いくぞ』

『ふっふふ……次はわたしが相手するよ、竜吾さん！』

『負けねえぞユアユア。巖師匠の教えを受けた俺は最強なんだ！』

『ああ。ユアユア、ボコボコにしてやれ』

『師匠お!』

自分の会社のタレントが、日本を代表する演出家を師匠と呼びながら、格闘ゲームに興じていた。

『巖師匠、アドバイスがわかりやすくて草』『最強なんだ！（集中線）』『竜吾くん流れるように弟子入りしててウケる』『指導（格ゲー）』『これは学びになりますね……』『芝居学べバカ』『動きもガチだったけど指導もガチだよこれ』『巖裕次郎に学ぶ！投げ技の対策！』『芝居しろバカ』『師弟関係が築かれたと聞いて』『イケメンとジジイの間に挟まるユアユア』『孫と一緒にゲームしてるおじいちゃんだ』『正直いいか？ この絵面めちやくちや微笑ましい』『わかる』『わかる』『わかる』『巖裕次郎がこんなに格ゲー強いとか普通思わねえよ』『この李白の目を以てしても……』『節穴定期』『ユアユア、押されて草』『巖師匠の指導が早速効果を!』『マジで教えるの上手くて草』『これが指導者の資質』

コメントが、早すぎて追いきれなかった。

「おもしろいね」

星アリスは固まった。

——本当になにを考えているの……巖裕次郎。

## 配信できないタイプの修羅場

『いやあ、最高でしたね』

「楽しんでもらえたなら、なによりだよ」

ゲリラ的に行った『巖裕次郎参戦！ 配信』が終わったあと、電話でプロデューサーに連絡を取ると、それはもう上機嫌だった。

プロデューサーが楽しそうだとなんとなくおもしろくないのだが、とりあえず口だけは良かったね〜と言っておく。

『今回の配信は、スターズと今後の仕事のパイプを繋ぐのが目的でしたが、話題性という意味では巖裕次郎の登場は最高のサプライズでした』

「まあ、そうだろうね」

『それはもう！ 結愛さんは言わずもがなですが、あれから堂上竜吾のチャンネルやSNSの動きも随分と好調なようですよ。アリサ社長にも苦虫を噛み潰したような顔でお礼を言われましたからね』

本当に楽しそうだなコイツ……

『それで、舞台の方はどうですか？』

「え？ ああ、うん。そこそこ順調かな。わたしの配役も決まったよ」

『それはそれは、おめでとうございます。で、一体どんな役を？』

「……ダメだよ、プロデューサー。わたしの配役はシークレットなんだから。いくらプロデューサーでも先に教えられないよ」

『おやおや、冷たいですねえ』

冷たいもなにも、そもそもプロデューサーに温かく接したことなんて一度もない。

『それにしても本当に、よく巖裕次郎を配信の場に引っ張って来れましたね』

「まあね。わたしの人徳つてやつ？」

『そうですね。やはりビジネスに必要なのは心です』

「心にもないこと言わない方がいいよ？」

とはいえ、配信関係が好調なのはなによりだ。これでわたしも、芝居に集中できる。

「今後の配信でも、何回か巖のおじいちゃんに出てもらう予定だから、またスケジュール調整して送るね。チエックしといて」

『それは素晴らしい！ 巖裕次郎も、よく予定を合わせてくれるものです』

「いや、予定合わせるのはわりと簡単だよ？ 今、一緒に住んでるし」

『……失礼、結愛さん。よく聞こえなかったのですが、もう一度よろしいですか？』

「じゃ、またねー」

『ちよつと、待つ……』

なんか言いたそうだったけど、そろそろ休憩時間が終わりそうなので、電話を切る。なんかプロデューサーにしてはめずらしく、動揺した声音だったからからかって遊びたかったけど、まあいいや。

スマホをカバンにしまって、隣に声をかける。

「おまたせ、七生さん。そろそろ休憩終わりだね。稽古戻ろ」

「うん。ところで結愛、今の誰？」

「ああ、わたしのプロデューサーだよ」

「へえ、どんな人？」

「ほくろ」

「……小さくて黒いってこと？」

「うまいこと言うねえ、七生さん」

プロデューサーはたしかに真っ黒だ。

「この前の配信、私もみたよ」

「ほんとに!? ありがと〜!」

「なんか、巖さんの意外な一面が見れた気がして、私も楽しかった」

「そっか〜。天球の人にそう言ってもらえると、わたしもうれしいよ」  
よかったよかった。

わたしも景ちゃんも、課題をクリアして至って順調、配信も好調でいたれりつくせり……かと思いきや、そう良いことばかりではない。

稽古場に戻ると、阿良也くんが巖さんに詰め寄っていた。

「巖さんなにやってんの？」

「あん？」

「いくら結愛のファンだからって、動画にまで出るのはやりすぎだと思うけど？」 宣伝目的って見られても仕方ないよ」

言いながら、阿良也くんは仏頂面のままスマホを突きつける。わたしも巖さんの後ろからちらっと覗き込んだ。

「……結愛」

「ああ、べつに大丈夫だよ。そういう風に言われることも想定の内だし」

画面に表示されているのは芸能系のニュースサイトで、目立つ字体で「巖裕次郎、JK配信者の動画に出演!」「スターズ俳優にゲーム指導!」などと、いかにもそれっぽいわげな見出しが並んでいる。巖裕次郎は星アリスとは不仲説が唱えられていたが、星アキラのキャスト起用に加え、今回の動画の一件で、和解が成立したと見てもいいのだろうか、などと。巖のおじいちゃんにとってはおもしろくなさそうな一文もある。

うわあ、どちらかといえば、これキツイのはわたしじゃなくて巖さんの方だよ。どんな反応するんだろ。わたしは、おじいちゃんの顔を見たが、

「宣伝? 何言ってるやがる。俺が出たいから出ただけだぞ」

無敵か? このジジイ。

「……」

いつもは人を困らせて沈黙させる側の阿良也くんが、めずらしく黙り込んで天を仰いだ。いや、すごいね。阿良也くんこんな反応させるの、巖さんくらいじゃないの?

「……はあ。なんの動画に出て何をしたらって、もういいけどさ。指導の方は大丈夫なわけ?」

「えらそうな口利くようになったな」

巖のおじいちゃんは、阿良也くんの懸念を鼻で笑う。

「ユアユアも夜風も、俺が出した課題はもうクリアしてる。お前の方こそ、まだジョバンニを掴みきれてないんじゃないかねえのか?」

「……」

「他人の心配をする前に、まず自分の役作りを完成させたらどうだ?」

うへえ、とわたしは思わず首を縮めた。このおじいちゃん、やつぱりなんだかんだ言っても演出家としてはプロ中のプロだ。いつもは何を言われても動じない阿良也くんが、逆に何も言えなくなっちゃうんだもんね。

後ろの方で、亀さんが「巖さんきつつー」と、肩を竦めた。七生さんの方は「巖さんにあれだけ口答えしたんだから当然でしょ」と、冷やかな視線だ。

「まあ、たしかに。それもそうだね」

ふらり。巖さんから視線を外した阿良也くんは、景ちゃんの方を見た。

「最初は外部の役者は結愛だけで十分だって。そう思ってたけど、なかなかどうして……夜風もおもしろい役者だ」

景ちゃんはこの前公園で修得していた感情表現を、手作りの人形と一緒に劇団のみなさんに見せびらかしている。うむ、今日も景ちゃんはおかしい。

「ねえ、夜風」

「なに？ あつ！ 阿良也君も私の感情表現がみたいのね？ いいわ

よ！…もつと近くで……」

「今日、夜風ん家行っていい？」

「え？」

何気ない阿良也くんの提案に、それを近くで聞いていたアキラくんがぎよつとした表情になった。しばらく固まっていた景ちゃんも、我に返ったようにぶんぶんと首を振る。ついでに、両手のマペットも振る。

「い、嫌」

「なんで？ いいじゃん。1日だけでいいからさ」

「嫌」

「夜風の部屋の匂いも気になるんだ」

「絶対に嫌」

あー、うんうん、わかっていましたよ。

七生さんから聞いたことがある。阿良也くんは、一度共演者に惚れ

たら相手を理解するまで嗅ぎ回り続けるストーカーのような悪癖を持っていてるのだ。わたしも山の中で匂いを嗅がれたり、獣になつたり、裸で組み敷かれたり、一緒に熊を美味しく頂いたりしたので、よくわかってる。

そう。わかっているのだ。阿良也くんの言葉に、他意はない。景ちゃんに対して、やましい気持ちもきつとない。しかし、

「おい待て、コラ」

男のお泊りを許せるか許せないかは、またべつのお話である。

一歩踏み出したわたしの怒気に、亀さんが「ひっ」とか言いながら下がった。うん、邪魔だからどいてもらえると助かる。

「なに？ 結愛。今、俺は夜風と話してるんだけど」

「なに、じゃないんだよ。わたしの前で幼馴染を口説くのはやめてくれないかな？」

「俺はもつと夜風のことを知りたいだけだよ」

「ダメです」

「ダメって言われる筋合いはないな」

「あるよ、幼馴染として」

「ねえ、夜風。いいよね？」

「嫌です」

「困ったな。結愛からも何か言つてよ」

「ぶつ殺すよ？」

「俺に殺意を告げるんじゃないよ、夜風を説得してほしいんだけど」

ボサボサ寝不足クマ野郎は、やれやれといった様子で頭をかいた。

ふん、当然だ。景ちゃんがそんな簡単に男のお泊りを許すわけがない……まあ、わたしはいつでも好きな時に泊まれるけどな！ 隣でゴロゴロして寝顔も見放題だけどな！

などと、わたしが内心で勝ち誇るのも束の間。

「俺と一緒に山籠りした時は、裸で一夜を明かしたのに、なんで普通に



泊まるのがダメなわけ？」

その一言に、稽古場の空気が、完全に凍りついた。

天球のみなさんが、わたしと阿良也くんを中心に、一步下がって身を引く。

わたしも、自分の顔からさつと血の気が引くのを自覚した。

「裸で……」

「一夜を……」

「明かして……」

あああああああああああ！

あ、阿良也くんのバカーっ！

「ちよつと!?! なに誤解を生むような言い方してるの!?!」

「だって、本当のことだろう?」

「本当でも言っていないことと悪いことがあるでしょうが!」

うわあ! 痛い痛い痛い!!

みんなからの「え、コイツらそういう関係だったの……?」「いつの間……」「やったな、阿良也」みたいな生温い視線が本当に痛い!

だけど、その中でも、一際大きく、どす黒く、形容し難い感情の矢印が背中から刺さってきて、わたしは堪らず凍りついた。

「結愛ちゃん?」

あ、やつべ……

「どういうこと? 前に、阿良也君とは何もなかったって……そう言ったわよね?」

あひひ!?

物心ついた時から、10年以上。わたしは景ちゃんのいろんな声を聞いてきた。いろんな感情を覗いてきた。

けれど、ヤバい。これはヤバい。ほんとうにヤバい。今まで、最も純度の高い怒りとか嫉妬とか疑いとか、そういう類いのどす黒い感情がぐるぐると渦巻いて、わたしに向けられている。

あと純粹に、顔がめちやくちや冷たくてこわい。

「ち、ちが……違うよ景ちゃん！ 誤解だよ!? わたしはべつに阿良也くんとは何も……」

「ネツアイ？ ネツアイしたの？」

「してないしてないしてない！ 神に誓ってしてないよ！ 絶対してないから！ わたしは景ちゃん一筋だよ!」

「でも、裸になったんでしよう？」

「それ、は」

「なったんでしよう？」

「う、うん……」

なりましたねえ……

「結愛ちゃん」

「いや、ちよつとまって！ 私の話を……」

「正座して」

「け、景ちゃ……」

「正座」

「はい……」

はい。正座します。

わたしは今、世界で一番冷たい目で見下されている自覚がある。見下してくる冷たい表情の景ちゃんも超美人なのでカメラに収めたいけど、残念ながらそういう雰囲気ではない。ちくしょう。

「どうして、阿良也くんの前で裸になる必要があつたの？」

「え、演技向上のために……」

「演技向上のために裸になる必要があるの？」

「あ、あるよ！ 景ちゃんだってほら！ 良い演技するためにゲロ吐いたりするじゃん！」

「ゲロと裸は違うわ」

そりやそうだけどね!?

「ちよつと、阿良也くん！ 黙って見てないでなんとか言つて……」

「てめえ、阿良也……！ 見たのか？ ユアユアの裸を？ 本当に見たのか？」

「うん」

「……」

「きれいだったよ」

「阿良也ア！」

「巖さん巖さん！ ダメだって！ 阿良也締め上げちゃダメだって！」

「阿良也もなにおちよくってんだ!? やめろやめろ！」

「なあなあ、阿良也。ユアユアのおっ……ぐぼお!」

「亀え!」

なんか、あつちはあつちで巖のおじいちゃんに締め上げられていました。亀さんも巖さんに腹パンくらって吹っ飛んでる。めっちゃくちゃだ。

うん、これはもうダメみたいですな。

「阿良也君」

「なに？ 夜風」

「今日、うちに泊まっていたいいから、その夜のこと包み隠さず教えて」

「ああ、もちろんいいよ。あの夜の結愛は最高だったからね。いくらでも語れる」

「阿良也くん、マジで言い方考えて。ほんとお願いだから言い方考えて」

ぶんすかと頬を膨らませて離れていく景ちゃんは、わたしと目が合っても「ぶいつ」とそっぽを向いてしまった。

うおおおおおん！

かわいいけどマジでその対応は血反吐を吐きそうになるからほんとうにやめてほしい。わたしのメンタルが持たない。

「ユアユア」

「……あー、もうっ！ なに、巖のおじいちゃん!? 言つとくけど、わたしは阿良也くんとは本当に何も……」

「事情があったにせよ、若い女がみだりに肌を晒すものじゃない。ましてや、山の中だ。次から気をつけろ」

「あつ、はい」

なんだか、至極真つ当な注意をされてしまった。

あれかな？ 阿良也くんを締め上げて頭冷えたのかな？

とにかく、わたしは小声で、巖さんに告げる。

「阿良也くんが何をしでかすかわからないから、今日はわたし、景ちゃんの家に泊まるね？」

「そうか。まあ、1日くらいなら構わねえが、困ったな」

「なにが？」

「俺の晩メシはどうすんだ？」

「ハンバーガーでも食つてろクソジジイ」

★★★

「それで、どうしてアキラくんまで来たわけ？」

「心配だからに決まってるだろう？」

夜。夜風家にて。

わたしは隣に立つて野菜を切るアキラくんに、じつとりした視線を向けた。

なんだコイツ。こっちは阿良也くんの魔の手から景ちゃんを守るのに忙しいんだよ。イケメンウルトラ仮面様に構っている暇はない。

「景ちゃんを心配してくれるのは嬉しいけど、余計なお世話だよ」

「いや、夜風君も心配だけど、それ以上に君が阿良也さんに何かしないか心配で……」

「……ナニモシンパイイライナイヨ？」

「包丁を握りしめながら言わないでくれ」

心配しなくても、おかわりのサラダ切ってるだけだつてば。

「はーい、サラダのおかわり持ってきたよ」

「ありがとう。それにしてもうまいね、夜風カレー」

阿良也くんはここぞとばかりにくつろいで、もりもりと景ちゃんのお手製カレーを食べている。

ほんとにさあ！ コイツはさあ！

「それで阿良也くん、景ちゃんの誤解解いてくれた？」

「もちろん。ちゃんと説明したよ」

「裸で……阿良也くんの上に……馬乗りになって……一晩明かして……熊も一緒に……」

景ちゃんはスプーンも持たずに、顔を真っ赤にして両手で頬を抱えながら、ぐるぐると目を回している。

ほんとにさあ！ コイツはさあ！

「ねえちゃんと説明した!? 誤解がないように説明した!」

「した、したよ。首を掴まないでくれ。夜風カレーが食べられない」

わたしが戻ってきたことによく気がついたのか、景ちゃんは我に返った様子で、赤い顔をぶるぶると振った。

「……事情は大体わかったわ」

「ほんと!? よかった!」

「でも、阿良也くんの前で裸になるのはよくないと思うの」

それは、そうなんです……

「でも、景ちゃんも役作りのためにどうしても必要だったら、裸になるでしょ!」

「……なるわね」

「だよね!? そうだよね! よかったあ〜!」

「でも、結愛ちゃんの裸を阿良也君に見られるのは……なんか、いやだわ」

まだ頬が赤い景ちゃんが、ちらりと私を見て、また頬を膨らませた。

は？ かわいすぎか？ 結婚しろよ。

幸せに浸るわたしの横に、アキラくんが割って入る。

「いやいや、そもそも裸になっちゃダメだよ2人とも。しっかりして」

「そういうえば、堀君はなんでここにいるの?」

「阿良也さん、僕は星です」

「堀くんは裸になるの嫌なの?」

「え、これそういう話なんですか?」

「でもアキラくん、無駄に腹筋鍛えてるよね」

「ちよっ……やめてくれ万宵君! シャツをまくらないでくれ!」

「そうよ結愛ちゃん! えっちだからやめて! ご飯中よ!」

わいわい、がやがや。

ようやく普通にカレーライスを食べられる雰囲気になってきた。よかったよかった。

「そういえば、夜風。結愛のこと以外に、聞きたいことがあるんだっけ？」

「え？ あ、うん。できれば、役作りについて聞けたらいいなって思ってたんだけど」

お、さすがは景ちゃん。考えなしに阿良也くんを家にあげたわけじゃなかったんだね。感心感心。

「……役作りか。逆に、俺から一つ聞いてもいい？」

「ええ、べつにいいけど……なに？」

「夜風はさ」

すつ、と。カレーを掬いながら。

「弟妹きょうだいのことを、疎きまましく思ったことはある？」

敵意があるわけではない。害意があるわけではない。

まるで、スプーンのように先っぽが丸い、けれど無遠慮な一言を、阿良也くんは景ちゃんに差し込んだ。

「……え？」

「……あ？」

ぶつり、と。

わたしの中で、何かがキレる音がした。

## 百合の間にはさまる天使

それは、ずっとずっと考えないようにしてきたことだった。

けれど阿良也くんは、何の躊躇いもなくそれを口にする。

「ルイちゃんとレイちゃん、だっけ？ あの子たちのこと、疎ましく思ったことはない？」

お母さんがいなくなつて、あの男がいなくなつて、夜凧家の生活は大きく変わった。

客観的に言えば、母親が病気で死に、父親は家から消え、あとに残されたのはまだ小さい双子を抱えた長女。急変した家庭環境は、簡単に言ってしまうえば誰がどう見ても同情してしまうような、わかりやすい不幸な家族の完成形だった。

否が応でも、周囲の注目を集めた。

——お母さんが亡くなつたって。

——まあ、かわいそうに。

——お父様は何をしているのかしら？

——夜凧さん家って小説家でしょう？

——なんでも、家に帰ってないみたいよ。

同情よりも興味と好奇心の色のの方が強い視線に嫌悪感を覚えたのは、きつと景ちゃんよりもわたしの方だった。景ちゃんは以前よりも画面の中の世界にのめり込むようになっていって、わたしはその隣にいることはできても、景ちゃんと同じように映画の世界に逃避することはできなかつた。

あるいは、隣にいる景ちゃんの横顔さえ見ることができれば、それでよかったのかもしれない。

あの男のことはたしかに許せなかつたけれど、あの男をどうにかしてやる力は、まだ子どもだったわたしにはなかつたから。だから、わたしは景ちゃんが一番近くで、景ちゃんを支えることに全力を尽くすことにした。

「……ルイとレイは、2人とも良い子よ。結愛ちゃん以外の人を、家に呼ぶのはひさしぶりだったから、もし阿良也くんに失礼なことを言っ

たなら」

「いや、そういうことじゃないんだ」

景ちゃんの返答を阿良也くんが否定する。きれいな瞳が、目に見えて泳ぐ。呼吸のテンポが、わかりやすく乱れる。

「夜風はずっと、3人暮らしだろ？　だってこの家、夜風たちとちびつこと、結愛の臭いしかない」

君の臭いが染み付いているのは、逆にすごいね、なんて。阿良也さんは無遠慮に笑う。

そう。誰もが夜風家を遠巻きに見守る中で、わたしはこの家に無遠慮に入り込んだ。かわいそうに、と見られる景ちゃんが我慢ならなかった。景ちゃんがかわいそうな目で見られると、その無遠慮な視線で景ちゃんの幸せが吸い取られてしまうように思えたから。だからわたしは、景ちゃんの隣でなるべく楽しく笑うことにした。

わたしの中で、最優先事項として常に頭の中にあっただのは景ちゃんの幸せで。

「夜風はさ。まだ10代なのに、2人のせいで大人になることを強いられたんじゃないの？」

——ごめんね、結愛ちゃん。今日はレイとルイのお迎えに行かないからいけなから。

——ルイね、最近また背が伸びたの。新しい洋服を買ってあげなくちゃ。

——聞いて結愛ちゃん。レイったら、この前お母さんみたいなこと言い始めてね。

景ちゃんの一番近くにいたのは、わたしだ。

景ちゃんの次に、レイちゃんとルイくんの成長を見守ってきたのもわたしだ。

レイちゃんは同じ年頃の女の子よりも、ちよつとだけしつかりものに育った。やわらかく笑ってルイくんを見守る様子には、すでにあの人の面影があった。

ルイくんは同じ年頃の男の子よりも、ちよつとだけ泣き虫に育った。純粋で感受性豊かに物語を楽しむその様子には、すでにあの男の



面影があつた。

血がつながっているのだから、当然だ。あの子達が、あの2人に似るのは当たり前だ。でもわたしは、景ちゃんがレイちゃんとルイくんの中に2人の面影を見る度に、せつかく忘れていた記憶と感情を掘り起こして、少しだけさびしい顔をしているのが、どうしてもやるせないくて。

——レイが大きくなったら、もつとお家のこと手伝つて、お姉ちゃんに樂させてあげるんだ！

——ルイが大きくなったらね、お姉ちゃんにおいしいものいっぱい食べさせてあげるんだ！

わたしにだけ、こつそりと。2人はそんなことを教えてくれて。

ああ、景ちゃんは愛されているな、つて。うれしくなると同時に、少しだけこわくなった。

もしもこのまま、2人が大きくなって、あの2人にもつともつと似てきたら、その時、わたしは何も変わらずに景ちゃんの隣にいることができるだろうか？

その時、わたしの居場所は、まだこの家にあるだろうか？

「自分の感情に正直であることは、役者の条件だ。よく思い出してよ」

阿良也さんが開けようとしているそれは、

「弟妹<sup>きょうだい</sup>を恨んだ夜もあつたんじやない？」

わたしが景ちゃんの隣でずっとずっと考えないようにしてきたことだった。

「万宵くん!」

気がつけば、手が出ていた。胸ぐらを掴んで、押し倒していた。

頭の芯は自分でもおそろしいほど熱っぽい感覚があるのに、指先はかじかんだように冷たかった。

「……ああ、そうか。この家から、結愛の臭いもするってことはそれだけ、ずっと夜風と一緒にいたってことか」

「阿良也くん……やめてよ」

「やめないよ。俺は夜風と話しているんだ。どいてくれないかな？」

「どかないよ。わたしが、景ちゃんを傷つける発言を許すと思う？」

「夜風を傷つける発言？」

押し倒しているのはわたしの方であるはずなのに、会話の主導権はどこまでも組み敷いた男の方に握られていた。

「おかしなことを言うね。傷つきたくないのは、君のほうだろ」

息が詰まる。

深い色の瞳に、何もかも、すべてを見透かされているような、そんな感覚。

「まあでも……それでもいい。じゃあ、説明してよ、結愛。自分が、なんで怒ってるのか。人間って、意外に自分の気持ちすら、自分で分かってなかったりするだろ？」

ああ、逆だ。

わたしの心は、今、怒りに満ちている。

「自分の気持ちに分からない役者は、他人の気持ちも分からない。そういう役者は……『嘘吐き』は臭わない」

そのどろどろとした感情の赴くままに、彼を抑えつけようとしているけれど。

「本当に、一緒に夜を過ごしてよかったよ、結愛。今の君からは、とても良い匂いがする。『正直者』だ」

この男は。

わたしの感情のすべてを、舐め取ろうとしている。

「……あつたかもしれない」

爆発しそうなわたしの感情に、蓋をしたのは。

阿良也くんの視線でも、腰を上げかけたアキラくんでもなく。

脱力したまま座り込んだ、景ちゃんの声だった。

『『どうして私だけ』って。そう思っていたことが、あつたかもしれない。お母さんが死んで、悲しくなつて、でも……映画を観ていれば、楽

しい気持ちがい出せるかも、って。レイやルイに、たくさん笑ってあげられるって思ったの」

景ちゃんの瞳が、わたしに向いた。

「結愛ちゃんもきつと、傷ついていたから。アイツに裏切られて、傷ついていたのは同じだったから」

あまりにもあつさりと、景ちゃんはそれを口にした。

「……え」

すつ、と。頭の中が真っ白になった。

ずつとずつと、わたしは景ちゃんを助けているつもりでいた。

辛い思いをしている景ちゃんを、映画の世界に夢中になっている景ちゃんを、わたしが助けてあげなくちゃ、守ってあげなくちゃ、と。隣で横顔を見詰めながらそう思っていた。

「映画の世界の人たちは、笑ってる人も泣いてる人たちもいて……画面の中の役者さんを見ると、私も幸せな気持ちになったわ。いつそ、映画の世界に入り込めればいいのに……って。そうしたら、全部全部、忘れられるのになって」

実際は、それだけじゃなくて。

わたしが、景ちゃんのことを気遣っていたように。

景ちゃんも、わたしのことを気遣ってくれていて。

「でも、私にはレイがいてルイがいて、結愛ちゃんがいてくれた」

わたしみたいに特別な力がなくても、景ちゃんはきつと気がついていて。わたしがあの父親に向けていた、特別な感情を、その深さを。

「だから……ッ」

だから、わたしが助けて、わたしが守ってあげているつもりだった景ちゃんは、本当は……。

「そうか。ジョバンニは母親に救われていたのか」

ポツリ、と阿良也くんが言葉を溢した。

言葉だけではない、涙を流した。

それだけで、どうしようもなく理解してしまう。

「ジヨバンニが病気がちの母親をどう感じていたのか、ずっと握めずにいたんだ。でも、分かった」

今、この瞬間。

明神阿良也はわたしの目の前で、わたしの大切な人を喰ったのだ、と。

「ありがとう、夜風。これで俺は、ようやく少し、ジヨバンニに近づける」

あれだけ引つ掻き回しておいて、最後は随分あっさりしていた。

そうやって、阿良也くんは食べたいものだけ食べて、言いたいことだけ言って、帰っていった。

残されたわたしたちの空気は、ちよつと気まずかった。

景ちゃんは、遠慮がちにわたしに目を向けて、小さく声を発する。

「ありがとう、結愛ちゃん。私のために、怒ってくれて」

「……ううん」

違う。違うんだよ、景ちゃん。

そんな、きれいな自己犠牲なんかじゃない。

わたしはただ、わたしのために怒っただけなんだよ、と。

「ごめん、景ちゃん。もう寝るね」

そう伝えることは、なぜかできなかった。

★★★

昔の夢だ。

「景ちゃんのお父さんは、なんで小説を書こうと思ったの？」

我ながら子どもっぽい、バカな質問だったと思う。

——さて、なんでだろうね。

子どもっぽいバカな質問だったから、彼はその問いをはぐらかしたのか。

それとも、その問いが彼のパーソナルの根幹に触れる質問だったか

らはぐらかしたのか。

今となつては、どちらが正解だったのか確かめる術はないけれど、おそらく後者だと、わたしは思っている。

——結愛ちゃんは、世の中には正直者と嘘吐き、どっちの方が多いと思う？

嘘吐き、と。わたしは即答した。

だって、わたしには心が視えるから。誰が嘘を吐いているのか、その気持ちはどこに向けられているのか、すぐにわかってしまったから。

まだ小さかったわたしの周りには、既に掃いて腐るほどの嘘吐きが溢れていて。

景ちやんと、景ちやんのお父さんは、わたしに嘘を吐かない、数少ない正直者だった。でも、正直者であるはずの彼は「そうだね」と、わたしの即答を肯定したあと、唇に人差し指を当てて、耳元で囁いた。

——僕はね。もっともつと上手な、嘘吐きになりたいんだ。どうして？

——小説家っていう生き物は、世界で一番、嘘が上手なくちやあいけないんだ。

じゃあ、おじさんが書いているお話は嘘なの？

わたしは、おじさんの書くお話が、大好きなのに！

そう言うと、彼ははじめて、困った表情になって、わたしの頭に手を置いた。

——だから結愛ちゃんには、僕と一緒に嘘吐きになってほしいんだ。

きみの生き方は役者のようであるべきだ、と。それは優しい口調だった。

正直にならなくていい。

？吐きになればいい。

人に好かれるように、人に愛されるように。所作も口調も表情も。自然な笑顔も、悲しみに暮れる涙も。

すべてをコントロールして、人に愛されるように生きればいい。



瞼を開けて、いやな汗をかいていることを自覚する。

「うあ……アイツの夢とか、最近見てなかったのに」

吐き捨てながら、本当に阿良也くんを恨みたくなってくる。

きちんと寝ていたはずなのに、なぜか全身が重く、気怠かった。なぜか、というか。間違いなく、夢の内容が最悪だったせいだけ。

隣では、まだ景ちゃんの寝息が聞こえる。せめてその寝顔を見て癒やされようと、わたしはごろんと寝返りを打った。

「おはよう、万宵さん」

「……………」

ちよん、と。

わたしの鼻先が、白くてきれいなおでこに、擦れて触れた。

「寝起きだと、声低いんだね。汗、かいてるけど大丈夫？ いやな夢、見てたでしょう？」

紡がれた言葉と共に、吐息がわたしの頬をくすぐる。上目遣いの瞳の中の、その虹彩の色遣いまでもが、つぶさに観察できる。

天使が、いた。

並んで寝ている、わたしと景ちゃんの間、割り込むように。百城千世子が、すぐ隣で寝ていた。

「……………」

「うっぎゃあああああ!!」

喉から絞り出したわたしの大絶叫が、夜凧家を根本から揺さぶった。

「ち、ちちち、千世子ちゃん!!」

「どうしたっ!? 大丈夫か、万宵君!!」

「入ってくんないア! 星アキラあ!」

「ぐぼお!？」

意味がわからなかったもので、とりあえずイケメンの顔面に、まくらを投げつけた。

あなたを喰べたい

「あはは。それで、その夜風さんをいじめてきた役者さんとケンカしたんだ。相変わらず万宵さんは夜風さんしかみてないね」  
「あはは、じゃないよ。千世子ちゃんなんているの？ なにしにきたの？」

爽やかな朝のはじまり。

わたしの対面では、両手でお行儀よく味噌汁をすすっている百城千世子がいる。まるで新婚夫婦の朝のような光景だ。人によつてはこの光景だけで、いくらでも金を払うだろう。

「私、万宵さんと友達でしよう？」

「え？ あ、うん」

「で、もちろん夜風さんも友達」

「どうしよう結愛ちゃん、私、千世子ちゃんに友達って言ってもらっちゃったわ!? 友達だって！」

「おーはいはい。よかつたね。よしよし」

「だから、友達なら急に遊びに来てもいいかかって」

「いや友達の使い方とか認識雑だね？」

それで夜中にきて朝起きたら隣に百城千世子がいるって、こつちとしてはかなりのホラーだよ。

「それに、夜風さんは私が知らないうちに、アキラくと熱愛してるし」

「千世子君……君までそれをネタにするのはやめてくれないか」

「万宵さんは万宵さんで、なんかよくわかんないけど、あの明神さんって役者さんとただならぬ雰囲気になってるみたいだし」

「やめてやめて千世子ちゃん。ようやく誤解を解いた景ちゃんがなんかすごい顔になってるからやめて」

ほんとになにをしに来たんだこの天使は。かき回すのはごはんにかける生卵だけにしてほしいんだけど。

「夜風さんは、今日は予定はあるの？」

「稽古の自主練はしようと思ってたけど、それ以外はべつに」



「万宵さんは？」

「わたしも夜にちよろつと配信はしようと思ってるけど、今日は基本的にオフだよ」

「じゃあき、2人とも」

するりとわたしと景ちゃんの間に入り込んだ千世子ちゃんは、左右の手をわたしたちに絡めて言った。

「今日、デートしようよ。3人で」

「どうかな？」

「うっひよおあ……！」

千世子ちゃんが引きずって持ち込んできたキャリーケースには、1日分のお泊りの道具だけでなく、大量のかわいいお洋服やらコスメやらのグッズが満載されていた。そして、百城千世子は今をときめく若手トップ女優。演技はもちろん、それらを組み合わせたコーディネートも超一流だった。

わたしの目の前には、きれいにかわいくビューティフルにデート用に着せ替えられた、すっごくかわいい景ちゃんがいる。

「けいちゃんかわいいねえ」

「万宵さんどこから声出してるの？」

そうは言っても、これはさすがにヤバイ。景ちゃんはもちろん全宇宙がひっくり返って頭を垂れるほどの超絶ミラクルスーパー美少女だが、基本的に私服のセンスに関してはクソミソのミジンコちゃんである。なんかよくわかんない文字がプリントされたTシャツを格安の価格で見つけてきては「これはオシャレね」とか悦に浸りながら鏡で見る程度にはセンスがない。とはいえ、それは景ちゃんのセンスがクソザコナメクジであること以外にも、夜風家の懐事情があまり芳しく無いという理由もある。かわいくて良い服は基本的に高いのだ。なのでわたしも景ちゃんに合わせて、いろんなクソTシャツをペアルックとしてコレクションしてきた。

そんな景ちゃんがきちんとブランドもののお洋服を着て、デート用

のコーデに身を包んでいる。これはもう、親友としては目から涙を吹き出して口からよだれが垂れるほどにうれしい。決してやましい気持ちはありませんよ、ええ。

すわりとしたシルエットのパーカーワンピースに、足元はやはり景ちゃんが滅多に履かないようなブーツ。ただでさえスレンダーで美しい景ちゃんの身体のラインが、ゆったりと……それでいてますますきれいに見える。

「なまあしはちよつとえつちだねえ」

「万宵さん。さすがに夜凧さんの足の間で頭を突つ込むのは気持ち悪いよ」

「結愛ちゃんどいて。邪魔だわ」

そうは言っても、目の前にえつちな生足があるのだから、頭を突つ込んでパーカーワンピースの中を覗きに行くのは、わたしの義務に等しい。まあ、千世子ちゃんのコーデだからそこは抜かりなく、ちゃんとショートパンツ用意して景ちゃんに穿かせてるんですけどね。さすがだね。まあ、そこらへんのどこの馬の骨ともしれない輩に景ちゃんのパンツを見せるわけにはいかないので、これが正しいとは思わく。

それにしてもJKの生足ってなんでこんなに魅力的なんだろうね。制服の生足もちろん味わい深いけど、私服の生足にはまた一段と奥深い味わいがあるよね。なにが言いたいかというと、景ちゃんに着せる服にパーカーワンピースを採用した千世子ちゃんマジ最高って気持ちです。ありがとうマジ感謝中。

「ちよーかーもえつちだねえ」

「そうかしら？ はじめてつけるから、ちよつと違和感があるけど」

千世子ちゃんは私服でもチョーカーを身につけることが多いし、わたしもコラボ配信をした時はファッションの方向性を合わせるために、チョーカーをつけていた。しかし、首元が比較的大きく開くパーカーワンピースで、景ちゃんがチョーカーを身に着けているとなんかこう……えつちポイントが増す。わたしの中のえちちちコン口が燃え上がる。えつちコン口点火！ しゅぼぼぼ！

「で、あとは変装用にメガネね」

「メガネ……？ め、メガネっ!？」

「万宵さんちよつとは静かにできないの?」

「だって千世子さん!? 景ちゃんにメガネですよ!？」

景ちゃんは見た目だけでなく目もとっても良いので、メガネは本来不要だが、不要なものをあえて足すのも、また一つのオシャレの答え。その小洒落た知的感の魅力たるや、もはや筆舌に尽くしがたい。

「それと、これは指輪ね」

「それはわたしとのエンゲージリング?」

「万宵さん黙って。夜風さん、あと髪も結っちゃおうか。メディアに出る時はストレートで下ろしてるイメージが強いから、今日は三編みにしちやおう」

「みつ、みみみ、三編みっ!? おかわわわわ」

「万宵さん、もう口閉じて筋トレでもしてたら?」

景ちゃんがあまりにもかわいすぎておかしくなっちゃいそうなので、わたしは千世子ちゃんに言われた通り、部屋のすみっこでブリッジをはじめた。すみっこ筋トレ暮らしです。これは腹筋によく効く。

「よしできた」

髪を結び終わった景ちゃんは、ブリッジした状態で逆さまに見てもかわいかった。完璧にかわいいものは逆さまにしてもかわいいなだね。

「さすがだよ千世子ちゃん。パーフェクトだよ。これから毎日うちに来て、景ちゃんのコーデしてくれない?」

「万宵さん、私のこともしかして暇人か何かだと思ってる?」

まあいいや、と首を振った千世子ちゃんは、大絶賛ブリッジ中のわたしを見下ろして言った。

「じゃあ、次は万宵さんの番だね」

「へ?」



(どうしよう……)

渋谷の街を歩きながら、夜風景は困っていた。

万宵結愛は、誰がどう見ても完璧な美少女である。出るところは出て、引つ込むべきところは引つ込んでいる身体のラインは同性の自分から見ても魅力的だと思うし、2人で並んで歩いていたら、男性が目を惹きつけられるのはきつと結愛の方だ。

笑顔はやわらかく、表情は明るく、その場にいるだけで空気が華やかに楽しくなるような美少女。それが万宵結愛である。

そんな結愛が、

(結愛ちゃんがいつもと違って……なんだかかっこよくて、ドキドキする)

今日のデートは、いつもとは違う服装で攻めていた。

「ん？ どしたの、景ちゃん？」

「べつに、なんでもないけど」

「あ、万宵さん。次、ゲーセン行って、プリ撮ろ！ プリ！」

「お、いいねー。わたし変顔するよ」

「えぐい顔して、えぐい顔」

千世子と並んで歩いている結愛は、まるで彼女と彼氏のようなだった。千世子が彼女で、結愛が彼氏だ。

簡潔に言えば、ボーイッシュファッション、とでも言えばいいのだろうか。足の長さや細さを生足とは別の意味で際立たせる黒のスキニーに、ビッグサイズのアウターを合わせ、おまけに変装も兼ねて丁寧に結び上げられた髪をキャップの中におさめて、見ようによってはまるでショートヘアのようにも見える。

もつとも、結愛は景と違って胸のサイズがかなり大きいので、性別に関してはまちがえようがない。昔から、結愛は基本的に自分のキャラクターや立ち位置を……言うなれば『見られ方』を理解しているのか、清楚系やかわいい系のファッションをすることが多かった。

(だから、こっとうかっこいい系の服装はめずらしいっていうか……ううん)

伊達メガネのレンズの奥からじつと結愛を見る。

いつもより大きく見える背中が敏感に振り返って、指先が景のメガネをつついた。

「あ、結愛ちゃ……」

「景ちゃん、あんまり見ると、くすぐったいよ」

「ご、ごめんなさい」

「いや、謝らなくてもいいけどね?」

わたしを見てくれるのはうれしいけどね、と。そう言う結愛の横顔は、いつもよりどこか色っぽくて、景はたまらず視線をそらした。

「わたし、ちよつとジュース買ってくるね」

「う、うん」

自販機の方へ歩いていく結愛を見て、ほつと息を吐く。すると、今度は背中から手を差し入れられた。

「きやつ……!」

「夜風さん、今日はずっと難しい顔してるね」

千世子である。

変装用のマスクの下でも、にこにここと笑っているのがわかる。

「3人でデートするのは、あんまり楽しくない?」

「……そんなことないわ。千世子ちゃん、今日はありがとう」

「ん? なんのこと?」

「私と結愛ちゃんを元気づけるために、遊びに誘ってくれたんでしょ?」

「べつに、私が遊びたいから、遊びに誘っただけだよ」

そんなことを言っているが、千世子の視線は、景の中で燻っているものを探るようだった。

「何を悩んでるの?」

「……私、カムパネルラにならなきゃいけないの」

でも、その探り方は、無遠慮なものではなくて。むしろ温かく、こちらを気遣うようで。

だから自然と、景は千世子に向けて心の中の言葉を漏らした。

「でも、私の中のカムパネルラは、ずっと結愛ちゃんだったから……だから、私……ちゃんと、カムパネルラになれる自信がないの」

母が死んだあの日から、父が消えたあの日から。

「いつもキラキラして、遠くを見ていて……でも、誰よりもやさしくて、繊細な人」

夜風景にとつて、万宵結愛が光だった。

阿良也のようにできればいいのかもしれない。けれど、景はどうすれば他人になれるのか……他者の経験を喰えるのか、わからない。

「私が、カムパネルラになれないのなら……いつそのこと、舞台を降りた方が」

「ふーん、つまんない悩みだね」

「つまっ……!?!」

千世子は、齒に衣着せずに物を言うところがあるが、それにしても一言で切つて捨てられて、景は目を剥いた。

「もったいないなあ。すぐ近くに答えがあるのに、そこから目を逸らしてるなんて、もったいないにも程があるよ」

「じゃあ……教えて。私、どうしたらいいの?」  
ぬるり。

路地裏に連れ込まれて、力強く肩を掴まれる。

指がマスクを下ろして、天使の素顔が顕になる。

「うん……それはね」

口の中を、覗き見て。

ああ、千世子ちゃんにも、尖った齒が生えているんだ、と。なぜか、赤い口の中で、紡がれる言葉よりも白い齒を凝視した。



なんだか、オシヤレして何も考えずに1日中遊び回るのは、めっちゃくちゃひさしぶりだったかもしれない。

ビルの屋上から見る夕焼けが、とてもきれいだ。

「千世子ちゃん、今日はありがとうね。楽しかったよ。景ちゃんも、いい気分転換になったみたい」

「うん。私も楽しかったよ」

「景ちゃんは？」

「お手洗いに行くつて言つてたよ」

景ちゃんが戻つてきたら、そろそろ帰り支度をした方がいいかもしれない。千世子ちゃんも、明日からはまた仕事だろう。

「ねえ、万宵さん」

「うん？」

「私達、友達？」

「もちろん、友達だよ！」

「……そっか。よかった」

じゃあ、と。

まるで、プレゼントを取り出すような気軽さで。

まるで、チョコレートを手渡すような甘さで。

「私のために死んでくれる？」

百城千世子は、オレンジ色の空を背景に。

わたしに向けて、血まみれの包丁を突きつけた。

## 天使を喰（は）む

天使のような美少女が、血のような夕焼けをバックに、わたしに刃物を突きつけている。

いや、すでにそれらは刺さっていると断言していい。

殺意が刺さる。

敵意が刺さる。

嫌悪が刺さる。

害意が刺さる。

可視化できないそれを、わたしは手に取るように感じることはできない。

普通の人間なら押しつぶされてしまいそうになるほどのプレッシャーを、真正面から浴びせかけられて。

「で？」

わたしは、きよとんと首を傾げた。

その光景はどこまでも現実離れしていて、どこまでも美しく、そしてだからこそ、わたしにそれがお芝居であることを、強く認識させた。

「よくできてるね、この包」

真つ赤な刃物を、素手で掴む。

べつちやりと手のひらに付着したのは、血糊だろうか、それとも特殊な絵の具か何かだろうか。いずれにせよ、その作り物の冷たさが、今のわたしにはどこか心地良かった。

「あーあ。やっぱり気づいてた？」

くしゃつと。

天使の仮面が、歪んで崩れる。けれどそれは以前無理矢理、わたしが剥がした時のような笑みではなく、自然に癒着していたものが剥がれ落ちるような、やわらかい笑みだった。

その笑顔は百城千世子のものというよりも、一人の女の子のものだった。

「うん」



「いつから?」

「えーと、みんなで着替え終わって、景ちゃんの家の玄関から出た時、かな」

「なにそれ。最初からじゃん」

わたしに掴まれた包丁の刃を、わたしに掴ませたまま、ぽいっと放り出して。千世子ちゃんは気が抜けた自分の気持ちを表すかのように、くるくると回った。おいおい、ハサミを渡す時は人に向けちゃいけないって、この天使習わなかったのか? まあ、ニセモノの包丁だからいいけど。

「私の次の役。人を殺したことを隠して遊ぶ、女子高生の役なんだ」

「ああ、なるほどね。だから、今日は遊びながらずっと殺気立っていた、と。わたしたちを利用しながら、役作りしてたわけだ」

「うん。そういうこと」

この天使、ちつとも悪びれないな。

ペロツて舌を出してもかわいいのは、同性から見てもずるいと思う。

わたし? わたしも時々やります。自分の顔の良さは積極的に利用していくべきだと思うので。

「そっかー、バレちゃったかあ。ちよつと残念」

「なんで? 殺気を忍ばせながら笑って遊ぶ、なんて上手い役者さんでもなかなかできないと思うけど?」

事実、わたしはプリクラを撮ったりゲーセンに行きながら、隣にいる千世子ちゃんから濃厚な殺気のようなものを感じ取っていた。わたしにそう感じさせる、ということは。表面上は穏やかに振る舞いながら、わたしたちと遊びながら、バッグにナイフを隠して楽しんでいたり、ということ。つまりそういう感情を作りながらリアルタイムでコントロールして、役作りをしているということだ。

相変わらずだな、と。感心してしまう。

百城千世子という役者は、この高みにあってなお、わたしと景ちゃんを丸ごと喰らおうとしている

「千世子ちゃんは、やっぱりすごいなあ」

だから、人の心を覗きながら会話を回すわたしにしては、本当にめずらしく。

素直に、思ったことがそのまま口をついて出た。

「ふうん」

ずるり、と手を引かれた。

ずるり、と指先が首まで伸びた。締めたわけではない。掴んだわけでもない。ただ、指先がわたしの喉笛に触れられただけ。

しかし、ただそれだけで、わたしは目の前の天使に、心の臓まで掴まれた気持ちになった。

「そう言ってもらえるのはうれしいけど、でもわたしはまだ、自分がすごいとは思えないな」

誰もが憧れる天使が。

スターズの頂点に立つスターが。

わたしの目の前でどろりと本心を開いて、その心の内を吐露する。まるで、自分の体に刃を突き立てて、内臓と血を見せびらかすように、本心を曝け出す。

赤色の嫉妬が、そこにあつた。

「私はね、万宵さん。贅沢かもしれないけれど、もっと上を目指しているんだ」

「もつと、上？」

「うん。もつと上だよ」

比喩ではない。

心を、掴まれる。

「私はあなたに殺意を抱いて、でも、あなたは私が心の内に抱いたこの殺意に気づかない。これが最上。私は演じる役の仮面を被りながら、万宵さんに気付かれない。それが、目標だったの」

だから、今日は失敗、と。

天使はいつそ清々しいほどの笑顔でカラカラと笑った。

「繰り返しになっちゃうけど。わたしは、十分すごいと思うよ？」

「うん。万宵さんはそう言ってくれるよね。でも、すごいだけじゃ、だめなの」

指先は、首筋にかかったままだ。

吐息が唇に触れる。とても、蠱惑的で、それでいて貪欲な、天使の心。

「万宵さんは、夜風さんをいつも見ているよね？」

「うん」

即答する。

「私もね、見てほしいんだ。たくさん見てほしい。万宵さんが夜風さんを見ているみたい。夜風さんが万宵さんを見ているみたい。たくさんたくさん、私のことを見てほしいの」

きれいな唇からさらさらと紡がれる言葉は、強欲で、嫉妬に満ちていて、浅ましくて。

けれど、千世子ちゃんからわたしに刺さる感情は、そんな言葉の印象とは裏腹に、どこまでも澄んでいて、とてもとても綺麗だった。

「だからさ、ライバルに塩を送るっていうわけじゃないけど。立ち止まってるとうろ見ると、私が困っちゃうんだよね」

首から、手が離れる。

くるりくるりと千世子ちゃんは回りながら「悩んでる時はたくさん遊べば発散できるかな、なんて思ったけど。いまいち乗り切れなかったみたいだし」と、こちらの顔を覗き込んできた。

「私でよければ、話聞くよ？」

問い。見た目が天使の超絶美少女に「大丈夫？ 話聞こか？」というテンプレイケメンお持ち帰りムーヴをされた場合、抵抗することはできるだろうか？

回答。不可能である。

「えっと、あのね」

「うんうん」

わたしは洗いざらい、悩んでいることを話した。

わたしが昔から、景ちゃんの側で景ちゃんのことを支えてきたこと。と。

でも、わたしが景ちゃんのことを気遣っていたように、景ちゃんもわたしのことを気遣ってくれていたこと。

ルイくんやレイちゃんが大きくなったら、わたしの居場所はなくなっちゃうんじゃないか、という浅ましい不安。

結局、そんな自分本位の考えに押し潰されそうになってる、わたし自身の身勝手さ。

わたしは、人の心が見えるから。人の考えていることが、ある程度わかってしまうから。

だからこそ、丁寧に自分の気持ちを、相手に隅々まで触れてもらえるように、気をつけて喋った。

喋ったのに……

何故か、千世子ちゃんの瞳からはどんどん光が消えていく……というか。ハイライトがなくなっただけで冷たくなっていく……というか。

明らかに後半になるにつれ、呆れに近い感情が漏れ出してきた。

「ねえ、千世子ちゃん、ちゃんと聞いてる？」

「ああ、うん。聞いてる聞いてる」

「うそー！ 絶対ちゃんと聞いてない！」

言ってから、自分でもそれが重くてめんどくさい女のテンプレみたいなセリフであることに気づいて、なんとも言えない気持ちになる。

「じゃあ、はつきり言っただけ？」

「う、うん」

「万宵さんのそれ、悩みじゃないよ。ていうか、なにそれ惚気のろけ？ 夜風

さんの仲、自慢してる？」

「わたしは真剣に悩んでるんだけど！」

「万宵さんって基本的にめちゃくちゃ小器用なのに、夜風さんが絡むとバカみたいになるよ？ そういうところ、弱点みたいで

私は良いと思うよ」

「よくはないっ！」

まるでちっちゃい子どもを宥めるかのように、頭の上に手をのっけられた。

「大丈夫。大丈夫だよ。さっき夜風さんとも話したけど、そんなに心配する必要はないと思うよ」

されるがままに、決して大きくはない千世子ちゃんの手のひらに、

頭を撫でられる。

「万宵さんは夜風さんのことをたくさん考えて、なるべく側にいようとして。夜風さんも自分に寄り添ってくれる万宵さんのことを、とっても大切にしている……」

まんまるのアーモンドみたいな目が、すつと細められる。

「お互いに、本当の幸さいわいを祈っている」

それは明らかに、銀河鉄道の夜から引用した言葉だった。

「だってそれ、はじめから両想いってことじゃん。勝手に壁作ってつまらない悩み方しちゃって——」

千世子ちゃんは、天使だ。

それは、疑い様のない事実。

「——かわいいね」

けれど、寄せた耳元で、囁くようにそう言われて。

鏡を見るまでもなく、自分の顔色が朱色に染まったのを自覚して。間近でいたずらっぽく笑う千世子ちゃんの表情は、申し訳ないけれど、小悪魔のそれにししか見えなかった。

「ゆ、結愛ちゃん!? 千世子ちゃん!? なにしてるの!?!」

唐突に。響くように通る声が聞こえて、はつとなる。

そこには、わなわなと震えてわたしたちを見詰める景ちゃんの姿があった。

「あ、夜風さん」

「千世子ちゃん、なにしてるの!?! どうして包丁持ってるの!?! なんでそんなに結愛ちゃんとかくっついてるの!?!」

「あ、違う! 違うよ景ちゃん! ベつにこれは浮気とかじゃなくて」

「浮気!?! 千世子ちゃんに浮気したの!?!」

「してない! してないってば! むしろわたし、包丁突きつけられてたからね!?! 殺意向けられてたからね!?!」

「私に隠れてお芝居の練習してたの!?!」

ああ言えばこう言うなもう!?!

「あははっ！」

「ちよつと千世子ちゃん！ なんでもつとくつついてくるの!?!」

「え、ダメ？」

「あ、いや、えつと。ダメ、じゃないけど」

「ずるい！ じゃあ私もくつつくわ！」

ぷくーつと。頬を膨らませた景ちゃんがぱーつと寄ってきて、ひしつとくつついてくる。

必然的に、わたしと景ちゃん、千世子ちゃんをサンドイッチする形になった。

「うん。2人とも、もう大丈夫そうだね」

挟まれたサンドイッチエンジンジェルが、上目遣いでそう聞いてくる。

やれやれ。

どうやらやつぱり、わたしはまだこの役者の大先輩には、勝てそうにない。

「お腹空いたね。ご飯食べに行こうよ」

「なに食べる？」

「牛丼いこ。牛丼」

「牛丼！ 最近食べてないわ！」

「いいね。じゃあ、夜風さんには私のオススメの食べ方を教えてあげるよ」



明神阿良也は、稽古場の入口が開く気配を感じて、振り返った。

阿良也は、常識を重んじるタイプではないが、常識が皆無というわけではない。舞台の芝居は1人ではできないチーム戦であり、最低限の礼儀や礼節は、師である巖から叩き込まれた。

だから昨日、夜風家で自分がやったことはとんでもなく礼を失した行動であることを、阿良也は自覚していた。場合によっては、謝罪をしなければならぬとも思っていた。

ただし、阿良也は夜風景と万宵結愛という役者を、その芸歴に反し

て、とても高くなっている。

「ほら、景ちゃん。やっぱり阿良也くんいたよ」

「そうね」

良い役者とは、総じて飲み込みが早く、そして立ち直りも早い。

入ってきた2人の少女は、まるで昨日の出来事がなかったかのように、お互いの手を固く握りしめていた。

その様子はまるで、連れ立って銀河鉄道に乗る、ジヨバンニとカムパネルラのように……本番では自分が景の隣に立つジヨバンニにならないければならないことを、阿良也に強く意識させた。

「昨日はごめん。でも、大丈夫そうだね」

「うん」

「もう平気」

顔つきが変わっている。

雰囲気が変わっている。

何らかのきっかけがあって、それが2人の迷いを断ち切ったのは、明らかだった。

「何を喰ったの？」

顔を見合わせてから、景と結愛は笑顔で答えた。

「牛丼アタマの大盛り汁だくキムチとろろ添え」

「ごめん。なんだって？」

## 悪魔とゴジラとクソジジイ

巖のおじいちゃんと生活を共にし始めてから一週間と少し。

「ユアユア、今日のご飯はなんだ？」

「同居を申し込んだのはわたしからだから何も言えないんだけど、ちよつと順応が早すぎると思うよおじいちゃん」

わたしはすっかりこのジジイの胃袋を掴んでしまった。

このおじいちゃん、テンプレ頑固ジジイみたいな巖つい見た目に反して、好物はハンバーガーとかなので、完全な子ども舌なんだよね。今もわたしは、せっせとハンバーグのタネをコネコネしている。

「ハンバーグか。悪くねえな」

「悪くねえな、じゃないよ。出されたものは文句言わずにちゃんと食べてね」

「俺がユアユアの作ったものに文句をつけるとでも？」

「ごめん。わたしが悪かったよ」

だめだ。このジジイ、レスバが強すぎる。わたしも大概口論には強いつもりだけど、ちよつと勝てる気がしない。いろいろな意味で。

正直、わたしは自分に向けられる好意に慣れていないし、そういう感情をなるべく多く受け取れるように生きてきた自覚もある。けれど、とはいえ……ここまではつきりと好意を示されると、困惑する気持ちもあるわけで。

なによりも、巖のおじいちゃんからわたしに向けられる感情の色は、配信中にわたしがファンから向けられる熱烈な感情の色とは微妙に異なっていた。

「巖のおじいちゃんはさ。なんでそんなに、わたしのこと好きなの？」  
「あ？」

我ながらふぎけた質問である。自意識過剰も良いところだ。しかし、どうしても気になるところでもあった。

人の感情を可視化できるわたしには、一つの譲れない結論がある。

好意とは、無償の感情ではない。

好いた相手には、自分を好いてほしい。これは、人間として当然の



欲求だ。例えばわたしは景ちゃんのことを大好きだし、景ちゃんにもわたしのことを好きであってほしいと思う。人からの好意はプラスの感情であるのと同じに、そういう承認欲求を内包した、どろりとした生々しい部分も、間違いなくあるのだ。伊達に長い間、配信者をやって好奇の目に晒されてきたわけではない。

でも、なんというか、巖のおじいちゃんから向けられる好意は違うのだ。そういうのじゃないのだ。

巖のおじいちゃんからわたしに向けられる感情には、どう言えばいいのだろうか。一言で言ってしまうえば、生々しい部分がない。見返りがないというか、無駄に湿っていないというか。対価を求めていることがわかる、陽だまりのような温かきがある。

「人が人を好きになるのに、理由つてのは必ず必要なのか？」

だから、素知らぬ顔でこんな臭いセリフを吐けるのだろうか？

ご飯を食べたら、お風呂が基本である。

「巖のおじいちゃん。先にお風呂もらったよ」

「おう」

パジャマに着替えて、髪をドライヤーで乾かしながら、巖のおじいちゃん横に座る。

テレビの画面で流れているのは、一本の古い映画だ。

とても有名な映画監督の、よく知られている代表作。ベルリン国際映画祭で特別賞も受賞した、世界的な評価を受けている作品。

たった三文字の簡素なタイトルとは裏腹に、物語は主人公の胃の中身を大映しにして「これは癌だけど。でも本人は全然そんなことに気がついていないぜ！」という皮肉めいた導入からはじまる。自分が膵臓癌のくせにこの映画を再生しはじめた時は、何の自虐ネタだろう？と思ったのだけれど、巖のおじいちゃんは病気に関係なく、元々この映画が好きだったらしい。

「不幸は人間に真理を教えるらしいぞ。どう思う？ ユアユア」

「どうも何も、その通りなんじゃない？」

特に思うところもなかったので、そのまま答える。

すると画面を見詰めながら、演劇界の大御所は薄く笑った。

「映画を見ている時、ユアユアはいつもつまらなそうだな」

素知らぬ顔で凶星を衝かれて、押し黙る。

「夜風と一緒に、数は見ているだろう？ あれは、根っからの映画好きだ」

「景ちゃんから直接聞いたの？」

「いいや。だが、演技を見ていりゃわかる。ビデオテープが擦り切れるまで映画を見てなきや、あんな演技はできない」

まあ、俺は演劇畑の人間だから特別映画に詳しいわけじゃないがな、と。

らしくない謙遜を話の接続に使って、巖のおじいちゃんは言葉を続けた。

「画面の中の作り物の感情を眺めているのはつまらないか？」

「そんなことは、ないけど」

「顔に書いてある。理解できないってな」

「……いじわるなこと言うね」

「ああ。俺は底意地の悪いクソジジイだからな」

底意地の悪いクソジジイをぐっと睨む。とはいえ、わたしが睨んだところで、この人は平気な顔で「ご褒美か？」とか言いそうだ。まったくもって敵わない。

「わたしね。景ちゃんと千世子ちゃんの演技を見た時、うらやましいなって思ったの」

劇団天球に来てから、わたしは本当にたくさんのもを得た。

七生さんからは、舞台上での演劇表現の基礎基本のすべてを。

阿良也くんからは、己の在り方を食べさせてもらって。

そして、千世子ちゃんに、迷いを振り切る手伝いをしてもらった。

「ねえ、巖のおじいちゃん。わたし、成長してるよね？」

「ああ。スポンジみたいにいるんなもんを吸収してるからな」

「でも、それでも、まだ足りないと思うんだ」

「向上心を忘れないのは良いことだ。それを落とした瞬間に、役者は死ぬ」

「良い風に言ってるけど、それ……巖のおじいちゃんから見ても、わたしにはまだ役者としての能力が足りてないってことでしょ？」

「ああ。俺は巖しいからな」

前に進んでいる実感はある。ピースは揃いつつある。わたしは、わたしを演じる役を、もう少しで組み上げることができる。おそらく、今のわたしなら、景ちゃんと一緒に舞台に立つことだけはできるだろう。

でも、それだけではきつとダメなのだ。あの本物を、掴むことはできないのだ。

わたしがまた口を開く前に、今度は巖さんの方が先に言葉を投げってきた。

「なあ、ユアユア」

「なに？」

「心が視えるってのは退屈か？」

「……おもしろくは、ないかな」

「人の気持ちを覗き込んで、自分だけ好きな様に手玉に取るってのは、楽しいか？」

「巖のおじいちゃん、わたしにお説教してる？」

「俺の心は、そう視えるか？」

「……そういう返しは、ずるいなあ」

言葉だけを切り取れば、たしかにお説教のような言葉だった。

でも、巖のおじいちゃんがわたしに向けている感情が、あんまりにも温いものだから、わたしはこれっぽっちも怒る気にはなれなかった。

「つまらねえだろう」

ぽつりと。

眩かれた一言が、どうしてかやけに重く、心の中に落ちた。

「心つてのは、見えないからおもしろいんだ。想像できるから、楽しいもんだ。それが見えちゃったら、そりゃあ、人間のいろんなものがつまらなく視えちゃうだろうさ」

「……もしかして、慰めてくれてる？」

「聞かなくてもわかるんじゃないやねえか？」

「重ねていじわるだね」

わたしには、好きな映画はない。

子どもの頃はあれほど夢中になっていた本も、いつからかただの配信のネタバレに変わってしまった。宮沢賢治の本をたくさん読み漁って、解釈の足しにはなっても、それが活きているという実感が、わたしの中にはまだ足りない。

物語という嘘の塊を、本物として愛することができないから。

だからわたしは、画面の中で描かれる作りモノの物語を、愛せなくなってしまうのだろうか？

「ねえ、おじいちゃん」

「なんだ」

「わたし、本物の嘘吐きになれるかな？」

デスアイランドで見た、景ちゃんと千世子ちゃんのように。

「それは、少し違うな」

返ってきたのは、静かな否定の言葉だった。

「嘘吐きだらけのこの世界で、嘘を吐かない覚悟をした者を役者という」

すらすらと紡がれた言葉は、やけに滑らかで。まるで一人の役者のよう。

なんとなく、昔も同じセリフを吐いたことがあるんだろうな、と。

わたしは思った。

「それ、わたし以外の人にも言ったことがあるでしょう？」

「よくわかったな。昔、似たような悩みを持ってた馬鹿に、同じことを

言った」

「そのおバカさんは、今は何してるの？」

「俺の舞台で、主演を張る役者になったよ」

阿良也くんのことを言っているのは、なんとなくわかった。

「ねえ、巖さん」

「なんだ？」

肩を寄せる。口元を、耳に近づける。

なんとなく、大きな声で言うのは恥ずかしかった。

「もし、わたしが巖さんの舞台に相応しい役者になれたら……」

「巖さん！ 玄関開いてたから入っちゃったわ！ 夜遅くにごめんなさい！ でも、どうしてもセリフ回しで聞きたいところが、あつて……」

バサリ、と。台本が落ちる音がした。

明るくウキウキとした景ちゃんの表情が、こちらを見て能面のように固まっていた。

「……景ちゃん？」

「ゆあちゃん？」

アイエエエエエエエ!

ケイチャン!?

ケイチャンナンデ!!!?

「ゆあちゃん？」

落ち着け、わたし。

おーけー。状況を整理しよう。

今は夜である。わたしは夕ご飯にハンバーグを作っていたのだから、それは当然だ。

わたしはすでにお風呂を済ませているので、もちろんすでに制服は脱いでいて、いつでもこのまま寝ることができるパジャマ姿である。

そして、わたしは今、巖のじいちゃんにぐでーつとよっかかりながら、映画を鑑賞していた。

どのあたりがセーフだろうか？ 基本的にはすべてアウトだと思う。くそつたれ。

「ゆあちゃん？」

おだやかな巖のおじいちゃんとは正反対の、あまりにもどす黒い感情が襲いかかってきたので、わたしは考えるよりも先に景ちゃんに向かって土下座した。

体の反射が、脳の思考を上回った瞬間だった。

「なるほど。そういうことだったのね」

「はい。そういうことなんです」

パジャマ姿で正座したまま、わたしは景ちゃんに向かって全力で頷いた。人間って正座したままこんなにも力強く頷けるんだね。はじめて知ったよ。

「じゃあ、巖さんとゆあちゃんの間には何も無いのね？」

「ないない。ほんとだよ。やましいこととか何もしてないよ？」

「ああ。俺はユアユアの純粋なファンだ」

ちよつと黙ってるよクソジジイ。

「そう。わかったわ」

「本当!? いやあ、よかった！ あ、景ちゃんもハンバーグ食べる？」

すぐに温められるよ！」

「うん。いただくわ」

それから、と。景ちゃんはセーラー服の上を脱いで言った。

「今日から私も、ここに住むから」

ホワツツ？

「え？ 景ちゃん。今なんて？」

「今日から私もここに住むから。結愛ちゃん、着替え貸して」

「いやいや！ いやいやいや！ ダメに決まってるでしょ!?! 現役J

Kとおじいちゃんが一つの屋根の下に暮らすなんて犯罪だよ!?! 事

案だよ?。」

「はっ。」

景ちゃんの喉から、景ちゃんのものとは思えない、すっぱー低い声が漏れた。

どん、と。景ちゃんは無表情のまま、わたしの頭をすり抜けて、壁に手を突いた。景ちゃんの方がわたしよりも背が高いので、当然の如く見下ろす形になる。

壁ドンである。ちよつとキュンときた。

「結愛ちゃん」

「は、はっ」

「結愛ちゃんの職業はなに？」

「は、配信者？」

「その前に？」

「あ、女子高生です」

「うん。そうよね」

みなさんはご存知だろうか？

美人の無表情ほど、こわいものはない。淡々と言葉責めも添えられると、尚更である。

「結愛ちゃんも女子高生よね？ JKよね？ 結愛ちゃんがよくて、

私がダメな理由はなに？」

「で、でも！ わたしは景ちゃんが大切だし」

「私も結愛ちゃんが大切だわ」

ひん。即答された。結婚しよ。

いいや、そうじゃなくて。

「巖のおじいちゃん！ なんとか言っつてよ！」

「……」

「ちよつと!! おーい。おじいちゃん？」

「ああ。すまねえ。良い画だと思っつてな」

「いい加減にしろよクソジジイ」

景ちゃんの壁ドンはタダじゃないし、見世物でもないんだよ。金取るぞ、おい。

「良いじゃねえか。夜風、今日からはお前もここで寝泊まりしろ」

「ええ。もちろん。ありがとう、巖さん」

「ええ……やっぱりそうなるの……？」

「何か不満か？」

「いや、不満はないけどさ〜」

もちろん、四六時中景ちゃんと一緒に居られるのであれば、不満はない。ないはずなのだが、なんとなく不満めいた抗議をしまつている自分がいるようで、わたしは思わず首を傾げた。

まあ、いいか。

「わたしはそれでも構わないけど、巖のおじいちゃんは大丈夫なの？」

住み込みで二人分の演技指導するってことですよ？」

「ああ？ そっちこそ何言ってやがる。一人見るのも二人も大して変わらねえよ」

それにな、と。

演劇界の重鎮は、不敵な笑みを浮かべて言った。

「推しが、推しに狂っている姿を間近で見られるんだ。これはもう最高だろう」

「わたしが景ちゃんに狂ってるのは事実だから何も言えないんだけど、やっぱりちよつとおかしいよおじいちゃん」



## 屋形船配信

「はいはい。みなさんこんばんは。ユアユアです」

『ばんはー』『こんゆあー』『こんゆあー』『ひさびさの配信だぜ』『実家に帰ってきたみたいだ』『テンション上がるなあ』『は？ゲリラ配信か？』『まってくれ。今から夜勤なんだが』『やってみせろよ、社畜！』『なんともなるはずだ！』『ゆあゆあだど!?』『オタクが三人！』『来るぞ遊馬！』『完璧な流れでダメだった』『ばんはー』『祭りの場所は、ここかあ？』『配信おもしろいよな』『ミラーワールドに帰れ』『今日何やるの？』『知らん』『ゆあゆあの顔見れば良いよ』『それはそう』

おうおうおう。特に事前の告知もなくゲリラ配信をはじめたというのに、コメント欄がなかなかの盛況ぶりだ。なんだか嬉しくなっちゃうねえ。

とはいえたしかに、こうして配信をするのは、とってもひさしぶりな感じだ。最近は舞台の稽古に全力を尽くしていたから、どうしても配信の回数が減っていた。それでも、待ってくれているファンのみんながいるというのは嬉しいものである。

『なんか揺れてる？ 気のせい？』『前回はへりだったからな……』『急に東京上空だったからな……』『まさか今回は海か？』

お。当たらずも遠からずと言ったところだね。

「今日はなんと、わたしが出演予定の舞台、銀河鉄道の夜の役者のみなさんにご飯に来てるよー。そして、本日は屋形船の上からお届けします！」

『マジで海上で草』『屋形船は川だろ』『阿良也くん見たい』『アキラくんお願いします』『ボクは七生さんがいいです』『落ち着けお前ら、まじは巖さんだ』『劇団天球の推し割れすぎて草』『だってよお……』『誰か亀のにーさんも応援してやれ』『亀のにーさんが出てた回の切り抜き、地味に伸びてたよな』『普通にあの人の芝居の解説おもしろいねん』『亀さんと絡んでる時の辛辣極まるゆあゆあ好き』『わかる』『わかる』『わかる』

「さてさて。今日は屋形船だからねえ……会場は盛り上がりつつあるかな

？」

外から勢い良く、船内の宴会場の扉を開く。

「あ、みてみてゆあーっ！ アキラのち○こー！」

盛り上がり過ぎだろバカ野郎。

わたしは即座に配信画面を叩き切った。

具体的には「みてみてゆあーっ！」のあたりでアキラくんのパンツを全力でずり下ろしている七生さんを視認することができたので、ギリギリのところまでセンチティブワードを排除することに成功した。

あ、あぶねえー……まじで危なかった。

わたしがこれまで積み上げてきた配信者としての財産が、一発でBANされるところだった。

ふざけんなマジで。星アキラのちん○如きでわたしの配信者人生が終わってたまるか。

「あー！ ぐ、ごめんゆあ!?! もしかして配信してた!?!」

「ん。大丈夫だよ七生さん。アキラくんのイチモツが見える前に叩き切ったから」

「ごめんゆあー」

「はいはい。よしよし」

ぐでえ、と涙目で抱きついてくる七生さんをよしよししてあげる。まあ、とても色濃い反省の感情が見て取れるし、ここは許して差し上げましょう。わたしは心が広いからね。

「ガタガタ騒ぐな、七生。ゆあゆあは配信に関してはプロだ。アキラの股関が映り込むよりも早く、配信画面を即座に切断している」

と、片手で日本酒のおちよこを傾けながら、わかりやすいドヤ顔で巖のじいちゃんが言う。

「いやまあ……そうだけど。巖のじいちゃん、なんでわかるの」

「配信を見ていたからだ」

「なんでだよ」

巖のじいちゃんの手には、しっかりとタブレット端末が握られてい

た。

なんで当たり前のように飲み席で配信見てるんだ、このボケジジイ。いつの間に使えるようになった？

本物のわたしがここにいるのに配信画面見てるんじゃないよ。ていうか、告知なしのゲリラ配信だったのに反応早すぎない？ わたしのファンか？ ファンだったわ、うん。

「七生さん！ それよりもまずぼくのパンツをずり下げたことに関して何か言うことはないんですか!？」

赤面したままベルトかちやかちやと直しているアキラくんが叫んでくる。べつに感情を読み取るまでもないが、その心はかつてないほどに羞恥心に塗れていた。ちよっとおもしろい。

とろんとした表情で、小首を傾げて。まるで小悪魔のように、七生さんは言う。

「アキラ、意外とおっきいね？」

「違うそうじゃない！」

ほほう。意外と大きいと。なるほど。

「亀さんとどっちが大きかった？」

「アキラ」

「やるねえ、アキラくん」

「やめろ！」

べつにアキラくんの下半身には毛ほども興味はないが、イケメンが狼狽える様子を見るのは中々におもしろい。

「結愛ちゃん、どうしたの？」

そこで、幸いなことにお手洗いで席を外していたらしい景ちゃんが帰ってきた。自分で覗きに行ってる七生さんはいいけど、景ちゃんにアキラくんの汚らわしいエクスカリバーを見せるわけにはいかないからね。

「なんでもないよ、景ちゃん。ここにしていると汚れたものを見ることになるかもしれないから、わたしと一緒に夜景楽しみに外に出ようね」

そう。夜景だけに。

「でも私、ご飯食べたいわ」

「それはたしかに。ちよつと亀さん、取り皿ちようだい」

「少し待て！ ゆあゆあ！ 俺は今からこのいけ好かねえイケメンと男と男の真剣勝負をしなきゃならねえ！」

「なに出そうとしてんの？」

「やめときな、亀。絶対アキラの方がでかいから」

「だまれ七生お！ ちゃんと比べてみなきやわっかんねーだろうがあ  
！」

「うん。前言撤回。亀さん、その汚い手でわたしたちに二度と触れないでね」

「二度と……？」

まったく、男ってどうしてこう、あそこの大きさを張り合おうとするんだろうね。

いやでも、わたしも前世では昔はあそこの大きさを気にしていたような気になっていなかったような……。

「どうしたの結愛ちゃん」

「ちん〇んとおっぱいの大ききのプライドって似てるかもしれない。どう思う景ちゃん？」

「どうしちやつたの結愛ちゃん」

いかんいかん。この場にいるとわたしまで下ネタに吞まれてしま  
いそうだ。

屋形船の中から、景ちゃんを連れて外に出る。

「夜景、きれいだねえ」

「ええ」

川の中から、夜の街並みを見る。これはたしかに、新鮮な体験だ。  
ほう、と。息を吐く景ちゃんの横顔も、きらきらと輝いているよう  
だった。

「流れる夜景が、銀河に輝く星空に見えるだろう？」

「うわびつくりした」

いつの間にか、背後に巖のおじいちゃんが回っていた。ジジイのく  
せに素早い。

「ちよつとおじいちゃん。わたしと景ちゃんと二人っきりのロマン

チツクタイムを邪魔しないでくれない?」

「メシを取り分けてきたぞ」

「ごはん!」

景ちゃんは基本的に食いしん坊である。つまり、餌付けに弱い。とてもかわいい。

お惣菜が山盛りに盛られた取皿を渡されて、景ちゃんのご満悦の様子だ。そのまま、巖のじいちゃんはどこかつとわたしと景ちゃんの間に入り込んだ。

なんかこう、わたしたちの間への挟まり方が手慣れてきやがったな、このジジイ……。

「この夜景は、死の景色だ」

「死の景色……こんなにきれいなのに?」

「ここから見える一つ一つの灯りは、そこに住む人々の営みが生んだもの。手を伸ばしたくなる、あたたかいものだ。だが、今の俺たちには、触れることすら叶わない」

三途の川、なんてよく言われるように。水が流れる河川は、昔から現世とあの世を隔てる境界だったという。

わたしたちは今、銀河鉄道に乗って死者が見る景色を味わっている。

「悪くないだろう?」

「うん。悪くないね」

そういえば、ゆっくり夜景を眺める、なんて。いつぶりだろうか。

誰の視線も、感情も気にせず、隣で同じ景色の美しさを共有する。それはもしかしたら、すごく素敵なことなのかもしれない。

巖のおじいちゃんを挟んで、わたしと景ちゃんは、しばらく黙って夜景を眺めていた。



しばらく席を空けていただけで、お酒が飲めるみなさんはすっかり出来上がってしまったらしい。

いびきが響く宴会場の中で、几帳面にスマホを見て自分の演技を振り返っているのは、アキラくん一人だけだった。

元気づけてあげようかな、なんて。めずらしく余計なお節介をする気が浮かんだけれど、まだ起きていた七生さんと亀さんが絡みに行ったららしい。アキラくんにしてはめずらしい、ちよつと怒ったような声と、亀さんの「フルチンで演じる前から自虐してんじゃねえ！」みたいな、言い争いの声が聞こえてきた。なんだろう。下半身を絡めないで演劇の話ができないのだろうか？

とはいえ、あちらに関しては何心配ないだろう。問題は、やはりこつちだ。

「ゆあゆあ」

「なに？」

「今日、話す」

「ん。わかった」

お酒が弱い阿良也さんには一杯盛って寝てもらって。アキラくんと話している亀さんたちには、わたしたちの話は聞こえない。

他の誰にも聞こえないように、巖のおじいちゃんや景ちゃんに切り出した。

「よく聞け。夜風」

「どうしたの？ 巖さん」

「俺はもうすぐ死ぬ」

きよとん、と。

景ちゃんの感情が、表情そのままの困惑に満ちた。

「……そうは見えないけれど」

うんうんだよね。わたしもそう思う。

「臍臓に悪性の腫瘍があるんだ。医者の話では、持って半年。それが俺の余命だ」

きちんと景ちゃんの目を見て語りかけながら「まあもつとも、ゆあゆあのおかげで少し寿命は伸びたがな」と巖さんは補足した。

いや、さすがにわたしの配信に寿命を伸ばす効果はないが……。

「……結愛ちゃんは、知ってたの？」

「うん」

ようやく、理解が追いついてきたらしい景ちゃんの心の内が、ぐちゃぐちゃに歪んでいく。

やっぱり、こういう時の人の心を見るのは、少しだけしんどい。

でも、見なくちゃいけない。それが、わたしの役目だ。

「だから、巖さんと一緒に生活していたの？ 演技指導のためじゃないって、病気の巖さんを支えるために？」

「それは違うよ、景ちゃん」

「ああ。俺が、ゆあゆあの手料理を食いたかっただけだ」

もうわたしが全部説明するから、黙っててくれないかな、このジジイ。

「わたしは単純に、自分の演技の質を高めるために、巖のじいちゃんの側にいることを決めたの」

「それは……でも、そんな。どうして」

「もちろん、景ちゃんの隣に立つのに、相応しい役者になるためだよ」ボケジジイのお腹を、げしげしと肘でつつく。

ちゃんと真面目に話せ、というメッセージが伝わったのか。巖のおじいちゃんは溜息を吐きながら、景ちゃんに言った。

「夜風。お前の役、カムパネルラは死者を乗せて走る銀河鉄道の乗客だ。生者のジョバンニとは違う。カムパネルラは自分の死を自覚している」

だから、と。

言葉を繋げて。

「お前は、俺を通じて最も死に近づかなきゃならない。そしてそれは、俺がゆあゆあに渡した配役も同様だ」

「どうして、そこまで」

「俺が演出家で、お前が役者だからだ」

ああ、ずるい。

巖さんは、自分が演出家で、景ちゃんを役者だという。

けれど、この期に及んでもまだ「お前たちが役者だから」とは、言ってくれないのだ。

「お前は、俺の死を喰って役作りをしろ」

「だめ。だめよ。ちゃんと、ちゃんとみんなに言わなくちゃ！ 私や結愛ちゃんだけじゃなくて、みんなに伝えて、入院して治療して、それから……！」

「ダメだよ。景ちゃん」

「どうして!?!」

めずらしくわたしに対して叫び返してきた景ちゃん。その背中に、そっとしなだれかかる。

追いつかなければならない。本番までに。

成らなければならぬ。一人の役者に。

認められなければならない。この演出家に。

「景ちゃんは、カムパネルラだから。カムパネルラにならなくちゃいけないから」

言い聞かせて、染み込ませる。

じわりと、涙が滲む気配がした。

「大丈夫。一人じゃないよ。わたしも背負うから」

わたしは、人でなしだ。

それで良い。

だってわたしは、景ちゃんと同じ景色を見たいから。

人でなしでなければ役者になれないのなら、一緒に落ちていこう。

夜景と一緒に、目に焼き付けよう。

大丈夫。舞台は、必ず成功させる。

「わたしたち、今日から共犯者だね」

だって、死者を想うわたしの愛する人の顔は、こんなにも美しい。



## 悪魔は、銀河鉄道には乗れない

景ちゃんの動揺は、あの日だけだった。

巖さんの余命に関する心のざわめきはやはり見て取れたけれど、傍から見れば何も変わらないう、いつも通りの夜風景に戻った。それは、景ちゃんに対して自分の余命を伝えた巖さんも同じく。

「まって結愛ちゃん。巖さんに勝てないわ……」

「うん。だってこのおじいちゃん強いもん。ちなみにわたしでも中々勝てないよ」

「え？」

「まだまだだな、夜風」

『巖さん相変わらず格ゲー強くて草』『景ちゃんボッコボコやんけ』『まあ、景ちゃん元々そこまでゲームは上手くねえしな』『それにしても巖さんが上手すぎるよ』『それはそう』『役者と演出家の姿か？これが……』『ゆあゆあが後ろで腕組んで見守ってるのクソおもしろいな』『後方保護者面定期』

それこそ、いきなりぶった切った屋形船配信の後始末をお願いできる程度には、二人はいつも通りになった。

「巖さん！ そんなにドバドバお醤油かけないで！」

「薄味だとうまくねえ」

「薄味じゃない！ ちゃんと味付けてあるでしょ！ 結愛ちゃんからもなんとか言ってー！」

「おいジジイ。景ちゃんのご飯だ。黙って味わって食べ」

「わかった」

「なんで結愛ちゃんの言うことだけは素直に聞くの!？」

一緒にご飯を食べて、映画を見て、演技の話をして。

シンプルに同じことを積み重ねていく、三人での共同生活が続いた。

女子高生二人に、死にかけの演劇バカのジジイが一人。普通なら、ありえない組み合わせ。

でも、不思議と楽しかった。

「おじいちゃんってさ。家族とかはどうしてるの？」

「昔はいた。今はいねえ」

「ははあん。出て行かれたんだ」

「なんでわかった？」

「そりゃあわかるよ。どうせ芝居にばっか現を抜かして、家族のことほったらかしにしてたんでしょ」

「……」

巖のじいちゃんにしてはめずらしく、言葉が返ってこない。

押し黙った横顔の皺が、いつもより深く見えた。

「ゆあゆあの言う通りだ。俺はろくでなしだからな」

「ろくでなしだねえ。家族よりも芝居を優先するなんて、本当にろくでなしだよ」

世界で一番きらいな男の顔を思い出しながら、わたしははつきりと告げた。

「そうだ。大切な人よりも芸術を優先するなんて、本当に人間としてどうかしてる。」

家族よりも小説を愛した、景ちゃんの父親のように。あるいは巖のおじいちゃんも、家族よりも芝居を愛してしまった、同じ種類のろくでなしなのかもしれない。

それでも、わたしは隣に座るこのろくでなしのジジイのことを嫌いにはなれないのだから、つくづく人の心というものは理屈ではないな、と実感してしまう。

「巖のおじいちゃんって、家族が死にそうな時でも、芝居を優先しそうだもんね」

「……」

「いや、そこは否定してほしいんだけど」

「否定はできねえな。否定できないまま、ずっと芝居をやってきて、この歳になっちゃった」

「はあ、やれやれ。本当の幸ってなんだろう、なんて。宮沢賢治は言ってるわけだけだよ」

「ああ」

「ろくでなしの巖のおじいちゃんは、絶対幸せにはなれないね」

「……ああ。そうだな」

本当は、それも否定してほしかったのだけれど。

素直じゃないジジイの心の内を覗き見て、それ以上の追求はやめておいた。

言葉にすると、野暮なこともある。

「かわいそうだから……おじいちゃんが死ぬ時、わたしくらいは側にいてあげるよ」

「余計なお世話だ」



その日は、あつという間にやってきた。

舞台、銀河鉄道の夜。

主演、明神阿良也、夜風景。

簡素なパンフレットを、百城千世子は客席で穴が空きそうなほどに見詰めていた。

「何度見ても、書かれている内容は変わらないわよ」

「うん。わかってる」

隣のアリサが呆れたように言ってきたが、それでも千世子はパンフレットから顔を上げなかった。

万宵結愛。

探している名前は、まるで端役のようにひっそりと記載されていた。

「おもしろいね。本番当日になっても、役名すらわからないなんて」

「外部から客寄せのために呼び込んだキャストよ。扱いとしてはそんなものでしょう」

「アリサさん。それ、アキラくんに言ってる?」

「皮肉のつもりはないわ。事実として述べているだけ」

自分の息子に対して手厳しいなあ、と。千世子は笑った。

とはいえ、アキラの名前は役名と共に記されているので、扱いとし

ては結愛よりも上だ。

周囲を見回す。公演初日ということもあって、客席は満員だった。千世子やアリサのように、純粹に巖裕次郎の舞台を観に来ている役者畑の人間もいれば、明らかにそわそわと浮足立っている、アキラや結愛目当てのファンの姿も見受けられる。ネットの記事では、初日以降のチケットも完売だと書かれていた。結愛のチャンネルでの宣伝、スターズ俳優であるアキラの出演。それらは間違いなく、興行面ではプラスに作用していた。

「ゆあゆあ、やつぱり脇役なのかな？」

「役名もないもんな」

「ちよつとがっかり」

「アキラくんも、これちよい役なんですよ？」

だからこそ、その扱いに不満を持つファンがいるのは、わからないでもない。

ひそひそと聞こえてきた声に、千世子は少し溜息を吐きそうになった。

「がっかりした？ あなた、万宵結愛のこと、推していたものね」

きつと、意図したものではないのだろうか。

推している、というアリサのその言い回しが、少しおかしかった。

「うん。そうだね。でもべつに、がっかりはしてないよ」

アリサは、彼女と一緒にカメラに映ったことはない。

千世子は、ある。

今、この舞台を観に来ている観客の中で、万宵結愛の隣に並び立つた経験があるのは、自分だけだ。

だから、期待できる。純粹に、彼女の演技を楽しみに待つことができる。

そういう意味では、

「きつと、すごいものが見れるって、信じてるから」

やはり、万宵結愛は、百城千世子にとって推しだった。

スマートフォンを切るために、バッグから取り出す。

「……………え？」

そして、目に入ってきたニュースに千世子は目を奪われた。

『演出家 巖裕次郎 緊急入院』

★★★★★

本番当日。

心の中を覗けるわたしから見ても、みんなのコンディションは完璧だった。

体を引き締める、心地良い緊張感。練習の成果を見せる、ワクワクとした高揚感。

うん。良い雰囲気だ。

良い雰囲気だからこそ、それを壊してしまうかもしれない事実を告げるのが辛かった。

「……結愛ちゃん」

「わかってる」

衣装に着替えた景ちゃんと、目配せをし合う。

どちらがそれを言うか。

少し迷ったけれど、適任なのはわたしだと判断した。

「ごめん。本番前に、みんなに伝えておきたいことがあって」  
手を挙げたわたしに、視線が集まる。

「お、どうした？」

「みんな聞けよ。ゆあゆあから、ありがたいお言葉があるってさ」

「なんだなんだ」

亀さんはゆったりと笑っている。七生さんはちよつと緊張しているのか、少しだけ表情がぎこちない。阿良也くんはさすがというべきか、もうほとんど役に入り込んでいる。

息を吸う。

意識して、言葉を紡ぐ。

「今朝、巖さんが倒れたの」

簡潔に、その事実を告げた。

「……は？」

全員が黙り込んで目を見張る中で、亀さんの間拔けな声が、はつきりと響いた。

「前から病気で、余命の宣告も受けてた。騙し騙しやってたけど、やっぱり限界だったみたいで」

不幸中の幸いというべきだろうか。わたしと景ちゃんが家にいたことが、良い方向に作用した。

すぐに救急車を呼ぶことができたし、考え得る限り最速の措置ができたと、お医者さんは言っていた。

ただし、それはイコールで、巖のおじいちゃんやんの命が絶対に助かる……ということではない。むしろ逆。今、巖さんは危篤の状態だ。

「なんだよ、それ……俺らは何も聞かされてねえぞ」

「うん。わたしと景ちゃんしか知らなかったから」

「そんな、どうして二人にだけ……？」

「みんなには、隠しておきたかったんだと思う」

動揺が、広がっていく。瞳と感情に、突き刺される。

落ち着け。

わたしは、今、天球の役者全員に見られている。

声を整えろ。

平静を装え。

フラットに、事実を伝えろ。

わたしだけが、みんなの心を見れるのだから。

「結愛」

阿良也くんが、顔を上げた。

「巖さんは、死ぬのか？」

「うん。いつ亡くなっても、おかしくないって」

「……そうか」

瞳が伏せられる。

爆発しかけた感情に、そつと蓋がされた。

すごいな、と。わたしは純粹にそう思った。

阿良也くんの一声で、広がっていた衝撃が、また静まり返った。

その隙を逃さずに、言う。

「……今まで黙ってて、ごめん」

わたしと巖さんの付き合いは、みんなに比べれば、圧倒的に浅い。でも、この数ヶ月は、家族といっても差し支えないほどに、一緒に時間を過ごしてきた。

動揺があるはずだ。悲しみがあるはずだ。迷いが生まれるはずだ。それらすべてを断ち切って、みんなの背中を押す。目の前の芝居を最高のものにするために。

わたしは、あの演出家に託されたのだ。

わたしの……わたしにしか、できない役目。

それを果たそう。

動揺するみんなの心を見る。

不安。焦燥。悲しみ。

こちらに向けられる、それらすべてが、わたしには見える。

でも、大丈夫。大丈夫だ。

「聞いてほしいの」

声を発した瞬間に。

あのいけ好かないジジイの顔が、自然と浮かんできた。

——サインください。

最初はず、ファンであることにびっくりした。

——やっぱリユアユアはかわいいな。

その好意を不審にすら思った。

——宣伝？ 何言ってやがる。俺が出たいから出ただけだぞ。

でも、触れてみたらその感情は、思いの外あたたかいもので。

——当たり前だ。配信は俺の楽しみだぞ。

指導は厳しかったけど、純粹にわたしのことを応援してくれていて。

——俺の晩メシはどうすんだ？

ご飯を食べて。映画を見て。どうでもいいことを喋って。

一緒に過ごす、そういう時間がとても楽しくて。

——俺の死を、喰えるか？

あ、無理だ。

「今日の舞台は中止にしよう」

あれ？

なに言ってるんだろう、わたし。

違う。そうじゃない。

わたしが言うべきことは、そうじゃない。

巖さんの分まで、みんなでこの舞台を成功させようって。そう言うべきなのに。そう言うはずだったのに。

否定する心が、あるはずなのに。

口が、勝手に動く。

極めて一般的な、理屈を説くように。

「平気だよ。公演は何日もあるんだから。今頃、ネットニュースにもなってるし、お客さんたちもお芝居観るところじゃないでしょ」

口が、勝手に動く。

つらつらと事実を述べるように。

「大丈夫。誰も責めたりしないよ。わたしたちにとって、巖さんがすごく大切な存在だって、みんなわかってるもん」

口だけが、勝手に動く。

言い訳を、必死に紡ぐように。

「だから、だからさ……」

ああ、ダメだ。

気がついてしまった。

覚悟していたはずなのに。

理解していたはずなのに。

わかっていたはずなのに。

わたしには、人の命よりも、芝居を優先するという選択ができない。

「みんな、巖さんのところに行こうよ」



絞り出した声は、枯れていて。

自分の声じゃないみたいで。

隣に立つ景ちゃんには、何も言わずに目を細めた。

ああ、ダメだ。

わたしは、役者にはなれない。

明神阿良也は、信じられない気持ちで万宵結愛を見詰めていた。人間は、自分よりも動揺している人間を見ると、不思議と落ち着くものらしい。

「——結愛」

一言。阿良也は、名前を呼んだ。

「なに」

「ちよっと、落ち着いた方がいい」

「わたしは、落ち着いてるけど」

明らかに震えている声でそう言われて、堪らず苦笑しそうになる。最初に会った時、阿良也は結愛のことを、得体の知れない女だと思っただ。

何を考えているかわからず、相手の欲しがる言葉をぼんと言うくせに、どこか飄々としていて、演じる者としては光るものこそあれど、まだまだ未熟で。

だが、その未熟さを補おうとする強い飢えがあった。

万宵結愛のそういう飢えた獣のような部分を、阿良也はなにによりも評価していた。

けれどきつと、結愛の人間としての特色は、別にある。

警戒心の強い七生とすぐに仲良くなり、コメディリーフの亀とは軽口を叩き合って場を和ませ、親友である夜風景のことをなによりも大切に、そしてこの数ヶ月、あのどうしようもない頑固親父である巖裕次郎と生活を共にし続けた。

だから、阿良也は言葉にして、その事実を指摘する。

「じゃあ、なんでそんなに泣いてんの？」

万宵結愛は、やさしいのだ。

「え」

そこでようやく、自分のことに気がついたように。

結愛は呆然と、頬から溢れる水滴を、自分の手のひらで拭いた。

「これは、ちが……」

「らしくないよ。普段はあれだけ、人の心を覗き込んでるみたいなことを言うくせに。いや、逆か……」

阿良也はハンカチを取り出して、差し出す。

「人の心が見えすぎるから。自分の心に、気がつかないふりをしてきたのか」

本当なら、阿良也は結愛に言いたいことが、たくさんある。

病気があるなら、素直にそう言ってほしかった。秘密にせずに、団員全員に伝えてほしかった。

しかし、それは巖本人に言わなければならない文句であって、結愛に向けるのは筋違いだ。

なによりも、自分たちの親父のことを、こんなに思って泣いてくれる女の子を、責めることはできない。

「ごめん。でも、ありがとう。巖さんのわがままに、付き合ってくれて」

それは、阿良也から結愛への、感謝の言葉であると同時に。

劇団天球から結愛への、感謝の言葉でもあった。

「……なんで、なんで阿良也さんは、そんなに平然としていられるの！」

「これでも、ショックは受けているつもりだよ」

「みんなは……天球のみんなは、わたしなんかよりも、巖さんとずっとずっと一緒にいて！わたしよりも、たくさんたくさん悲しいはずなのに！」

「やっぱり自分のことが見えてないな」

あきれて、阿良也は言った。

「一緒に過ごした時間の長さで、人を大切に想う心の重さが決まるわけじゃない」

虚を突かれたように、きれいな顔が固まった。

続けて、七生が結愛の手を握る。

「そうだよ。私達も、結愛も。巖さんのことを大切に思っている気持ちには、一緒だよ。比べることなんてできないよ」

天球の全員が、涙を流す結愛のことを、やさしい目で見る。

天球の全員が、巖を思つて涙を流す結愛のことを、この劇団の一員として認めていた。

整った顔立ちが、ますますぐしゃぐしゃに歪んで、団員たちを見回す。

「七生さん。じゃあ……すぐに巖さんのところに行こうよ」

「それは」

「だめだ。公演に穴は空けられない」

「亀さん！」

「わかるよ。お前の気持ちは」

先手を打つて亀太郎にそう言われて、結愛が押し黙る。

「あの人の最期が。俺らの親父の最期が、病院のベッドの上で一人ぼっちだなんて……そんなことがあっていいのかって。この場にいる全員が、そう思ってるよ」

「それでも」

言葉を引き継いで、阿良也は言う。

「親の死に目に会えないのが役者だ。俺たちはみんな、そういう覚悟をして、舞台上に立っている」

阿良也は、正面から結愛を見据える。

艶やかな濃い茶髪が、伏せた顔にかかつて表情を覆い隠す。

ぽたぽたと床に落ちる雫が、表情が見えなくても結愛の感情を痛いほどに物語っていた。

「結愛ちゃん」

「ぱちん、と。」

それまでずっと口を開いてこなかった景が、バレツタで長い黒髪をまとめた。

その印象ががらりと変わる。

普段は背中で長髪を靡かせているからこそ、短髪の少年のように変化した外見は、景がすでに役に入っていることを物語っていて。

私は芝居をやる、と。

「……景ちゃん」

言外にそう告げられて、結愛は信じられないものを見るような面持

ちで、親友を見た。

意外だな、と阿良也は思った。が、すぐに当然だな、と思い直した。夜風景は、万宵結愛に支えられている。それは、付き合いの短い天球の団員たちから見ても、紛れもない事実ではあったが。

「景ちゃん。お願い。一緒に、巖さんのところに行こうよ」

「行けないわ」

「なんで」

「これから、本番だもの」

なんてことはない。

覚悟ができていたのは、景の方で。

覚悟ができていないのは、結愛の方だったのだ。

「景ちゃん！」

「結愛ちゃん。巖さんは演出家で、私達は役者よ」

それは、親友としての言葉ではない。

同じ舞台に立つ役者としての、共演者への疑問提起。

「結愛ちゃんは、ちがうの？」

「……」

ぐしゃぐしゃで、ぐちゃぐちゃで、めちゃくちゃな表情。

しかし、そのあらゆる感情がないまぜになった表情に、阿良也はようやく、結愛の素顔を見た気がした。

「もういい。わたしだけでも、行くから」

万宵結愛は、控室から逃げ出すように出て行った。

しばらく、沈黙があった。

「……ふーっ」

「大丈夫か、七生？」

「うん、大丈夫。結愛がいなかったら、私ももつと狼狽えてたかもしれないけど」

「そりゃ俺もだ。いや……全員そうか」

劇団天球の役者たちは、芝居の準備を始める。

いつも通りに。まるで、この場に巖がいるかのように。

「夜風、追いかけていいの？」

「うん。大丈夫。阿良也くんこそ……」

「心配はしてないよ。結愛は、巖さんが選んだ役者で……俺が認めた役者だ」

乱れた集中を、元に戻すために。

阿良也は、再び椅子の上に座り込んだ。

「主演の俺が信じなきや、嘘になる」

★★★

わたしがおかしいの？

違う。おかしいのは、みんなだ。

巖さんよりも、舞台を優先してる。みんなの方がおかしい。走る。

だめだ、という感情だけが、わたしの心に満ちていた。

ゆあゆあ、と。あの低い声でそう呼ばれる声だけが、フラッシュバックする。

走る。

わかっていた。

みんなは役者で。

巖さんに認められていて。

でも、わたしだけは……巖さんに「結愛」と。名前でも呼んでもらったことがない。走る。

本当は、わかっているんだ。

わたしだけが、役者になれていない。走る。

でも、それなら。

じゃあ、いいじゃないかって。

そう思う。

役者じゃないのなら、すべてを放り出して、わたしだけが、巖さんの側にいたって、いいじゃないか。

走る。

劇場の出口に向かっていたわたしの手を、誰かが唐突に掴んで、引き止めた。

☆☆☆☆

巖裕次郎は、ぼんやりと天井を見上げていた。

声が出ない。喉から何一つ、音を発することができない。

自分の体のことは、自分が一番良くわかっている。

死にかけている、と。そんな色濃い実感があつた。

そんな実感を得てもなお、巖は舞台のことを考えていた。

自分の病状は、ニユースになっっているだろうか？

観客に、良からぬ感情を抱かせているかもしれない。

初日の公演に、とんでもない荷物を持ち込んでしまった。

演出家失格だ。

でも、あいつらなら、きっと大丈夫だろう。

そんな確信と安心が、巖にはあつて。

けれど、一人の少女の顔を思い出して。死にかけの老人は、意識を

手離すのを踏み留まった。

まだ死ねない。

まだ伝えられていないことがある。

だから。

——生きてえ。

死にかけの老人に相応しくない、強い生への執着を巖は抱いていた。

あるいはその執着が最後のチャンスを、呼び込んだのかもしれない。

唐突に、扉が開く音が響いた。

「失礼」

「なんだきみは!?! この病室は今、関係者以外の立ち入りは……」

「申し遅れました。私、こういう者です」

声が聞こえた。

主治医と誰かが、言い争う声。

「そちらの寝たきり老人との契約は済んでおります。書類はこちらに。多少の無理は、どうか聞いていただきたい。ご安心ください。金なら積みまますので」

ベッドの上の病人を見下ろして、スーツ姿の男は告げる。

「困るんですよ。あなたに死んでもらっては……それは、契約違反です」

見慣れない、白衣を着た外国人たちを引き連れるその姿は、まるで悪魔の手先のように。

——頼む。あの子を、俺に預けてほしい。

——こちらこそ、よろしくお願いします。

ああ、たしかに。

この男とは、そういう契約を交わした。

「彼女の面倒を公演終了まで見ると、そう約束したはずでしょう？」

耳が痛い。

癩に障る。

それでも——

「死にかけの老人の運命を、捻じ曲げにきました。金力で、ね」

本当に変えることができるかは、本人の気力次第ですが、と。

その口元が、歪に微笑んだ。

★★★

景ちゃんが、追いかけてきてくれたんだと、そう思った。

でも、わたしの手を掴んで引き止めたのは、景ちゃんではなかった。

「……千世子ちゃん」

「大丈夫？ ひどい顔だね」

千世子ちゃんは、いつも通りの声音と笑顔で、ふわりと笑った。

そのまま手を引かれて、廊下の隅に誘導される。

「千世子ちゃ……ごめ」



「謝らなくていいよ。ニュースは見たし、顔を見れば大体何があったかはわかるし」

言いながら、濡らしたハンカチを目元に当てられた。

「涙が止まらないのは仕方がないけど、擦るのは絶対ダメ。本番前だし、万宵さんのきれいな顔がもつたいないよ」

頬に触れたハンカチは冷たくて。

でも、その言葉はとても温かくて。

わたしは継るように、千世子ちゃんの細い体に、抱き着いた。

「ごめん。ごめん……わたし、いま、おかしいから……だから、ちよつと……ごめん」

「うん。いいよ。好きにして」

頭の後ろを、撫でられる。

身体だけじゃなく、指の細さもそれでわかった。

ぽんぽん、と。

背中をあやすように、叩かれる。

「ごめんね。夜風さんじゃなくて」

「……そんなことない」

「でも、ほんとは夜風さんに追いかけて来てほしかったんでしょ？」

「……今は、千世子ちゃんが、いい」

「ふふっ。それなら、慌てて客席から飛び出してきた甲斐があったかもね」

スターズの天使に抱きつく、なんて。

こんな光景、誰かに見られたら、それだけで大変なことになる。

でも、そうしたいから、わたしは千世子ちゃんに抱きついてしまった。

抱き締める。ふわふわの髪の毛の、その毛先の感触を、頬で感じる。

生きている人間は、あったかい。今は、その温かさだけを、感じていたかった。

「つらい？」

「……うん。つらい」

「しんどい？」

「うん。しんどい」

「こわい？」

「めちやくちやくわい」

「そっか」

質問しているくせに。

千世子ちゃんはそれ以上の答えを求めずに、ただ「よしよし」と、わたしの背中と頭を撫でた。

「抜け出してきたのか、とか。そういうこと、聞かないの？」

「さつきも言ったでしょ？ 見ればわかるから。それに事実として、抜け出してきたんでしよう？」

全部わかってるよ、と。

そう言いたげな口調だった。

「千世子ちゃんは」

「うん」

「本番を投げ出して、出ていく役者がいたら、軽蔑する？」

「軽蔑する」

「役者、失格だと思う？」

「失格だと思う」

本当に迷わない、即答だった。

「じゃあ、わたしはやっぱり、役者失格だ……」

「そうかな？ 逆に聞くけど。万宵さんは、どうして今まで、動画配信を続けてきたの？」

「それは……見てくれる人たちがいるから」

「そうだよね。今日もいるよ。このお芝居を観に来てくれた、お客さんたち」

一つ一つ。

言い聞かせるように、千世子ちゃんは言う。

「自分は役者じゃない。その覚悟ができていない、なんて。そんなのは結局、自分に対する言い訳。お金を貰って、期待を背負って、役に成ったのなら。どんなに小さな舞台の上でも、どんなに安いカメラの前でも、その瞬間から、役者は役者になる」

わたしの友達、ではない。

スターズのプロとして、一人の役者として、百城千世子は言葉を紡いでくれている。

「大丈夫。あなたはもう役者だよ。万宵さん」  
けれども。

今のわたしには、その優しさこそが、苦しい。

「……でもそれじゃあ、だから……だから、わたしには舞台上に立つ責任があるって。千世子ちゃんは、そう言いたいのか？」

「うん、そうだね」

目の前の仕事から逃げ出すな。

与えられた責任を果たせ。

役者としての千世子ちゃんの言葉はどこまでも正論で。

「無理。無理だよ」

だからこそ、その正論をどうしても昂った心が拒絶してしまう。

「覚悟はしてたつもりだったのに……巖さんがいつ、どんな時にいなくなっても、わたしは、巖さんの期待に応える演技をするつもりだったのに……でも、無理だった。できない。できないよ……」

情けない告白だった。

甘えた嘆願だった。

でも、それらはすべて、わたしの正直な心の内だった。

「そっか」

千世子ちゃんは、わたしの背中と頭から手を離して。

そして、胸に手をやって、押した。

「なら、私も正直に言うね」

体を押されて。

縋りついた体を、押し退けられて。

拒絶される、と。

そう思った。

「役者として、とか。プロとして、とか。とりあえずそういう言葉を並べたててはみたけど……」

けれど、

「でもまあ、ここまでは建前」

逆だった。

「おい、万宵結愛」

抱き締めていた腕を、完全に振り解かれる。

首元を、掴み上げられる。

「こつちを見ろ」

体を、壁に押しつけられた。

わたしよりも小さな体から出ていとは思えない、強い力だった。

「不安はわかる。心配なのもわかる。コンディションは最悪で、演技  
なんでできないくらい心もボロボロで、辛くて苦しくて……」

熱い感情だった。

触れると、火傷してしまいそうなほどに。

「それでも、客席には私がいる」

「……え？」

さつきまでの、理路整然とした論し方とは違う。

言いたいことを、そのまま言ってるような口調だった。

「私はね。今日、役者の万宵結愛を観に来たんだ。他の人は、明神阿良  
也を目当てで来たかもしれない。夜風景に期待しているかもしれない  
い。巖裕次郎の舞台だから、来たのかもしれない」

捲し立てられる。

「でも、私という一人の観客が……一番楽しみにしているのは、あなた  
の演技」

一人の人間が、今。

私だけを見ている。

強く、強く、求められている。

「だから、魅せてよ」

以前、千世子ちゃんに言われたことを思い出す。

——私もね、見てほしいんだ。たくさん見てほしい。万宵さんが夜  
風さんを見ているみたいに。夜風さんが万宵さんを見ているみたい  
に。たくさんたくさん、私のことを見てほしいの。

今日は逆なんだ、と。

わたしが、千世子ちゃんに見られる番なんだ、と。  
何故か、とても自然に、そう思えた。

「地震が起きても、火事になっても、この劇場に隕石が落ちてきたって、私はあなたから目を離さない。ずっとずっと、見ていてあげる。私は今日、あなたの観客になるから」

ううん、それも違うか、と。

千世子ちゃんは言葉を重ねて。

「私が、あなたと夜凧さんの、物語を見届けるから」

悪魔みたいな、天使の笑顔。

物語の中で、本物を生む。

それは、あの日。デスアイランドで、わたしができなかったこと。

景ちやんと千世子ちゃんが作る世界に、手を伸ばした。

届かなかった。

今日は届かせる。

わたしが、届かせる側になれる。

「……」

ポケットに振動を感じて、スマホを見る。

件名のないメールが一件。いつも長ったらしい業務連絡を慇懃無礼な文面で送りつけてくるプロデューサーからの連絡は、今日に限ってはたった一行だった。

『こちらはおまかせください』

スマホを、握り締めた。

今日という日のために、天球のみんなはたくさんのお金を積んできた。

今日という日のために、巖さんは自分の全てを懸けて、指導を行ってきた。

わたしという役者はきつと、たくさんの人に支えられている。

その想いに、応えなければ……嘘になってしまう。

「うん。良い顔になったね」

千世子ちゃんの身体が、今度こそ、わたしから離れる。

離れる前に、その爪先が、少しだけ伸びて。

吐息が耳に触れて、唇の熱に頬を撫でられた。

「……千世子ちゃん」

「願掛けだよ。私の仮面、貸してあげる。終わったら、返しに来て」

「……ありがとう」

わたしは、巖さん選ばれたキャストだ。

わたしは、観客の心Heartに届く演技をしたい。

わたしは、観客の心Nameに名前を刻む、役者になりたい。

——嘘吐きだらけのこの世界で、嘘を吐かない覚悟をした者を役者という。

この気持ちだけは絶対に、嘘ではないから。

「見ててね。千世子ちゃん」

だから、変わろう。

「わたしの、お芝居を」

他の誰でもない。

巖裕次郎の舞台で。